芥川龍之介全集

第六巻

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5



大正十五年八月撮影
(鵠沼に於て)

も亦度たび繰り返されてゐる。それは彼等と我々人間を知り、彼はボヘミア的生活をつづけたものには或は滑稽に見えるであらう。しかし彼はヒステリツクに叫ぶやうに叫ばずにはゐられなかつた。阿呆たちは彼を殺した後、世界中に大きい寺院を建ててゐる。だ。我々はそれ等の寺院にやはり彼の歓声を感ずるであらう。どうしてもおまへたちはわからないか？」――それはクリストひとりの歓声ではない。後代にもみじめに死んで行つた、あらゆるクリストたちの歓声である。

(SM印　B…1)　10…20

「續西方の人」原稿

(第四四—四五頁)

第六卷目錄

西方の人……一
續西方の人……三三
十本の針……五一
侏儒の言葉……五七
文藝的な、餘りに文藝的な……一五五
續文藝的な、餘りに文藝的な……二四三
僻見……二五一
一　齋藤茂吉……二五三
二　岩見重太郎……二六二
三　大久保湖州……二七一

四　木村毅齋……二九〇
芭蕉雜記……三〇三
續芭蕉雜記……三三二
今昔物語に就いて……三三七
明治文藝に就いて……三四七
文壇小言……三五一
小說作法十則……三五五

小論文

「私」小說論小見……三六一

「わたくし」小説に就いて……三六九
藤澤淸造君に答ふ……三七〇
發句私見……三七二
藝術その他……三七六
一批評家に答ふ……三八六
小說の戲曲化……三八八
文部省の假名遣改定案について……三九三

雜纂

文藝雜談……四〇一

芝居漫談……四〇九
萩原朔太郎君……四一三
近松さんの本格小說……四一七
瀧井君の作品に就いて……四二〇
凡兆に就いて……四二三
思ふままに……四二五
プロレタリア文藝の可否……四二八
佛蘭西文學と僕……四三一
漢文漢詩の面白味……四三五
短歌雜感……四四〇

或悪傾向を排す……四四五
わが月評……四五八
一　大正八年六月の文壇……四五八
二　大正九年四月の文壇……四六八
有島生馬君に與ふ……四七七
大正八年の文壇……四八〇
大正八年度の文藝界……四八三
大正九年度の文藝界……五〇三

「文藝講座」

文藝一般論……五一五
文藝鑑賞……五四三

講演

ロビン・ホッド……五六五
文藝雜感……五七九
明日の道德……五九一

補遺

西方の人

1　この人を見よ

わたしは彼是十年ばかり前に藝術的にクリスト教を——殊にカトリツク教を愛してゐた。長崎の「日本の聖母の寺」は未だに私の記憶に殘つてゐる。かう云ふわたしは北原白秋氏や木下杢太郎氏の播いた種をせつせと拾つてゐた鴉に過ぎない。それから又何年か前にはクリスト教の爲に殉じたクリスト教徒たちに或興味を感じてゐた。殉教者の心理はわたしにはあらゆる狂信者の心理のやうに病的な興味を與へたのである。わたしはやつとこの頃になつて四人の傳記作者のわたしたちに傳へたクリストと云ふ人を愛し出した。クリストは今日のわたしには行路の人のやうに見ることは出來ない。それは或は紅毛人たちは勿論、今日の青年たちには笑はれるであらう。しかし十九世紀の末に生まれたわたしは彼等のもう見るのに飽きた、——寧ろ倒すことをためらはない十字架に目を注ぎ出したのである。日本に生まれた「わたしのクリスト」は必しもガリラヤの湖を眺めてゐない。赤あかと實のつた柹の木の下に長崎の入江も見えてゐるのである。從つてわたしは歴史的事實や地理的事實を顧みないであらう。（それは少くともジアナリステイツクには

困難を避ける爲ではない。若し眞面目に構へようとすれば、五六冊のクリスト傳は容易にこの役をはたしてくれるのである。）それからクリストの一言一行を忠實に擧げてゐる餘裕もない。わたしは唯わたしの感じた通りに「わたしのクリスト」を記すのである。嚴しい日本のクリスト教徒も賣文の徒の書いたクリストだけは恐らくは大目に見てくれるであらう。

2　マリア

マリアは唯の女人だつた。が、或夜聖靈に感じて忽ちクリストを生み落した。我々はあらゆる女人の中に多少のマリアを感じるであらう。同時に又あらゆる男子の中にも――。いや、我々は爐に燃える火や畠の野菜や素燒きの瓶や巖疊に出來た腰かけの中にも多少のマリアを感じるであらう。マリアは「永遠に女性なるもの」ではない。唯「永遠に守らんとするもの」である。クリストの母、マリアの一生もやはり「涙の谷」の中に通つてゐた。が、マリアは忍耐を重ねてこの一生を歩いて行つた。世間智と愚と美德とは彼女の一生の中に一つに住んでゐる。ニイチェの叛逆はクリストに對するよりもマリアに對する叛逆だつた。

3　聖靈

我々は風や旗の中にも多少の聖靈を感じるであらう。聖靈は必ずしも「聖なるもの」ではない。唯「永遠に超えんとするもの」である。ゲエテはいつも聖靈に Daemon の名を與へてゐた。のみならずいつもこの聖靈に捉はれないやうに警戒してゐた。が、聖靈の子供たちは――あらゆるクリストたちは聖靈の爲にいつか捉はれる危險を持つてゐる。聖靈は惡魔や天使ではない。勿論、神とも異るものである。我々は時々善惡の彼岸に聖靈の歩いてゐるのを見るであらう。善惡の彼岸に、――しかしロムブロゾオは幸か不幸か精神病者の腦髓の上に聖靈の歩いてゐるのを發見してゐた。

4　ヨセフ

クリストの父、大工のヨセフは實はマリア自身だつた。彼のマリアほど尊まれないのはかう云ふ事實にもとづいてゐる。ヨセフはどう贔屓目に見ても、畢竟餘計ものの第一人だつた。

5　エリザベツ

マリアはエリザベツの友だちだつた。バプテズマのヨハネを生んだものはこのザカリアの妻、エリザベツである。麥の中に芥子の花の咲いたのは畢に偶然と云ふ外はない。我々の一生を支配し

する力はやはりそこにも動いてゐるのである。

6　羊飼ひたち

マリアの聖靈に感じて孕んだことは羊飼ひたちを騷がせるほど、醜聞だつたことは確かである。クリストの母、美しいマリアはこの時から人間苦の途に上り出した。

7　博士たち

東の國の博士たちはクリストの星の現はれたのを見、黃金や乳香や沒藥を寶の盒に入れて捧げに行つた。が、彼等は博士たちの中でも僅かに二人か三人だつた。他の博士たちはクリストの星の現はれたことに氣づかなかつた。のみならず氣づいた博士たちの一人は高い臺の上に佇みながら、（彼は誰よりも年よりだつた。）きらびやかにかかつた星を見上げ、はるかにクリストを憐んでゐた。

「又か！」

8　ヘロデ

ヘロデは或大きい機械だつた。かう云ふ機械は暴力により、多少の手數を省く爲にいつも我々には必要である。彼はクリストを恐れる爲にベツレヘムの幼な兒を皆殺しにした。勿論クリスト以外のクリストも彼等の中にはまじつてゐたであらう。ヘロデの兩手は彼等の血の爲にまつ赤になつてゐたかも知れない。我々は恐らくこの兩手の前に不快を感じずにはゐられないであらう。しかしそれは何世紀か前のギロティンに對する不快である。我々はヘロデを憎むことは勿論、輕蔑することも出來るものではない。いや、寧ろ彼の爲に憐みを感じるばかりである。ヘロデはいつも玉座の上に憂鬱な顏をまともにしたまま、橄欖や無花果の中にあるベツレヘムの國を見おろしてゐる。一行の詩さへ殘したこともなしに。……

9 ボヘミア的精神

幼いクリストはエヂプトへ行つたり、更に又「ガリラヤのうちに避け、ナザレと云へる邑に止まつたりしてゐる。我々はかう云ふ幼な兒を佐世保や横須賀に轉任する海軍將校の家庭にも見出すであらう。クリストのボヘミア的精神は彼自身の性格の前にかう云ふ境遇にも潜んでゐたかも知れない。

10 父

クリストはナザレに住んだ後、ヨセフの子供でないことを知つたであらう。或は聖靈の子供であることを、――しかしそれは前者よりも決して重大な事件ではない。「人の子」クリストはこの時から正に二度目の誕生をした。「女中の子」ストリンドベリイはまづ彼の家族に反叛した。それは彼の不幸であり、同時に又彼の幸福だつた。クリストも恐らくは同じことだつたであらう。彼はかう云ふ孤獨の中に仕合せにも彼の前に生まれたクリスト――バプテズマのヨハネに遭遇した。我々は我々自身の中にもヨハネに會ふ前のクリストの心の陰影を感じてゐる。ヨハネは野蜜や蝗を食ひ、荒野の中に住まつてゐた。が、彼の住まつてゐた荒野は必しも日の光のないものではなかつた。少くともクリスト自身の中にあつた、薄暗い荒野に比べて見れば……。

11 ヨハネ

バプテズマのヨハネはロマン主義を理解出來ないクリストだつた。彼の威厳は荒金のやうにそこにかがやかに殘つてゐる。彼のクリストに及ばなかつたのも恐らくはその事實に存するであらう。クリストに洗禮を授けたヨハネは櫟の木のやうに逞しかつた。しかし獄中にはいつたヨハネ

はもう枝や葉に漲つてゐる槲の木の力を失つてゐた。彼の最後の慟哭はクリストの最後の慟哭のやうにいつも我々を動かすのである。――

「クリストはお前だつたか、わたしだつたか?」

ヨハネの最後の慟哭は――いや、必しも慟哭ばかりではない。太い槲の木は枯れかかつたものの、未だに外見だけは枝を張つてゐる。若しこの氣力さへなかつたとしたならば、二十何歳かのクリストは決して冷かにかう言はなかつたであらう。

「わたしの現にしてゐることをヨハネに話して聞かせるが善い。」

12 悪魔

クリストは四十日の斷食をした後、目のあたりに悪魔と問答した。我々も悪魔と問答をする爲には何等かの斷食を必要としてゐる。我々の或ものはこの問答の中に悪魔の誘惑に負けるであらう。又或ものは誘惑に負けずに我々自身を守るであらう。しかし我々は一生を通じて悪魔と問答をしないこともあるのである。クリストは第一にパンを斥けた。が、「パンのみでは生きられない」と云ふ註釋を施すのを忘れなかつた。それから彼自身の力を恃めと云ふ悪魔の理想主義者的忠告を斥けた。しかし又「主たる汝の神を試みてはならぬ」と云ふ辯證法を用意してゐた。最後に

「世界の國々とその榮華と」を斥けた。それはパンを斥けたのと或は同じことのやうに見えるであらう。しかしパンを斥けたのは現實的欲望を斥けたのに過ぎない。クリストはこの第三の答の中に我々自身の中に絶えることのない、あらゆる地上の夢を斥けたのである。この論理以上の論理的決闘はクリストの勝利に違ひなかつた。ヤコブの天使と組み合つたのも恐らくはかう云ふ決闘だつたであらう。悪魔は畢にクリストの前に頭を垂れるより外はなかつた。けれども彼のマリアと云ふ女人の子供であることは忘れなかつた。この悪魔との問答はいつか重大な意味を與へられてゐる。が、クリストの一生では必しも大事件と云ふことは出來ない。彼は彼の一生の中に何度も「サタンよ、退け」と言つた。現に彼の傳記作者の一人、――ルカはこの事件を記した後、「悪魔この試み皆畢りて暫く彼を離れたり」とつけ加へてゐる。

13 最初の弟子たち

クリストは僅かに十二歳の時に彼の天才を示してゐる。が、洗禮を受けた後も誰も弟子になるものはなかつた。村から村を歩いてゐた彼は定めし寂しさを感じたであらう。けれどもとうとう四人の弟子たちは――しかも四人の漁師たちは彼の左右に從ふことになつた。彼等に對するクリストの愛は彼の一生を貫いてゐる。彼は彼等に圍まれながら、見る見る鋭い舌に富んだ古代のジ

ヤアナリストになつて行つた。

14　聖靈の子供

クリストは古代のジヤアナリストになつた。同時に又古代のボヘミアンになつた。彼の天才は飛躍をつづけ、彼の生活は一時代の社會的約束を踏みにじつた。彼を理解しない弟子たちの中に時々ヒステリイを起しながら。——しかしそれは彼自身には大體歡喜に滿ち渡つてゐた。クリストは彼の詩の中にどの位情熱を感じてゐたであらう。「山上の敎へ」は二十何歳かの彼の感激に滿ちた產物である。彼はどう云ふ前人も彼に若かないのを感じてゐた。この海のやうに高まつた彼の天才的ジヤアナリズムは勿論敵を招いたであらう。が、彼等はクリストを恐れない訣には行かなかつた。それは實に彼等には——クリストよりも人生を知り、從つて又人生に對する恐怖を抱いてゐる彼等にはこの天才の量見の呑みこめない爲に外ならなかつた。

15　女人

大勢の女人たちはクリストを愛した。就中マグダラのマリアなどは、一度彼に會つた爲に七つの惡鬼に攻められるのを忘れ、彼女の職業を超越した詩的戀愛さへ感じ出した。クリストの命の

終つた後、彼女のまつ先に彼を見たのはかう云ふ戀愛の力である。クリストも亦大勢の女人たちを、――就中マグダラのマリアを愛した。彼等の詩的戀愛は未だに燕子花のやうに匂やかである。クリストは度たび彼女を見ることに彼の寂しさを慰めたであらう。後代は、――或は後代の男子たちは彼等の詩的戀愛に冷淡だつた。（尤も藝術的主題以外には）しかし後代の女人たちはいつもこのマリアを嫉妬してゐた。
「なぜクリスト樣は誰よりも先にお母さんのマリア樣に再生をお示しにならなかつたのかしら？」――
それは彼女等の洩らして來た、最も僞善的な歎息だつた。

16　奇蹟

クリストは時々奇蹟を行つた。が、それは彼自身には一つの比喩を作るよりも容易だつた。彼はその爲にいよいよ奇蹟に對する嫌惡の情を抱いてゐた。その爲にも――キリストの使命を感じてゐたのは彼の道を教へることだつた。彼の奇蹟を行ふことは後代にルツソオの吼り立つた通り、彼の道を教へるのには不便を與へるのに違ひなかつた。しかし彼の「小羊たち」はいつも奇蹟を望んでゐた。クリストも亦三度に一度はこの願に從はずにはゐられなかつた。彼の人間的な、餘りに人

間的な性格はかう云ふ一面にも露はれてゐる。が、クリストは奇蹟を行ふ度に必ず責任を回避してゐた。

「お前の信仰はお前を癒した。」

しかしそれは同時に又科學的眞理にも違ひなかつた。クリストは又或時はやむを得ず奇蹟を行つた爲に、――或長病に苦しんだ女の彼の衣にさはつた爲に彼の力の脱けるのを感じた。彼の奇蹟を行ふことにいつも多少ためらつたのはかう云ふ實感にも明らかである。クリストは、後代のクリスト教徒は勿論、彼の十二人の弟子たちよりもはるかに鋭い理智主義者だつた。

17 背徳者

クリストの母、美しいマリアはクリストには必しも母ではなかつた。彼の最も愛したものは彼の道に從ふものだつた。クリストは又情熱に燃え立つたまま、大勢の人々の集つた前に大膽にもかう云ふ彼の氣もちを言ひ放すことさへ憚らなかつた。マリアは定めし戸の外に彼の言葉を聞きながら、悄然と立つてゐたことであらう。我々は我々自身の中にマリアの苦しみを感じてゐる。たとひ我々自身の中にクリストの情熱を感じてゐるとしても、――しかしクリスト自身も亦時々はマリアを憐んだであらう。かがやかしい天國の門を見ずにありのままのイエルサレムを眺めた

時には。……

18　クリスト教

クリスト教はクリスト自身も實行することの出來なかつた、逆說の多い詩的宗教である。彼は彼の天才の爲に人生さへ笑つて投げ棄ててしまつた。ワイルドの彼にロマン主義者の第一人を發見したのは當り前である。彼の敎へた所によれば、「ソロモンの榮華の極みの時にだにその裝ひ」は風に吹かれる一本の百合の花に若かなかつた。彼の道は唯詩的に――あすの日を思ひ煩はずに生活しろと云ふことに存してゐる。何の爲に？――それは勿論ユダヤ人たちの天國へはひる爲に違ひなかつた。しかしあらゆる天國も流轉せずにはゐることは出來ない。石鹸の匂のする薔薇の花に滿ちたクリスト教の天國はいつか空中に消えてしまつた。が、我々はその代りに幾つかの天國を造り出してゐる。クリストは我々に天國に對する憧憬を呼び起した第一人だつた。更に又彼の逆說は後代に無數の神學者や神祕主義者を生じてゐる。彼等の議論はクリストを茫然とさせずには措かなかつたであらう。しかし彼等の或者はクリストよりも更にクリスト教的である。クリストは兎に角我々に現世の向うにあるものを指し示した。我々はいつもクリストの中に我々の求めてゐるものを、――我々を無限の道へ驅りやる喇叭の聲を感じるであらう。同時に又いつもク

リストの中に我々を虐んでやまないものを、――近代のやつと表現した世界苦を感じずにはゐられないであらう。

19 ジヤアナリスト

我々は唯我々自身に近いものの外は見ることは出來ない。少くとも我々に迫つて來るものは我我自身に近いものだけである。クリストはあらゆるジヤアナリストのやうにこの事實を直覺してゐた。花嫁、葡萄園、驢馬、工人――彼の教へは目のあたりにあるものを一度も利用せずにすましたことはない。「善いサマリア人」や「放蕩息子の歸宅」はかう云ふ彼の詩の傑作である。抽象的な言葉ばかり使つてゐる後代のクリスト教的ジヤアナリスト――牧師たちは一度もこのクリストのジヤアナリズムの效果を考へなかつたのであらう。彼は彼等に比べれば勿論、後代のクリストたちに比べても、決して遜色のあるジヤアナリストではない。彼のジヤアナリズムはその爲に西方の古典と肩を並べてゐる。彼は實に古い炎に新しい薪を加へるジヤアナリストだつた。

20 エホバ

クリストの度たび說いたのは勿論天上の神である。――我々を造つたものは神ではない、神こそ

我々の造つたものである。」――から云ふ唯物主義者グウルモンの言葉は我々の心を喜ばせるであらう。それは我々の腰に垂れた鎖を截りはなす言葉である。が、同時に又我々の腰に新らしい鎖を加へる言葉である。のみならずこの新らしい鎖も古い鎖よりも強いかも知れない。神は大きい雲の中から細かい神經系統の中に下り出した。しかもあらゆる名のもとにやはりそこに位してゐる。クリストは勿論目のあたりに度たびこの神を見たであらう。(神に會はなかつたクリストの惡魔に會つたことは考へられない。)彼の神も亦あらゆる神のやうに社會的色彩の強いものである。しかし兎に角我々と共に生まれた「主なる神」だつたのに違ひない。クリストはこの神の爲に――詩的正義の爲に戰ひつづけた。あらゆる彼の逆說はそこに源を發してゐる。後代の神學はそれ等の逆說を最も詩の外に解釋しようとした。それから、――誰も讀んだことのない、退屈な無數の本を殘した。ヴオルテエルは今日では滑稽なほど「神學」の神を殺す爲に彼の劍を揮つてゐる。しかし「主なる神」は死ななかつた。同時に又クリストも死ななかつた。神はコンクリイトの壁に苔の生える限り、いつも我々の上に臨んでゐるであらう。ダンテはフランチエスカを地獄に墮した。が、いつかこの女人を炎の中から救つてゐた。一度でも悔い改めたものは――美しい一瞬間を持つたものはいつも「限りなき命」に入つてゐる。感傷主義の神と呼ばれ易いのも恐らくはかう云ふ事實の爲であらう。

21 故郷

「豫言者は故郷に入れられず。」――それは或はクリストには第一の十字架だつたかも知れない。彼は畢には全ユダヤを故郷としなければならなかつた。汽車や自動車や汽船や飛行機は今日ではあらゆるクリストに世界中を故郷にしてゐる。勿論又あらゆるクリストは故郷に入れられなかつたのに違ひない。現にポオを入れたものはアメリカではないフランスだつた。

22 詩人

クリストは一本の百合の花を「ソロモンの榮華の極みの時」よりも更に美しいと感じてゐる。(尤も彼の弟子たちの中にも彼ほど百合の花の美しさに恍惚としたものはなかつたであらう。)しかし弟子たちと話し合ふ時には會話上の禮節を破つても、野蠻なことを言ふのを憚らなかつた。――「凡そ外より人に入るものの人を汚し能はざる事を知らざる乎。そは心に入らず、腹に入りて廁に遺す。すなはち食ふ所のもの潔れり。」……

23 ラザロ

クリストはラザロの死を聞いた時、今までにない涙を流した。今までにない――或は今まで見せずにゐた涙を。ラザロの死から生き返つたのはかう云ふ彼の感傷主義の爲である。母のマリアを顧なかつた彼はなぜラザロの姉妹たち、――マルタやマリアの前に涙を流したのであらう？この矛盾を理解するものはクリストの、――或はあらゆるクリストの天才的利己主義を理解するものである。

24 カナの饗宴

クリストは女人を愛したものの、女人と交はることを顧みなかつた。それはモハメットの四人の女人たちと交ることを許したのと同じことである。彼等はいづれも一時代を、――或は社會を越えられなかつた。しかしそこには何ものよりも自由を愛する彼の心も動いてゐたことは確かである。後代の超人は犬たちの中に假面をかぶることを必要とした。しかしクリストは假面をかぶることも不自由のうちに數へてゐた。所謂「爐邊の幸福」の譃は勿論彼には明らかだつたであらう。アメリカのクリスト、――ホヰツトマンはやはりこの自由を選んだ一人である。我々は彼の詩の中に度たびクリストを感ずるであらう。クリストは未だに大笑ひをしたまま、踊り子や花束や樂器に滿ちたカナの饗宴を見おろしてゐる。しかし勿論その代りにそこには彼の贖はなければなら

ぬ多少の寂しさはあつたことであらう。

25　天に近い山の上の問答

クリストは高い山の上に彼の前に生まれたクリストたち――モオゼやエリヤと話をした。それは惡魔と戰つたのよりも更に意味の深い出來事であらう。彼はその何日か前に彼の弟子たちにイエルサレムへ行き、十字架にかかることを豫言してゐた。彼のモオゼやエリヤと會つたのは彼の或精神的危機に佇んでゐた證據である。彼の顏は「日の如く輝き其衣は白く光」つたのも必しも二人のクリストたちの彼の前に下つた爲ばかりではない。彼は彼の一生の中でも最もこの時は嚴肅だつた。彼の傳記作者は彼等の間の問答を記錄に殘してゐない。しかし彼の投げつけた問は「我等は如何に生くべき乎」である。クリストの一生は短かつたであらう。が、彼はこの時に、――やつと三十歲に及んだ時に彼の一生の總決算をしなければならない苦しみを嘗めてゐた。モオゼはナポレオンも言つたやうに戰略に長じた將軍である。エリヤも亦クリストよりも政治的天才に富んでゐたであらう。のみならず今日は昨日ではない。今日ではもう紅海の波も壁のやうに立たなければ、炎の車も天上から來ないのである。クリストは彼等と問答しながら、愈彼の見苦しい死の近づいたのを感じずにはゐられなかつた。天に近い山の上には氷のやうに澄んだ日の光の

中に岩むらの聳えてゐるだけである。しかし深い谷の底には柘榴や無花果も匂つてゐたであらう。そこには又家々の煙もかすかに立ち昇つてゐたかも知れない。クリストも亦恐らくはかう云ふ下界の人生に懐しさを感じずにはゐなかつたであらう。しかし彼の道は嫌でも應でも人氣のない天に向つてゐる。彼の誕生を告げた星は——或は彼を生んだ聖靈は彼に平和を與へようとしない。「山を下る時イエス彼等（ペテロ、ヤコブ、その兄弟のヨハネ）に命じて人の子の死より甦るまでは汝等の見し事を人に告ぐべからずと言へり。」——天に近い山の上にクリストの彼に先立つた「大いなる死者たち」と話をしたのは實に彼の日記にだけそつと殘したいと思ふことだつた。

26 幼な兒の如く

クリストの教へた逆説の一つは「我まことに汝等に告げん。若し改まりて幼な兒の如くならずば天國に入ることを得じ」である。この言葉は少しも感傷主義的ではない。クリストはこの言葉の中に彼自身の誰よりも幼な兒に近いことを現してゐる。同時に又聖靈の子供だつた彼自身の立ち場を明らかにしてゐる。ゲエテは彼の「タツソオ」の中にやはり聖靈の子供だつた彼自身の苦しみを歌ひ上げた。「幼な兒の如くあること」は幼稚園時代にかへることである。クリストの言葉に從へば、誰かの保護を受けなければ、人生に堪へないものの外は黄金の門に入ることは出來ない。

そこには又世間智に對する彼の輕蔑も忍びこんでゐる。彼の弟子たちは正直に(幼な兒を前にしたクリストの圖の我々に不快を與へるのは後代の僞善的感傷主義の爲である。)彼の前に立つた幼な兒に驚かない訣には行かなかつたであらう。

27 イエルサレムへ

クリストは一代の豫言者になつた。同時に又彼自身の中の豫言者は、——或は彼を生んだ聖靈はおのづから彼を飜弄し出した。我々は蠟燭の火に燒かれる蛾の中にも彼を感じるであらう。蛾は唯蛾の一匹に生まれた爲に蠟燭の火に燒かれるのである。クリストも亦蛾と變ることはない。ショウは十字架に懸けられる爲にイエルサレムへ行つたクリストに雷に似た冷笑を與へてゐる。しかしクリストはイエルサレムへ驢馬を驅つてはひる前に彼の十字架を背負つてゐた。それは彼にはどうすることも出來ない運命に近いものだつたであらう。彼はそこでも天才だつたと共にやはり畢に「人の子」だつた。のみならずこの事實は數世紀を重ねた「メシア」と云ふ言葉のクリストを支配してゐたことを敎へてゐる。樹の枝を敷いた道の上に「ホザナよ、ホザナよ」の聲に打たれながら、驢馬を走らせて行つたクリストは彼自身だつたと共にあらゆるイスラエルの豫言者たちだつた。彼の後に生まれたクリストの一人は遠いロオマの道の上に再生したクリストに「どこへ

行く？」と詰られたことを傳へてゐる。クリストも亦イエルサレムへ行かなかつたとすれば、やはり誰か豫言者たちの一人に「どこへ行く？」と詰られたことであらう。

28 イエルサレム

クリストはイエルサレムへはひつた後、彼の最後の戰ひをした。それは水々しさを缺いてゐたものの、何か烈しさに滿ちたものである。彼は道ばたの無花果を呪つた。しかもそれは無花果の彼の豫期を裏切つて一つも實をつけてゐない爲だつた。あらゆるものを慈んだ彼もここでは半ばヒステリツクに彼の破壞力を揮つてゐる。

「カイゼルのものはカイゼルに返せ。」

それはもう情熱に燃えた青年クリストの言葉ではない。彼に復讐し出した人生に對する（彼は勿論人生よりも天國を重んじた詩人だつた。）老成人クリストの言葉である。そこに潜んでゐるものは必しも彼の世間智ばかりではない。彼はモオゼの昔以來、少しも變らない人間愚に愛想を盡かしてゐたことであらう。が、彼の苛立たしさは彼にエホバの「殿に入りてその中にをる賣買する者を殿より逐出し、兌銀者の案、鴿を賣者の椅子」を倒させてゐる。

「この殿も今に壞れてしまふぞ。」

或女人はかう云ふ彼の爲に彼の額へ香油を注いだりした。クリストは彼の弟子たちにこの女人を咎めないことを命じた。それから――十字架と向かひ合つたクリストの氣もちは彼を理解しない彼等に對する、優しい言葉の中に忍びこんでゐる。彼は香油を匂はせたまま、(それは土埃りにまみれ勝ちな彼には珍らしい出來事の一つに違ひなかつた。)靜かに彼等に話しかけた。

「この女人はわたしを葬る爲にわたしに香油を注いだのだ。わたしはいつもお前たちと一しよにゐることの出來るものではない。」

ゲツセマネの橄欖はゴルゴタの十字架よりも悲壯である。クリストは死力を揮ひながら、そこに彼自身とも、――彼自身の中の聖靈とも戰はうとした。ゴルゴタの十字架は彼の上に次第に影を落さうとしてゐる。彼はこの事實を知り悉してゐた。が、彼の弟子たちは、――ペテロさへ彼の心もちを理解することは出來なかつた。クリストの祈りは今日でも我々に迫る力を持つてゐる。

――

「わが父よ、若し出來るものならば、この杯をわたしからお離し下さい。けれども仕かたはないと仰有るならば、どうか御心のままになすつて下さい。」

あらゆるクリストは人氣のない夜中に必ずかう祈つてゐる。同時に又あらゆるクリストの弟子たちは「いたく憂へて死ぬばかり」な彼の心もちを理解せずに橄欖の下に眠つてゐる。……

29　ユダ

後代はいつかユダの上にも惡の圓光を輝かせてゐる。しかしユダは必しも十二人の弟子たちの中でも特に惡かつた訣ではない。ペテロさへ庭鳥の聲を擧げる前に三度クリストを知らないと言つてゐる。ユダのクリストを賣つたのはやはり今日の政治家たちの彼等の首領を賣るのと同じことだつたであらう。パピニも亦ユダのクリストを賣つたのを大きい謎に數へてゐる。が、クリストは明らかに誰にでも賣られる危機に立つてゐた。祭司の長たちはユダの外にも何人かのユダを數へてゐた筈である。唯ユダはこの道具になるいろいろの條件を具へてゐた。勿論それ等の條件の外に偶然も加はつてゐたことであらう。後代はクリストを「神の子」にした。それは又同時にユダ自身の中に惡魔を發見することになつたのである。しかしユダはクリストを賣つた後、白楊の木に縊死してしまつた。彼のクリストの弟子だつたことは、――神の聲を聞いたものだつたことは或はそこにも見られるかも知れない。ユダは誰よりも彼自身を憎んだ。十字架に懸つたクリストも勿論彼を苦しませたであらう。しかし彼を利用した祭司の長たちの冷笑もやはり彼を憤らせたであらう。

「お前のしたいことをはたすが善い。」

から云ふユダに對するクリストの言葉は輕蔑と憐憫とに溢れてゐる。「人の子」クリストは彼自身の中にも或はユダを感じてゐたかも知れない。しかしユダは不幸にもクリストのアイロニイを理解しなかつた。

30 ピラト

ピラトはクリストの一生には唯偶然に現れたものである。彼は畢に代名詞に過ぎない。後代も亦この官吏に傳說的色彩を與へてゐる。しかしアナトオル・フランスだけはから云ふ色彩に欺かれなかつた。

31 クリストよりもバラバを

クリストよりもバラバを——それは今日でも同じことである。バラバは叛逆を企てたであらう。同時に又人々を殺したであらう。しかし彼等はおのづから彼の所業を理解してゐる。ニイチエは後代のバラバたちを街頭の犬に比へたりした。彼等は勿論バラバの所業に憎しみや怒りを感じてゐたであらう。が、クリストの所業には、——恐らくは何も感じなかつたであらう。若し何か感じてゐたとすれば、それは彼等の社會的に感じなければならぬと思つたものである。彼等の精神

的奴隷たちは、——肉體だけ逞しい兵卒たちはクリストに荊の冠をかむらせ、紫の袍をまとはせた上、「ユダヤの王安かれ」と叫んだりした。クリストの悲劇はかう云ふ喜劇のただ中にあるだけに見じめである。クリストは正に精神的にユダヤの王だつたのに違ひない。が、天才を信じない犬たちは——いや、天才を發見することは手易いと信じてゐる犬たちはユダヤの王の名のもとに眞のユダヤの王を嘲つてゐる。「方伯のいと奇しとするまでにイエス一言も答へせざりき。」——クリストは傳記作者の記した通り、彼等の訊問や嘲笑には何の答へもしなかつたであらう。のみならず何の答へをすることも出來なかつたことは確かである。しかしバラバは頭を擧げて何ごとも明らかに答へたであらう。バラバは唯彼の敵に叛逆してゐる。が、クリストは彼自身に、——彼自身の中のマリアに叛逆してゐる。それはバラバの叛逆よりも更に根本的な叛逆だつた。同時に又「人間的な、餘りに人間的な」叛逆だつた。

32　ゴルゴタ

十字架の上のクリストは畢に「人の子」に外ならなかつた。

「わが神、わが神、どうしてわたしをお捨てなさる?」

勿論英雄崇拜者たちは彼の言葉を冷笑するであらう。況や聖靈の子供たちでないものは唯彼の

言葉の中に「自業自得」を見出すだけである。「エリ、エリ、ラマサバクタニ」は事實上クリストの悲鳴に過ぎない。しかしクリストはこの悲鳴の爲に一層我々に近づいたのである。のみならず彼の一生の悲劇を一層現實的に教へてくれたのである。

33 ピエタ

クリストの母、年をとつたマリアはクリストの死骸の前に歎いてゐる。――から云ふ圖の piéta と呼ばれるのは必しも感傷主義的と言ふことは出來ない。唯ピエタを描かうとする畫家たちはマリア一人だけを描かなければならぬ。

34 クリストの友だち

クリストは十二人の弟子たちを持つてゐた。が、一人も友だちは持たずにゐた。若し一人でも持つてゐたとすれば、それはアリマタヤのヨセフである。「日暮るる時尊き議員なるアリマタヤのヨセフと云へる者來れり。この人は神の國を望めるものなり。彼はばからずピラトに往きてイエスの屍を乞ひたり。」――マタイよりも古いと傳へられるマコは彼のクリストの傳記の中にから云ふ意味の深い一節を殘した。この一節はクリストの弟子たちを「これに從ひつかへしものども

なり」と云ふ言葉と全然趣を異にしてゐる。ヨセフは恐らくはクリストよりも更に世間智に富んだクリストだつたであらう。彼は「はばからずピラトに往きイエスの屍を乞」つたことはクリストに對する彼の同情のどの位深かつたかを示してゐる。教養を積んだ議員のヨセフはこの時には率直そのものだつた。後代はピラトやユダよりもはるかに彼には冷淡である。しかし彼は十二人の弟子たちよりも或は彼を知つてゐたであらう。ヨハネの首を皿にのせたものは殘酷にも美しいサロメである。が、クリストは命を終つた後、彼を葬る人々のうちにアリマタヤのヨセフを數へてゐた。彼はそこにヨハネよりもまだしも幸福を見出してゐる。ヨセフも亦議員にならなかつたとしたらば、――それはあらゆる「若し……ならば」のやうに畢竟問はないでも善いことかも知れない。けれども彼は無花果の下や象嵌をした杯の前に時々彼の友だちのクリストを思ひ出してゐたことであらう。

35 復活

ルナンはクリストの復活を見たのをマグダレナのマリアの想像力の爲にした。想像力の爲に、――しかし彼女の想像力に飛躍を與へたものはクリストである。彼女の子供を失つた母は度たび彼の復活を――彼の何かに生まれ變つたのを見てゐる。彼は或は大名になつたり、或は池の上の

鴨になつたり、或は又蓮華になつたりした。けれどもクリストはマリアの外にも死後の彼自身を示してゐる。この事實はクリストを愛した人々のどの位多かつたかを現すものであらう。彼は三日の後に復活した。が、肉體を失つた彼の世界中を動かすには更に長い年月を必要とした。その爲に最も力のあつたのはクリストの天才を全身に感じたジヤアナリストのパウロである。クリストを十字架にかけた彼等は何世紀かの流れ去るのにつれ、シエクスピイアの復活を認めるやうにクリストの復活を認め出した。が、死後のクリストも流轉を閲したことは確かである。あらゆるものを支配する流行はやはりクリストも支配して行つた。クララの愛したクリストはパスカルの尊んだクリストではない。が、クリストの復活した後、犬たちの彼を偶像とすることは、――その又クリストの名のもとに横暴を振ふことは變らなかつた。クリストの後に生れたクリストたちの彼の敵になつたのはこの爲である。しかし彼等も同じやうにダマスカスへ向ふ途の上に必ず彼等の敵の中に聖靈を見ずにはゐられなかつた。

「サウロよ、サウロよ、何の爲にわたしを苦しめるのか？　棘のある鞭を蹴ることは決して手易いものではない。」

我々は唯茫々とした人生の中に佇んでゐる。我々に平和を與へるものは眠りの外にある訣はない。あらゆる自然主義者は外科醫のやうに殘酷にこの事實を解剖してゐる。しかし聖靈の子供た

ちはいつもかう云ふ人生の上に何か美しいものを殘して行つた。何か「永遠に超えようとするもの」を。

36 クリストの一生

勿論クリストの一生はあらゆる天才の一生のやうに情熱に燃えた一生である。彼は母のマリアよりも父の聖靈の支配を受けてゐた。彼の十字架の上の悲劇は實にそこに存してゐる。彼の後に生まれたクリストたちの一人、――ゲエテは「徐ろに老いるよりもさつさと地獄へ行きたい」と願つたりした。が、徐ろに老いて行つた上、ストリントベリイの言つたやうに晩年には神祕主義者になつたりした。聖靈はこの詩人の中にマリアと吊り合ひを取つて住まつてゐる。彼の「大いなる異教徒」の名は必しも當つてゐないことはない。彼は實に人生の上にはクリストよりも更に大きかつた。況や他のクリストたちよりも大きかつたことは勿論である。彼の誕生を知らせる星はクリストの誕生を知らせる星よりも圓まるとかがやいてゐたことであらう。しかし我々のゲエテを愛するのはマリアの子供だつた爲ではない。マリアの子供たちは麥畠の中や長椅子の上にも充ち滿ちてゐる。いや、兵營や工場や監獄の中にも多いことであらう。我々のゲエテを愛するのは唯聖靈の子供だつた爲である。我々は我々の一生の中にいつかクリストと一しよにゐるであらう。

ゲエテも亦彼の詩の中に度たびクリストの髯を抜いてゐる。クリストの一生は見じめだつた。が、彼の後に生まれた聖靈の子供たちの一生を象徴してゐた。（ゲエテさへも實はこの例に洩れない。）クリスト教は或は滅びるであらう。少くとも絶えず變化してゐる。けれどもクリストの一生はいつも我々を動かすであらう。それは天上から地上へ登る爲に無殘にも折れた梯子である。薄暗い空から叩きつける土砂降りの雨の中に傾いたまま。……

37　東方の人

ニイチエは宗教を「衛生學」と呼んだ。それは宗教ばかりではない。道徳や經濟も「衛生學」である。それ等は我々におのづから死ぬまで健康を保たせるであらう。「東方の人」はこの「衛生學」を大抵涅槃の上に立てようとした。老子は時々無何有の郷に佛陀と挨拶をかはせてゐる。しかし我我は皮膚の色のやうにはつきりと東西を分つてゐない。クリストの、――或はクリストたちの一生の我々を動かすのはこの爲である。「古來英雄の士、悉く山阿に歸す」の歌はいつも我々に傳はりつづけた。が、「天國は近づけり」の聲もやはり我々を立たせずにはゐない。老子はそこに年少の孔子と、――或は支那のクリストと問答してゐる。野蠻な人生はクリストたちをいつも多少は苦しませるであらう。太平の艸木となることを願つた「東方の人」たちもこの例に洩れない。クリ

ストは「狐は穴あり。空の鳥は巣あり。然れども人の子は枕する所なし」と言つた。彼の言葉は恐らくは彼自身も意識しなかつた、恐しい事實を孕んでゐる。我々は狐や鳥になる外は容易に塒の見つかるものではない。（昭和二・七・十）

續西方の人

1　再びこの人を見よ

クリストは「萬人の鏡」である。「萬人の鏡」と云ふ意味は萬人のクリストに倣へと云ふのではない。たつた一人のクリストの中に萬人の彼等自身を發見するからである。わたしはわたしのクリストを描き、雜誌の締め切日の迫つた爲にペンを抛たなければならなかつた。今は多少の閑のある爲にもう一度わたしのクリストを描き加へたいと思つてゐる。誰もわたしの書いたものなどに、――殊にクリストを描いたものなどに興味を感ずるものはないであらう。しかしわたしは四福音書の中にまざまざとわたしに呼びかけてゐるクリストの姿を感じてゐる。わたしのクリストを描き加へるのもわたし自身にはやめることは出來ない。

2　彼の傳記作者

ヨハネはクリストの傳記作者中、最も彼自身に媚びてゐるものである。野蠻な美しさにかがやいたマタイやマコに比べれば、――いや、巧みにクリストの一生を話してくれるルカに比べてさ

へ、近代に生まれた我々には人工の甘露味を味はさずには措かない。しかしヨハネもクリストの一生の意味の多い事實を傳へてゐる。我々は、ヨハネのクリストの傳記に或苛立たしさを感じるであらう。けれども三人の傳記作者たちに或魅力も感じられるであらう。人生に失敗したクリストは獨特の色彩を加へない限り、容易に「神の子」となることは出來ない。ヨハネはこの色彩を加へるのに少くとも最も當代には、up to date の手段をとつてゐる。ヨハネの傳へたクリストはマコやマタイの傳へたクリストのやうに天才的飛躍を具へてゐない。が、壯嚴にも優しいことは確かである。クリストの一生を傳へるのに何よりも簡古を重んじたマコは恐らく彼の傳記作者中、最もクリストを知つてゐたであらう。マコの傳へたクリストは現實主義的に生き生きしてゐる。我々はそこにクリストと握手し、クリストを抱き、――更に多少の誇張さへすれば、クリストの髯の匂を感じるであらう。しかし壯嚴にも劬りの深いヨハネのクリストも斥けることは出來ない。兎に角彼等の傳へたクリストに比べれば、後代の傳へたクリストは、――殊に彼をデカダンとした或ロシア人のクリストは徒らに彼を傷けるだけである。クリストは一時代の社會的約束を蹂躙することを顧みなかつた。（賣笑婦や稅吏や癩病人はいつも彼の話し相手である。）しかし天國を見なかつたのではない。クリストを l'enfant に描いた畫家たちはおのづからかう云ふクリストに憐みに近いものを感じてゐたであらう。（それは母胎を離れた後、「唯我獨尊」の獅子吼をした

佛陀よりもはるかに手よりのないものである。）けれども幼兒だつたクリストに對する彼等の憐みは多少にもしろ、デカダンだつたクリストに對する彼の同情よりも勝つてゐる。クリストは如何に葡萄酒に醉つても、何か彼自身の中にあるものは天國を見せずには措かなかつた。彼の悲劇はその爲に、——單にその爲に起つてゐる。或ロシア人は或時のクリストの如何に神に近かつたを知つてゐない。が、四人の傳記作者たちはいづれもこの事實に注目してゐた。

3　共產主義者

クリストはあらゆるクリストたちのやうに共產主義的精神を持つてゐる。若し共產主義者の目から見るとすれば、クリストの言葉は悉く共產主義的宣言に變るであらう。彼に先立つたヨハネさへ「二つの衣服を持てる者は持たぬ者に分け與へよ」と叫んでゐる。しかしクリストは無政府主義者ではない。我々人間は彼の前におのづから本體を露してゐる。（尤も彼は我々人間を操縱することは出來なかつた、——或は我々人間に操縱されることは出來なかつた。それは彼のヨセフではない、聖靈の子供だつた所以である。）しかしクリストの中にあつた共產主義者を論ずることはスヰツルに遠い日本では少くとも不便を伴つてゐる。少くともクリスト教徒たちの爲に。

4　無抵抗主義者

クリストは又無抵抗主義者だつた。それは彼の同志さへ信用しなかつた爲である。近代では丁度トルストイの他人の眞實を疑つたやうに。――しかしクリストの無抵抗主義は何か更に柔かである。靜かに眠つてゐる雪のやうに冷かではあつても柔かである。……

5　生活者

クリストは最速度の生活者である。佛陀は成道する爲に何年かを雪山の中に暮らした。しかしクリストは洗禮を受けると、四十日の斷食の後、忽ち古代のジヤアナリストになつた。彼はみづから燃え盡きようとする一本の蠟燭にそつくりである。彼の所業やジヤアナリズムは卽ちこの蠟燭の蠟淚だつた。

6　ジヤアナリズム至上主義者

クリストの最も愛したのは目ざましい彼のジヤアナリズムである。若し他のものを愛したとすれば、彼は大きい無花果のかげに年とつた豫言者になつてゐたであらう。平和はその時にはクリ

ストの上にも下つて來たのに相違ない。彼はもうその時には丁度古代の賢人のやうにあらゆる妥協のもとに微笑してゐたであらう。しかし運命は幸か不幸か彼にかう云ふ安らかな晩年を與へてくれなかつた。それは受難の名を與へられてゐても、正に彼の悲劇だつたであらう。けれどもクリストはこの悲劇の爲に永久に若々しい顏をしてゐるのである。

7　クリストの財布

かう云ふクリストの收入は恐らくはジヤアナリズムによつてゐたのであらう。が、彼は「明日のことを考へるな」と云ふほどのボヘミアンだつた。ボヘミアン？——我々はここにもクリストの中の共産主義者を見ることは困難ではない。しかし彼は兎も角も彼の天才の飛躍するまま、明日のことを顧みなかつた。「ヨブ記」を書いたジヤアナリストは或は彼よりも雄大だつたかも知れない。しかし彼は「ヨブ記」にない優しさを忍びこます手腕を持つてゐた。この手腕は少からず彼の收入を扶けたことであらう。彼のジヤアナリズムは十字架にかかる前に正に最高の市價を占めてゐた。しかし彼の死後に比べれば、——現にアメリカ聖書會社は神聖にも年々に利益を占めてゐる。……

8 或時のマリア

クリストはもう十二歳の時に彼の天才を示してゐた。彼の傳記作者の一人、――ルカの語る所によれば、「其子イエルサレムに留りぬ。然るにヨセフと母これを知らず、三日の後殿にて遇ふ。彼教師の中に坐し、聽き且問ひゐたり。聞者皆其知慧と其應對とを奇しとせり。」それは論理學を學ばずに論理に長じた學生時代のスウィフトと同じことである。かう云ふ早熟の天才の例は勿論世界中に稀ではない。クリストの父母は彼を見つけ、「さんざんお前を探してゐた」と言つた。すると彼は存外平氣に「どうしてわたしを尋ねるのです。わたしはわたしのお父さんのことを務めなければなりません」と答へた。「されど兩親は其語れる事を曉らず」と云ふのも恐らくは事實に近かつたであらう。けれども我々を動かすのは「其母これらの凡の事を心に藏めぬ」と云ふ一節である。美しいマリアはクリストの聖靈の子供であることを承知してゐた。この時のマリアの心もちはいぢらしいと共に哀れである。マリアはクリストの言葉の爲にヨセフに恥ぢなければならなかつたであらう。それから彼女自身の過去も考へなければならなかつたであらう。最後に――或は人氣のない夜中に突然彼女を驚かした聖靈の姿も思ひ出したかも知れない。「人の皆無、仕事は全部」と云ふフロオベルの氣もちは幼いクリストの中にも漲つてゐる。しかし大工の妻だつた

マリアはこの時も薄暗い「涙の谷」に向かひ合はなければならなかつたであらう。

9　クリストの確信

クリストは彼のジヤアナリズムのいつか大勢の讀者の爲に持て囃されることを確信してゐた。彼のジヤアナリズムに威力のあつたのはかう云ふ確信のあつた爲である。從つて彼は又最期の審判の、——即ち彼のジヤアナリズムの勝ち誇ることも確信してゐた。尤もかう云ふ確信も時々は動かずにゐなかつたであらう。しかし大體はこの確信のもとに自由に彼のジヤアナリズムを公けにした。「一人の外に善者はなし、即ち神なり」——それは彼の心の中を正直に語つたものだつたであらう。しかしクリストは彼自身も「善き者」でないことを知りながら、詩的正義の爲に戰ひつづけた。この確信は事實となつたものの、勿論彼の虚榮心である。クリストも亦あらゆるクリストたちのやうにいつも未來を夢みてゐた超阿呆の一人だつた。若し超人と云ふ言葉に對して超阿呆と云ふ言葉を造るとすれば。……

10　ヨハネの言葉

「世の罪を負ふ神の仔羊を觀よ。我に後れ來らん者は我よりも優れる者なり。」——バプテズマの

ヨハネはクリストを見、彼のまはりにゐた人々にかう話したと傳へられてゐる。壁の上にストリントベリイの肖像を掲げ、「ここにわたしよりも優れたものがゐる」と言つた、逞しいイプセンの心もちはヨハネの心もちに近かつたであらう。そこに茨に近い嫉妬よりも寧ろ薔薇の花に似た理解の美しさを感じるばかりである。かう云ふ年少のクリストのどの位天才的だつたかは言はずとも善い。しかしヨハネもこの時にはやはり最も天才的だつたであらう。丁度丈の高いヨルダンの蘆のゆららかに星を撫でてゐるやうに。……

11　或時のクリスト

クリストは十字架にかかる前に彼の弟子たちの足を洗つてやつた。「ソロモンよりも大いなるもの」を以てみづから任じてゐたクリストのかう云ふ謙遜を示したのは我々を動かさずには措かないのである。それは彼の弟子たちに教訓を與へる爲ではない。彼も彼等と變らない「人の子」だつたことを感じた爲におのづからかう云ふ所業をしたのであらう。それはヨハネのクリストを見て「神の仔羊を觀よ」と言つたのよりも壯嚴である。平和に至る道は何びとともクリストよりもマリアに學ばなければならぬ。マリアは唯この現世を忍耐して歩いて行つた女人である。（カトリツク教はクリストに達する爲にマリアを通じるのを常としてゐる。それは必しも偶然ではない。直

ちにクリストに達しようとするのは人生ではいつも危險である。)或はクリストの母だつたと云ふ以外に所謂ニウス・ヴァリユウのない女人である。弟子たちの足さへ洗つてやつたクリストは勿論マリアの足もとにひれ伏したかつたことであらう。しかし彼の弟子たちはこの時も彼を理解しなかつた。

「お前たちはもう綺麗になつた。」

それは彼の謙遜の中に死後に勝ち誇る彼の希望(或は彼の虚榮心)の一つに溶け合つた言葉である。クリストは事實上逆說的にも正にこの瞬間には彼等に劣つてゐると同時に彼等に百倍するほどまさつてゐた。

12 最大の矛盾

クリストの一生の最大の矛盾は彼の我々人間を理解してゐたにも關らず彼自身を理解出來なかつたことである。彼は庭鳥の啼く前にペテロさへ三度クリストを知らないと云ふことを承知してゐた。彼の言葉はその外にも如何に我々人間の弱いかと云ふことを敎へてゐる。しかも彼は彼自身もやはり弱いことを忘れてゐた。クリストの一生を背景にしたクリスト敎を理解することはこの爲に一々彼の所業を「豫言者X・Y・Zの言葉に應はせん爲なり」と云ふ詭辯を用ひなければな

らなかつた。のみならず畢にかう云ふ詭辯の古い貨幣になつた後はあらゆる哲學や自然科學の力を借りなければならなかつた。クリスト教は畢竟クリストの作つた教訓主義的な文藝に過ぎない。若し彼の(クリストの)ロマン主義的な色彩を除けば、トルストイの晩年の作品はこの古代の教訓主義的な作品に最も近い文藝であらう。

13 クリストの言葉

クリストは彼の弟子たちに「わたしは誰か?」と問ひかけてゐる。この問に答へることは困難ではない。彼はジヤアナリストであると共にジヤアナリズムの中の人物――或は「譬喩」と呼ばれてゐる短篇小説の作者だつたと共に「新約全書」と呼ばれてゐる小説的傳記の主人公だつたのである。我々は大勢のクリストたちの中にもかう云ふ事實を發見するであらう。クリストも彼の一生を彼の作品の索引につけずにはゐられない一人だつた。

14 孤身

「イエス……家に入りて人に知られざらん事を願ひしが隱れ得 りき。」――かう云ふマコの言葉は又他の傳記作者の言葉である。クリストは度たび隱れようとした。が、彼のジヤアナリズム

や奇蹟は彼に人々を集まらせてゐた。彼のイエルサレムへ赴いたのもペテロの彼を「メシア」と呼んだ影響も全然ないことはない。しかしクリストは十二の弟子たちよりも或は橄欖の林だの岩の山などを愛したであらう。しかもジヤアナリズムや奇蹟を行つたのは彼の性格の力である。彼はここでも我々のやうに矛盾せずにはゐられなかつた。けれどもジヤアナリストとなつた後、彼の孤身を愛したのは疑ひのない事實である。トルストイは彼の死ぬ時に「世界中に苦しんでゐる人人は澤山ある。それをなぜわたしばかり大騒ぎをするのか?」と言つた。この名聲の高まると共に自ら安じない心もちは我々にも決してない訣ではない。クリストは名高いジヤアナリストになつた。しかし時々大工の子だつた昔を懐がつてゐたかも知れない。ゲエテはかう云ふ心もちをフアウスト自身に語らせてゐる。フアウストの第二部の第一幕は實にこの吐息の作つたものと言つても善い。が、フアウストは幸ひにも艸花の咲いた山の上に佇んでゐた。……

15　クリストの歎聲

クリストは比喩を話した後、「どうしてお前たちはわからないか?」と言つた。この歎聲も亦度たび繰り返されてゐる。それは彼ほど我々人間を知り、彼ほどボヘミア的生活をつづけたものには或は滑稽に見えるであらう。しかし彼はヒステリツクに時々かう叫ばずにはゐられなかつた。

阿呆たちは彼を殺した後、世界中に大きい寺院を建ててゐる。が、我々はそれ等の寺院にやはり彼の歎聲を感ずるであらう。「どうしてお前たちはわからないか?」――それはクリストひとりの歎聲ではない。後代にも見じめに死んで行つた、あらゆるクリストたちの歎聲である。

16 サドカイの徒やパリサイの徒

サドカイの徒やパリサイの徒はクリストよりも事實上不滅である。この事實を指摘したのは「進化論」の著者ダアウィンだつた。彼等は今後も地衣類のやうにいつまでも地上に生存するであらう。「適者生存」は彼等には正に當嵌まる言葉である。彼等ほど地上の適者はない。彼等は何の感激もなしに油斷のない處世術を講じてゐる。マリアは恐らくクリストの彼等の一人でなかつたことを悲しんだであらう。ゲエテをベエトホオヴエンの罵つたのは正にゲエテ自身の中にゐるサドカイの徒やパリサイの徒を罵つたのだつた。

17 カヤパ

祭司の長だつたカヤパにも後代の憎しみは集つてゐる。彼はクリストを憎んでゐたであらう。が、必しもこの憎しみは彼一人にあつた訣ではない。唯彼を推し立てることのクリストを憎み或

は妬んだ大勢の人々に便利だつたからである。カヤパはきららに袍を着下し、冷かにクリストを眺めてゐたであらう。現世はそこにピラトと共に意氣地のない聖靈の子供を嘲つてゐる。燃えさかる松明の光りの中に。……

18　二人の盗人たち

　クリストの死の不評判だつたことは彼の十字架にかかる時にも盗人たちと一しよだつたのに明らかである。盗人たちの一人はクリストを罵ることを憚らなかつた。彼の言葉は彼自身の中にやはり人生の爲に打ち倒されたクリストを見出したことを示してゐる。しかしもう一人の盗人は彼よりも更に妄想を持つてゐた。クリストはこの盗人の言葉に彼の心を動かしたであらう。この盗人を慰めた彼の言葉は同時に又彼自身を慰めてゐる。

「お前はお前の信仰の爲に必ず天國にはひるであらう。」

後代はこの盗人に彼等の同情を示してゐる。が、もう一人の盗人には、――クリストを罵つた盗人には輕蔑を示してゐるのに過ぎない。それは正にクリストの敎へた詩的正義の勝利を示すものであらう。が、彼等は、――サドカイの徒やパリサイの徒は今日でも私かにこの盗人に贊成してゐる。事實上天國にはひることは彼等には無花果や眞桑瓜の汁を啜るほど重大ではない。

19　兵卒たち

兵卒たちは十字架の下にクリストの衣を分ち合つた。彼等には彼の衣の外に彼の持つてゐたものは見えなかつたのである。彼等は定めし肩幅の廣い模範的兵卒たちだつたのに違ひない。クリストは定めし彼等を見おろし、彼等の所業を輕蔑したであらう。しかし又同時に是認したであらう。クリストはクリスト自身の外には我々人間を理解してゐる。彼の教へた言葉によれば、感傷主義的詠嘆は最もクリストの嫌つたものだつた。

20　受難

十字架にかかつたクリストは多少の虚榮心を持つてゐたものの、彼の肉體的苦痛と共に精神的苦痛にも襲はれたであらう。殊に十字架を見守つてゐたマリアを眺めることは苦しかつた訣である。が、彼は「エリ、エリ、ラマサバクタニ」と云ふ必死の聲を擧げた後も(たとひそれは彼の愛する讃美歌の一節だつたにもせよ)彼の息の絶える前には何かおほ聲を發してゐた。我々はこのおほ聲の中に或は唯死に迫つた力を感ずるばかりであらう。しかしマタイの言葉によれば、「殿の幔上より下まで裂けて二つになり、又地震ひて岩裂け、墓ひらけて既に寐ねたる聖徒の身多く甦」つ

た。彼の死は確かに大勢の人々にかう云ふショックを與へたであらう。（マリアの腦貧血を起したことを記してゐないのは新約聖書の威嚴を尊んだからである。）クリストの一言一行に永遠の註釋を與へてゐるパピニさへこの事實はマタイを引いてゐるのに過ぎない。彼自身を欺いてゐるパピニの詩的情熱はそこにも亦馬脚を露してゐる。クリストの死は事實上彼の豫言者的天才を妄信した人々には――彼自身の中にエリヤを見た人々には餘りに我々に近いものだつた。從つて又炎の車に乘つて天上に去るよりも恐しかつた。彼等は唯その爲にショックを受けずにはゐなかつたのである。しかし年をとつた祭司たちはこのショックに欺かれはしなかつたであらう。

「それ見たことか！」

彼等の言葉はイエルサレムからニウヨウクや東京へも傳はつてゐる。イエルサレムを圍んだ橄欖の山々を最も散文的に飛び超えながら。

21　文化的なクリスト

クリストの弟子たちに理解されなかつたのは彼の餘りに文化人だつた爲である。（彼の天才を別にしても。）彼等は大體は少くとも彼に奇蹟を求めてゐた。哲學の盛んだつた摩伽陀國の王子はクリストよりも奇蹟を行はなかつた。それはクリストの罪よりも寧ろユダヤの罪である。彼はロオ

マの詩人たちにも遜らない第一流のジヤアナリストだつた。同時に又彼の愛國的精神さへ抛つて顧みない文化人だつた。(マコはクリスト傳第七章二五以下にこの事實を記してゐる。)バプテズマのヨハネは彼の前には駱駝の毛衣や蝗や野蜜に野人の面目を露してゐる。クリストはヨハネの言つたやうに洗禮に唯聖靈を用ひてゐた。のみならず彼の洗禮(?)を受けたのは十二人の弟子たちの外にも賣笑婦や税吏や罪人だつた。我々はかう云ふ事實にもおのづから彼に柔い心臓のあつたのを見出すであらう。彼は又彼の行つた奇蹟の中に度たび細かい神經を示してゐる。文化的なクリストは十字架の上に最も野蠻な死を遂げるやうになつた。しかし野蠻なバプテズマのヨハネは文化的なサロメの爲に盆の上に頭をのせられてゐる。運命はここにも彼等の爲に逆說的な悪戲を忘れなかつた。……

22　貧しい人たちに

クリストのジヤアナリズムは貧しい人たちや奴隷を慰めることになつた。それは勿論天國などに行かうと思はない貴族や金持ちに都合の善かつた爲もあるであらう。しかし彼の天才は彼等を動かさずにはゐなかつたのである。いや、彼等ばかりではない。我々も彼のジヤアナリズムの中に何か美しいものを見出してゐる。何度叩いても開かれない門のあることは我々も亦知らないわ

けではない。狹い門からはひることもやはり我々には必しも幸福ではないことを示してゐる。しかし彼のジヤアナリズムはいつも無花果のやうに甘みを持つてゐる。彼は實にイスラエルの民の生んだ、古今に珍らしいジヤアナリストだつた。同時に又我々人間の生んだ、古今に珍らしい天才だつた。「豫言者」は彼以後には流行してゐない。しかし彼の一生はいつも我々を動かすであらう。彼は十字架にかかる爲に、——ジヤアナリズム至上主義を推し立てる爲にあらゆるものを犧牲にした。ゲエテは婉曲にクリストに對する彼の輕蔑を示してゐる。丁度後代のクリストたちの多少はゲエテを嫉妬してゐるやうに。——我々はエマヲの旅びとたちのやうに我々の心を燃え上らせるクリストを求めずにはゐられないのであらう。

（昭和二年七月二十三日）

〔遺稿〕

十本の針

一　或人々

わたしはこの世の中に或人々のあることを知つてゐる。それ等の人々は何ごとも直覺すると共に解剖してしまふ。つまり一本の薔薇の花はそれ等の人々には美しいと共に畢竟植物學の教科書中の薔薇科の植物に見えるのである。現にその薔薇の花を折つてゐる時でも。………

唯直覺する人々はそれ等の人々よりも幸福である。眞面目と呼ばれる美德の一つはそれ等の人人(直覺すると共に解剖する)には與へられない。それ等の人々はそれ等の人々の一生を恐しい遊戲の中に用ひ盡すのである。あらゆる幸福はそれ等の人々には解剖する爲に減少し、同時に又あらゆる苦痛も解剖する爲に增加するであらう。「生まれざりしならば」と云ふ言葉は正にそれ等の人々に當つてゐる。

二　わたしたち

わたしたちは必しもわたしたちではない。わたしたちの祖先は悉くわたしたちの中に息づいて

ゐる。わたしたちの中にゐるわたしたちの祖先に從はなければ、わたしたちは不幸に陷らなければならぬ。「過去の業」と云ふ言葉はかう云ふ不幸を比喩的に說明する爲に用ひられたのであらう。「わたしたち自身を發見する」のは卽ちわたしたちの中にゐるわたしたちの祖先を發見することである。同時に又わたしたちを支配する天上の神々を發見することである。

三　鴉と孔雀と

わたしたちに最も恐しい事實はわたしたちの畢にわたしたちを超えられないと云ふことである。あらゆる樂天主義的な目隱しをとつてしまへば、鴉はいつになつても孔雀になることは出來ない。或詩人の書いた一行の詩はいつも彼の詩の全部である。

四　空中の花束

科學はあらゆるものを說明してゐる。未來も亦あらゆるものを說明するであらう。しかしわたしたちの重んずるのは唯科學そのものであり、或は藝術そのものである。――卽ちわたしたちの精神的飛躍の空中に捉へた花束ばかりである。L'homme est rien と言はないにもせよ、わたしたちは「人として」は格別大差のあるものではない。「人として」のボオドレエルはあらゆる精神的

院に充ち滿ちてゐる。唯「惡の華」や「小さい散文詩」は一度も彼等の手に成つたことはない。

五　2+2=4

2+2=4と云ふことは眞實である。しかし事實上十の間に無數の因子のあることを認めなければならぬ。卽ちあらゆる問題はこの十の中に含まれてゐる。

六　天國

若し天國を造り得るとすれば、それは唯地上にだけである。この天國は勿論茨の中に薔薇の花の咲いた天國であらう。そこには又「あきらめ」と稱する絕望に安んじた人々の外には犬ばかり澤山步いてゐる。尤も犬になることも惡いことではない。

七　懺悔

わたしたちはあらゆる懺悔にわたしたちの心を動かすであらう。が、あらゆる懺悔の形式は、「わたしのしたことをしないやうに。わたしの言ふことをするやうに」である。

八　又或人びと

わたしは又或人々を知つてゐる。それ等の人々は何ごとにも容易に飽くことを知らない。一人の女人や一つの想念や一本の石竹や一きれのパンをいやが上にも得ようとしてゐる。從つてそれ等の人びとほど贅澤に暮らしてゐるものはない。同時に又それ等の人びとほど見じめに暮らしてゐるものはない。それ等の人々はいつの間にかいろいろのものの奴隷になつてゐる。從つて他人には天國を與へても、――或は天國に至る途を與へても、天國は畢にそれ等の人々自身のものになることは出來ない。「多欲喪身」と云ふ言葉はそれ等の人々に與へられるであらう。孔雀の羽根の扇や人乳を飲んだ豚の仔の料理さへそれ等の人びとにはそれだけでは決して滿足を與へないのである。それ等の人々は必然に悲しみや苦しみさへ求めずにはゐない。(求めずとも與へられる當然の悲しみや苦しみの外にも)そこにそれ等の人々を他の人々から截り離す一すぢの溝は掘られてゐる。それ等の人々は阿呆ではない。が、阿呆以上の阿呆である。それ等の人々を救ふものは唯それ等の人々以外の人々に變ることであらう。從つて到底救はれる道はない。

九　聲

大勢の人々の叫んでゐる中に一人の話してゐる聲は決して聞えないと思はれるであらう。が、事實上必ず聞えるのである。わたしたちの心の中に一すぢの炎の殘つてゐる限りは。――尤も時時彼の聲は後代のマイクロフォンを待つかも知れない。

十　言葉

わたしたちはわたしたちの氣もちを容易に他人に傳へることは出來ない。それは唯傳へられる他人次第によるのである。「拈華微笑」の昔は勿論、百數十行に亙る新聞記事さへ他人の氣もちと應じない時には到底合點の出來るものではない。「彼」の言葉を理解するものはいつも「第二の彼」であらう。しかしその「彼」も亦必ず植物のやうに生長してゐる。從つて或時代の「彼」の言葉は第二の或時代の「彼」以外に理解することは出來ないであらう。いや、或時代の彼自身さへ他の時代の彼自身には他人のやうに見えるかも知れない。が、幸ひにも「第二の彼」は「彼」の言葉を理解したと信じてゐる。

（昭和二年七月）

〔遺稿〕

侏儒の言葉

「侏儒の言葉」の序

「侏儒の言葉」は必しもわたしの思想を傳へるものではない。唯わたしの思想の變化を時々窺はせるのに過ぎぬものである。一本の草よりも一すぢの蔓草、――しかもその蔓草は幾すぢも蔓を伸ばしてゐるかも知れない。

星

太陽の下に新しきことなしとは古人の道破した言葉である。しかし新しいことのないのは獨り太陽の下ばかりではない。

天文學者の說によれば、ヘラクレス星群を發した光は我我の地球へ達するのに三萬六千年を要するさうである。が、ヘラクレス星群と雖も、永久に輝いてゐることは出來ない。何時か一度は冷灰のやうに、美しい光を失つてしまふ。のみならず死は何處へ行つても常に生を孕んでゐる。光を失つたヘラクレス星群も無邊の天をさまよふ内に、都合の好い機會を得さへすれば、一團の星雲と變化するであらう。さうすれば又新しい星は續々と其處に生まれるのである。

宇宙の大に比べれば、太陽も一點の燐火に過ぎない。況や我我の地球をやである。しかし遠い宇宙の極、銀河のほとりに起つてゐることも、實はこの泥團の上に起つてゐることと變りはない。生死は運動の方則のもとに、絕えず循環してゐるのである。さう云ふことを考へると、天上に散在する無數の星にも多少の同情を禁じ得ない。いや、明滅する星の光は我我と同じ感情を表はし

てゐるやうにも思はれるのである。この點でも詩人は何ものよりも先に高々と眞理をうたひ上げた。

眞砂なす數なき星のその中に吾に向ひて光る星あり

しかし星も我我のやうに流轉を閱すると云ふことは——兎に角退屈でないことはあるまい。

鼻

クレオパトラの鼻が曲つてゐたとすれば、世界の歴史はその爲に一變してゐたかも知れないとは名高いパスカルの警句である。しかし戀人と云ふものは滅多に實相を見るものではない。いや、我我の自己欺瞞は一たび戀愛に陷つたが最後、最も完全に行はれるのである。

アントニイもさう云ふ例に洩れず、クレオパトラの鼻が曲つてゐたとすれば、努めてそれを見まいとしたであらう。又見ずにはゐられない場合もその短所を補ふべき何か他の長所を探したであらう。何か他の長所と云へば、天下に我我の戀人位、無數の長所を具へた女性は一人もゐないのに相違ない。アントニイもきつと我我同樣、クレオパトラの眼とか脣とかに、あり餘る償ひを見出したであらう。その上又例の「彼女の心」！實際我我の愛する女性は古往今來飽き飽きする程、素ばらしい心の持ち主である。のみならず彼女の服裝とか、或は彼女の財產とか、或は又彼

女の社會的地位とか、――それらも長所にならないことはない。更に甚しい場合を擧げれば、以前或名士に愛されたと云ふ事實乃至風評さへ、長所の一つに數へられるのである。しかもあのクレオパトラは豪奢と神祕とに充ち滿ちたエヂプトの最後の女王ではないか？　香の煙の立ち昇る中に、冠の珠玉でも光らせながら、蓮の花か何か弄んでゐれば、多少の鼻の曲りなどは何人の眼にも觸れなかつたであらう。況やアントニイの眼をやである。

かう云ふ我我の自己欺瞞はひとり戀愛に限つたことではない。我我は多少の相違さへ除けば、大抵我我の欲するままに、いろいろ實相を塗り變へてゐる。たとへば齒科醫の看板にしても、それが我我の眼にはひるのは看板の存在そのものよりも、看板のあることを欲する心、――牽いては我我の齒痛ではないか？　勿論我我の齒痛などは世界の歴史には沒交渉であらう。しかしかう云ふ自己欺瞞は民心を知りたがる政治家にも、敵狀を知りたがる軍人にも、或は又財況を知りたがる實業家にも同じやうにきつと起るのである。わたしはこれを修正すべき理智の存在を否みはしない。同時に又百般の人事を統べる「偶然」の存在も認めるものである。が、あらゆる熱情は理性の存在を忘れ易い。「偶然」は云はば神意である。すると我我の自己欺瞞は世界の歴史を左右すべき、最も永久な力かも知れない。

つまり二千餘年の歴史は眇たる一クレオパトラの鼻の如何に依つたのではない。寧ろ地上に遍

満した我我の愚昧に依つたのである。哂ふべき、――しかし壯嚴な我我の愚昧に依つたのである。

修身

道徳は便宜の異名である。「左側通行」と似たものである。

×

道徳の與へたる恩恵は時間と勞力との節約である。道徳の與へる損害は完全なる良心の麻痺である。

×

妄に道徳に反するものは經濟の念に乏しいものである。妄に道徳に屈するものは臆病ものか怠けものである。

×

我我を支配する道徳は資本主義に毒された封建時代の道徳である。我我は殆ど損害の外に、何の恩恵にも浴してゐない。

×

强者は道徳を蹂躙するであらう。弱者は又道徳に愛撫されるであらう。道徳の迫害を受けるも

のは常に強弱の中間者である。

×

道徳は常に古着である。

×

良心は我我の口髭のやうに年齢と共に生ずるものではない。我我は良心を得る爲にも若干の訓練を要するのである。

×

一國民の九割強は一生良心を持たぬものである。

×

我我の悲劇は年少の爲、或は訓練の足りない爲、まだ良心を捉へ得ぬ前に、破廉恥漢の非難を受けることである。

我我の喜劇は年少の爲、或は訓練の足りない爲、破廉恥漢の非難を受けた後に、やつと良心を捉へることである。

×

良心とは嚴肅なる趣味である。

×

良心は道徳を造るかも知れぬ。しかし道徳は未だ嘗て、良心の良の字も造つたことはない。

×

良心もあらゆる趣味のやうに、病的なる愛好者を持つてゐる。さう云ふ愛好者は十中八九、聰明なる貴族か富豪かである。

好惡

わたしは古い酒を愛するやうに、古い快樂說を愛するものである。我我の行爲を決するものは善でもなければ惡でもない。唯我我の好惡である。或は我我の快不快である。さうとしかわたしには考へられない。

ではなぜ我我は極寒の天にも、將に溺れんとする幼兒を見る時、進んで水に入るのであるか？　救ふことを快とするからである。では水に入る不快を避け、幼兒を救ふ快を取るのは何の尺度に依つたのであらう？　より大きい快を選んだのである。しかし肉體的快不快と精神的快不快とは同一の尺度に依らぬ筈である。いや、この二つの快不快は全然相容れぬものではない。寧ろ鹹水と淡水とのやうに、一つに融け合つてゐるものである。現に精神的教養を受けない京阪邊の紳士

諸君はすつぽんの汁を啜つた後、鰻を菜に飯を食ふさへ、無上の快に數へてゐるではないか？　且又水や寒氣などにも肉體的享樂の存することは寒中水泳の示すところである。なほこの間の消息を疑ふものはマソヒズムの場合を考へるが好い。あの呪ふべきマソヒズムはかう云ふ肉體的快不快の外見上の倒錯に常習的傾向の加はつたものである。わたしの信ずるところによれば、或は柱頭の苦行を喜び、或は火裏の殉教を愛した基督教の聖人たちは大抵マソヒズムに罹つてゐたらしい。

我我の行爲を決するものは昔の希臘人の云つた通り、好惡の外にないのである。我我は人生の泉から、最大の味を汲み取らねばならぬ。「パリサイの徒の如く、悲しき面もちをなすこと勿れ。」耶蘇さへ既にさう云つたではないか。賢人とは畢竟荊棘の路にも、薔薇の花を咲かせるもののことである。

侏儒の祈り

わたしはこの綵衣を纏ひ、この筋斗の戲を獻じ、この太平を樂しんでゐれば不足のない侏儒でございます。どうかわたしの願ひをおかなへ下さいまし。

どうか一粒の米すらない程、貧乏にして下さいますな。どうか又熊掌にさへ飽き足りる程、富

裕にもして下さいますな。

どうか採桑の農婦すら嫌ふやうにして下さいますな。どうか又後宮の麗人さへ愛するやうにもして下さいますな。

どうか菽麥すら辨ぜぬ程、愚昧にして下さいますな。どうか又雲氣さへ察する程、聰明にもして下さいますな。

とりわけどうか勇ましい英雄にして下さいますな。わたしは現に時とすると、攀ぢ難い峯の頂を窮め、越え難い海の浪を渡り――云はば不可能を可能にする夢を見ることがございます。さう云ふ夢を見てゐる時程、空恐しいことはございません。わたしは龍と闘ふやうに、この夢と闘ふのに苦しんで居ります。どうか英雄とならぬやうに――英雄の志を起さぬやうに力のないわたしをお守り下さいまし。

わたしはこの春酒に酔ひ、この金縷の歌を誦し、この好日を喜んでゐれば不足のない侏儒でございます。

自由意志と宿命と

兎に角宿命を信ずれば、罪悪なるものの存在しない爲に懲罰と云ふ意味も失はれるから、罪人

に對する我我の態度は寛大になるのに相違ない。同時に又自由意志を信ずれば責任の觀念を生ずる爲に、良心の麻痺を免れるから、我我自身に對する我我の態度は嚴肅になるのに相違ない。ではいづれに從はうとするのか？

わたしは恬然と答へたい。半ばは自由意志を信じ、半ばは宿命を信ずべきである。或は半ばは自由意志を疑ひ、半ばは宿命を疑ふべきである。なぜと云へば我我は我我に負はされた宿命により、我我の妻を娶つたではないか？　同時に又我我は我我に惠まれた自由意志により、必ずしも妻の注文通り、羽織や帶を買つてやらぬではないか？

自由意志と宿命とに關らず、神と惡魔、美と醜、勇敢と怯懦、理性と信仰、――その他あらゆる天秤の兩端にはかう云ふ態度をとるべきである。古人はこの態度を中庸と呼んだ。中庸とは英吉利語の good sense である。わたしの信ずるところによれば、グッドセンスを待たない限り、如何なる幸福も得ることは出來ない。もしそれでも得られるとすれば、炎天に炭火を擁したり、大寒に團扇を揮つたりする痩せ我慢の幸福ばかりである。

小兒

軍人は小兒に近いものである。英雄らしい身振を喜んだり、所謂光榮を好んだりするのは今更

此處に云ふ必要はない。機械的訓練を貴んだり、動物的勇氣を重んじたりするのも小學校にのみ見得る現象である。殺戮を何とも思はぬなどは一層小兒と選ぶところはない。殊に小兒と似てゐるのは喇叭や軍歌に鼓舞されれば、何の爲に戰ふかも問はず、欣然と敵に當ることである。

この故に軍人の誇りとするものは必ず小兒の玩具に似てゐる。緋縅の鎧や鍬形の兜は成人の趣味にかなつた者ではない。勲章も——わたしには實際不思議である。なぜ軍人は酒にも醉はずに、勲章を下げて歩かれるのであらう？

武器

正義は武器に似たものである。武器は金を出しさへすれば、敵にも味方にも買はれるであらう。正義も理窟をつけさへすれば、敵にも味方にも買はれるものである。古來「正義の敵」と云ふ名は砲彈のやうに投げかはされた。しかし修辭につりこまれなければ、どちらがほんとうの「正義の敵」だか、滅多に判然したためしはない。

日本人の勞働者は單に日本人と生まれたが故に、パナマから退去を命ぜられた。これは正義に反してゐる。亞米利加は新聞紙の傳へる通り、「正義の敵」と云はなければならぬ。しかし支那人の勞働者も單に支那人と生まれたが故に、千住から退去を命ぜられた。これも正義に反してゐる。

日本は新聞紙の傳へる通り、――いや日本は二千年來、常に「正義の味方」である。正義はまだ日本の利害と一度も矛盾はしなかつたらしい。

武器それ自身は恐れるに足りない。恐れるのは武人の技倆である。正義それ自身も恐れるに足りない。恐れるのは煽動家の雄辯である。武后は人天を顧みず、冷然と正義を蹂躙した。しかし李敬業の亂に當り、駱賓王の檄を讀んだ時には色を失ふことを免れなかつた。「一抔土未乾　六尺孤安在」の雙句は天成のデマゴオクを待たない限り、發し得ない名言だつたからである。

わたしは歴史を翻へす度に、遊就館を想ふことを禁じ得ない。過去の廊下には薄暗い中にさまざまの正義が陳列してある。青龍刀に似てゐるのは儒教の教へる正義であらう。騎士の槍に似てゐるのは基督教の教へる正義であらう。此處に太い棍棒がある。これは社會主義者の正義であらう。彼處に房のついた長劍がある。あれは國家主義者の正義であらう。わたしはさう云ふ武器を見ながら、幾多の戰ひを想像し、おのづから心悸の高まることがある。しかしまだ幸か不幸か、わたし自身その武器の一つを執りたいと思つた記憶はない。

尊王

十七世紀の佛蘭西の話である。或日 Duc de Bourgogne が Abbé Choisy にこんなことを尋

ねた。シャルル六世は氣違ひだつた。その意味を婉曲に傳へる爲には、何と云へば好いのであらう？　アベは言下に返答した。「わたしならば唯かう申します。シャルル六世は氣違ひだつたと。」アベ・ショアズイはこの答を一生の冒險の中に數へ、後のちまでも自慢にしてゐたさうである。十七世紀の佛蘭西はかう云ふ逸話の殘つてゐる程、尊王の精神に富んでゐたと云ふ。しかし二十世紀の日本も尊王の精神に富んでゐることは當時の佛蘭西に劣らなさうである。まことに、――――欣幸の至りに堪へない。

創作

藝術家は何時も意識的に彼の作品を作るのかも知れない。しかし作品そのものを見れば、作品の美醜の一半は藝術家の意識を超越した神秘の世界に存してゐる。一半？　或は大半と云つても好い。

我我は妙に問ふに落ちず、語るに落ちるものである。我我の魂はおのづから作品に露るることを免れない。一刀一拜した古人の用意はこの無意識の境に對する畏怖を語つてはゐないであらうか？

創作は常に冒險である。所詮は人力を盡した後、天命に委かせるより仕方はない。

少時學語苦難圓　唯道工夫半未全
到老始知非力取　三分人事七分天

趙甌北の「論詩」の七絶はこの間の消息を傳へたものであらう。藝術は妙に底の知れない凄みを帶びてゐるものである。我我も金を欲しがらなければ、又名聞を好まなければ、最後に殆ど病的な創作熱に苦しまなければ、この無氣味な藝術などと格鬪する勇氣は起らなかつたかも知れない。

鑑賞

藝術の鑑賞は藝術家自身と鑑賞家との協力である。云はば鑑賞家は一つの作品を課題に彼自身の創作を試みるのに過ぎない。この故に如何なる時代にも名聲を失はない作品は必ず種々の鑑賞を可能にする特色を具へてゐる。しかし種々の鑑賞を可能にすると云ふ意味はアナトオル・フランスの云ふやうに、何處か曖昧に出來てゐる爲、どう云ふ解釋を加へるのもたやすいと云ふ意味ではあるまい。寧ろ廬山の峯々のやうに、種々の立ち場から鑑賞され得る多面性を具へてゐるのであらう。

古典

古典の作者の幸福なる所以は兎に角彼等の死んでゐることである。

又

我我の――或は諸君の幸福なる所以も兎に角彼等の死んでゐることである。

幻滅した藝術家

或一群の藝術家は幻滅の世界に住してゐる。彼等は愛を信じない。良心なるものをも信じない。唯昔の苦行者のやうに無何有の砂漠を家としてゐる。その點は成程氣の毒かも知れない。しかし美しい蜃氣樓は砂漠の天にのみ生ずるものである。百般の人事に幻滅した彼等も大抵藝術には幻滅してゐない。いや、藝術と云ひさへすれば、常人の知らない金色の夢は忽ち空中に出現するのである。彼等も實は思ひの外、幸福な瞬間を持たぬ訣ではない。

告白

完全に自己を告白することは何人にも出來ることではない。同時に又自己を告白せずには如何なる表現も出來るものではない。

ルツソオは告白を好んだ人である。しかし赤裸々の彼自身は「懺悔録」の中にも發見出來ない。メリメは告白を嫌つた人である。しかし「コロンバ」は隱約の間に彼自身を語つてはゐないであらうか？　所詮告白文學とその他の文學との境界線は見かけほどはつきりしてゐないのである。

人生

——石黑定一君に——

もし游泳を學ばないものに泳げと命ずるものがあれば、何人も無理だと思ふであらう。もし又ランニングを學ばないものに駈けろと命ずるものがあれば、やはり理不盡だと思はざるを得まい。しかし我我は生まれた時から、かう云ふ莫迦げた命令を負はされてゐるのも同じことである。

我我は母の胎内にゐた時、人生に處する道を學んだであらうか？　しかも胎内を離れるが早いか、兎に角大きい競技場に似た人生の中に踏み入るのである。勿論游泳を學ばないものは滿足に泳げる理窟はない。同様にランニングを學ばないものは大抵人後に落ちさうである。すると我我も創痍を負はずに人生の競技場を出られる筈はない。

成程世人は云ふかも知れない。「前人の跡を見るが好い。あそこに君たちの手本がある」と。しかし百の游泳者や千のランナアを眺めたにしろ、忽ち游泳を覺えたり、ランニングに通じたりす

るものではない。のみならずその游泳者は悉く水を飲んでをり、その又ランナアは一人残らず競技場の土にまみれてゐる。見給へ、世界の名選手さへ大抵は得意の微笑のかげに澁面を隱してゐるではないか？

人生は狂人の主催に成つたオリムピック大會に似たものである。我我は人生と闘ひながら、人生と闘ふことを學ばねばならぬ。かう云ふゲエムの莫迦莫迦しさに憤慨を禁じ得ないものはさつさと埒外に歩み去るが好い。自殺も亦確かに一便法である。しかし人生の競技場に踏み止まりたいと思ふものは創痍を恐れずに闘はなければならぬ。

又

人生は一箱のマッチに似てゐる。重大に扱ふのは莫迦莫迦しい。重大に扱はなければ危險である。

又

人生は落丁の多い書物に似てゐる。一部を成すとは稱し難い。しかし兎に角一部を成してゐる。

地上樂園の光景は屢詩歌にもうたはれてゐる。が、わたしはまだ殘念ながら、さう云ふ詩人の地上樂園に住みたいと思つた覺えはない。基督教徒の地上樂園は畢竟退屈なるパノラマである。黄老の學者の地上樂園もつまりは索漠とした支那料理屋に過ぎない。況んや近代のユウトピアなどは——ウイルヤム・ジエエムスの戰慄したことは何びとの記憶にも殘つてゐるであらう。

わたしの夢みてゐる地上樂園はさう云ふ天然の溫室ではない。同時に又さう云ふ學校を兼ねた食糧や衣服の配給所でもない。唯此處に住んでゐれば、兩親は子供の成人と共に必ず息を引取るのである。それから男女の兄弟はたとひ惡人に生まれるにもしろ、莫迦には決して生まれない結果、少しも迷惑をかけ合はないのである。それから女は妻となるや否や、家畜の魂を宿す爲に從順そのものに變るのである。それから子供は男女を問はず、兩親の意志や感情通りに、一日のうちに何囘でも聾と啞と腰ぬけと盲目とになることが出來るのである。それから甲の友人は乙の友人よりも貧乏にならず、同時に又乙の友人は甲の友人よりも金持ちにならず、互ひに相手を褒め合ふことに無上の滿足を感ずるのである。それから——ざつとかう云ふ處を思へば好い。

これは何もわたし一人の地上樂園たるばかりではない。同時に又天下に充滿した善男善女の地

上樂園である。唯古來の詩人や學者はその金色の瞑想の中にかう云ふ光景を夢みなかつた。夢みなかつたのは別に不思議ではない。かう云ふ光景は夢みるにさへ、餘りに眞實の幸福に溢れすぎてゐるからである。

附記　わたしの甥はレムブラントの肖像畫を買ふことを夢みてゐる。しかし彼の小遣ひを十圓貰ふことは夢みてゐない。これも十圓の小遣ひは餘りに眞實の幸福に溢れすぎてゐるからである。

暴力

人生は常に複雜である。複雜なる人生を簡單にするものは暴力より外にある筈はない。この故に往往石器時代の腦髓しか持たぬ文明人は論爭より殺人を愛するのである。

しかし亦權力も畢竟はパテントを得た暴力である。我我人間を支配する爲にも、暴力は常に必要なのかも知れない。或は又必要ではないのかも知れない。

「人間らしさ」

わたしは不幸にも「人間らしさ」に禮拜する勇氣は持つてゐない。いや、屢「人間らしさ」に輕蔑を感ずることは事實である。しかし又常に「人間らしさ」に愛を感ずることも事實である。愛を？

――或は愛よりも憐憫かも知れない。が、兎に角「人間らしさ」にも動かされぬやうになつたとすれば、人生は到底住するに堪へない精神病院に變りさうである。Swift の畢に發狂したのも當然の結果と云ふ外はない。

スウイフトは發狂する少し前に、梢だけ枯れた木を見ながら、「おれはあの木とよく似てゐる。頭から先に參るのだ」と呟いたことがあるさうである。この逸話は思ひ出す度にいつも戰慄を傳へずには置かない。わたしはスウイフトほど頭の好い一代の鬼才に生まれなかつたことをひそかに幸福に思つてゐる。

椎の葉

完全に幸福になり得るのは白痴にのみ與へられた特權である。如何なる樂天主義者にもせよ、笑顏に終始することの出來るものではない。いや、もし眞に樂天主義なるものの存在を許し得るとすれば、それは唯如何に幸福に絶望するかと云ふことのみである。

「家にあれば笥にもる飯を草まくら旅にしあれば椎の葉にもる」とは行旅の情をうたつたばかりではない。我我は常に「ありたい」ものの代りに「あり得る」ものと妥協するのである。學者はこの椎の葉にさまざまの美名を與へるであらう。が、無遠慮に手に取つて見れば、椎の葉はいつも椎

の葉である。

椎の葉の椎の葉たるを歎ずるのは椎の葉の笥たるを主張するよりも確かに尊敬に價してゐる。しかし椎の葉の椎の葉たるを一笑し去るよりも退屈であらう。少くとも生涯同一の歎を繰り返すことに倦まないのは滑稽であると共に不道徳である。實際又偉大なる厭世主義者は澁面ばかり作つてはゐない。不治の病を負つたレオパルディさへ、時には蒼ざめた薔薇の花に寂しい頬笑みを浮べてゐる。……

追記　不道徳とは過度の異名である。

佛陀

悉達多は王城を忍び出た後六年の間苦行した。六年の間苦行した所以は勿論王城の生活の豪奢を極めてゐた祟りであらう。その證據にはナザレの大工の子は、四十日の斷食しかしなかつたやうである。

又

悉達多は車匿に馬轡を執らせ、潜かに王城を後ろにした。が、彼の思辨癖は屢彼をメランコ

リアに沈ましめたと云ふことである。すると王城を忍び出た後、ほつと一息ついたものは實際將來の釋迦無二佛だつたか、それとも彼の妻の耶輸陀羅だつたか、容易に斷定は出來ないかも知れない。

又

悉達多は六年の苦行の後、菩提樹下に正覺に達した。彼の成道の傳說は如何に物質の精神を支配するかを語るものである。彼はまづ水浴してゐる。それから乳糜を食してゐる。最後に難陀婆羅と傳へられる牧牛の少女と話してゐる。

政治的天才

古來政治的天才とは民衆の意志を彼自身の意志とするもののやうに思はれてゐた。が、これは正反對であらう。寧ろ政治的天才とは彼自身の意志を民衆の意志とするもののことを云ふのである。少くとも民衆の意志であるかのやうに信ぜしめるものを云ふのである。この故に政治的天才は俳優的天才を伴ふらしい。ナポレオンは「莊嚴と滑稽との差は僅かに一步である」と云つた。この言葉は帝王の言葉と云ふよりも名優の言葉にふさはしさうである。

又

民衆は大義を信ずるものである。が、政治的天才は常に大義そのものには一文の錢をも抛たないものである。唯民衆を支配する爲には大義の假面を用ひなければならぬ。しかし一度用ひたが最後、大義の假面は永久に脫することを得ないものである。もし又强ひて脫さうとすれば、如何なる政治的天才も忽ち非命に仆れる外はない。つまり帝王も王冠の爲におのづから支配を受けてゐるのである。この故に政治的天才の悲劇は必ず喜劇をも兼ねぬことはない。たとへば昔仁和寺の法師の鼎をかぶつて舞つたと云ふ「つれづれ草」の喜劇をも兼ねぬことはない。

戀は死よりも强し

「戀は死よりも强し」と云ふのはモオパスサンの小說にもある言葉である。が、死よりも强いものは勿論天下に戀ばかりではない。たとへばチブスの患者などのビスケツトを一つ食つた爲に知れ切つた往生を遂げたりするのは食慾も死よりは强い證據である。食慾の外にも數へ擧げれば、愛國心とか、宗敎的感激とか、人道的精神とか、利慾とか、名譽心とか、犯罪的本能とか――まだ死よりも强いものは澤山あるのに相違ない。つまりあらゆる情熱は死よりも强いものなのであ

らう。(勿論死に對する情熱は例外である。)且つ又戀はさう云ふもののうちでも、特に死よりも強いかどうか、迂闊に斷言は出來ないらしい。一見、死よりも強い戀と見做され易い場合さへ、實は我我を支配してゐるのは佛蘭西人の所謂ボヴアリスムである。我我自身を傳奇の中の戀人のやうに空想するボヴアリイ夫人以來の感傷主義である。

地獄

人生は地獄よりも地獄的である。地獄の與へる苦しみは一定の法則を破つたことはない。たとへば餓鬼道の苦しみは目前の飯を食はうとすれば飯の上に火の燃えるたぐひである。しかし人生の與へる苦しみは不幸にもそれほど單純ではない。目前の飯を食はうとすれば、火の燃えることもあると同時に、又存外樂樂と食ひ得ることもあるのである。のみならず樂樂と食ひ得た後さへ、腸加太兒の起ることもあると同時に、又存外樂樂と消化し得ることもあるのである。かう云ふ無法則の世界に順應するのは何びとにも容易に出來るものではない。もし地獄に墮ちたとすれば、わたしは必ず咄嗟の間に餓鬼道の飯も掠め得るであらう。況や針の山や血の池などは二三年其處に住み慣れさへすれば格別跋渉の苦しみを感じないやうになつてしまふ筈である。

公衆は醜聞を愛するものである。白蓮事件、有島事件、武者小路事件――公衆は如何にこれらの事件に無上の滿足を見出したであらう。ではなぜ公衆は醜聞を――殊に世間に名を知られた他人の醜聞を愛するのであらう？　グルモンはこれに答へてゐる。――

「隱れたる自己の醜聞も當り前のやうに見せてくれるから。」

グルモンの答は中つてゐる。が、必ずしもそればかりではない。醜聞さへ起し得ない俗人たちはあらゆる名士の醜聞の中に彼等の怯懦を辯解する好個の武器を見出すのである。同時に又實際には存しない彼等の優越を樹立する、好個の臺石を見出すのである。「わたしは白蓮女史ほど美人ではない。しかし白蓮女史よりも貞淑である。」「わたしは有島氏ほど才子ではない。しかし有島氏よりも世間を知つてゐる。」「わたしは武者小路氏ほど……」――公衆は如何にかう云つた後、豚のやうに幸福に熟睡したであらう。

又

天才の一面は明らかに醜聞を起し得る才能である。

輿論

輿論は常に私刑であり、私刑は又常に娯樂である。たとひピストルを用ふる代りに新聞の記事を用ひたとしても。

又

輿論の存在に價する理由は唯輿論を蹂躙する興味を與へることばかりである。

敵意

敵意は寒氣と選ぶ所はない。適度に感ずる時は爽快であり、且又健康を保つ上には何びとにも絶對に必要である。

ユウトピア

完全なるユウトピアの生れない所以は大體下の通りである。——人間性そのものを變へないとすれば、完全なるユウトピアの生まれる筈はない。人間性そのものを變へるとすれば、完全なる

ユウトピアと思つたものも忽ち又不完全に感ぜられてしまふ。

危險思想

危險思想とは常識を實行に移さうとする思想である。

惡

藝術的氣質を持つた青年の「人間の惡」を發見するのは誰よりも遲いのを常としてゐる。

二宮尊德

わたしは小學校の讀本の中に二宮尊德の少年時代の大書してあつたのを覺えてゐる。貧家に人となつた尊德は晝は農作の手傳ひをしたり、夜は草鞋を造つたり、大人のやうに働きながら、健氣にも獨學をつづけて行つたらしい。これはあらゆる立志譚のやうに――と云ふのはあらゆる通俗小說のやうに、感激を與へ易い物語である。實際又十五歲に足らぬわたしは尊德の意氣に感激すると同時に、尊德ほど貧家に生まれなかつたことを不仕合せの一つにさへ考へてゐた。……

けれどもこの立志譚は尊德に名譽を與へる代りに、當然尊德の兩親には不名譽を與へる物語で

ある。彼等は尊徳の教育に寸毫の便宜をも與へなかつた。いや、寧ろ與へたものは障碍ばかりだつた位である。これは兩親たる責任上、明らかに恥辱と云はなければならぬ。しかし我我の兩親や教師は無邪氣にもこの事實を忘れてゐる。尊徳の兩親は酒飲みでも或は又博奕打ちでも好い。問題は唯尊徳である。どう云ふ艱難辛苦をしても獨學を廢さなかつた尊徳である。我我少年は尊徳のやうに勇猛の志を養はなければならぬ。

わたしは彼等の利己主義に驚嘆に近いものを感じてゐる。成程彼等には尊徳のやうに下男をも兼ねる少年は都合の好い息子に違ひない。のみならず後年聲譽を博し、大いに父母の名を顯はしたりするのは好都合の上にも好都合である。しかし十五歳に足らぬわたしは尊徳の意氣に感激すると同時に、尊徳ほど貧家に生まれなかつたことを不仕合せの一つにさへ考へてゐた。丁度鎖に繫がれた奴隷のもつと太い鎖を欲しがるやうに。

奴隷

奴隷廢止と云ふことは唯奴隷たる自意識を廢止すると云ふことである。我我の社會は奴隷なしには一日も安全を保し難いらしい。現にあのプラトオンの共和國さへ、奴隷の存在を豫想してゐるのは必ずしも偶然ではないのである。

又

暴君を暴君と呼ぶことは危険だつたのに違ひない。が、今日は暴君以外に奴隷を奴隷と呼ぶことも亦やはり甚だ危険である。

悲劇

悲劇とはみづから羞づる所業を敢てしなければならぬことである。この故に萬人に共通する悲劇は排泄作用を行ふことである。

強弱

強者とは敵を恐れぬ代りに友人を恐れるものである。一撃に敵を打ち倒すことには何の痛痒も感じない代りに、知らず識らず友人を傷けることには兒女に似た恐怖を感ずるものである。

弱者とは友人を恐れぬ代りに、敵を恐れるものである。この故に又至る處に架空の敵ばかり發見するものである。

S・Mの智慧

これは友人S・Mのわたしに話した言葉である。

辨證法の功績。――所詮何ものも莫迦げてゐると云ふ結論に到達せしめたこと。

少女。――どこまで行つても清冽な淺瀬。

早教育。――ふむ、それも結構だ。まだ幼稚園にゐるうちに智慧の悲しみを知ることには責任を持つことにも當らないからね。

追憶。――地平線の遠い風景畫。ちやんと仕上げもかゝつてゐる。

女。――メリイ・ストオプス夫人によれば女は少くとも二週間に一度、夫に情欲を感ずるほど貞節に出來てゐるものらしい。

年少時代。――年少時代の憂鬱は全宇宙に對する驕慢である。

艱難汝を玉にす。――艱難汝を玉にするとすれば、日常生活に、思慮深い男は到底玉になれない筈である。

我等如何に生くべき乎。――未知の世界を少し殘して置くこと。

社交

あらゆる社交はおのづから虚僞を必要とするものである。もし寸毫の虚僞をも加へず、我我の友人知己に對する我我の本心を吐露するとすれば、古への管鮑の交りと雖も破綻を生ぜずにはゐなかつたであらう。管鮑の交りは少時問はず、我我は皆多少にもせよ、我我の親密なる友人知己を憎惡し或は輕蔑してゐる。が、憎惡も利害の前には鋭鋒を收めるのに相違ない。且又輕蔑は多多益々恬然と虚僞を吐かせるものである。この故に我我の友人知己と最も親密に交る爲めには、互に利害と輕蔑とを最も完全に具へなければならぬ。これは勿論何びとにも甚だ困難なる條件である。さもなければ我我はとうの昔に禮讓に富んだ紳士になり、世界も亦とうの昔に黄金時代の平和を現出したであらう。

瑣事

人生を幸福にする爲には、日常の瑣事を愛さなければならぬ。雲の光り、竹の戰ぎ、群雀の聲、行人の顏、――あらゆる日常の瑣事の中に無上の甘露味を感じなければならぬ。

人生を幸福にする爲には？――しかし瑣事を愛するものは瑣事の爲に苦しまなければならぬ。

庭前の古池に飛びこんだ蛙は百年の愁を破つたであらう。が、古池を飛び出した蛙は百年の愁を與へたかも知れない。いや、芭蕉の一生は享樂の一生であると共に、誰の目にも受苦の一生である。我我も微妙に樂しむ爲には、やはり又微妙に苦しまなければならぬ。

人生を幸福にする爲には、日常の瑣事に苦しまなければならぬ。雲の光り、竹の戰ぎ、群雀の聲、行人の顏、——あらゆる日常の瑣事の中に墮地獄の苦痛を感じなければならぬ。

神

あらゆる神の屬性中、最も神の爲に同情するのは神には自殺の出來ないことである。

又

我我は神を罵殺する無數の理由を發見してゐる。が、不幸にも日本人は罵殺するのに價ひするほど、全能の神を信じてゐない。

民衆

民衆は穩健なる保守主義者である。制度、思想、藝術、宗教、——何ものも民衆に愛される爲

には、前時代の古色を帯びなければならぬ。所謂民衆藝術家の民衆の爲に愛されないのは必ずしも彼等の罪ばかりではない。

又

民衆の愚を發見するのは必ずしも誇るに足ることではない。が、我我自身も亦民衆であることを發見するのは兎も角も誇るに足ることである。

又

古人は民衆を愚にすることを治國の大道に數へてゐた。丁度まだこの上にも愚にすることの出來るやうに。――或は又どうかすれば賢にでもすることの出來るやうに。

チエホフの言葉

チエホフはその手記の中に男女の差別を論じてゐる。――「女は年をとると共に、益々女の事に從ふものであり、男は年をとると共に、益々女の事から離れるものである。」

しかしこのチエホフの言葉は男女とも年をとると共に、おのづから異性との交渉に立ち入らな

いと云ふのも同じことである。これは三歳の童兒と雖もとうに知つてゐることと云はなければならぬ。のみならず男女の差別よりも寧ろ男女の無差別を示してゐるものと云はなければならぬ。

服装

少くとも女人の服装は女人自身の一部である。啓吉の誘惑に陷らなかつたのは勿論道念にも依つたのであらう。が、彼を誘惑した女人は啓吉の妻の借着をしてゐる。もし借着をしてゐなかつたとすれば、啓吉もさほど樂樂とは誘惑の外に出られなかつたかも知れない。

註　菊池寛氏の「啓吉の誘惑」を見よ。

處女崇拜

我我は處女を妻とする爲にどの位妻の選擇に滑稽なる失敗を重ねて來たか、もうそろそろ處女崇拜には背中を向けても好い時分である。

又

處女崇拜は處女たる事實を知つた後に始まるものである。即ち卒直なる感情よりも零細なる知

識を重んずるものである。この故に處女崇拜者は戀愛上の衒學者と云はなければならぬ。あらゆる處女崇拜者の何か嚴然と構へてゐるのも或は偶然ではないかも知れない。

又

勿論處女らしさ崇拜は處女崇拜以外のものである。この二つを同義語とするものは恐らく女人の俳優的才能を餘りに輕々に見てゐるものであらう。

禮法

或女學生はわたしの友人にかう云ふ事を尋ねたさうである。

「一體接吻をする時には目をつぶつてゐるものなのでせうか？　それともあいてゐるものなのでせうか？」

あらゆる女學校の教課の中に戀愛に關する禮法のないのはわたしもこの女學生と共に甚だ遺憾に思つてゐる。

貝原益軒

わたしはやはり小學時代に貝原益軒の逸事を學んだ。益軒は嘗て乘合船の中に一人の書生と一しよになつた。書生は才力に誇つてゐたと見え、滔々と古今の學藝を論じた。が、益軒は一言も加へず、靜かに傾聽するばかりだつた。その内に船は岸に泊した。船中の客は別れるのに臨んで姓名を告げるのを例としてゐた。書生は始めて益軒を知り、この一代の大儒の前に忸怩として先刻の無禮を謝した。——かう云ふ逸事を學んだのである。

當時のわたしはこの逸事の中に謙讓の美德を發見した。少くとも發見する爲に努力したことは事實である。しかし今は不幸にも寸毫の教訓さへ發見出來ない。この逸事の今のわたしにも多少の興味を與へるは僅かに下のやうに考へるからである。——

一　無言に終始した益軒の侮蔑は如何に辛辣を極めてゐたか！

二　書生の恥ぢるのを欣んだ同船の客の喝采は如何に俗惡を極めてゐたか！

三　益軒の知らぬ新時代の精神は年少の書生の放論の中にも如何に潑剌と鼓動してゐたか！

或辯護

或新時代の評論家は「蝟集する」と云ふ意味に「門前雀羅を張る」の成語を用ひた。「門前雀羅を張る」の成語は支那人の作つたものである。それを日本人の用ふるのに必ずしも支那人の用法を

踏襲しなければならぬと云ふ法はない。もし通用さへするならば、たとへば、「彼女の頬笑みは門前雀羅を張るやうだつた」と形容しても好い筈である。

もし通用さへするならば、――萬事はこの不可思議なる「通用」の上に懸つてゐる。たとへば「わたくし小説」もさうではないか？　Ich-Roman と云ふ意味は一人稱を用ひた小説である。必ずしもその「わたくし」なるものは作家自身と定まつてはゐない。が、日本の「わたくし」小説は常にその「わたくし」なるものを作家自身とする小説である。いや、時には作家自身の閲歴談と見られたが最後、三人稱を用ひた小説さへ「わたくし」小説と呼ばれてゐるらしい。これは勿論獨逸人の――或は全西洋人の用法を無視した新例である。しかし全能なる「通用」はこの新例に生命を與へた。「門前雀羅を張る」の成語もいつかはこれと同じやうに意外の新例を生ずるかも知れない。

すると或評論家は特に學識に乏しかつたのではない。唯聊か時流の外に新例を求むるのに急だつたのである。その評論家の揶揄を受けたのは、――兎に角あらゆる先覺者は常に薄命に甘んじなければならぬ。

天才もそれぞれ乗り越え難い或制限に拘束されてゐる。その制限を發見することは多少の寂しさを與へぬこともない。が、それはいつの間にか却つて親しみを與へるものである。丁度竹は竹であり、蔦は蔦である事を知つたやうに。

火星

火星の住民の有無を問ふことは我我の五感に感ずることの出來る住民の有無を問ふことである。しかし生命は必ずしも我我の五感に感ずることの出來る條件を具へるとは限つてゐない。もし火星の住民も我我の五感を超越した存在を保つてゐるとすれば、彼等の一群は今夜も亦篠懸を黄ばませる秋風と共に銀座へ來てゐるかも知れないのである。

Blanqui の夢

宇宙の大は無限である。が、宇宙を造るものは六十幾つかの元素である。是等の元素の結合は如何に多數を極めたとしても、畢竟有限を脱することは出來ない。すると是等の元素から無限大の宇宙を造る爲には、あらゆる結合を試みる外にも、その又あらゆる結合を無限に反復して行かなければならぬ。して見れば我我の棲息する地球も、——是等の結合の一つたる地球も太陽系中

の一惑星に限らず、無限に存在してゐる筈である。この地球上のナポレオンはマレンゴオの戰に大勝を博した。が、茫々たる大虚に浮んだ他の地球上のナポレオンは同じマレンゴオの戰に大敗を蒙つてゐるかも知れない。……

これは六十七歳のブランキの夢みた宇宙觀である。議論の是非は問ふ所ではない。唯ブランキは牢獄の中にかう云ふ夢をペンにした時、あらゆる革命に絶望してゐた。このことだけは今日もなほ何か我我の心の底へ滲み渡る寂しさを蓄へてゐる。夢は既に地上から去つた。我我も慰めを求める爲には何萬億哩の天上へ、——宇宙の夜に懸つた第二の地球へ輝かしい夢を移さなければならぬ。

庸才

庸才の作品は大作にもせよ、必ず窓のない部屋に似てゐる。人生の展望は少しも利かない。

機智

機智とは三段論法を缺いた思想であり、彼等の所謂「思想」とは思想を缺いた三段論法である。

又

機智に對する嫌惡の念は人類の疲勞に根ざしてゐる。

政治家

政治家の我我素人よりも政治上の知識を誇り得るのは紛紛たる事實の知識だけである。畢竟某黨の某首領はどう言ふ帽子をかぶつてゐるかと言ふのと大差のない知識ばかりである。

又

所謂「床屋政治家」とはかう言ふ知識のない政治家である。若し夫れ識見を論ずれば必ずしも政治家に劣るものではない。且又利害を超越した情熱に富んでゐることは常に政治家よりも高尚である。

事實

しかし紛紛たる事實の知識は常に民衆の愛するものである。彼等の最も知りたいのは愛とは何

かと言ふことではない。クリストは私生兒かどうかと言ふことである。

武者修行

わたしは從來武者修行とは四方の劍客と手合せをし、武技を磨くものだと思つてゐた。が、今になつて見ると、實は己ほど強いものの餘り天下にゐないことを發見する爲にするものだつた。
——宮本武藏傳讀後。

ユウゴオ

全フランスを蔽ふ一片のパン。しかもバタはどう考へても、餘りたつぷりはついてゐない。

ドストエフスキイ

ドストエフスキイの小說はあらゆる戲畫に充ち滿ちてゐる。尤もその又戲畫の大半は惡魔をも憂鬱にするに違ひない。

フロオベル

フロオベルのわたしに教へたものは美しい退屈もあると言ふことである。

モオパスサン

モオパスサンは氷に似てゐる。尤も時には氷砂糖にも似てゐる。

ポオ

ポオはスフインクスを作る前に解剖學を研究した。ポオの後代を震駭した祕密はこの研究に潜んでゐる。

或資本家の論理

「藝術家の藝術を賣るのも、わたしの蟹の罐詰めを賣るのも、格別變りのある筈はない。しかし藝術家は藝術と言へば、天下の寶のやうに思つてゐる。あゝ言ふ藝術家の顰みに傚へば、わたしも亦一罐六十錢の蟹の罐詰めを自慢しなければならぬ。不肖行年六十一、まだ一度も藝術家のやうに莫迦莫迦しい己惚れを起したことはない。」

批評學

——佐佐木茂索君に——

或天氣の好い午前である。博士に化けたMephistophelesは或大學の講壇に批評學の講義をしてゐた。尤もこの批評學はKantのKritikや何かではない。只如何に小說や戲曲の批評をするかと言ふ學問である。

「諸君、先週わたしの申し上げた所は御理解になつたかと思ひますから、今日は更に一歩進んだ『半肯定論法』のことを申し上げます。『半肯定論法』とは何かと申すと、これは讀んで字の通り、或作品の藝術的價値を半ば肯定する論法であります。しかしその『半ば』なるものは『より惡い半ば』でなければなりません。『より善い半ば』を肯定することは頗るこの論法には危險であります。

「たとへば日本の櫻の花の上にこの論法を用ひて御覽なさい。櫻の花の『より善い半ば』は色や形の美しさであります。けれどもこの論法を用ふるためには『より善い半ば』よりも『より惡い半ば』——即ち櫻の花の匂ひを肯定しなければなりません。つまり『匂ひは正にある。が、畢竟それだけだ』と斷案を下してしまふのであります。若し又萬一『より惡い半ば』の代りに『より善い半ば』

を肯定したとすれば、どう言ふ破綻を生じますか？『色や形は正に美しい。が、畢竟それだけだ』――これでは少しも櫻の花を貶したことにはなりません。

「勿論批評學の問題は如何に或小說や戲曲を貶すかと言ふことに關してゐます。しかしこれは今更のやうに申し上げる必要はありますまい。

「ではこの『より善い半ば』や『より惡い半ば』は何を標準に區別しますか？　かう言ふ問題を解決する爲には、これも度たび申し上げた價値論へ溯らなければなりません。價値は古來信ぜられたやうに作品そのものの中にある訣ではない、作品を鑑賞する我我の心の中にあるものであります。すると『より善い半ば』や『より惡い半ば』は我我の心を標準に、――或は一時代の民衆の何を愛するかを標準に區別しなければなりません。

「たとへば今日の民衆は日本風の草花を愛しません。卽ち日本風の草花は惡いものであります。又今日の民衆はブラジル珈琲を愛してゐます。卽ちブラジル珈琲は善いものに違ひありません。或作品の藝術的價値の『より善い半ば』や『より惡い半ば』も當然かう言ふ例のやうに區別しなければなりません。

「この標準を用ひずに、美とか眞とか善とか言ふ他の標準を求めるのは最も滑稽な時代錯誤であります。諸君は赤らんだ麥藁帽のやうに舊時代を捨てなければなりません。善惡は好惡を超越し

ない、好惡は卽ち善惡である、愛憎は卽ち善惡である、――これは『半肯定論法』に限らず、苟くも批評學に志した諸君の忘れてはならぬ法則であります。

「扨『半肯定論法』とは大體上の通りでありますが、最後に御注意を促したいのは『それだけだ』と言ふ言葉であります。この『それだけだ』と言ふ言葉は是非使はなければなりません。第一『それだけだ』と言ふ以上、『それ』卽ち『より惡い半ば』を肯定してゐることは確かであります。しかし又第二に『それ』以外のものを否定してゐることも確かであります。卽ち『それだけだ』と言ふ言葉は頗る一揚一抑の趣に富んでゐると申さなければなりません。が、更に微妙なことには第三に『それ』の藝術的價値さへ、隱約の間に否定してゐます。勿論否定してゐると言つても、なぜ否定するかと言ふことは說明も何もしてゐません。只言外に否定してゐる、――これはこの『それだけだ』と言ふ言葉の最も著しい特色であります。顯にして晦、肯定にして否定とは正に『それだけだ』の謂でありませう。

「この『半肯定論法』は『全否定論法』或は『木に緣つて魚を求むる論法』よりも信用を博し易いかと思ひます。『全否定論法』或は『木に緣つて魚を求むる論法』とは先週申し上げた通りでありますが、念の爲めにざつと繰り返すと、或作品の藝術的價値をその藝術的價値そのものにより、全部否定する論法であります。たとへば或悲劇の藝術的價値を否定するのに、悲慘、不快、憂鬱等の非難

を加へる事と思へばよろしい。又この非難を逆に用ひ、幸福、愉快、輕妙等を缺いてゐると罵つてもかまひません。一名『木に緣つて魚を求むる論法』と申すのは後に擧げた場合を指したのであります。『全否定論法』或は『木に緣つて魚を求むる論法』は痛快を極めてゐる代りに、時には偏頗の疑ひを招かないとも限りません。しかし『半肯定論法』は兎に角或作品の藝術的價値を半ばは認めてゐるのでありますから、容易に公平の看を與へ得るのであります。

「就いては演習の題目に佐佐木茂索氏の新著『春の外套』を出しますから、來週までに佐佐木氏の作品へ『半肯定論法』を加へて來て下さい。(この時若い聽講生が一人、「先生、『全否定論法』を加へてはいけませんか？」と質問する）いや、『全否定論法』を加へることは少くとも當分の間は見合せなければなりません。佐佐木氏は兎に角聲名のある新進作家でありますから、やはり『半肯定論法』位を加へるのに限ると思ひます。……」

× × × × ×

一週間たつた後、最高點を採つた答案は下に揭げる通りである。

「正に器用には書いてゐる。が、畢竟それだけだ。」

親子

親は子供を養育するのに適してゐるかどうかは疑問である。成程牛馬は親の爲に養育されるのに違ひない。しかし自然の名のもとにこの舊習の辯護するのは確かに親の我儘である。若し自然の名のもとに如何なる舊習も辯護出來るならば、まづ我我は未開人種の掠奪結婚を辯護しなければならぬ。

又

子供に對する母親の愛は最も利己心のない愛である。が、利己心のない愛は必ずしも子供の養育に最も適したものではない。この愛の子供に與へる影響は——少くとも影響の大半は暴君にするか、弱者にするかである。

又

人生の悲劇の第一幕は親子となつたことにはじまつてゐる。

又

古來如何に大勢の親はかう言ふ言葉を繰り返したであらう。——「わたしは畢竟失敗者だつた。

しかしこの子だけは成功させなければならぬ。」

可能

我我はしたいことの出來るものではない。只出來ることをするものである。これは我我個人ばかりではない。我我の社會も同じことである。恐らくは神も希望通りにこの世界を造ることは出來なかつたであらう。

ムアアの言葉

ジョオヂ・ムアアは「我死せる自己の備忘錄」の中にかう言ふ言葉を挾んでゐる。——「偉大なる畫家は名前を入れる場所をちやんと心得てゐるものである。又決して同じ所に二度と名前を入れぬものである。」

勿論「決して同じ所に二度と名前を入れぬこと」は如何なる畫家にも不可能である。しかしこれは咎めずとも好い。わたしの意外に感じたのは「偉大なる畫家は名前を入れる場所をちやんと心得てゐる」と言ふ言葉である。東洋の畫家には未だ嘗て落款の場所を輕視したるものはない。落款の場所に注意せよなどと言ふのは陳套語である。それを特筆するムアアを思ふと、坐ろに東西

の差を感ぜざるを得ない。

大作

大作を傑作と混同するものは確かに鑑賞上の物質主義である。大作は手間賃の問題にすぎない。わたしはミケル・アンヂエロの「最後の審判」の壁畫よりも遙かに六十何歳かのレムブラントの自畫像を愛してゐる。

わたしの愛する作品

わたしの愛する作品は、——文藝上の作品は畢竟作家の人間を感ずることの出來る作品である。人間を——頭腦と心臟と官能とを一人前に具へた人間を。しかし不幸にも大抵の作家はどれか一つを缺いた片輪である。(尤も時には偉大なる片輪に敬服することもない訣ではない。)

「虹霓關」を見て

男の女を獵するのではない。女の男を獵するのである。——シヨウは「人と超人と」の中にこの事實を戲曲化した。しかしこれを戲曲化したものは必しもシヨウにはじまるのではない。わたく

しは梅蘭芳の「虹霓關」を見、支那にも既にこの事實に注目した戲曲家のあるのを知つた。のみならず「戲考」は「虹霓關」の外にも、女の男を捉へるのに孫呉の兵機と劍戟とを用ひた幾多の物語を傳へてゐる。

「董家山」の女主人公金蓮、「轅門斬子」の女主人公桂英、「雙鎖山」の女主人公金定等は悉かう言ふ女傑である。更に「馬上緣」の女主人公梨花を見れば彼女の愛する少年將軍を馬上に俘にするばかりではない。彼の妻にすまぬと言ふのを無理に結婚してしまふのである。胡適氏はわたしにかう言つた。――「わたしは『四進士』を除きさへすれば、全京劇の價値を否定したい。」しかし是等の京劇は少くとも甚だ哲學的である。哲學者胡適氏はこの價値の前に多少氏の雷霆の怒を和げる訣には行かないであらうか？

經驗

經驗ばかりにたよるのは消化力を考へずに食物ばかりにたよるものである。同時に又經驗を徒らにしない能力ばかりにたよるのもやはり食物を考へずに消化力ばかりにたよるものである。

アキレス

希臘の英雄アキレスは踵だけ不死身ではなかつたさうである。——即ちアキレスを知る爲にはアキレスの踵を知らなければならぬ。

藝術家の幸福

最も幸福な藝術家は晩年に名聲を得る藝術家である。國木田獨歩もそれを思へば、必しも不幸な藝術家ではない。

好人物

女は常に好人物を夫に持ちたがるものではない。しかし男は好人物を常に友だちに持ちたがるものである。

又

好人物は何よりも先に天上の神に似たものである。第一に歡喜を語るのに好い。第二に不平を訴へるのに好い。第三に——ゐてもゐないでも好い。

罪

「その罪を憎んでその人を憎まず」とは必しも行ふに難いことではない。大抵の子は大抵の親にちゃんとこの格言を實行してゐる。

桃李

「桃李言はざれども、下自ら蹊を成す」とは確かに知者の言である。尤も「桃李言はざれども」ではない。實は「桃李言はざれば」である。

偉大

民衆は人格や事業の偉大に籠絡されることを愛するものである。が、偉大に直面することは有史以來愛したことはない。

廣告

「侏儒の言葉」十二月號の「佐佐木茂索君の爲に」は佐佐木君を貶したのではありません。佐佐木

君を認めない批評家を嘲つたものであります。かう言ふことを廣告するのは「文藝春秋」の讀者の頭腦を輕蔑することになるのかも知れません。しかし實際或批評家は佐佐木君を貶したものと思ひこんでゐたさうであります。且又この批評家の亞流も少くないやうに聞き及びました。その爲に一言廣告します。尤もこれを公にするのはわたくしの發意ではありません。實は先輩里見弴君の煽動によつた結果であります。どうかこの廣告に憤る讀者は里見君に非難を加へて下さい。「侏儒の言葉」の作者。

追加廣告

前掲の廣告中、「里見君に非難を加へて下さい」と言つたのは勿論わたしの常談であります。實際は非難を加へずともよろしい。わたしは或批評家の代表する一團の天才に敬服した餘り、どうも多少ふだんよりも神經質になつたやうであります。同上

再追加廣告

前掲の追加廣告中、「或批評家の代表する一團の天才に敬服した」と言ふのは勿論反語と言ふものであります。同上

畫力は三百年、書力は五百年、文章の力は千古無窮とは王世貞の言ふ所である。しかし敦煌の發掘品等に徴すれば、書畫は五百年を閲した後にも依然として力を保つてゐるらしい。のみならず文章も千古無窮に力を保つかどうかは疑問である。觀念も時の支配の外に超然としてゐることの出來るものではない。我我の祖先は「神」と言ふ言葉に衣冠束帶の人物を髣髴してゐた。しかし我我は同じ言葉に髯の長い西洋人を髣髴してゐる。これはひとり神に限らず、何ごとにも起り得るものと思はなければならぬ。

又

わたしはいつか東洲齋寫樂の似顔畫を見たことを覺えてゐる。その畫中の人物は綠いろの光琳波を描いた扇面を胸に開いてゐた。それは全體の色彩の效果を强めてゐるのに違ひなかつた。が、廓大鏡に覗いて見ると、綠いろをしてゐるのは綠靑を生じた金いろだつた。わたしはこの一枚の寫樂に美しさを感じたのは事實である。けれどもわたしの感じたのは寫樂の捉へた美しさと異つてゐたのも事實である。かう言ふ變化は文章の上にもやはり起るものと思はなければならぬ。

又

藝術も女と同じことである。最も美しく見える爲には一時代の精神的雰圍氣或は流行に包まれなければならぬ。

又

のみならず藝術は空間的にもやはり軛を負はされてゐる。一國民の藝術を愛する爲には一國民の生活を知らなければならぬ。東禪寺に浪士の襲撃を受けた英吉利の特命全權公使サア・ルサアフォド・オルコックは我我日本人の音樂にも騷音を感ずる許りだつた。彼の「日本に於ける三年間」はかう言ふ一節を含んでゐる。――「我我は坂を登る途中、ナイティンゲエルの聲に近い鶯の聲を耳にした。日本人は鶯に歌を教へたと言ふことである。それは若しほんたうとすれば、驚くべきことに違ひない。元來日本人は音樂と言ふものを自ら教へることも知らないのであるから。」（第二卷第二十九章）

天才とは僅かに我我と一歩を隔てたもののことである。只この一歩を理解する爲には百里の半ばを九十九里とする超數學を知らなければならぬ。

又

天才とは僅かに我我と一歩を隔てたもののことである。同時代は常にこの一歩の千里であることを理解しない。後代は又この千里の一歩であることに盲目である。同時代はその爲に天才を殺した。後代は又その爲に天才の前に香を焚いてゐる。

又

民衆も天才を認めることに吝かであるとは信じ難い。しかしその認めかたは常に頗る滑稽である。

又

天才の悲劇は「小ぢんまりした、居心の好い名聲」を與へられることである。

又

耶蘇「我笛吹けども、汝等踊らず。」
彼等「我等踊れども、汝足らはず。」

譃

我我は如何なる場合にも、我我の利益を擁護せぬものに「清き一票」を投ずる筈はない。この「我我の利益」の代りに「天下の利益」を置き換へるのは全共和制度の譃である。この譃だけはソヴィエツトの治下にも消滅せぬものと思はなければならぬ。

又

一體になつた二つの觀念を採り、その接觸點を吟味すれば、諸君は如何に多數の譃に養はれてゐるかを發見するであらう。あらゆる成語はこの故に常に一つの問題である。

又

我我の社會に合理的外觀を與へるものは實はその不合理の――その餘りに甚しい不合理の爲ではないであらうか？

レニン

わたしの最も驚いたのはレニンの餘りに當り前の英雄だつたことである。

賭博

偶然即ち神と鬪ふものは常に神祕的威嚴に滿ちてゐる。賭博者も亦この例に洩れない。

又

古來賭博に熱中した厭世主義者のないことは如何に賭博の人生に酷似してゐるかを示すものである。

又

法律の賭博を禁ずるのは賭博に依る富の分配法そのものを非とする爲ではない。實は唯その經

濟的ディレツタンティズムを非とする爲である。

懷疑主義

懷疑主義も一つの信念の上に、——疑ふことは疑はぬと言ふ信念の上に立つものである。成程それは矛盾かも知れない。しかし懷疑主義は同時に又少しも信念の上に立たぬ哲學のあることをも疑ふものである。

正直

若し正直になるとすれば、我我は忽ち何びとも正直になられぬことを見出すであらう。この故に我我は正直になることに不安を感ぜずにはゐられぬのである。

虚僞

わたしは或譃つきを知つてゐた。彼女は誰よりも幸福だつた。が、餘りに譃の巧みだつた爲にほんたうのことを話してゐる時さへ譃をついてゐるとしか思はれなかつた。それだけは確かに誰の目にも彼女の悲劇に違ひなかつた。

又

わたしも亦あらゆる藝術家のやうに寧ろ譃には巧みだつた。が、いつも彼女には一籌を輸する外はなかつた。彼女は實に去年の譃をも五分前の譃のやうに覺えてゐた。

又

わたしは不幸にも知つてゐる。時には譃に依る外は語られぬ眞實もあることを。

諸君

諸君は青年の藝術の爲に墮落することを恐れてゐる。しかしまづ安心し給へ。諸君ほどは容易に墮落しない。

又

諸君は藝術の國民を毒することを恐れてゐる。しかしまづ安心し給へ。少くとも諸君を毒することは絶對に藝術には不可能である。二千年來藝術の魅力を理解せぬ諸君を毒することは。

忍從

忍從はロマンテイツクな卑屈である。

企圖

成すことは必しも困難ではない。が、欲することは常に困難である。少くとも成すに足ることを欲するのは。

又

彼等の大小を知らんとするものは彼等の成したことに依り、彼等の成さんとしたことを見なければならぬ。

兵卒

理想的兵卒は苟くも上官の命令には絶對に服從しなければならぬ。絶對に服從することは絶對に批判を加へぬことである。卽ち理想的兵卒はまづ理性を失はなければならぬ。

又

理想的兵卒は苟くも上官の命令には絶對に服從しなければならぬ。絶對に服從することは絶對に責任を負はぬことである。即ち理想的兵卒はまづ無責任を好まなければならぬ。

軍事教育

軍事教育と言ふものは畢竟只軍事用語の知識を與へるばかりである。その他の知識や訓練は何も特に軍事教育を待つた後に得られるものではない。現に海陸軍の學校さへ、機械學、物理學、應用化學、語學等は勿論、劍道、柔道、水泳等にもそれぞれ專門家を傭つてゐるではないか？しかも更に考へて見れば、軍事用語も學術用語と違ひ、大部分は通俗的用語である。すると軍事教育と言ふものは事實上ないものと言はなければならぬ。事實上ないものの利害得失は勿論問題にはならぬ筈である。

勤儉尚武

「勤儉尚武」と言ふ成語位、無意味を極めてゐるものはない。尚武は國際的奢侈である。現に列

強は軍備の爲に大金を費してゐるではないか？　若し「勤儉尙武」と言ふことも痴人の談でないとすれば、「勤儉遊蕩」と言ふこともやはり通用すると言はなければならぬ。

日本人

我我日本人の二千年來君に忠に親に孝だつたと思ふのは猿田彦命もコスメ・テイツクをつけてゐたと思ふのと同じことである。もうそろ／＼ありのままの歷史的事實に徹して見ようではないか？

倭寇

倭寇は我我日本人も優に列強に伍するに足る能力のあることを示したものである。我我は盜賊、殺戮、姦淫等に於ても、決して「黃金の島」を探しに來た西班牙人、葡萄牙人、和蘭人、英吉利人等に劣らなかつた。

つれづれ草

わたしは度たびかう言はれてゐる。――「つれづれ草などは定めしお好きでせう？」しかし不幸

にも「つれづれ草」などは未嘗愛讀したことはない。正直な所を白狀すれば「つれづれ草」の名高いのもわたしには殆ど不可解である。中學程度の教科書に便利であることは認めるにもしろ。

徵候

戀愛の徵候の一つは彼女は過去に何人の男を愛したか、或はどう言ふ男を愛したかを考へ、その架空の何人かに漠然とした嫉妬を感ずることである。

又

又戀愛の徵候の一つは彼女に似た顏を發見することに極度に鋭敏になることである。

戀愛と死と

戀愛の死を想はせるのは進化論的根據を持つてゐるのかも知れない。蜘蛛や蜂は交尾を終ると、忽ち雄は雌の爲に刺し殺されてしまふのである。わたしは伊太利の旅役者の歌劇「カルメン」を演ずるのを見た時、どうもカルメンの一擧一動に蜂を感じてならなかつた。

身代り

我我は彼女を愛する爲に往々彼女の外の女人を彼女の身代りにするものである。かう言ふ羽目に陥るのは必しも彼女の我我を卻けた場合に限る訣ではない。我我は時には怯懦の爲に、時には又美的要求の爲にこの殘酷な慰安の相手に一人の女人を使ひ兼ねぬのである。

結婚

結婚は性慾を調節することには有效である。が、戀愛を調節することには有效ではない。

又

彼は二十代に結婚した後、一度も戀愛關係に陥らなかつた。何と言ふ俗惡さ加減！

多忙

我我を戀愛から救ふものは理性よりも寧ろ多忙である。戀愛も亦完全に行はれる爲には何よりも時間を持たなければならぬ。ウエルテル、ロミオ、トリスタン――古來の戀人を考へて見ても、

彼等は皆閑人ばかりである。

男子

男子は由來戀愛よりも仕事を尊重するものである。若しこの事實を疑ふならば、バルザツクの手紙を讀んで見るが好い。バルザツクはハンスカ伯爵夫人に「この手紙も原稿料に換算すれば、何フランを越えてゐる」と書いてゐる。

行儀

昔わたしの家に出入りした男まさりの女髪結は娘を一人持つてゐた。わたしは未だに蒼白い顏をした十二三の娘を覺えてゐる。女髪結はこの娘に行儀を敎へるのにやかましかつた。殊に枕をはづすことにはその都度折檻を加へてゐたらしい。が、近頃ふと聞いた話によれば、娘はもう震災前に藝者になつたとか言ふことである。わたしはこの話を聞いた時、ちよつともの哀れに感じたものの、微笑しない訣には行かなかつた。彼女は定めし藝者になつても、嚴格な母親の躾け通り、枕だけははづすまいと思つてゐるであらう。……

自由

誰も自由を求めぬものはない。が、それは外見だけである。實は誰も肚の底では少しも自由を求めてゐない。その證據には人命を奪ふことに少しも躊躇しない無賴漢さへ、金甌無缺の國家の爲に某某を殺したと言つてゐるではないか？　しかし自由とは我我の行爲に何の拘束もないことであり、卽ち神だの道德だの或は又社會的習慣だのと連帶責任を負ふことを潔しとしないものである。

又

自由は山巓の空氣に似てゐる。どちらも弱い者には堪へることは出來ない。

又

まことに自由を眺めることは直ちに神々の顏を見ることである。

又

自由主義、自由戀愛、自由貿易、——どの「自由」も生憎杯の中に多量の水を混じてゐる。しかも大抵はたまり水を。

言行一致

言行一致の美名を得る爲にはまづ自己辯護に長じなければならぬ。

方便

一人を欺かぬ聖賢はあつても、天下を欺かぬ聖賢はない。佛家の所謂善巧方便とは畢竟精神上のマキアヴエリズムである。

藝術至上主義者

古來熱烈なる藝術至上主義者は大抵藝術上の去勢者である。丁度熱烈なる國家主義者は大抵亡國の民であるやうに——我我は誰でも我我自身の持つてゐるものを欲しがるものではない。

唯物史觀

若し如何なる小說家もマルクスの唯物史觀に立脚した人生を寫さなければならぬならば、同樣に又如何なる詩人もコペルニクスの地動說に立脚した日月山川を歌はなければならぬ。が、「太陽は西に沈み」と言ふ代りに「地球は何度何分廻轉し」と言ふのは必しも常に優美ではあるまい。

支那

螢の幼蟲は蝸牛を食ふ時に全然蝸牛を殺してはしまはぬ。いつも新らしい肉を食ふ爲に蝸牛を痲痺させてしまふだけである。我日本帝國を始め、列强の支那に對する態度は畢竟この蝸牛に對する螢の態度と選ぶ所はない。

又

今日の支那の最大の悲劇は無數の國家的羅曼主義者即ち「若き支那」の爲に鐵の如き訓練を與へるに足る一人のムツソリニもゐないことである。

小說

本當らしい小說とは單に事件の發展に偶然性の少ないばかりではない。恐らくは人生に於ける

よりも偶然性の少ない小説である。

文章

文章の中にある言葉は辭書の中にある時よりも美しさを加へてゐなければならぬ。

又

彼等は皆樗牛のやうに「文は人なり」と稱してゐる。が、いづれも内心では「人は文なり」と思つてゐるらしい。

女の顔

女は情熱に驅られると、不思議にも少女らしい顔をするものである。尤もその情熱なるものはパラソルに對する情熱でも差支へない。

世間智

消火は放火ほど容易ではない。かう言ふ世間智の代表的所有者は確かに「ベル・アミ」の主人公

であらう。彼は戀人をつくる時にもちやんともう絶縁することを考へてゐる。

又

單に世間に處するだけならば、情熱の不足などは患はずとも好い。それよりも寧ろ危險なのは明らかに冷淡さの不足である。

恆産

恆産のないものに恆心のなかつたのは二千年ばかり昔のことである。今日では恆産のあるものは寧ろ恆心のないものらしい。

彼等

わたしは實は彼等夫婦の戀愛もなしに相抱いて暮らしてゐることに驚嘆してゐた。が、彼等はどう云ふ訣か、戀人同志の相抱いて死んでしまつたことに驚嘆してゐる。

「振つてゐる」「高等遊民」「露悪家」「月並み」等の言葉の文壇に行はれるやうになつたのは夏目先生から始まつてゐる。かう言ふ作家所生の言葉は夏目先生以後にもない訣ではない。久米正雄君所生の「微苦笑」「強氣弱氣」などはその最たるものであらう。なほ又「等、等、等」と書いたりするのも宇野浩二君所生のものである。我我は常に意識して帽子を脱いでゐるものではない。のみならず時には意識的には敵とし、怪物とし、犬となすものにもいつか帽子を脱いでゐるものである。或作家を罵る文章の中にもその作家の作つた言葉の出るのは必ずしも偶然ではないかも知れない。

幼兒

我我は一體何の爲に幼い子供を愛するのか？　その理由の一半は少くとも幼い子供にだけは欺かれる心配のない爲である。

又

我我の恬然と我我の愚を公にすることを恥ぢないのは幼い子供に對する時か、——或は、犬猫に對する時だけである。

「大雅は餘程呑氣な人で、世情に疎かつた事は、其室玉瀾を迎へた時に夫婦の交りを知らなかつたと云ふので略其人物が察せられる。」

「大雅が妻を迎へて夫婦の道を知らなかつたと云ふ樣な話も、人間離れがしてゐて面白いと云へば、面白いと云へるが、丸で常識のない愚かな事だと云へば、さうも云へるだらう。」

から言ふ傳說を信ずる人はここに引いた文章の示すやうに今日もまだ藝術家や美術史家の間に殘つてゐる。大雅は玉瀾を娶つた時に交合のことを行はなかつたかも知れない。しかしその故に交合のことを知らずにゐたと信ずるならば、——勿論その人はその人自身烈しい性欲を持つてゐる餘り、苟くもちやんと知つてゐる以上、行はずにすませられる筈はないと確信してゐる爲であらう。

荻生徂徠

荻生徂徠は煎り豆を嚙んで古人を罵るのを快としてゐる。わたしは彼の煎り豆を嚙んだのは儉約の爲と信じてゐたものの、彼の古人を罵つたのは何の爲か一向わからなかつた。しかし今日考

へて見れば、それは今人を罵るよりも確かに當り障りのなかつた爲である。

作家

文を作るのに缺くべからざるものは何よりも創作的情熱である。その又創作的情熱を燃え立たせるのに缺くべからざるものは何よりも或程度の健康である。瑞典式體操、菜食主義、複方ヂアスタアゼ等を輕んずるのは文を作らんとするものの志ではない。

又

文を作らんとするものは如何なる都會人であるにしても、その魂の奥底には野蠻人を一人持つてゐなければならぬ。

又

文を作らんとするものの彼自身を恥づるのは罪惡である。彼自身を恥づる心の上には如何なる獨創の芽も生えたことはない。

又

百足　ちつとは足でも歩いて見ろ。
蝶　ふん、ちつとは羽根でも飛んで見ろ。

又

氣韻は作家の後頭部である。作家自身には見えるものではない。若し又無理に見ようとすれば、頸の骨を折るのに了るだけであらう。

又

批評家　君は勤め人の生活しか書けないね？
作家　誰か何でも書けた人がゐたかね？

又

あらゆる古來の天才は、我我凡人の手のとどかない壁上の釘に帽子をかけてゐる。尤も踏み臺

はなかつた訣ではない。

又

しかしああ言ふ踏み臺だけはどこの古道具屋にも轉がつてゐる。

又

あらゆる作家は一面には指物師の面目を具へてゐる。が、それは恥辱ではない。あらゆる指物師も一面には作家の面目を具へてゐる。

又

のみならず又あらゆる作家は一面には店を開いてゐる。何、わたしは作品は賣らない？　それは君、買ひ手のない時にはね。或は賣らずとも好い時にはね。

又

俳優や歌手の幸福は彼等の作品ののこらぬことである。――と思ふこともない訣ではない。

〔以下遺稿〕

辯護

他人を辯護するよりも自己を辯護するのは困難である。疑ふものは辯護士を見よ。

女人

健全なる理性は命令してゐる。――「爾、女人を近づくる勿れ。」

しかし健全なる本能は全然反對に命令してゐる。――「爾、女人を避くる勿れ。」

又

女人は我々男子には正に人生そのものである。即ち諸惡の根源である。

理性

わたしはヴォルテェルを輕蔑してゐる。若し理性に終始するとすれば、我々は我々の存在に滿腔の呪詛を加へなければならぬ。しかし世界の賞讚に醉つた Candide の作者の幸福さは！

自然

我々の自然を愛する所以は、――少くともその所以の一つは自然は我々人間のやうに妬んだり欺いたりしないからである。

處世術

最も賢い處世術は社會的因襲を輕蔑しながら、しかも社會的因襲と矛盾せぬ生活をすることである。

女人崇拜

「永遠に女性なるもの」を崇拜したゲエテは確かに仕合せものの一人だつた。が、Yahoo の牝を輕蔑したスウィフトは狂死せずにはゐなかつたのである。これは女性の呪ひであらうか？　或は又理性の呪ひであらうか？

理性

理性のわたしに教へたものは畢竟理性の無力だつた。

運命

運命は偶然よりも必然である。「運命は性格の中にある」と云ふ言葉は決して等閑に生まれたものではない。

教授

若し醫家の用語を借りれば、苟くも文藝を講ずるには臨床的でなければならぬ筈である。しかも彼等は未だ嘗人生の脈搏に觸れたことはない。殊に彼等の或ものは英佛の文藝には通じても彼等を生んだ祖國の文藝には通じてゐないと稱してゐる。

知徳合一

我々は我々自身さへ知らない。況や我々の知つたことを行に移すのは困難である。「知慧と運命」を書いたメエテルリンクも知慧や運命を知らなかつた。

藝術

最も困難な藝術は自由に人生を送ることである。尤も「自由に」と云ふ意味は必しも厚顔にと云ふ意味ではない。

自由思想家

自由思想家の弱點は自由思想家であることである。彼は到底狂信者のやうに獰猛に戰ふことは出來ない。

宿命

宿命は後悔の子かも知れない。――或は後悔は宿命の子かも知れない。

彼の幸福

彼の幸福は彼自身の教養のないことに存してゐる。同時に又彼の不幸も、――ああ、何と云ふ退屈さ加減！

小說家

最も善い小說家は「世故に通じた詩人」である。

言葉

あらゆる言葉は錢のやうに必ず兩面を具へてゐる。例へば「敏感な」と云ふ言葉の一面は畢竟「臆病な」と云ふことに過ぎない。

或物質主義者の信條

「わたしは神を信じてゐない。しかし神經を信じてゐる。」

阿呆

阿呆はいつも彼以外の人々を悉く阿呆と考へてゐる。

處世的才能

何と言つても「憎悪する」ことは處世的才能の一つである。

懺悔

古人は神の前に懺悔した。今人は社會の前に懺悔してゐる。すると阿呆や悪黨を除けば、何びとも何かに懺悔せずには娑婆苦に堪へることは出來ないのかも知れない。

又

しかしどちらの懺悔にしても、どの位信用出來るかと云ふことはおのづから又別問題である。

「新生」讀後

果して「新生」はあつたであらうか?

トルストイ

ビユルコフのトルストイ傳を讀めば、トルストイの「わが懺悔」や「わが宗教」の譃だつたことは明らかである。しかしこの譃を話しつづけたトルストイの心ほど傷ましいものはない。彼の譃は

餘人の眞實よりもはるかに紅血を滴らしてゐる。

二つの悲劇

ストリントベリイの生涯の悲劇は「觀覽隨意」だつた悲劇である。が、トルストイの生涯の悲劇は不幸にも「觀覽隨意」ではなかつた。從つて後者は前者よりも一層悲劇的に終つたのである。

ストリントベリイ

彼は何でも知つてゐた。しかも彼の知つてゐたことを何でも無遠慮にさらけ出した。何でも無遠慮に、――いや、彼も亦我々のやうに多少の打算はしてゐたであらう。

又

ストリントベリイは「傳說」の中に死は苦痛か否かと云ふ實驗をしたことを語つてゐる。しかしかう云ふ實驗は遊戲的に出來るものではない。彼も亦「死にたいと思ひながら、しかも死ねなかつた」一人である。

或理想主義者

彼は彼自身の現實主義者であることに少しも疑惑を抱いたことはなかつた。しかしかう云ふ彼自身は畢竟理想化した彼自身だつた。

恐怖

我々に武器を執らしめるものはいつも敵に對する恐怖である。しかも屢實在しない架空の敵に對する恐怖である。

我々

我々は皆我々自身を恥ぢ、同時に又彼等を恐れてゐる。が、誰も率直にかう云ふ事實を語るものはない。

戀愛

戀愛は唯性慾の詩的表現を受けたものである。少くとも詩的表現を受けない性慾は戀愛と呼ぶ

に慣しない。

或老練家

彼はさすがに老練家だつた。醜聞を起さぬ時でなければ、戀愛さへ滅多にしたことはない。

自殺

萬人に共通した唯一の感情は死に對する恐怖である。道德的に自殺の不評判であるのは必しも偶然ではないかも知れない。

又

自殺に對するモンテェエヌの辯護は幾多の眞理を含んでゐる。自殺しないものはしないのではない。自殺することの出來ないのである。

又

死にたければいつでも死ねるからね。

ではためしにやつて見給へ。

革命

革命の上に革命を加へよ。然らば我等は今日よりも合理的に娑婆苦を嘗むることを得べし。

死

マインレンデルは頗る正確に死の魅力を記述してゐる。實際我々は何かの拍子に死の魅力を感じたが最後、容易にその圏外に逃れることは出來ない。のみならず同心圓をめぐるやうにぢりぢり死の前へ歩み寄るのである。

「いろは」短歌

我々の生活に缺くべからざる思想は或は「いろは」短歌に盡きてゐるかも知れない。

運命

遺傳、境遇、偶然、——我々の運命を司るものは畢竟この三者である。自ら喜ぶものは喜んで

も善い。しかし他を云々するのは僣越である。

嘲けるもの

他を嘲るものは同時に又他に嘲られることを恐れるものである。

或日本人の言葉

我にスウィツルを與へよ。然らずんば言論の自由を與へよ。

人間的な、餘りに人間的な

人間的な、餘りに人間的なものは大抵は確かに動物的である。

或才子

彼は惡黨になることは出來ても、阿呆になることは出來ないと信じてゐた。が、何年かたつて見ると、少しも惡黨になれなかつたばかりか、いつも唯阿呆に終始してゐた。

希臘人

復讐の神をジュピタアの上に置いた希臘人よ。君たちは何も彼も知り悉してゐた。

又

しかしこれは同時に又如何に我々人間の進歩の遅いかと云ふことを示すものである。

聖書

一人の知慧は民族の知慧に若かない。唯もう少し簡潔であれば。……

或孝行者

彼は彼の母に孝行した。勿論愛撫や接吻が未亡人だつた彼の母を性的に慰めるのを承知しながら。

或悪魔主義者

彼は悪魔主義の詩人だつた。が、勿論實生活の上では安全地帶の外に出ることはたつた一度だけで懲り懲りしてしまつた。

或自殺者

彼は或瑣末なことの爲に自殺しようと決心した。が、その位のことの爲に自殺するのは彼の自尊心には痛手だつた。彼はピストルを手にしたまま、傲然とかう獨り語を言つた。――「ナポレオンでも蚤に食はれた時は痒いと思つたのに違ひないのだ。」

或左傾主義者

彼は最左翼の更に左翼に位してゐた。從つて最左翼をも輕蔑してゐた。

無意識

我々の性格上の特色は、――少くとも最も著しい特色は我々の意識を超越してゐる。

矜誇

我々の最も誇りたいのは我々の持つてゐないものだけである。實例。――Tは獨逸語に堪能だつた。が、彼の机上にあるのはいつも英語の本ばかりだつた。

偶像

何びとも偶像を破壞することに異存を持つてゐるものはない。同時に又彼自身を偶像にすることに異存を持つてゐるものもない。

又

しかし又泰然と偶像になり了せることは何びとにも出來ることではない。勿論天運を除外例としても。

天國の民

天國の民は何よりも先に胃袋や生殖器を持つてゐない筈である。

或仕合せ者

彼は誰よりも單純だつた。

自己嫌惡

最も著しい自己嫌惡の徵候はあらゆるものに譃を見つけることである。いや、必しもそればかりではない。その又譃を見つけることに少しも滿足を感じないことである。

外見

由來最大の臆病者ほど最大の勇者に見えるものはない。

人間的な

我々人間の特色は神の決して犯さない過失を犯すと云ふことである。

罰

罰せられぬことほど苦しい罰はない。それも決して罰せられぬと神々でも保證すれば別問題である。

罪

道徳的並びに法律的範圍に於ける冒險的行爲、――罪は畢竟かう云ふことである。從つて又どう云ふ罪も傳奇的色彩を帶びないことはない。

わたし

わたしは良心を持つてゐない。わたしの持つてゐるのは神經ばかりである。

又

わたしは度たび他人のことを「死ねば善い」と思つたものである。しかもその又他人の中には肉親さへ交つてゐなかつたことはない。

又

わたしは度たびかう思つた。――「俺があの女に惚れた時にあの女も俺に惚れた通り、俺があの女を嫌ひになつた時にはあの女も俺を嫌ひになれば善いのに。」

又

わたしは三十歳を越した後、いつでも戀愛を感ずるが早いか、一生懸命に抒情詩を作り、深入りしない前に脫却した。しかしこれは必しも道德的にわたしの進步したのではない。唯ちよつと肚の中に算盤をとることを覺えたからである。

又

わたしはどんなに愛してゐた女とでも一時間以上話してゐるのは退屈だつた。

又

わたしは度たび譃をついた。が、文字にする時は兎に角、わたしの口づから話した譃はいづれも拙劣を極めたものだつた。

又

わたしは第三者と一人の女を共有することに不平を持たない。しかし第三者が幸か不幸かかう

云ふ事實を知らずにゐる時、何か急にその女に憎惡を感ずるのを常としてゐる。

又

わたしは第三者と一人の女を共有することに不平を持たない。しかしそれは第三者と全然見ず知らずの間がらであるか、或は極疎遠の間がらであるか、どちらかであることを條件としてゐる。

又

わたしは第三者を愛する爲に夫の目を偸んでゐる女にはやはり戀愛を感じないことはない。しかし第三者を愛する爲に子供を顧みない女には滿身の憎惡を感じてゐる。

又

わたしを感傷的にするものは唯無邪氣な子供だけである。

又

わたしは三十にならぬ前に或女を愛してゐた。その女は或時わたしに言つた。——「あなたの

奥さんにすまない。」わたしは格別わたしの妻に済まないと思つてゐた訣ではなかつた。が、妙にこの言葉はわたしの心に滲み渡つた。わたしは正直にかう思つた。――「或はこの女にもすまないのかも知れない。」わたしは未だにこの女にだけは優しい心もちを感じてゐる。

又

わたしは金錢には冷淡だつた。勿論食ふだけには困らなかつたから。

又

わたしは兩親には孝行だつた。兩親はいづれも年をとつてゐたから。

又

わたしは二三の友だちにはたとひ眞實を言はないにもせよ、譃をついたことは一度もなかつた。彼等も亦譃をつかなかつたから。

革命に革命を重ねたとしても、我々人間の生活は「選ばれたる少数」を除きさへすれば、いつも暗澹としてゐる筈である。しかも「選ばれたる少数」とは「阿呆と悪党と」の異名に過ぎない。

民衆

シェクスピイアも、ゲエテも、李太白も、近松門左衛門も滅びるであらう。しかし藝術は民衆の中に必ず種子を残してゐる。わたしは大正十二年に「たとひ玉は砕けても、瓦は砕けない」と云ふことを書いた。この確信は今日でも未だに少しも揺がずにゐる。

又

打ち下ろすハンマアのリズムを聞け。あのリズムの存する限り、藝術は永遠に滅びないであらう。（昭和改元の第一日）

又

わたしは勿論失敗だつた。が、わたしを造り出したものは必ず又誰かを作り出すであらう。一本の木の枯れることは極めて區々たる問題に過ぎない。無数の種子を宿してゐる、大きい地面が

存在する限りは。（同上）

或夜の感想

眠りは死よりも愉快である。少くとも容易には違ひあるまい。（昭和改元の第二日）

（大正十二年—昭和二年）

文藝的な、餘りに文藝的な

一　「話」らしい話のない小説

僕は「話」らしい話のない小説を最上のものとは思つてゐない。從つて「話」らしい話のない小説ばかり書けとも言はない。第一僕の小説も大抵は「話」を持つてゐる。デツサンのない畫は成り立たない。それと丁度同じやうに小説は「話」の上に立つものである。（僕の「話」と云ふ意味は單に「物語」と云ふ意味ではない。）若し嚴密に云ふとすれば、全然「話」のない所には如何なる小説も成り立たないであらう。從つて僕は「話」のある小説にも勿論尊敬を表するものである。「ダフニとクロオと」の物語以來、あらゆる小説或は敍事詩が「話」の上に立つてゐる以上、誰か「話」のある小説に敬意を表せずにゐられるであらうか？「マダム・ボヴアリイ」も「話」を持つてゐる。「戰爭と平和」も「話」を持つてゐる。「赤と黑と」も「話」を持つてゐる。……

しかし或小説の價値を定めるものは決して「話」の長短ではない。況や「話」の奇拔であるか奇拔でないかと云ふことは評價の埒外にある筈である。（谷崎潤一郎氏は人も知る通り、奇拔な「話」の上に立つた多數の小説の作者である。その又奇拔な「話」の上に立つた同氏の小説の何篇かは恐ら

くは百代の後にも殘るであらう。しかしそれは必しも「話」の奇拔であるかどうかに生命を託してゐる訣ではない。)更に進んで考へれば、「話」らしい話の有無さへもかう云ふ問題には沒交涉である。僕は前にも言つたやうに「話」のない小說を、――或は「話」らしい話のない小說を最上のものとは思つてゐない。しかしかう云ふ小說も存在し得ると思ふのである。

「話」らしい話のない小說は勿論唯身邊雜事を描いただけの小說ではない。それはあらゆる小說中、最も詩に近い小說である。しかも散文詩などと呼ばれるものよりも遙かに小說に近いものである。僕は三度繰り返せば、この「話」のない小說を最上のものとは思つてゐない。が、若し「純粹な」と云ふ點から見れば、――通俗的興味のないと云ふ點から見れば、最も純粹な小說である。もう一度畫を例に引けば、デッサンのない畫は成り立たない。(カンディンスキイの「即興」などと題する數枚の畫は例外である。)しかしデッサンよりも色彩に生命を託した畫は成り立つてゐる。幸ひにも日本へ渡つて來た何枚かのセザンヌの畫は明らかにこの事實を證明するのであらう。僕はかう云ふ畫に近い小說に興味を持つてゐるのである。

ではかう云ふ小說はあるかどうか？　獨逸の初期自然主義の作家たちはかう云ふ小說に手をつけてゐる。しかし更に近代ではかう云ふ小說の作家としては何びともジュウル・ルナアルに若かない。(僕の見聞する限りでは)たとへばルナアルの「フィリップ一家の家風」は(岸田國士氏の日

本譯「葡萄畑の葡萄作り」の中にある）一見未完成かと疑はれる位である。が、實は「善く見る目」と「感じ易い心」とだけに仕上げることの出來る小說である。もう一度セザンヌを例に引けば、セザンヌは我々後代のものへ澤山の未完成の畫を殘した。丁度ミケル・アンヂエロが未完成の彫刻を殘したやうに。――しかし未完成と呼ばれてゐるセザンヌの畫さへ未完成かどうか多少の疑ひなきを得ない。現にロダンはミケル・アンヂエロの未完成の彫刻に完成の名を與へてゐる！……しかしルナアルの小說はミケル・アンヂエロの彫刻は勿論、セザンヌの畫の何枚かのやうに未完成の疑ひのあるものではない。僕は不幸にも寡聞の爲に佛蘭西人はルナアルをどう評價してゐるかを知らずにゐる。けれども、わがルナアルの仕事の獨創的なものだつたことを十分には認めてゐないらしい。

ではかう云ふ小說は紅毛人以外には書かなかつたか？　僕は僕等日本人の爲に志賀直哉氏の諸短篇を、――「焚火」以下の諸短篇を數へ上げたいと思つてゐる。

僕はかう云ふ小說は「通俗的興味はない」と言つた。僕の通俗的興味と云ふ意味は事件そのものに對する興味である。僕はけふ往來に立ち、車夫と運轉手との喧嘩を眺めてゐた。のみならず或興味を感じた。この興味は何であらう？　僕はどう考へて見ても、芝居の喧嘩を見る時の興味と違ふとは考へられない。若し違つてゐるとすれば、芝居の喧嘩は僕の上へ危險を齎さないにも關

らず、往來の喧嘩はいつ何時危險を齎らすかもわからないことである。僕はかう云ふ興味を與へる文藝を否定するものではない。しかしかう云ふ興味よりも高い興味のあることを信じてゐる。若しこの興味とは何かと言へば、――僕は特に谷崎潤一郎氏にはかう答へたいと思つてゐる。――「麒麟」の冒頭の數頁は直ちにこの興味を與へる好個の一例となるであらう。

「話」らしい話のない小說は通俗的興味の乏しいものである。が、最も善い意味では決して通俗的興味に乏しくない。(それは唯「通俗的」と云ふ言葉をどう解釋するかと云ふ問題である。)ルナアルの書いたフィリツプが――詩人の目と心とを透して來たフィリツプが僕等に興味を與へるのは一半はその僕等に近い一凡人である爲である。それをも亦通俗的興味と呼ぶことは必しも不當ではないであらう。(尤も僕は僕の議論の力點を「一凡人である」と云ふことには加へたくない。「詩人の目と心とを透して來た一凡人である」と云ふことに加へたいのである。)現に僕はかう云ふ興味の爲に常に文藝に親しんでゐる大勢の人を知つてゐる。僕等は勿論動物園の麒麟に驚嘆の聲を吝しむものではない。が、僕等の家にゐる猫にもやはり愛着を感ずるのである。

しかし或論者の言ふやうにセザンヌを畫の破壞者とすれば、ルナアルも亦小說の破壞者である。この意味ではルナアルは暫く問はず、振り香爐の香を帶びたジツドにもせよ、町の匂ひのするフイリツプにもせよ、多少はこの人通りの少ない、陷穽に滿ちた道を步いてゐるのであらう。僕

はから云ふ作家たちの仕事に――アナトオル・フランスやバレス以後の作家たちの仕事に興味を持つてゐる。僕の所謂「話」らしい話のない小説はどう云ふ小説を指してゐるか、なぜ又僕はかう云ふ小説に興味を持つてゐるか、――それ等は大體上に書いた數十行の文章に盡きてゐるであらう。

二　谷崎潤一郎氏に答ふ

次に僕は谷崎潤一郎氏の議論に答へる責任を持つてゐる。尤もこの答の一半は一の中にもないことはない。が、「凡そ文學に於て構造的美觀を最も多量に持ち得るものは小説である」と云ふ谷崎氏の言には不服である。どう云ふ文藝も、――僅々十七字の發句さへ「構造的美觀」を持たないことはない。しかしかう云ふ論法を進めることは谷崎氏の言を曲解するものである。とは言へ「凡そ文學に於て構造的美觀を最も多量に持ち得るもの」は小説よりも寧ろ戲曲であらう。勿論最も戲曲らしい戲曲は小説らしい戲曲よりも「構成的美觀」を缺いてゐるかも知れない。しかし戲曲は小説よりも大體「構成的美觀」に豐かである。――それも亦實は議論上の枝葉に過ぎない。兎に角小説と云ふ文藝上の形式は「最も」か否かを暫く措き、「構成的美觀」に富んでゐるであらう。なほ又谷崎氏の言ふやうに「筋の面白さを除外するのは、小説と云ふ形式が持つ特權を捨ててしまふ」

と云ふことも考へられるのに違ひない。が、この問題に對する答は(一)の中に書いたつもりである。唯「日本の小說に最も缺けてゐるところは、此の構成する力、いろいろ入り組んだ筋を幾何學的に組み立てる才能にある」かどうか、その點は僕は無造作に谷崎氏の議論に贊することは出來ない。我々日本人は「源氏物語」の昔からかう云ふ才能を持ち合せてゐる。單に現代の作家諸氏を見ても、泉鏡花氏、正宗白鳥氏、里見弴氏、久米正雄氏、佐藤春夫氏、宇野浩二氏、菊池寛氏等を數へられるであらう。しかもそれ等の作家諸氏の中にも依然として異彩を放つてゐるのは「僕等の兄」谷崎潤一郎氏自身である。僕は決して谷崎氏のやうに我々東海の孤島の民に「構成する力」のないのを悲しんでゐない。

この「構成する力」の問題はまだ何十行でも論ぜられるであらう。しかしその爲には谷崎氏の議論のもう少し詳しいのを必要としてゐる。唯次手に一言すれば、僕はこの「構成する力」の上では我々日本人は支那人よりも劣つてゐるとは思つてゐない。が、「水滸傳」「西遊記」「金瓶梅」「紅樓夢」「品花寶鑑」等の長篇を絮々綿々と書き上げる肉體的力量には劣つてゐると思つてゐる。

更に谷崎氏に答へたいのは「芥川君の筋の面白さを攻擊する中には、組み立ての方面よりも、或は寧ろ材料にあるかも知れない」と云ふ言葉である。僕は谷崎氏の用ふる材料には少しも異存を持つてゐない。「クリツプン事件」も「小さい王國」も「人魚の歎き」も材料の上では決して不足を

感じないものである。それから又谷崎氏の創作態度にも、——僕は佐藤春夫氏を除けば、恐らくは谷崎氏の創作態度を最も知つてゐる一人であらう。僕が僕自身を鞭つと共に谷崎潤一郎氏をも鞭ちたいのは（僕の鞭に棘のないことは勿論谷崎氏も知つてゐるであらう。）その材料を生かす爲の詩的精神の如何である。或は又詩的精神の深淺である。谷崎氏の文章はスタンダアルの文章よりも名文であらう。（暫く十九世紀中葉の作家たちはバルザツクでもスタンダアルでもサンドでも名文家ではなかつたと云ふアナトオル・フランスの言葉を信ずるとすれば）殊に繪畫的效果を與へることはその點では無力に近かつたスタンダアルなどの匹儔ではない。（これも又連帶責任者にはブランデスを連れてくれば善い。）しかしスタンダアルの諸作の中に漲り渡つた詩的精神はスタンダアルにして始めて得られるものである。フロオベエル以前の唯一のラルティストだつたメリメエさへスタンダアルに一籌を輸したのはこの問題に盡きてゐるであらう。僕が谷崎潤一郎氏に望みたいものは畢竟唯この問題だけである。「刺青」の谷崎氏は詩人だつた。が、「愛すればこそ」の谷崎氏は不幸にも詩人には遠いものである。

「大いなる友よ、汝は汝の道にかへれ。」

三　僕

最後に僕の繰り返したいのは僕も亦今後側目もふらずに「話」らしい話のない小説ばかり作るつもりはないと云ふことである。僕等は誰も皆出來ることしかしない。僕の持つてゐる才能はかう云ふ小説を作ることに適してゐるかどうか疑問である。のみならずかう云ふ小説を作ることは決して並み並みの仕事ではない。僕の小説を作るのは小説はあらゆる文藝の形式中、最も包容力に富んでゐる爲に何でもぶちこんでしまはれるからである。若し長詩形の完成した紅毛人の國に生まれてゐたとすれば、僕は或は小説家よりも詩人になつてゐたかも知れない。僕はいろいろの紅毛人たちに何度も色目を使つて來た。しかし今になつて考へて見ると、最も内心に愛してゐたのは詩人兼ジヤアナリストの猶太人――わがハインリツヒ・ハイネだつた。（昭和二・二・十五）

四　大作家

僕は上に書いた通り、頗る雜駁な作家である。が、雜駁な作家であることは必しも僕の患ひではない。いや、何びとの患ひでもない。古來の大作家と稱するものは悉く雜駁な作家である。彼等は彼等の作品の中にあらゆるものを抛りこんだ。ゲエテを古今の大詩人とするのもたとひ全部ではないにもせよ、大半はこの雜駁なことに、――この箱船の乘り合ひよりも雜駁なことに存してゐる。しかし嚴密に考へれば、雜駁なことは純粹なことに若かない。僕はこの點では大作家と

云ふものにいつも疑惑の目を注いでゐる。彼等は成程一時代を代表するに足るものであらう。しかし彼等の作品が後代を動かすに足るとすれば、それは唯彼等がどの位純粹な作家だつたかと云ふ一點に歸してしまふ訣である。「大詩人と云ふことは何でもない。我々は唯純粹な詩人を目標にしなければならぬ」と云ふ「狹い門」（ジッド）の主人公の言葉も決して等閑に附することは出來ない。僕は「話」らしい話のない小說を論じた時、偶然この「純粹な」と云ふ言葉を使つた。今この言葉を機緣にし、最も純粹な作家たちの一人、――志賀直哉氏のことを論ずるつもりである。從つてこの議論の後半はおのづから志賀直哉論に變化するであらう。尤も時と場合により、どう云ふ橫道に反れてしまふか、それは僕自身にも保證出來ない。

五　志賀直哉氏

志賀直哉氏は僕等のうちでも最も純粹な作家――でなければ最も純粹な作家たちの一人である。志賀直哉氏を論ずるのは勿論僕自身に始まつたことではない。僕は生憎多忙の爲に、――と云ふよりは寧ろ無精の爲にそれ等の議論を讀まずにゐる。從つていつか前人の說を繰り返すことになるかも知れない。しかし又或は前人の說を繰り返すことにもならないかも知れない。……………

（一）志賀直哉氏の作品は何よりも先にこの人生を立派に生きてゐる作家の作品である。立派

に？——この人生を立派に生きることは第一には神のやうに生きることであらう。志賀直哉氏も亦地上にゐる神のやうには生きてゐないかも知れない。が、少くとも清潔に、（これは第二の美德である）生きてゐることは確かである。勿論僕の「清潔に」と云ふ意味は石鹸ばかり使つてゐることではない。「道德的に清潔に」と云ふ意味である。これは或は志賀氏の作品を狹いものにしたやうに見えるかも知れない。が、實は狹いどころか、反つて廣くしてゐるのである。なぜ又廣くしてゐるかと言へば、僕等の精神的生活は道德的屬性を加へることにより、その屬性を加へない前よりも廣くならずにはゐないからである。（勿論道德的屬性を加へると云ふ意味も教訓的であると云ふことではない。物質的苦痛を除いた苦痛は大半はこの屬性の生んだものである。谷崎潤一郎氏の惡魔主義がやはりこの屬性から生まれてゐることは言ふまでもあるまい。「惡魔は神の二重人格者である。」更に例を求めるとすれば、僕は正宗白鳥氏の作品にさへ屢々論ぜられる厭世主義よりも寧ろ基督的魂の絶望を感じてゐるものである。）この屬性は志賀氏の中に勿論深い根を張つてゐたのであらう。しかし又この屬性を刺戟する上には近代の日本の生んだ道德的天才、——恐らくはその名に價する唯一の道德的天才たる武者小路實篤氏の影響も決して少くはなかつたであらう。念の爲にもう一度繰り返せば、志賀直哉氏はこの人生を清潔に生きてゐる作家である。それは同氏の作品の中にある道德的口氣にも窺はれるであらう。（「佐々木の場合」の末段はその著し

い一例である。)同時に又同氏の作品の中にある精神的苦痛にも窺はれないことはない。長篇「暗夜行路」を一貫するものは實にこの感じ易い道徳的魂の苦痛である。

(二)　志賀直哉氏は描寫の上には空想を頼まないリアリストである。その又リアリズムの細に入つてゐることは少しも前人の後に落ちない。若しこの一點を論ずるとすれば、僕は何の誇張もなしにトルストイよりも細かいと言ひ得るであらう。これは又同氏の作品を時々平板に了らせてゐる。が、この一點に注目するものはかう云ふ作品にも滿足するであらう。世人の注目を惹かなかつた、「廿代一面」はかう云ふ作品の一例である。しかしその效果を收めたものは、(たとへば小品「鵠沼行」にしても)寫生の妙を極めないものはない。次手に「鵠沼行」のことを書けば、あの作品のディテエルは悉く事實に立脚してゐる。が、「丸くふくれた小さな腹には所々に砂がこびりついて居た」と云ふ一行だけは事實ではない。それを讀んだ作中人物の一人は「ああ、ほんたうにあの時には××ちやんのおなかに砂がついてゐた」と言つた!

(三)　しかし描寫上のリアリズムは必しも志賀直哉氏に限つたことではない。同氏はこのリアリズムに東洋的傳統の上に立つた詩的精神を流しこんでゐる。同氏のエピゴオネンの及ばないのはこの一點にあると言つても差し支へない。これこそ又僕等に、――少くとも僕に最も及び難い特色である。僕は志賀直哉氏自身もこの一點を意識してゐるかどうかは必しもはつきりとは保證出

來ない。(あらゆる藝術的活動を意識の閾の中に置いたのは十年前の僕である。)しかしこの一點はたとひ作家自身は意識しないにもせよ、確かに同氏の作品に獨特の色彩を與へるものである。「焚き火」、「眞鶴」等の作品は殆どかう云ふ特色の上に全生命を託したものであらう。それ等の作品は詩歌にも劣らず(勿論この詩歌と云ふ意味は發句をも例外にするのではない。)頗る詩歌的に出來上つてゐる。これは又現世の用語を使へば、「人生的」と呼ばれる作品の一つ、――「憐れな男」にさへ看取出來るであらう。ゴム球のやうに張つた女の乳房に「豐年だ。豐年だ」を唄ふことは到底詩人以外に出來るものではない。僕は現世の人々がかう云ふ志賀直哉氏の「美しさ」に比較的注意しないことに多少の遺憾を感じてゐる。(「美しさ」は極彩色の中にあるばかりではない。)同時に又他の作家たちの美しさにもやはり注意しないことに多少の遺憾を感じてゐる。

(四)　更に又やはり作家たる僕は志賀直哉氏のテクニイクにも注意を怠らない一人である。「暗夜行路」の後篇はこの同氏のテクニイクの上にも一進歩を遂げてゐるものであらう。が、かう云ふ問題は作家以外の人々には餘り興味のないことかも知れない。僕は唯初期の志賀直哉氏さへ、立派なテクニイクの持ち主だつたことを手短かに示したいと思ふだけである。

――煙管は女持でも昔物で今の男持よりも太く、ガツシリした拵へだつた。吸口の方に玉藻の前が檜扇を翳して居る所が象眼になつてゐる。……彼は其の鮮な細工に暫く見惚れて居た。そし

て、身長の高い、眼の大きい、鼻の高い、美しいと云ふより總てがリッチな容貌をした女には如何にもこれが似合ひさうに思つた。——

これは「彼と六つ上の女」の結末である。

——代助は花瓶の右手にある組み重ねの書棚の前へ行つて、上に載せた重い寫眞帖を取り上げて、立ちながら、金の留金を外して、一枚二枚と繰り始めたが、中頃まで來てぴたりと手を留めた。其處には二十歳位の女の半身がある。代助は眼を俯せて凝と女の顔を見詰めてゐた。——

これは「それから」の第一回の結末である。

出門日已遠　不受徒旅欺　骨肉恩豈斷　手中挑靑絲　捷下萬仞岡　俯身試搴旗

これは更にずつと古い杜甫の「前出塞」の詩の結末——ではない一首である。が、いづれも目に訴へる、——言はば一枚の人物畫に近い造形美術的效果により、結末を生かしてゐるのは同じことである。

（五）　これは畢竟餘論である。志賀直哉氏の「子を盗む話」は西鶴の「子供地藏」（大下馬）を思はせ易い。が、更に「范の犯罪」はモオパスサンの「ラルティスト」（？）を思はせるであらう。「ラルティスト」の主人公はやはり女の體のまはりへナイフを打ちつける藝人である。「范の犯罪」の主人公は或精神的薄明りの中に見事に女を殺してしまふ。が、「ラルティスト」の主人公は如何に女を

殺さうとしても、多年の熟練を積んだ結果、ナイフは女の體に立たずに體のまはりにだけ立つのである。しかもこの事實を知つてゐる女は冷然と男を見つめたまま、微笑さへ洩らしてゐるのである。けれども西鶴の「子供地藏」は勿論、モオパスサンの「ラルティスト」も志賀直哉氏の作品には何の關係も持つてゐない。これは後世の批評家たちに模倣呼はりをさせぬ爲に特にちよつとつけ加へるのである。

六　僕等の散文

佐藤春夫氏の說によれば、僕等の散文は口語文であるから、しやべるやうに書けと云ふことである。これは或は佐藤氏自身は不用意の裡に言つたことかも知れない。しかしこの言葉は或問題を、――「文章の口語化」と云ふ問題を含んでゐる。近代の散文は恐らくは「しやべるやうに」の道を踏んで來たのであらう。僕はその著しい例に(近くは)武者小路實篤、宇野浩二、佐藤春夫等の諸氏の散文を數へたいものである。志賀直哉氏の散文も亦この例に洩れない。しかし僕等の「しやべりかた」が、紅毛人の「しやべりかた」は暫く問はず、鄰國たる支那人の「しやべりかた」よりも音樂的でないことも事實である。僕は「しやべるやうに書きたい」願ひも勿論持つてゐないものではない。が、同時に又一面には「書くやうにしやべりたい」とも思ふものである。僕の知つてゐる

る限りでは夏目先生はどうかとすると、實に「書くやうにしやべる」作家だつた。（但し「書くやうにしやべるものは卽ちしやべるやうに書いてゐるから」と云ふ循環論法的な意味ではない。）「しやべるやうに書く」作家は前にも言つたやうにゐない訣ではない。が、「書くやうにしやべる」作家はいつこの東海の孤島に現はれるであらう。しかし、――

しかし僕の言ひたいのは「しやべる」ことよりも「書く」ことである。僕等の散文も羅馬のやうに一日に成つたものではない。僕等の散文は明治の昔からじりじり成長をつづけて來たものである。その礎を据ゑたものは明治初期の作家たちであらう。しかしそれは暫く問はず、比較的近い時代を見ても、僕は詩人たちが散文に與へた力をも數へたいと思ふものである。

夏目先生の散文は必しも他を待つたものではない。しかし先生の散文が寫生文に負ふ所のあるのは爭はれない。ではその寫生文は誰の手になつたか？　俳人兼歌人兼批評家だつた正岡子規の天才によつたものである。（子規はひとり寫生文に限らず、僕等の散文、――口語文の上へ少からぬ功績を殘した。）かう云ふ事實を振り返つて見ると、高濱虛子、坂本四方太等の諸氏もやはりこの寫生文の建築師のうちに數へなければならぬ。（勿論「俳諧師」の作家高濱氏の小說の上に殘した足跡は別に勘定するのである。）けれども僕等の散文が詩人たちの恩を蒙つたのは更に近い時代にもない訣ではない。ではそれは何かと言へば、北原白秋氏の散文である。僕等の散文に近代的な

色彩や匂を與へたものは詩集「思ひ出」の序文だつた。かう云ふ點では北原氏の外に木下杢太郎氏の散文を數へても善い。

現世の人々は詩人たちを何か日本のパルナスの外に立つてゐるやうに思つてゐる。が、何も小說や戲曲はあらゆる文藝上の形式と沒交涉に存在してゐる訣ではない。詩人たちは彼等の仕事の外にもやはり又僕等の仕事にいつも影響を與へてゐる。それは別に上に書いた事實の證明するばかりではない。僕等と同時代の作家たちの中に詩人佐藤春夫、詩人室生犀星、詩人久米正雄等の諸氏を數へることは明らかに僕の說を裏書きするものである。いや、それ等の作家ばかりではない。最も小說家らしい里見弴氏さへ幾篇かの詩を殘してゐる筈である。

詩人たちは或は彼等の孤立に多少の歎を持つてゐるかも知れない。しかしそれは僕に言はせれば、寧ろ「名譽の孤立」である。

七　詩人たちの散文

尤も詩人たちの散文は人力にも限りのある以上、大抵彼等の詩と同程度に完成してゐないのを常としてゐる。芭蕉の「奥の細道」もやはり又この例に洩れない。殊に冒頭の一節はあの全篇に漲つた寫生的興味を破つてゐる。第一「月日は百代の過客にして、ゆきかふ年も又旅人なり」と云ふ

第一行を見ても、輕みを帶びた後半は前半の重みを受けとめてゐない。（散文にも野心のあつた芭蕉は同時代の西鶴の文章を「淺ましくもなり下れる姿」と評した。これは枯淡を愛した芭蕉には少しも無理のない言葉である。）しかし彼の散文もやはり作家たちの散文に影響を與へたことは確かである。たとひそれは「俳文」と呼ばれる彼以後の散文を通過して來たにもしろ。

八　詩歌

日本の詩人たちは現世の人々にパルナスの外にゐると思はれてゐる。その理由の一半は現世の人々の鑑賞眼が詩歌に及ばないことも數へられるであらう。しかし又一つには詩歌は畢に散文のやうに僕等の全生活感情を盛り難いことにもよる訣である。（詩は――古い語彙を用ひるとすれば、新體詩は短歌や發句よりもかう云ふ點では自由である。プロレツトカルトの詩はあつても、プロレツトカルトの發句はない。）しかし詩人たちは、――たとへば現世の歌人たちもかう云ふ試みをしてゐないことはない。その最も著しい例は「悲しき玩具」の歌人石川啄木が僕等に殘した仕事である。これは恐らくは今日では言ひ古されてゐることであらう。しかし「新詩社」は啄木の外にもこの「オディツソイスの弓」を引いたもう一人の歌人を生み出してゐる。「酒ほがひ」の歌人吉井勇氏は正にかう云ふ仕事をした。「酒ほがひ」の歌にうたはれたものはいづれも小說の匂を帶びてゐ

る。(或は心理描寫の影を帶びてゐる。)大川端の秋の夕暮に浪聲を思つた吉井勇氏はかう云ふ點では石川啄木と、――貧苦と鬪つた石川啄木と好個の對照を作るものであらう。(なほ又次手に一言すれば、「アララギ」の父正岡子規が「明星」の子北原白秋氏と僕等の散文を作り上げる上に力を合せたのも好對照である。)が、これは必しも「新詩社」にばかりあつたことではない。齋藤茂吉氏は「赤光」の中に「死に給ふ母」、「おひろ」等の連作を發表した。のみならず又十何年か前に石川啄木の殘して行つた仕事を――或は所謂「生活派」の歌を今もなほ着々と完成してゐる。元來齋藤茂吉氏の仕事ほど、多岐多端に渡つてゐるものはない。同氏の歌集は一首ごとに倭琴やセロや三味線や工場の汽笛を鳴り渡らせてゐる。(僕の言ふのは「一首ごと」である。「一首の中に」と言ふのではない。)若しこのまま書きつづけるとすれば、僕は或はいつの間にか齋藤茂吉論に移つてしまふであらう。しかしそれは便宜上、齒止めをかけて置かなければならぬ。僕はまだこの次手に書きたいことを持ち合せてゐる。が、兎に角齋藤茂吉氏ほど、仕事の上に慾の多い歌人は前人の中にも少かつたであらう。

九　兩大家の作品

勿論あらゆる作品はその作家の主觀を離れることは出來ない。しかし假に客觀と云ふ便宜上の

貼り札を用ひるとすれば、自然主義の作家たちの中でも最も客觀的な作家は德田秋聲氏である。正宗白鳥氏はこの點では對蹠點に立つてゐると言つても善い。正宗白鳥氏の厭世主義は武者小路實篤氏の樂天主義と好箇の對照を作つてゐる。のみならず殆ど道德的である。德田氏の世界も暗いものかも知れない。しかしそれは小宇宙である。久米正雄氏の「德田水」と呼んだ東洋詩的情緒のある小宇宙である。そこにはたとひ娑婆苦はあつても、地獄の業火は燃えてゐない。けれども正宗氏はこの地面の下に必ず地獄を覗かせてゐる。僕は確か一昨年の夏、正宗氏の作品を集めた本を手當り次第に讀破して行つた。人生の表裏を知つてゐることは正宗氏も德田氏に劣らないかも知れない。しかし僕の受けた感銘は――少くとも僕の受けた感銘中、最も僕に迫つたものは中世紀から僕等を動かしてゐた宗敎的情緒に近いものである。

　我を過ぎて汝は歎きの市に入り
　我を過ぎて汝は永遠の苦しみに入る。………

（追記。この後二三日を經て正宗氏の「ダンテに就いて」を讀んだ。感慨少からず。）

十　厭世主義

正宗白鳥氏の敎へる所によれば、人生はいつも暗澹としてゐる。正宗氏はこの事實を敎へる爲

に種々雜多の「話」を作つた。（尤も同氏の作品中には「話」らしい話のない小說も少くない。）しかもその「話」を運ぶ爲にも種々雜多のテクニイクを用ひてゐる。才人の名はかう云ふ點でも當然正宗氏の上に與へらるべきであらう。しかし僕の言ひたいのは同氏の厭世主義的人生觀である。僕も亦正宗氏のやうに如何なる社會組織のもとにあつても、我々人間の苦しみは救ひ難いものと信じてゐる。あの古代のパンの神に似たアナトオル・フランスのユウトピア（「白い石の上で」）さへ佛陀の夢みた寂光土ではない。生老病死は哀別離苦と共に必ず僕等を苦しめるであらう。僕は確か去年の秋、ダスタエフスキイの子供か孫かの餓死した電報を讀んだ時、特にかう思はずにはゐられなかつた。これは勿論コムミュニスト治下のロシアにあつた話である。しかしアナアキストの世界となつても、畢竟我々人間は我々人間であることにより、到底幸福に終始することは出來ない。

けれども「金が仇」とは封建時代以來の名言である。金の爲に起る悲劇や喜劇は社會組織の變化と共に必ず多少は減ずるであらう。いや、僕等の精神的生活も幾分か變化を受ける筈である。若しかう云ふ點を力說すれば、我々人間の將來は或は明るいと言はれるであらう。しかし又金の爲に起らずにゐる悲劇や喜劇もない訣ではない。のみならず金は必しも我々人間を飜弄する唯一の力ではないのである。

正宗白鳥氏がプロレタリアの作家たちと立ち場を異にするのは當然である。僕も亦、――僕は或は便宜上のコムミユニストか何かに變るかも知れない。が、本質的にはどこまで行つても、畢竟ジヤアナリスト兼詩人である。文藝上の作品もいつかは滅びるのに違ひない。現に僕の耳學問によれば、フランス語のリエゾンさへ失はれつつある以上、ボオドレエルの詩の響もおのづから明日異るであらう。（尤もそんなことはどうなつても我々日本人には差支へない。）しかし一行の詩の生命は僕等の生命よりも長いのである。僕は今日も亦明日のやうに「怠惰なる日の怠惰なる詩人」、――一人の夢想家であることを恥としない。

十一　半ば忘れられた作家たち

僕等は少くとも錢のやうに必ず兩面を具へてゐる。兩面以上を具へてゐることも勿論決して稀ではない。紅毛人の作り出した「藝術家として又人として」はこの兩面を示すものである。「人として」失敗したと共に「藝術家として」成功したものは盗人兼詩人だつたフランソア・ヴィヨンにまさるものはない。「ハムレット」の悲劇もゲエテによれば、思想家たるべきハムレットが父の仇を打たなければならぬ王子だつた悲劇である。これも亦或は兩面の剋し合つた悲劇と言はれるであらう。僕等の日本は歷史上にもかう云ふ人物を持ち合せてゐる。征夷大將軍源實朝は政治家

としては失敗した。しかし「金槐集」の歌人源實朝は藝術家としては立派に成功してゐる。が、「人として」――或は何としてでも失敗したにしろ、藝術家としても成功しないことは更に悲劇的であると言はなければならぬ。

　しかし藝術家として成功したかどうかは容易に決定出來るものではない。現にラムボオを嗤つたフランスは今日ではラムボオに敬禮し出した。が、たとひ誤植だらけにもしろ、三冊（？）の著書のあつたことはラムボオの爲には仕合せである。若し著書もなかつたとしたならば、……

　僕は僕の先輩や知人に二三の好短篇を書きながら、しかもいつか忘れられた何人かの人々を數へてゐる。彼等は今日の作家たちよりも或は力を缺いてゐたかも知れない。けれども偶然と云ふものはやはりそこにもあつた訣である。（若し全然かう云ふ分子を認めない作家があるとすれば、それは例外とする外はない。）それ等の作品を集めることは或は不可能に近いかも知れない。しかし若し出來るとすれば、彼等の爲は暫く問はず、後人の爲にも役立つことであらう。

「生まるる時の早かりしか、或は又遲かりしか」は南蠻の詩人の歎ばかりではない。僕は福永挽歌、青木健作、江南文三等の諸氏にもかう云ふ歎を感じてゐる。僕はいつか横文字の雜誌に「半ば忘れられた作家たち」と云ふシリイズの廣告を發見した。僕も亦或はかう云ふシリイズに名を連ねる作家たちの一人であらう。かう云ふのは格別謙遜したのではない。イギリスのロマン主義時

代の流行兒だつた「僧」の作家ルイズさへやはりこのシリイズの中の一人である。しかし半ば忘れられた作家たちは必しも過去ばかりにある訣ではない。のみならず彼等の作品は一つの作品として見る時には現世の諸雜誌に載る作品よりも劣つてゐるとは言はれないのである。

十二　詩的精神

僕は谷崎潤一郎氏に會ひ、僕の駁論を述べた時、「では君の詩的精神とは何を指すのか？」と云ふ質問を受けた。僕の詩的精神とは最も廣い意味の抒情詩である。僕は勿論かう云ふ返事をした。すると谷崎氏は「さう云ふものならば何にでもあるぢやないか？」と言つた。僕はその時も述べた通り、何にでもあることは否定しない。「マダム・ボヴアリイ」も「ハムレット」も「神曲」も「ガリヴァアの旅行記」も悉く詩的精神の產物である。どう云ふ思想も文藝上の作品の中に盛られる以上、必ずこの詩的精神の淨火を通つて來なければならぬ。僕の言ふのはその淨火を如何に燃え立たせるかと云ふことである。それは或は半ば以上、天賦の才能によるものかも知れない。いや、精進の力などは存外效のないものであらう。しかしその淨火の熱の高低は直ちに或作品の價値の高低を定めるのである。

世界は不朽の傑作にうんざりするほど充滿してゐる。が、或作家の死んだ後、三十年の月日を

經ても、なほ僕等の讀むに足る十篇の短篇を殘したものは大家と呼んでも差支ない。たとひ五篇を殘したとしても、名家の列には入るであらう。最後に三篇を殘したとすれば、それでも兎に角一作家である。この一作家になることさへ決して容易に出來るものではない。僕はこれも亦橫文字の雜誌に「短篇などは二三日のうちに書いてしまふものである」と云ふウエルズの言葉を發見した。二三日は暫く問はず、締め切り日を前に控へた以上、誰でも一日のうちに書かないものはない。しかしいつも二三日のうちに書いてしまふと斷言するのはウエルズのウエルズたる所以である。從つて彼は碌な短篇を書かない。

十三　森先生

僕はこの頃「鷗外全集」第六卷を一讀し、不思議に思はずにはゐられなかつた。先生の學は古今を貫き、識は東西を壓してゐるのは今更のやうに言はずとも善い。のみならず先生の小說や戲曲は大抵は渾然と出來上つてゐる。（所謂ネオ・ロマン主義は日本にも幾多の作品を生んだ。が、先生の戲曲「生田川」ほど完成したものは少かつたであらう。）しかし先生の短歌や俳句は如何に贔屓目に見るとしても、畢に作家の域にはひつてゐない。先生は現世にも珍らしい耳を持つてゐた詩人である。たとへば「玉篋兩浦嶼」を讀んでも、如何に先生が日本語の響を知つてゐたかが窺はれ

るであらう。これは又先生の短歌や俳句にも髣髴出來ない訣ではない。同時に又體裁を成してゐることはいづれも整然と出來上つてゐる。この點では殆ど先生としては人工を盡したと言つても善いかも知れない。

けれども先生の短歌や發句は何か微妙なものを失つてゐる。詩歌はその又微妙なものさへ掴めば、或程度の巧拙などは餘り氣がかりになるものではない。が、先生の短歌や發句は巧は即ち巧であるものの、不思議にも僕等に迫つて來ない。これは先生には短歌や發句は餘戲に外ならなかつた爲であらうか？　しかしこの微妙なものは先生の戲曲や小説にもやはり鋒芒を露はしてゐない。（かう云ふのは先生の戲曲や小説を必しも無價値であると云ふのではない。）のみならず夏目先生の餘戲だつた漢詩は、――殊に晩年の絶句などはおのづからこの微妙なものを捉へることに成功してゐる。（若し「わが佛尊し」の譏りを受けることを顧みないとすれば。）

僕はかう云ふことを考へた揚句、畢竟森先生は僕等のやうに神經質に生まれついてゐなかつたと云ふ結論に達した。或は畢に詩人よりも何か他のものだつたと云ふ結論に達した。「澀江抽齋」を書いた森先生は空前の大家だつたのに違ひない。僕はかう云ふ森先生に恐怖に近い敬意を感じてゐる。いや、或は書かなかつたとしても、先生の精力は聰明の資と共に僕を動かさずには措かなかつたであらう。僕はいつか森先生の書齋に和服を着た先生と話してゐた。方丈の室に近い書

齋の隅には新らしい薄緣りが一枚あり、その上には蟲干しでも始まつたやうに古手紙が何本も並んでゐた。先生は僕にかう言つた。――「この間柴野栗山（？）の手紙を集めて本に出した人が來たから、僕はあの本はよく出來てゐる、唯手紙が年代順に並べてないのは惜しいと言つた。するとその人は日本の手紙は生憎月日しか書いてないから、年代順に並べることは到底出來ないと返事をした。それから僕はこの古手紙を指さし、ここに北條霞亭の手紙が何十本かある、しかも皆年代順に並んでゐると言つた。」！　僕はその時の先生の昂然としてゐたのを覺えてゐる。かう言ふ先生に瞠目するものは必しも僕一人には限らないであらう。しかし正直に白狀すれば、僕はアナトオル・フランスの「ジアン・ダアク」よりも寧ろボオドレエルの一行を殘したいと思つてゐる一人である。

十四　白柳秀湖氏

僕は又この頃白柳秀湖氏の「聲なきに聽く」と云ふ文集を讀み、「僕の美學」、「羞恥心に關する考察」、「動物の發性期と食物との關係」等の小論文に少からず興味を感じた。「僕の美學」は題の示すやうに正に白柳氏の美學に當り、「羞恥心に關する考察」は白柳氏の倫理學に當るものである。今後者は暫く問はず、前者をちよつと紹介すれば、美は僕等の生活から何の關係もなしに生まれた

ものではない。僕等の祖先は焚火を愛し、林間に流れる水を愛し、肉を盛る土器を愛し、敵を打ち倒す棒を愛した。美はこれ等の生活的必要品(?)からおのづから生まれて來たのである。……かう云ふ小論文は少くとも僕には現世に多いコントよりも遙に尊敬に價するものである。(白柳氏はこの小論文の末にこれは「文壇の一隅に唯物美學の呼聲、若しくはそれに關する飜譯の現れる絶對以前」に書いたと註してゐる。)僕は美學などは全然知らない。況や唯物美學などと云ふものには更に縁のない衆生である。しかし白柳氏の美の發生論は僕にも僕の美學を作る機會を與へた。白柳氏は造形美術以外の美の發生に言及してゐない。僕はもう十數年前、或山中の宿に鹿の聲を聞き、何かしみじみと人戀しさを感じた。あらゆる抒情詩はこの鹿の聲に、――雌を呼ぶ雄の聲に發したのであらう。しかしこの唯物美學は俳人は勿論、遠い昔の歌人さへ知つてゐたかも知れない。唯敍事詩に至つては確かに太古の民のゴシツプに起源を發してゐたのであらう。「イリアツド」は神々のゴシツプである。その又ゴシツプは僕等には野蠻な莊嚴に充ち滿ちた美を感じさせるのに違ひない。しかしそれは「僕等には」である。太古の民は「イリアツド」に彼等の歎ひや悲しみや苦しみを感ぜずにはゐなかつたであらう。のみならずそこに彼等の心の燃え上るのを感ぜずにはゐなかつたであらう。……

白柳秀湖氏は美の中に僕等の祖先の生活を見てゐる。が、僕等は僕等ばかりではない。アフリ

カの沙漠に都會の出來る頃には僕等の子孫の祖先にたるのである。從つて僕等の心もちは丁度地下の泉のやうに僕等の子孫にも傳はるであらう。僕は白柳秀湖氏のやうに焚き火に親しみを感じるものである。同時に又その親しみに太古の民を思ふものである。（僕は「槍ケ岳紀行」の中にちよつとこのことを書いたつもりである。）しかし「猿に近い吾々の祖先」は彼等の焚き火を燃やす爲にどの位苦心をしたことであらう。焚き火を燃やすことを發明したのは勿論天才だつたのに違ひない。けれどもその焚き火を燃やしつづけたものはやはり何人かの天才たちである。僕はこの苦心を思ふ時、不幸にも「今の藝術といふものなど、無くなつてしまつてもよい」とは考へない。

十五　「文藝評論」

批評も亦文藝上の一形式である。僕等の譽めたり貶したりするのも畢竟は自己を表現する爲であらう。幕の上に映つたアメリカの役者に、――しかも死んでしまつたヴァレンティノに拍手を送つて吝まないのは相手を歡ばせる爲でも何でもない。唯好意を、――惹いては自己を表現する爲にするのである。若し自己を表現する爲とすれば、……

小說や戲曲も紅毛人の作品に或は遙かに及ばないかも知れない。が、批評も亦紅毛人の作品に遜色のあるのは確かである。僕はかう云ふ荒蕪の中に唯正宗白鳥氏の「文藝評論」を愛讀した。批

評家正宗白鳥氏の態度は紅毛人の言葉を借りれば、徹頭徹尾ラコニツクである。のみならず「文藝評論」は必ずしも文藝評論ではない。時には文藝の中の人生評論である。しかも僕は巻煙草を片手に「文藝評論」を愛讀した。時々石のごろごろした一本道を思ひ出しながら、その又一本道の日の光に殘酷な歡びを感じながら。

十六　文學的未開地

イギリスは久しく閑却してゐた十八世紀の文藝に注目してゐる。それは一つには大戰の後には誰も陽氣なものを求めてゐるからであらう。(僕は私かに世界中同じではないかと思つてゐる。同時に又大戰の爲に打撃を受けない日本さへいつかこの流行に感染してゐるのも不思議なものだと思つてゐる。)しかし又一つには閑却してゐた爲に文學者たちの研究に材料を與へ易い爲もある訣である。雀は米のない流しもとへは來ない。文學者たちも同じことであらう。從つて等閑に附せられることはそれ自身發見されることになる訣である。

これは日本でも同じことである。俳諧寺一茶は暫く問はず、天明以後の俳人たちの仕事は殆ど誰にも顧みられてゐない。僕はかう云ふ俳人たちの仕事も次第に顯れて來ることと思つてゐる。しかも「月並み」の一言では到底片づけられない一面も次第に顯れて來ることと思つてゐる。

等閑に附せられると云ふことも必しも悪いことばかりではない。

十七　夏目先生

僕はいつか夏目先生が風流漱石山人になつてゐるのに驚嘆した。僕の知つてゐた先生は才氣煥發する老人である。のみならず機嫌の悪い時には先輩の諸氏は暫く問はず、後進の僕などは往生だつた。成程天才と云ふものはかう云ふものかと思つたこともないではない。何でも冬に近い木曜日の夜、先生はお客と話しながら、少しも顔をこちらへ向けずに僕に「葉卷をとつてくれ給へ」と言つた。しかし葉卷がどこにあるかは生憎僕には見當もつかない。僕はやむを得ず「どこにありますか？」と尋ねた。すると先生は何も言はずに猛然と（かう云ふのは少しも誇張ではない。）顋を右へ振つた。僕は怯づ怯づ右を眺め、やつと客間の隅の机の上に葉卷の箱を發見した。

「それから」「門」「行人」「道草」等はいづれもかう云ふ先生の情熱の生んだ作品である。先生は枯淡に住したかつたかも知れない。實際又多少は住してゐたであらう。が、僕が知つてゐる晩年さへ、決して文人などと云ふものではなかつた。まして「明暗」以前にはもつと猛烈だつたのに違ひない。僕は先生のことを考へる度に老辣無双の感を新たにしてゐる。が、一度身の上の相談を持ちこんだ時、先生は胃の具合も善かつたと見え、かう僕に話しかけた。――「何も君に忠告す

るんぢやないよ。唯僕が君の位置に立つてゐるとすればだね。……」僕は實はこの時には先生に顋を振られた時よりも遙かに參らずにはゐられなかつた。

十八　メリメエの書簡集

メリメエはフロオベエルの「マダム・ボヴァリイ」を讀んだ時、「超凡の才能を浪費してゐる」と言つた。「マダム・ボヴァリイ」はロマン主義者のメリメエには實際かう感ぜられたかも知れない。しかしメリメエの書簡集(誰かわからない女に宛てた戀愛書簡集)はいろいろの話を含んでゐる。たとへばパリから書いた二番目の書簡に、――

ルツ・サン・オノレエに貧しい女が一人住んでゐた。彼女は見すぼらしい屋根裏の部屋を殆ど一度も離れなかつた。それから又十二になる娘を一人持つてゐた。その少女は午後からオペラへ勤め、大抵眞夜中に歸つて來るのだつた。或夜のこと、娘は門番の部屋へ下りて來て「蠟燭に火をつけて貸して下さい」と言つた。門番の女房は娘のあとから屋根裏の部屋へ昇つて行つた。するとあの貧しい女は死骸になつて横たはつてゐた。のみならず娘は古トランクから出した一束の手紙を燃やしてゐた。「お母さんは今夜死にました。これはお母さんが死ぬ前に讀まずに燒けと言つてゐた手紙です」――娘は門番の女房にかう言つた。娘は父の名も知らなければ母の名も知

らなかつた。しかも生活の途と言つては唯せつせとオペラへ勤め、猿になつたり、惡魔になつたり、ほんの端役を勤めるだけだつた。母親は最後の教訓に「いつまでも端役でゐるやうに、又善良でゐるやうに」と言つた。娘は今でもこの教訓通り、善良な端役に終始してゐる。

もう一つ次手に田舍の話を引けば、今度はカンヌから書いた書簡に、――

グラツスに近い或農夫が一人、谷底に倒れて死んでゐた。前夜にそこへ轉げ落ちたか、抛りこまれたかしたものである。すると同じ仲間の農夫が一人、彼の友だちに殺人犯人は彼自身であると公言した。「どうして？　なぜ？」「あの男は俺の羊を呪つたやつだ。俺は俺の羊飼ひに教はり、三本の釘を鍋の中で煮てから、呪文を唱へてやることにした。あの男はその晩に死んでしまつたのだ。」……

この書簡集は一八四〇から一八七〇――メリメエの歿年に亙つてゐる。（彼の「カルメン」は一八四四の作品である。）かう云ふ話はそれ自身小説になつてゐないかも知れない。しかしモオティフを捉へれば、小説になる可能性を持つてゐる。モオパスサンは暫く問はず、フィリップはかう言ふ話から幾つも美しい短篇を作つた。僕等は勿論樗牛の言つたやうに「現代を超越」など出來るものではない。しかも僕等を支配する時代は存外短いものである。僕はメリメエの書簡集の中に彼の落ち穂を見出した時、しみじみかう感ぜずにはゐられなかつた。

メリメエはこの誰かわからない女へ手紙を書きはじめた時分から幾つも傑作を殘してゐる。それから又死んでしまふ前には新教徒の一人になつてゐる。これも亦僕にはニイチエ以前の超人崇拜家だつたメリメエを思ふと、多少の興味のないこともない。

十九　古典

僕等は皆知つてゐることの外は書けない。古典の作家たちも同じだつたであらう。プロフェッサアたちは文藝評論をする時、いつもこの事實を閑却してゐる。尤もこれは一概にプロフェッサアたちばかりとは言はれないかも知れない。しかしそれは兎も角も、僕は晩年に「あらし」を書いたシエクスピイアの心中に同情に近いものを感じてゐる。

二十　ジヤアナリズム

もう一度佐藤春夫氏の言葉を引けば、「文章はしやべるやうに書け」と云ふことである。僕は實際この文章をしやべるやうに書いて行つた。が、いくら書いて行つても、しやべりたいことは盡きさうもない。僕は實にかう云ふ點ではジヤアナリストであると思つてゐる。從つて職業的ジヤアナリストを兄弟であると思つてゐる。(尤も向うから御免だと言はれれば、默つて引き下る外は

ない。)ジャアナリズムと云ふものは畢竟歷史に外ならない。(新聞記事に誤傳があるのも歷史に誤傳があるのと同じことである。)歷史も又畢竟傳記である。その又傳記は、小說とどの位異つてゐるであらう。現に自敍傳は「私」小說と云ふものとはつきりした差別を持つてゐない。暫くクロオチェの議論に耳を貸さずに抒情詩等の詩歌を例外とすれば、あらゆる文藝はジャアナリズムである。のみならず新聞文藝は明治大正の兩時代に所謂文壇的作品に遜色のない作品を殘した。德富蘇峰、陸羯南、黑岩涙香、遲塚麗水等の諸氏の作品は暫く問はず、山中未成氏の書いた通信さへ文藝的には現世に多い諸雜誌の雜文などに劣るものではない。のみならず、――

のみならず新聞文藝の作家たちはその作品に署名しなかつた爲に名前さへ傳はらなかつたのも多いであらう。現に僕はかう云ふ人々の中に二三の詩人たちを數へてゐる。僕は一生のどの瞬間を除いても、今日の僕自身になることは出來ない。かう云ふ人々の作品も(僕はその作家の名前を知らなかつたにしろ)僕に詩的感激を與へた限り、やはりジャアナリスト兼詩人たる今日の僕には恩人である。僕を作家にした偶然はやはり彼等をジャアナリストにした。若し袋に入れた月給以外に原稿料のとれることを幸福であるとするならば、僕は彼等よりも幸福である。(虛名などは幸福にはならない。)かう云ふ點を除外すれば、僕等は彼等と職業的に何の相違も持つてゐない。少くとも僕はジャアナリストだつた。今日もなほジャアナリストである。將來も勿論ジャアナリ

ストであらう。
しかし諸大家たちは暫く問はず、僕はこのジヤアナリストたる天職にも時々うんざりすることは事實である。(昭和二・二・二十六)

二十一　正宗白鳥氏の「ダンテ」

正宗白鳥氏のダンテ論は前人のダンテ論を壓倒してゐる。少くとも獨特な點ではクロオチエのダンテ論にも劣らないかも知れない。僕はあの議論を愛讀した。正宗氏はダンテの「美しさ」には殆ど目をつぶつてゐる。それは或は故意にしたのであらう。或は又自然にしたのかも知れない。故上田敏博士もダンテの研究家の一人だつた。しかも「神曲」を飜譯しようとしてゐた。が、博士の遺稿を見れば、イタリア語の原文によつたものではない。あの書き入れの示すやうにケエリイの英吉利譯によつたのである。ケエリイの英吉利譯によりながら、ダンテの「美しさ」を云々するのは或は滑稽に墮ちるのであらう。(僕も亦ケエリイの外は讀んだことはない。)しかしダンテの「美しさ」はたとひケエリイの英吉利譯だけ讀んでも、幾分か感ぜられるのは確かである。……
それから又「神曲」は一面には晩年のダンテの自己辯護である。公金費消か何かの嫌疑を受けたダンテはやはり僕等自身のやうに自己辯護を必要としたのに違ひない。しかしダンテの達した天

國は僕には多少退屈である。それは僕等は事實上地獄を歩いてゐる爲であらうか？　或は又ダンテも淨罪界の外に登ることの出來なかつた爲であらうか？……

僕等は皆超人ではない。あの逞しいロダンさへ名高いバルザックの像を作り、世間の惡評を受けた時には神經的に苦しんだのである。故郷を追はれたダンテも亦神經的に苦しんだに違ひない。殊に死後には幽靈になり、彼の息子に現れたと云ふことは幾分かダンテの體質を――彼の息子に遺傳したダンテの體質を示してゐるであらう。ダンテは實際ストリントベリイのやうに地獄の底から脫け出して來た。現に「神曲」の淨罪界は病後の歡びに近いものを持つてゐる。……

しかしそれ等はダンテの皮下一寸に及ばないことばかりであらう。正宗氏はあの論文の中にダンテの骨肉を味はつてゐる。あの論文の中にあるのは十三世紀でもなければ伊太利でもない。唯僕等のゐる娑婆界である。平和を、唯平和を、――これはダンテの願ひだつたばかりではない。同時に又ストリントベリイの願ひだつた。僕は正宗氏のダンテを仰がずにダンテを見たことを愛してゐる。ベアトリチエは正宗氏の言ふやうに女人よりもはるかに天人に近い。若しダンテを讀んだ後、目のあたりにベアトリチエに會つたとしたならば、僕等は必ず失望するであらう。

僕はこの文章を書いてゐるうちにふとゲエテのことを思ひ出した。ゲエテの描いたフリイデリケは殆ど可憐そのものである。が、ボンの大學教授ネエケはフリイデリケの必しもさう云ふ女人

でないことを發表した。Düntzer 等の理想主義者たちは勿論この事實を信じてゐない。しかしゲエテ自身もネエケの言葉の僞りでないことを認めてゐる。のみならずフリイデリケの住んでゐたSesenheim の村も亦ゲエテの描いたのとは違つてゐたらしい。Tieck はわざわざこの村を尋ね、「後悔した」とさへ語つてゐる。ベアトリチエも亦同じことであらう。けれどもかう云ふベアトリチエはベアトリチエ自身を示さないにもせよ、ダンテ自身を示してゐる。ダンテは晩年に至つても、所謂「永遠の女性」を夢みてゐた。しかし所謂「永遠の女性」は天國の外には住んでゐない。のみならずその天國は「しないことの後悔」に充ち滿ちてゐる。丁度地獄は炎の中に「したことの後悔」を廣げてゐるやうに。

僕はダンテ論を讀んでゐるうちに鐵假面の下にある正宗氏の双眼の色を感じた。古人は「君看双眼色　不語似無愁」と言つた。やはり正宗氏の双眼の色も、――しかし僕は恐れてゐる。正宗氏は或はこの双眼も義眼であると言ふかも知れない。

二十二　近松門左衛門

僕は谷崎潤一郎、佐藤春夫の兩氏と一しよに久しぶりに人形芝居を見物した。人形は役者よりも美しい。殊に動かずにゐる時は綺麗である。が、人形を使つてゐる黑ん坊と云ふものは薄氣味

悪い。現にゴヤは人物の後に度たびああ云ふものをつけ加へた。僕等も或はああ云ふものに、――無氣味な運命に驅られてゐるのであらう。……

けれども僕の言ひたいのは人形よりも近松門左衞門である。僕は小春治兵衞を見てゐるうちに今更のやうに近松を考へ出した。近松は寫實主義者西鶴に對し、理想主義者の名を博してゐる。僕は近松の人生觀を知らない。近松は或は天を仰いで僕等の小を歎いてゐたであらう。或は又天氣模様を考へては明日の入りを氣遣つてゐたであらう。しかしそれは今日では誰も知らないことは確かである。唯近松の淨瑠璃を見れば、近松は決して理想主義者ではない。理想主義者では――理想主義者とは一體何であらう？　西鶴は文藝上の寫實主義者である。同時に又人生觀上の現實主義者である。（少くとも作品によれば）しかし文藝上の寫實主義者は必ずしも人生觀上の現實主義者ではない。いや、「マダム・ボヴアリイ」を書いた作家は文藝上にも又ロマン主義者だつた。若し夢を求めることをロマン主義と呼ぶとすれば、近松も亦ロマン主義者であらう。しかし又一面にはやはり逞しい寫實主義者である。「小春治兵衞」の河内屋から鴈治郎の姿を抹殺せよ。（この爲には文樂を見ることである。）そのあとに殘るものは何でもない、人生の隅々へ目の屆いた寫實主義的戲曲である。成程そこには元祿時代の抒情詩もまじつてゐるのに違ひない。が、この抒情詩を持つてゐるものをロマン主義者と呼ぶとすれば、――ド・リイル・ラダンの言葉に僞

りはない。僕等は阿呆でないとすれば、いづれもロマン主義者になる訣である。

元祿時代の戲曲的手法は今日よりも多少自然ではない。しかし元祿時代以後の戲曲的手法よりもはるかに小細工を用ひないものである。かう云ふ手法に煩はされないとすれば、「小春治兵衞」は心理描寫の上には決して寫實主義を離れてゐない。近松は彼等の官能主義やイゴイズムにも目を注いでゐる。いや、彼等の中にある何か不思議なものにも目をつけてゐる。彼等を死に導いたものは必ずしも太兵衞の惡意ではない。おさん親子の善意も亦やはり彼等を苦しませてゐる。

近松は度々日本のシエクスピイアに比せられてゐる。それは在來の諸家の說よりも或は一層シエクスピイア的かも知れない。第一に近松はシエクスピイアのやうに殆ど理智を超越してゐる。(ラテン人種の戲曲家モリエエルの理智を想起せよ。)それから又戲曲の中に美しい一行を撒き散らしてゐる。最後に悲劇の唯中にも喜劇的場景を點出してゐる。僕は炬燵の場の乞食坊主を見ながら、何度も名高い「マクベス」の中の醉つ拂ひの姿を思ひ出した。

近松の世話ものは高山樗牛以來、時代ものの上に置かれてゐる。が、近松は時代ものの中にもロマン主義者に終始したのではない。これも亦多少シエクスピイア的である。シエクスピイアは羅馬の都に時計を置いて顧みなかつた。近松も時代を無視してゐることはシエクスピイア以上である。のみならず神代の世界さへ悉く元祿時代の世界にした。それ等の人物も心理描寫の上には

存外屢寫實主義的である。たとへば「日本振袖始」さへ、巨旦蘇旦兄弟の爭ひは全然世話ものの中の一場景と變りはない。しかも巨旦の妻の氣もちや父を殺した後の巨旦の氣もちは恐らくは現世にも通用するであらう。まして素戔嗚の尊の戀愛などは恐れながら有史以來少しも變らない××である。

近松の時代ものは世話ものよりも勿論荒唐無稽である。しかしその爲に世話ものにない「美しさ」のあつたことは爭はれない。たとへば日本の南部の海岸に偶然漂つて來た舶の中に支那美人のゐる場景を想像せよ。(國姓爺合戰)それは僕等自身の異國趣味にも未だに或滿足を與へるであらう。

高山樗牛は不幸にもこれ等の特色を無視してゐる。近松の時代ものは世話ものよりも必しも下にあるものではない。唯僕等は封建時代の市井を比較的身近に感じてゐる。元祿時代の河庄は明治時代の小待合に近い。小春は、――殊に役者の扮する小春は明治時代の藝者に似たものである。かう云ふ事實は近松の世話ものに如實と云ふ感じを與へ易い。しかし何百年か過ぎ去つた後、――卽ち封建時代の市井さへ夢の中の夢に變つた後、近松の淨瑠璃をふり返つて見れば、僕等は時代ものの必ずしも下にゐないことを見出すであらう。のみならず時代ものは一面にはやはり世話ものと同時代の大名の生活を描いてゐる。しかもその世話ものほど如實と云ふ感じを與へないの

は封建時代の社會制度の僕等を大名の生活とは縁の遠いものにしてゐる爲である。九重の雲の中にいらせられる御一人さへ不思議にも近松の淨瑠璃を愛讀し給うた。それは近松の出身によるか、或は又市井の出來事に好奇心を持たれた爲かも知れない。しかし近松の時代ものに元祿時代の上流階級を感じられなかつたとも限らないのである。

僕は人形芝居を見物しながら、こんなことを考へてゐた。人形芝居は衰へてゐるらしい。のみならず淨瑠璃も原作通りに語つてゐないと云ふことである。しかし僕には芝居よりもはるかに興味の深いものだつた。

二十三　模倣

紅毛人は日本人の模倣に長じてゐることを輕蔑してゐる。のみならず日本人の風俗や習慣（或は道德）の滑稽であることを輕蔑してゐる。僕は堀口九萬一氏の紹介した「雪さん」と云ふフランス小說の梗概を讀み、（「女性」三月號所載）今更のやうにこの事實を考へ出した。

日本人は模倣に長じてゐる。僕等の作品も紅毛人の作品の模倣であることは爭はれない。しかし彼等も僕等のやうにやはり模倣に長じてゐる。ホイツスラアは油畫の上に浮世畫を模倣をしたかつたか？　いや、彼等は彼等同志もやはり模倣し合つてゐる。更に又過去に溯れば、大いなる

支那は彼等の爲にどの位先例を示したであらう？　彼等は或は彼等の模倣は「消化」であると云ふかも知れない。若し「消化」であると云ふならば、僕等の模倣も亦「消化」である。同じ水墨を以てしても、日本の南畫は支那の南畫ではない。のみならず僕等は往來の露店に言葉通り豚カツを消化してゐる。

しかも模倣を便宜とすれば、模倣するのに勝ることはない。僕等は先祖傳來の名刀を揮ひながら、彼等のタンクや毒瓦斯と戰ふ必要を認めないものである。しかも物質的文明はたとひ必要のない時にさへ、おのづから模倣を強ひずには措かない。現に古代には輕羅をまとつた希臘、羅馬等の暖國の民さへ、今では北狄の考案した、寒氣に堪へるのに都合の善い洋服と云ふものを用ひてゐる。

僕等の風俗や習慣の彼等に滑稽に見えるのもやはり少しも不思議ではない。彼等は僕等の美術には――殊に工藝美術にはとうに多少の賞讚をしてゐる。それは唯目のあたりに見ることの出來る爲と言はなければならぬ。僕等の感情や思想などは、必ずしも容易に見えるものではない。江戸末期の英吉利公使だつた Sir Rutherford Alcock は灸を据ゑてゐる子供を見、如何に僕等は迷信の爲にみづから苦めてゐるかと嘲笑した。僕等の風俗や習慣の中に潜んだ感情や思想は今日でも、――小泉八雲を出した今日でもやはり彼等には不可解である。彼等は僕等の風俗や習慣を勿

論笑はずにはゐられないであらう。同時に又彼等の風俗や習慣もやはり僕等には可笑しいのである。たとへばエドガア・ポオは酒飲みだつた爲に（或は酒飲みだつたかどうかと云ふ爲に）永年死後の名聲を落してゐた。「李白一斗詩百篇」を誇る日本ではかう云ふことは可笑しいと云ふ外はない。この互に輕蔑し合ふことは避け難い事實とは云ふものの、やはり悲しむべき事實である。のみならず僕等は僕等自身の中にもかう云ふ悲劇を感じないことはない。いや、僕等の精神的生活は大抵は古い僕等に對する新しい僕等の戰ひである。

しかし僕等は彼等よりも幾分か彼等を了解してゐる。（これは或は僕等には寧ろ不名譽なことかも知れない。）彼等は僕等に一顧も與へてゐない。僕等は彼等には未開人である。しかも日本に住んでゐる彼等は必ずしも彼等を代表するものではない。恐らくは世界を支配する彼等のサムプルとするにも足りないものであらう。が、僕等は丸善のある爲に多少彼等の魂を知つてゐることは確かである。

なほ又次手につけ加へれば、彼等も亦本質的にはやはり僕等と異つてゐない。僕等は（彼等も一しよにした）皆世界と云ふ箱船に乘つた人間獸の一群である。しかもこの箱船の中は決して明るいものではない。殊に僕等日本人の船室は度たび大地震に見舞はれるのである。

堀口九萬一氏の紹介は生憎まだ完結してゐない。のみならず氏の加へる筈の批評も載つてゐな

いのである。が、僕はそれだけにも、ふとこんなことを考へた爲にとりあへずペンを走らせることにした。

二十四　代作の辯護

「古代の畫家は少からず傑出した弟子を持つてゐる。が、近代の畫家は持つてゐない。それは彼等の金の爲に、或は高遠な理想の爲に弟子を教へる爲である。古代の畫家の弟子を教へたのは代作をさせるつもりだつた。從つて彼等の技巧上の祕密も悉く弟子に傳へたのである。弟子の傑出したのも不思議ではない。」――から云ふサミュエル・バットラアの言葉は一面には眞實を語つてゐる。天賦の才はその爲にばかり勿論生まれて來るものではない。しかし又その爲に促されることも多いであらう。僕はこの頃フロオベエルのモオパスサンを教へるのにどの位深切を盡したかを知つた。(彼はモオパスサンの原稿を讀んでやる時、連續した二つの文章の同じ構造であるのさへやかましく言つた。)しかしそれは何びとにも望むことの出來るものではない。(弟子に才能のある場合にしても)

今日の日本は藝術さへ大量生産を要求してゐる。のみならず作家自身にしても、大量生産をしない限り、衣食することも容易ではない。しかし量的向上は大抵質的低下である。すると古人の

行つたやうに弟子に代作させることも或は幾多の才人を生ずることになるかも知れない。封建時代の戯作者は勿論、明治時代の新聞小説家も全然この便法を用ひなかつたのではなかつた。美術家は、——たとへばロダンはやはり部分的には彼の作品を弟子に作らせてゐたのである。

かう云ふ傳統を持つた代作は或は今後は行はれるかも知れない。のみならずそれは必しも一時代の藝術を俗惡にするとも限らないのである。弟子はテクニイクを修めた後、勿論獨立しても差支ない。が、或は二代目、三代目と襲名することも出來るであらう。

僕はまだ不幸にも代作して貰ふ機會を持つてゐない。が、他人の作品を代作出來る自信は持つてゐる。唯一つむづかしいことには他人の作品を代作するのは自作するよりも手間どるに違ひない。

二十五　川柳

「川柳」は日本の諷刺詩である。しかし「川柳」の輕視せられるのは何も諷刺詩である爲ではない。寧ろ「川柳」と云ふ名前の餘りに江戸趣味を帶びてゐる爲に何か文藝と云ふよりも他のものに見られる爲である。古い川柳の發句に近いことは或は誰も知つてゐるかも知れない。のみならず發句も一面には川柳に近いものを含んでゐる。その最も著しい例は「鶉衣」(？)の初板にある横井也有

の連句であらう。あの連句はポルノグラフイツクな川柳集――「末摘花」と選ぶ所はない。

　　安どもらひの蓮のあけぼの

かう云ふ川柳の發句に近いことは誰でも認めずにゐられないであらう。(蓮は勿論造花の蓮である。)のみならず後代の川柳も全部俗惡と云ふことは出來ない。それ等も亦封建時代の町人の心を――彼等の歡びや悲しみを諧謔の中に現してゐる。若しそれ等を俗惡と云ふならば、現世の小說や戲曲も亦同樣に俗惡と云はなければならぬ。

小島政二郎氏は前に川柳の中の官能的描寫を指摘した。後代は或は川柳の中の社會的苦悶を指摘するかも知れない。僕は川柳には門外漢である。が、川柳も抒情詩や敍事詩のやうにいつかフアウストの前を通るであらう、尤も江戸傳來の夏羽織か何かひつかけながら。

　　心より詩人わが
　　喜ばむことを若知るや。
　　一人だに聞くことを
　　願はぬ詞を歌はしめよ。

二十六　詩形

お伽噺の王女は城の中に何年も靜かに眠つてゐる。短歌や俳句を除いた日本の詩形もやはりお伽噺の王女と變りはない。萬葉集の長歌は暫らく問はず、催馬樂も、平家物語も、謠曲も、淨瑠璃も韻文である。そこには必ず幾多の詩形が眠つてゐるのに違ひない。唯別行に書いただけでも、謠曲はおのづから今日の詩に近い形を現はすのである。そこには必ず僕等の言葉に必然な韻律のあることであらう。(今日の民謠と稱するものは少くとも大部分は詩形上都々逸と變りはない。)この眠つてゐる王女を見出すだけでも既に興味の多い仕事である。まして王女を目醒ませることをや。

尤も今日の詩は——更に古風な言葉を使へば、新體詩はおのづからかう云ふ道に歩みを運んでゐるかも知れない。又今日の感情を盛るのに昨日の詩形は役立たないであらう。しかし僕は過去の詩形を必ずしも踏襲しろと言ふのではない。唯それ等の詩形の中に何か命のあるものを感ずるのである。同時に又その何かを今よりも意識的に摑めと言ひたいのである。

僕等は皆どう云ふ點でも烈しい過渡時代に生を享けてゐる。從つて矛盾に矛盾を重ねてゐる。光は——少くとも日本では東よりも西から來るかも知れない。が、過去からも來る訣である。アポリネエルたちの連作體の詩は元祿時代の連句に近いものである。のみならず數等完成しないものである。この王女を目醒まさせることは勿論誰にも出來ることではない。が、一人のスウィン

バアンさへ出れば——と云ふよりも更に大力量の一人の「片歌の道守り」さへ出れば……

日本の過去の詩の中には緑いろのものが何か動いてゐる。何か互に響き合ふものが——僕はその何かを捉へることは勿論、その何かを生かすことも出來ないものの一人であらう。しかしその何かを感じてゐることは必ずしも人後に落ちないつもりである。こんなことは文藝上或は末の末のことかも知れない。唯僕はその何かに——ぼんやりした緑いろの何かに不思議にも心を惹かれるのである。

二十七　プロレタリア文藝

僕等は時代を超越することは出來ない。のみならず階級を超越することも出來ない。トルストイは女の話をする時には少しも猥褻を嫌はなかつた。それは又ゴルキイを辟易させるのに足るものだつた。ゴルキイはフランク・ハリスとの問答の中に「わたしはトルストイよりも禮儀を重んじてゐる。若しトルストイを學んだとしたらば、彼等はそれをわたしの素性の爲と——百姓育ちの爲と解釋するであらう」と正直に衷情を話してゐる。ハリスは又その言葉に「ゴルキイの未だに百姓であることはこの點に——即ち百姓育ちを羞ぢる點に露はれてゐる」と註してゐる。

中産階級の革命家を何人も生んでゐるのは確かである。彼等は理論や實行の上に彼等の思想を

表現した。が、彼等の魂は果して中產階級を超越してゐたであらうか？　ルツテルは羅馬加特力教に反逆した。しかも彼の仕事を妨げる惡魔の姿を目擊した。彼の理智は新しかつたであらう。しかし彼の魂はやはり羅馬加特力教の地獄を見ずにはゐられなかつたのである。これは宗教の上ばかりではない。社會制度の上でも同じことである。

僕等は僕等の魂に階級の刻印を打たれてゐる。のみならず僕等を拘束するものは必ずしも階級ばかりではない。地理的にも大は日本から小は一市一村に至る僕等の出生地も拘束してゐる。その他遺傳や境遇等も考へれば、僕等は僕等自身の複雜であることに驚嘆せずにはゐられないであらう。（しかも僕等を造つてゐるものはいづれも僕の意識の中に登つて來るとは限らないのである。）

カアル・マルクスは暫らく問はず、古來の女子參政權論者はいづれも良妻を作つてゐた。科學上の產物さへかう云ふ條件を示してゐるとすれば、藝術上の作品は――殊に文藝上の作品はあらゆる條件を示してゐる訣である。僕等はそれぞれ異つた天氣の下やそれぞれ異つた土の上に芽を出した草と變りはない。同時に又僕等の作品も無數の條件を具へた草の實である。若し神の目に見るとすれば、僕等の作品の一篇に僕等の全生涯を示してゐるのであらう。

プロレタリア文藝は――プロレタリア文藝とは何であらう？　勿論第一に考へられるのはプロ

レタリア文明の中に花を開いた文藝である。これは今日の日本にはない。それから次に考へられるものはプロレタリアの爲に闘ふ文藝である。これは日本にもないことはない。(若しスウイツルでも隣國だつたとすれば、或はもつと生まれたであらう。)第三に考へられるはコムミユニズムやアナアキズムの主義を持つてゐないにもせよ、プロレタリア的魂を根柢にした文藝である。第二のプロレタリア文藝は勿論第三のプロレタリア文藝と必ずしも兩立しないものではない。しかし若し多少でも新しい文藝を生ずるとすれば、それはこのプロレタリア的魂の生んだ文藝でなければならぬ。

僕は隅田川の川口に立ち、帆前船や達磨船の集まつたのを見ながら今更のやうに今日の日本に何の表現も受けてゐない「生活の詩」を感じずにはゐられなかつた。かう云ふ「生活の詩」をうたひ上げることはかう云ふ生活者を待たなければならぬ。少くともかう云ふ生活者にずつと同伴してゐなければならぬ筈である。コムミユニズムやアナアキズムの思想を作品の中に加へることは必ずしもむづかしいことではない。が、その作品の中に石炭のやうに黒光りのする詩的莊嚴を與へるものは畢竟プロレタリア的魂だけである。年少で死んだフイリツプは正にかう云ふ魂の持ち主だつた。

フロオベエルは「マダム・ボヴアリイ」にブウルジヨアの悲劇を描き盡した。しかしブウルジヨ

アに對するフロオベエルの輕蔑は「マダム・ボヴアリイ」を不滅にしない。「マダム・ボヴアリイ」を不滅にするものは唯フロオベエルの手腕だけである。フイリツプはプロレタリア的魂の外にも鍛へこんだ手腕を具へてゐる。するとどう云ふ藝術家も完成を目ざして進まなければならぬ。あらゆる完成した作品は方解石のやうに結晶したまま、僕等の子孫の遺産になるのである。たとひ風化作用を受けるにしても。

二十八　國木田獨歩

國木田獨歩は才人だつた。彼の上に與へられる「無器用」と云ふ言葉は當つてゐない。獨歩の作品はどれをとつて見ても、決して無器用に出來上つてゐない。「正直者」、「巡査」、「竹の木戸」、「非凡なる凡人」……いづれも器用に出來上つてゐる。若し彼を無器用と云ふならば、フイリツプも亦無器用であらう。

しかし獨歩の「無器用」と云はれたのは全然理由のなかつた訣ではない。彼は所謂戲曲的に發展する話を書かなかつた。のみならず長ながとも書かなかつた。（勿論どちらも出來なかつたのである。）彼の受けた「無器用」の言葉はおのづからそこに生じたのであらう。が、彼の天才は或は彼の天才の一部は實にそこに存してゐた。

獨歩は鋭い頭腦を持つてゐた。同時に又柔かい心臓を持つてゐた。しかもそれ等は獨歩の中に不幸にも調和を失つてゐた。從つて彼は悲劇的だつた。二葉亭四迷や石川啄木も、かう云ふ悲劇中の人物である。尤も二葉亭四迷は彼等よりも柔かい心臓を持つてゐなかつた。(或は彼等より逞しい實行力を具へてゐた。)彼の悲劇はその爲に彼等よりもはるかに靜かだつた。二葉亭四迷の全生涯は或はこの悲劇的でない悲劇の中にあるかも知れない。……

しかし更に獨歩を見れば、彼は鋭い頭腦の爲に地上を見ずにはゐられないながら、やはり柔かい心臓の爲に天上を見ずにもゐられなかつた。前者は彼の作品の中に「正直者」「竹の木戸」等の短篇を生じ、後者は「非凡なる凡人」「少年の悲哀」「畫の悲しみ」等の短篇を生じた。自然主義者も人道主義者も獨歩を愛したのは偶然ではない。

柔い心臓を持つてゐた獨歩は勿論おのづから詩人だつた。(と云ふ意味は必しも詩を書いてゐたと云ふことではない。)しかも島崎藤村氏や田山花袋氏と異る詩人だつた。大河に近い田山氏の詩は彼の中に求められない。同時に又お花畠に似た島崎氏の詩も彼の中に求められない。彼の詩はもつと切迫してゐる。獨歩は彼の詩の一篇の通り、いつも「高峯の雲よ」と呼びかけてゐた。年少時代の獨歩の愛讀書の一つはカアライルの「英雄論」だつたと云ふことである。カアライルの歴史觀も或は彼を動かしたかも知れない。が、更に自然なのはカアライルの詩的精神に觸れたこと

である。

けれども彼は前にも言つたやうな鋭い頭腦の持ち主だつた。「山林に自由存す」の詩は「武藏野」の小品に變らざるを得ない。「武藏野」はその名前通り、確かに平原に違ひなかつた。しかしまたその雜木林は山々を透かしてゐるのに違ひなかつた。德富蘆花氏の「自然と人生」は「武藏野」と好對照を示すものであらう。自然を寫生してゐることはどちらも等しいのに違ひない。が、後者は前者よりも沈痛な色彩を帶びてゐる。のみならず廣いロシアを含んだ東洋的傳統の古色を帶びてゐる。逆說的な運命はこの古色のある爲に「武藏野」を一層新らしくした。(幾多の人びとは獨步の拓いた「武藏野」の道を步いて行つたであらう。が、僕の覺えてゐるのは吉江孤雁氏一人だけである。當時の吉江氏の小品集は現世の「本の洪水」の中に姿を失つてしまつたらしい。が、何か梨の花に近い、ナイイヴな美しさに富んだものである。)

獨步は地上に足をおろした。それから――あらゆる人々のやうに野蠻な人生と向ひ合つた。しかし彼の中の詩人はいつまでたつても詩人だつた。鋭い頭腦は死に瀕した彼に「病牀錄」を作らせてゐる。が、かう云ふ彼は一面には「沙漠の雨」(?)と云ふ散文詩を作つてゐた。

若し獨步の作品中、最も完成したものを擧げるとすれば、「正直者」や「竹の木戶」にとどまるであらう。が、それ等の作品は必しも詩人兼小說家だつた獨步の全部を示してゐない。僕は最も調

和のとれた獨步を——或は最も幸福だつた獨步を「鹿狩り」等の小品に見出してゐる。（中村星湖氏の初期の作品はかう云ふ獨步の作品に近いものだつた。）自然主義の作家たちは皆精進して步いて行つた。が、唯一人獨步だけは時々空中へ舞ひ上つてゐる。……

二十九　再び谷崎潤一郎氏に答ふ

僕は谷崎潤一郎氏の「饒舌錄」を讀み、もう一度この文章を作る氣になつた。勿論僕の志も谷崎君にばかり答へるつもりではない。しかし私心を挾まずに議論を鬪はすことの出來る相手は滅多に世間にゐないものである。僕はその隨一人を谷崎潤一郎氏に發見した。これは或は谷崎氏は難有迷惑であると云ふかも知れない。けれども若し點心並みに僕の議論を聞いて貰へれば、それだけでも僕は滿足するのである。

不滅なるものは藝術ばかりではない。僕等の藝術論も亦不滅である。僕等はいつまでも藝術とは？云々のことを論じてゐるであらう。かう云ふ考へは僕のペンを鈍らせることは確かである。けれども僕の立ち場を明らかにする爲に暫く想念のピンポンを弄ぶとすれば、——

(1)　僕は或は谷崎氏の言ふやうに左顧右眄してゐるかも知れない。いや、恐らくはしてゐるで

あらう。僕は如何なる惡緣か、驀地に突進する勇氣を缺いてゐる。しかも稀にこの勇氣を得れば、大抵何ごとにも失敗してゐる。「話」らしい話のない小說などと言ひ出したのも或はこの一例かも知れない。しかし僕は谷崎氏も引用したやうに「純粹であるか否かの一點に依つて藝術家の價値は極まる」と言つたのである。これは勿論「話」らしい話のない小說を最上のものとは思つてゐない云々の言葉とは矛盾しない。僕は小說や戲曲の中にどの位純粹な藝術家の面目のあるかを見ようとするのである。(「話」らしい話を持つてゐない小說——たとへば日本の寫生文脈の小說はいづれも純粹な藝術家の面目を示してゐるとは限つてゐない。)「詩的精神云々の意味がよく分らない」と言つた谷崎氏に對する答はこの數行に足りてゐる筈である。

(2) 谷崎氏の所謂「構成する力」は僕にも理解出來たやうに感じてゐる。僕も亦日本の文藝に——殊に現世の文藝にかう云ふ力の缺けてゐることを必しも否むものではない。しかし若し谷崎君の言ふやうにかう云ふ力の現れるのは必しも長篇に限らないとすれば、前に僕の擧げた諸作家もやはりかう云ふ力を持ち合せてゐる。尤もこれは比較的な問題であるから、或標準の上に立つて有無を論じても仕かたはないであらう。なほ又僕の志賀直哉氏に及ばないのを「肉體的力量の感じの有無にある」と云ふのは全然僕には贊成出來ない。谷崎氏は僕自身よりも更に僕を買ひ冠つてゐる。「僕等は僕等自身の短所を語るものではない。僕等自身語らずとも他人は必ず語つてく

れるものである。」――メリメエは彼の書簡集の中にかう云ふ老外交家の言葉を引用した。僕も亦この言葉を少くとも部分的に守るつもりである。

(3) 「ゲエテの偉いのはスケールが大きくて猶且純粹性を失はないところにある」と言ふ谷崎氏の言葉は中つてゐる。これは僕にも異存はない。しかし雜駁である大詩人はあつても、純粹でない大詩人はない。從つて大詩人を大詩人たらしめるものは、――少くとも後代に大詩人の名を與へしめるものは雜駁であることに歸着してゐる。谷崎氏は「雜駁な」と云ふ言葉を下品に感じてゐるのであらう。それは僕等の趣味の相違である。僕はゲエテに「雜駁な」と云ふ言葉を與へた。しかしそこには必しも「騷々しい感じ」を含んでゐない。若し谷崎氏の語彙に從ふとすれば、「包容力の大きい」と云ふ言葉と同意味にしても善いのである。唯この「包容力の大きい」と云ふことは古來の詩人を評價する上に餘り重大視されてゐはしないであらうか？　ボオドレエルやラムボオを大詩人とする一群はユウゴオの上に圓光をかけない。僕は彼等の心もちに少からず同情してゐる。（元來ゲエテは僕等の嫉妬を煽動する力を具へてゐる。同時代の天才に嫉妬を示さない詩人たちさへゲエテに鬱憤を洩らしてゐるのは少くない。しかし僕は不幸にも嫉妬を示す勇氣もないものである。ゲエテは傳記の教へる所によれば、原稿料や印税の外にも年金や仕送りを貰つてゐた。彼の天才は暫く問はず、その又天才を助長した境遇や教育も暫く問はず、最後に彼のエネルギイ

を生んだ肉體的健康も暫く問はず、これだけでも羨しいと思ふものは恐らくは僕一人に限らないであらう。)

(4) これは谷崎氏に答へるのではない。僕等二人の議論の相違は「おのおの體質の相違になりはしないか」と云ふ谷崎氏の言葉に對し、ちよつと感慨を洩らしたいのである。谷崎氏の愛する紫式部は彼女の日記の一節に「清少納言こそ、したり顔にいみじう侍りける人。さばかり賢しだち、まなかきちらして侍るほども、よく見れば、まだいと堪へぬことおほかり。かく人にことならんと思ひ好める人は、かならず見おとりし、行く末うたてのみ侍れば、……もののあはれにすすみ、をかしきことも見すぐさぬほどに、おのづからさるまじく、あだなるさまにもなるに侍るべし。そのあだになりぬる人のはて、いかでかはよく侍らん」と云ふ言葉を殘した。僕は男根隆々たる淸家の少女を以て任ずるものではない。けれどもこの文章を讀み、(紫式部の科學的教養は體質の相違に言及するほど進步してゐなかつたにしろ)はるかに僕を戒めてゐる谷崎氏を感じずにはゐられなかつた。今再び谷崎氏に答へるのに當り、かう云ふ感慨を洩らすのは議論の是非を暫く問はず、「饒舌錄」の文章のリズムの堂々としてゐる爲ばかりではない。往年深夜の自動車の中に僕の爲に藝術を說いた谷崎潤一郎氏を思ひ出したからである。

三十　「野性の呼び聲」

僕は前に光風會に出たゴオガンの「タイチの女」(?)を見た時、何か僕を反撥するものを感じた。裝飾的な背景の前にどつしりと立つてゐる橙色の女は視覺的に野蠻人の皮膚の匂を放つてゐた。それだけでも多少辟易した上、裝飾的な背景と調和しないことにも不快を感じずにはゐられなかつた。美術院の展覽會に出た二枚のルノアルはいづれもこのゴオガンに勝つてゐる。殊に小さい裸女の畫などはどの位シヤルマンに出來上つてゐたであらう。――僕はその時はかう思つてゐた。が、年月の流れるのにつれ、あのゴオガンの橙色の女はだんだん僕を威壓し出した。それは實際タイチの女に見こまれたのに近い威力である。しかもやはりフランスの女も僕には魅力を失つたのではない。若し畫面の美しさを云々するとすれば、僕は未にタイチの女よりもフランスの女を採りたいと思つてゐる。……

僕はかう云ふ矛盾に似たものを文藝の中にも感じてゐる。更に又諸家の文藝評論の中にもタイチ派とフランス派とのあるのを感じてゐる。ゴオガンは、――少くとも僕の見たゴオガンは橙色の女の中に人間獸の一匹を表現してゐた。しかも寫實派の畫家たちよりも更に痛切に表現してゐた。或文藝批評家は――たとへば正宗白鳥氏は大抵この人間獸の一匹を表現したかどうかを尺

度にしてゐる。が、或文藝批評家は、——たとへば谷崎潤一郎氏は大抵人間獸の一匹よりも人間獸の一匹を含んだ畫面の美しさを尺度にしてゐる。(尤も諸家の文藝評論の尺度は必しもこの二者に限つてゐない。實踐道德的尺度もあれば、社會道德的尺度もあることは確かである。しかし僕はそれ等の尺度に餘り興味を持つてゐない。のみならず持つてゐないことも不思議ではないと信じてゐる。)勿論タイチ派は必しもフランス派と兩立しないものではない。兩者の差別はこの地上に生じた、あらゆる差別のやうに朦朧としてゐる。が、暫く兩端を擧げれば、兩者の差別のあることだけは兎に角一應は認めなければならぬ。

所謂ゲエテ・クロオチエ・スピンガアン商會の美學によれば、この差別も「表現」の一語に霧のやうに消えてしまふであらう。しかし或作品を仕上げる上には度たび僕等を、——或は僕を岐路に立たせることは事實である。古典的作家は巧妙にもこの岐路を一度に歩いて行つた。彼等に僕等群小の徒の及ぶことの出來ないのは恐らくはそこにあるのであらう。ルノアルは、——少くとも僕の見たルノアルはかう云ふ點ではゴオガンよりも古典的作家に近いのかも知れない。けれども橙色の人間獸の牝は何か僕を引き寄せようとしてゐる。かう云ふ「野性の呼び聲」を僕等の中に感ずるものは僕一人に限つてゐるのであらうか？

僕は僕と同時代に生まれた、あらゆる造形美術の愛好者のやうにまづあの沈痛な力に滿ちたゴ

オグに傾倒した一人だつた。が、いつか優美を極めたルノアルに興味を感じ出した。それは或は僕の中にある都會人の仕業だつたかも知れない。同時に又ルノアルを輕蔑する當時の愛好者の傾向につむじを曲げたこともない訣ではなかつた。けれども十年あまりたつて見ると、——立派に完成したルノアルは未だに僕を打たない訣ではない。しかしゴオグの糸杉や太陽はもう一度僕を誘惑するのである。それは橙色の女の誘惑とは或は異つてゐるかも知れない。が、何か切迫したものに言はば藝術的食慾を刺戟されるのは同じことである。何か僕等の魂の底から必死に表現を求めてゐるものに。——

しかも僕はルノアルに戀々の情を持つてゐるやうに文藝上の作品にも優美なものを愛してゐる「エピキユウルの園」を歩いたものは容易にその魅力を忘れることは出來ない。殊に僕等都會人はその點では誰よりも弱いのである。プロレタリア文藝の呼び聲も勿論僕を動かさないのではない。が、それよりもこの問題は根本的に僕を動かすのである。純一無雜になることは誰にも恐らくは困難であらう。しかし兎に角外見上でも僕の知つてゐる作家たちの中にはこの境涯にゐる人もない訣ではない。僕はいつもかう云ふ人々に多少の羨望を感じてゐる。……

……僕は誰かの貼つた貼り札によれば、所謂「藝術派」の一人になつてゐる。（かう云ふ名稱の存在するのは、同時に又かう云ふ名稱を生んだ或雰圍氣の存在するのは世界中に日本だけであらう。）僕

の作品を作つてゐるのは僕自身の人格を完成する爲に作つてゐるのではない。況や現世の社會組織を一新する爲に作つてゐるのではない。唯僕の中の詩人を完成する爲に作つてゐるのである。或は詩人兼ジヤアナリストを完成する爲に作つてゐるのである。從つて「野性の呼び聲」も僕には等閑に附することは出來ない。

或友人は森先生の詩歌に不滿を洩らした僕の文章を讀み、僕は感情的に森先生に刻薄であると云ふ非難を下した。僕は少くとも意識的には森先生に敵意などは持つてゐない。いや、寧ろ森先生に心服してゐる一人であらう。しかし僕の森先生にも羨望を感じてゐることは確かである。森先生は馬車馬のやうに正面だけ見てゐた作家ではない。しかも意力そのもののやうに一度も左顧右眄したことはなかつた。「タイイス」の中のパフヌシュは神に祈らずに人の子だつたナザレの基督に祈つてゐる。僕のいつも森先生に近づき難い心もちを持つてゐるのは或はかう云ふパフヌシュに近い歎息を感じてゐる爲であらう。

三十一 「西洋の呼び聲」

僕はゴオガンの橙色の女に「野性の呼び聲」を感じてゐる。しかし又ルドンの「若き佛陀」(土田麥僊氏所藏?)に「西洋の呼び聲」を感じてゐる。この「西洋の呼び聲」もやはり僕を動かさずには

措かない。谷崎潤一郎氏も谷崎氏自身の中に東西兩洋の相剋を感じてゐる。しかし僕の「西洋の呼び聲」と云ふのは或は谷崎氏の「西洋の呼び聲」とは多少異つてゐるかも知れない。僕はその爲に僕の感じる「西洋」のことを書いて見ることにした。

「西洋」の僕に呼びかけるのはいつも造形美術の中からである。文藝上の作品は――殊に散文は存外この點では痛切ではない。それは一つには僕等人間は人間獸であることに東西の差別の少ない爲であらう。（最も手近な例を引けば、某醫學博士の或少女を凌辱したのは全然神父セルジウスの百姓の娘に對したのと異らない男性の心理である。）それから又僕等の語學的素養は文藝上の作品の美を捉へる爲には餘りに不完全である爲であらう。僕等は、――少くとも僕は紅毛人の書いた詩文の意味だけは理解出來ないことはない。が、僕等の祖先の書いた詩文――たとへば凡兆の「木の股のあでやかなりし柳かな」に對するほど、一字一音の末に到るまで舌舐めずりをすることは出來ないのである。西洋の僕に呼びかけるのに造形美術を通してゐるのは必しも偶然ではないかも知れない。

この「西洋」の底に根を張つてゐるものはいつも不可思議なギリシアである。水の冷暖は古人も言つたやうに飲んで自知する外に仕かたはない。不可思議なギリシアも亦同じことである。僕は最も手短かにギリシアを說明するとすれば、日本にもあるギリシア陶器の幾つかを見ることを勸

めるであらう。或は又ギリシア彫刻の寫眞を見ることを勸めるであらう。それ等の作品の美しさはギリシアの神々の美しさである。或は飽くまでも官能的な、――言はば肉感的な美しさの中に何か超自然と言ふ外はない魅力を含んだ美しさである。この石に滲みこんだ麝香か何かの匂のやうに得體の知れない美しさは詩の中にもやはりないことはない。僕はポオル・ヴァレリを讀んだ時、(紅毛の批評家は何と言ふか知れない。)ボオドレエルの昔からいつも僕を動かしてゐたかう云ふ美しさに邂逅した。しかし最も直接に僕にこのギリシアを感じさせたのは前に擧げた一枚のルドンである。……

ギリシア主義とヘブライ主義との思想上の對立はいろいろの議論を生じてゐる。が、僕はそれ等の議論には餘り興味を持つてゐない。唯街頭の演說に耳を傾けるやうに聞いてゐるだけである。しかしこのギリシア的な美しさはかう云ふ問題に門外漢の僕にも「恐しい」と言つても差支へない。僕はここにだけ――このギリシアにだけ僕等の東洋に對立する「西洋の呼び聲」を感じるのである。貴族はブウルヂョアに席を讓つたであらう。ブウルヂョアも亦プロレタリアに早晩席を讓るであらう。けれども西洋の存する限り、不可思議なギリシアは必ず僕等を、――或は僕等の子孫たちを引き寄せようとするのに違ひない。

僕はこの文章を書いてゐるうちに古代の日本に渡つて來たアッシリアの竪琴を思ひ出した。大

いなる印度は僕等の東洋を西洋と握手させるかも知れない。しかしそれは未來のことである。西洋は——最も西洋的なギリシアは現在では東洋と握手してゐない。ハイネは「流謫の神々」の中に十字架に逐はれたギリシアの神々の西洋の片田舍に住んでゐることを書いた。けれどもそれは片田舍にもしろ、兎に角西洋だつたからである。彼等は僕等の東洋には一刻も住んではゐられなかつたであらう。西洋はたとひヘブライ主義の洗禮を受けた後にもしろ、何か僕等の東洋と異つた血脈を持つてゐる。その最も著しい例は或はポルノグラフィイにあるかも知れない。彼等は肉感そのものさへ僕等と趣を異にしてゐる。

或人々は千九百十四五年に死んだドイツの表現主義の中に彼等の西洋を見出してゐる。それから又或人々は——レムブラントやバルザツクの中に彼等の西洋を見出してゐる人々も勿論多いことであらう。現に秦豐吉氏などはロココ時代の藝術に秦氏の西洋を見出してゐる。僕はかう云ふ種々の西洋を西洋ではないと言ふのではない。しかしそれ等の西洋のかげにいつも目を醒ましてゐる一羽の不死鳥——不可思議なギリシアを恐れてゐるのである。恐れてゐる？——或は恐れてゐるのではないかも知れない。けれども妙に抵抗しながら、やはりじりじりと引き寄せられる動物的磁氣に近いものを感じない訣には行かないのである。

僕は若し目をつぶれるとすれば、かう云ふ「西洋の呼び聲」には目をつぶりたいと思つてゐる。

しかし目をつぶることは必しも僕の自由にはならない。僕はつい四五日前の夜に室生犀星氏や何かと一しよに久しぶりにパイプを啣へながら、若い人たちと話してゐる中に十年餘りも忘れてゐたボオドレエルの一行を思ひ出した。(それは僕には實驗心理的にも興味のある事實だつたのに違ひない。)それから不可思議な莊嚴に滿ちた一枚のルドンを思ひ出した。

　この「西洋の呼び聲」もやはり「野性の呼び聲」のやうに僕をどこかへつれて行かうとしてゐる。アポロに對するディオニソスに彼の偶像を發見した「ツアラトストラ」の詩人は幸福だつた。現世の日本に生まれ合せた僕は文藝的にも僕自身の中に無數の分裂を感ぜざるを得ない。それも或は僕一人に、——何ごとにも影響を受け易い僕一人に限つてゐることであらうか？　僕はこの不可思議なギリシアこそ最も西洋的な文藝上の作品を僕等の日本語に飜譯することを遮げてゐるのではないかと思つてゐる。或は僕等日本人の正確に理解することさへ(語學上の障害は暫らく問はず)遮げてゐるのではないかと思つてゐる。一枚のルドンは、——いや、いつかフランス美術展覽會に出てゐたモロオの「サロメ」(？)さへかう云ふ點では僕に東西を切り離した大海を想はせずには措かなかつた。この問題を逆にすれば、紅毛人の漢詩を理解しないのも當然であると言はなければならぬ。僕は大英博物館に一人の東洋學者のゐることを聞き囓つてゐる。しかし彼の漢詩の英譯は少くとも僕等日本人には原作の醍醐味を傳へてゐない。のみならず彼の漢詩論も盛唐を

貶して漢魏を揚げたのは前人の說を破つてゐるにもせよ、やはり僕等日本人には容易に首肯することは出來ないのである。ピカソは黑んぼの藝術に新らしい美しさを發見した。けれども彼等の東洋的藝術に――たとへば大愚良寛の書に新らしい美しさを發見するのはいつであらう。

三十二　批評時代

批評や隨筆の流行は卽ち創作の振はない半面を示したものである。――これは僕の議論ではない。佐藤春夫氏の議論である。(「中央公論」五月號所載)同時に又三宅幾三郎氏の議論である。(「文藝時代」五月號所載)僕は偶然軌を一にした兩氏の議論に興味を感じた。兩氏の議論は中つてゐるであらう。今日の作家たちは佐藤氏の言ふやうに疲れてゐるのに違ひない。(尤も「僕は疲れてゐない」と主張する作家は例外である。)或は休みない制作の爲に、(世界に日本の文壇ほど濫作を强ひる所はない。)或は又身邊の雜事の爲に、或は又爭ひ難い年齡の爲に、或は又、――事情はいろいろ變つてゐるにしても、兎に角多少は疲れてゐるであらう。現に紅毛の作家たちの中にも晚年には批評のペンを執つて閑を潰したものも少くはなかつた。……

佐藤氏はこの批評時代に一層根本的なものに觸れることを必要であると力說してゐる。三宅氏の「第一義的の批評」を要求するのも恐らくは佐藤氏と大差ないであらう。僕も亦各人の批評のペ

ンにも血の滴ることを望んでゐる。何を批評上では第一義的とするか？——それは各人各說かも知れない。その又各人各說であることに所謂「眞の批評」の出現する事實上の困難はあるのかも知れない。しかし僕等は各人各說でも兎に角僕等の信條や疑問を叩きつける外はないのである。現に正宗白鳥氏は「文藝評論」や「ダンテに就いて」の中に立派にかう云ふ仕事をした。正宗氏の議論は批評的に多少の缺點を數へ得るかも知れない。しかし後代の人々はいつかラツサアレも言つたやうに、「我々の過失を咎めるよりも我々の情熱を諒とするであらう。」

三宅氏は又「批評をも全々（原）小說家の手に委ねておく事は、寧ろ文學の進步發展を澁滯させる恐れがある」と言つてゐる。僕はこの言葉を讀んだ時、「詩人は彼自身の中に批評家を持つてゐる。が、批評家は彼自身の中に詩人を持つてゐるとは限らない」と云ふボオドレエルの言葉だつた。實際詩人は彼自身の中に批評家を持つてゐるのに違ひない。が、その批評家は彼の批評を「批評」と云ふ文藝上の或形式に完成する力を持つてゐるかどうか？——それは又おのづから別問題である。三宅氏の所謂「眞の批評家」の出現することを望むものは必しも僕ばかりに限らないであらう。

唯日本のパルナスは或因襲に捉はれてゐる。たとへば詩人室生犀星氏の小說や戲曲を作る時にはそれ等は決して餘技ではない。しかし小說家佐藤春夫氏の時々詩を作る時にはそれは不思議に

も餘技である。(僕はいつか佐藤氏自身の「僕の詩は決して餘技ではない」と憤慨してゐたのを覺えてゐる。)若し「小說家萬能」の言葉に相當する事實を數へるとすれば、これこそ正にその一つであらう。小說家兼批評家の場合もやはりこの事實と同じことである。僕は「鷗外全集」第三卷を讀み、批評家鷗外先生の當時の「專門的批評家」を如何に凌駕してゐるかを知つた。同時に又かう云ふ批評家のない時代の如何に寂しいものであるかを知つた。若し明治時代の批評家を數へるとすれば、僕は森先生や夏目先生と一しよに子規居士を數へたいと思つてゐる。東京の惡戲つ兒齋藤綠雨は右に森先生の西洋の學を借り、左に幸田先生の和漢の學を借りたものの、畢に批評家の域にはいつてゐない。(しかし僕は隨筆以外に何も完成しなかつた齋藤綠雨にいつも同情を感じてゐる。綠雨は少くとも文章家だつた。)けれどもそれは餘論である。……

批評家だつた森先生は自然主義の文藝の興つた明治時代の準備をした。(しかも逆說的な運命は自然主義の文藝の興つた時代には森先生を反自然主義者の一人にした。それは或は森先生の目はもつと遠い空を見てゐたからかも知れない。しかし兎に角明治二十年代にゾラやモオパスサンを云々した森先生さへ反自然主義者の一人になつたのは逆說的であると言はなければならぬ。)僕は若し當代も批評時代と呼ばれるとすれば、――三宅氏は「我々は來る可き日本文學の隆盛期に對して、殆ど絕望を感じないか」と言つてゐる。若し仕合せにもこの言葉は三宅氏一人の感慨だつ

たとすれば、――僕等はどの位安んじて新來の作家たちを待てるであらう。或は又どの位不安になつて新來の作家たちを待てるであらう。

所謂「眞の批評家」は籾を米から分つ爲に批評のペンを執るであらう。僕も亦時々僕自身の中にから云ふメシア的慾望を感じてゐる。しかし大抵は僕自身の爲に――僕自身を理智的に歌ひ上げる爲に書いてゐるのに過ぎない。批評も亦僕にはその點では殆ど小說を作つたり發句を作つたりするのと變らないのである。僕は佐藤、三宅兩氏の議論を讀み、僕の批評に序文をつける爲にとりあへずこの文章を艸することにした。

追記。僕はこの文章を書き終つた後、堀木克三氏の啓發を受け、宇野浩二氏の批評の名に「文藝的な、餘りに文藝的な」を使つてゐることを知つた。僕は故意に宇野氏の眞似をしたのでもなければ、なほ更プロレタリア文藝に對する共同戰線などにするつもりではない。唯文藝上の問題ばかりを論ずる爲に漫然とつけたばかりである。宇野氏も恐らくは僕の心もちを諒としてくれることであらう。

三十三　「新感覚派」

「新感覚派」の是非を論ずることは今は既に時代遲れかも知れない。が、僕は「新感覚派」の作家

たちの作品を讀み、その又作家たちの作品に對する批評家たちの批評を讀み、何か書いて見たい欲望を感じた。

少くとも詩歌は如何なる時代にも「新感覺派」の爲に進歩してゐる。「芭蕉は元祿時代の最大の新人だつた」と云ふ室生犀星氏の斷案は中つてゐるのに違ひない。芭蕉はいつも文藝的にはいやが上にも新人にならうと努力をしてゐた。小説や戯曲もそれ等の中に詩歌的要素を持つてゐる以上、——廣い意味の詩歌である以上、いつも「新感覺派」を待たなければならぬ。僕は北原白秋氏の如何に「新感覺派」だつたかを覺えてゐる。（「官能の解放」と云ふ言葉は當時の詩人たちの標語だつた。）同時に又谷崎潤一郎氏の如何に「新感覺派」だつたかを覺えてゐる。……

僕は今日の「新感覺派」の作家たちにも勿論興味を感じてゐる。「新感覺派」の作家たちは、——少くともその中の論客たちは僕の「新感覺派」に對する考へなどよりも新らしい理論を發表した。が、それは不幸にも十分に僕にはわからなかつた。唯「新感覺派」の作家たちの作品だけは、——それも僕にはわからないのかも知れない。僕等は作品を發表し出した頃、「新理智派」とか云ふ名を貰つた。（尤も僕等の僕等自身この名を使はなかつたのは確かである。）しかし「新感覺派」の作家たちの作品を見れば、僕等の作品よりも或意味では「新理智派」に近いと言はなければならぬ。では或意味とは何かと言へば、彼等の所謂感覺の理智の光を帶びてゐることである。僕は室生犀星

氏と一しよに碓氷山上の月を見た時、突然室生氏の妙義山を「生姜のやうだね」と云つたのを聞き、如何にも妙義山は一塊の根生姜にそつくりであることを發見した。この所謂感覺は理智の光を帶びてはゐない。が、彼等の所謂感覺は、――たとへば横光利一氏は僕の爲に藤澤桓夫氏の「馬は褐色の思想のやうに走つて行つた」(?)と云ふ言葉を引き、そこに彼等の所謂感覺の飛躍のあることを説明した。かう云ふ飛躍は僕にも亦全然わからない訣ではない。が、この一行は明らかに理智的な聯想の上に成り立つてゐる。彼等は彼等の所謂感覺の上にも理智の光を加へずには措かなかつた。彼等の近代的特色は或はそこにあるのであらう。けれども若し所謂感覺のそれ自身新しいことを目標とすれば、僕はやはり妙義山に一塊の根生姜を感じるのをより新しいとしなければならぬ。恐らくは江戸の昔からあつた一塊の根生姜を感じるのを。

「新感覺派」は勿論起らなければならぬ。それも亦あらゆる新事業のやうに(文藝上の)決して容易に出來るものではない。僕は「新感覺派」の作家たちの作品に、――と云ふよりも彼等の所謂「新感覺」に必しも敬服し難いことは前に書いた通りである。が、彼等の作品に對する批評家たちの批評も亦恐らくは苛酷に失してゐるであらう。「新感覺派」の作家たちは少くとも新らしい方向へ彼等の歩みを運んでゐる。それだけは何びとも認めなければならぬ。この努力を一笑してしまふのは單に今日「新感覺派」と呼ばれる作家たちに打撃を與へるばかりではない。彼等の今後の成長

の上にも、引いては彼等の後に來る「新感覺派」の作家たちのしつかりと目標を定める上にもやはり打撃を與へるであらう。それは勿論日本の文藝を伸び伸びと進歩させる所以ではあるまい。

しかし何と呼ばれるにもせよ、所謂「新感覺」を持つた作家たちは必ず今後も現れるであらう。僕はもう十年あまり前、確か久米正雄氏と一しよに「草土社」の展覽會を見物した後、久米氏の「この庭の檜の木を見ても『草土社』的に見えるのは不思議だよ」と感心してゐたことを覺えてゐる。「草土社」的に見えるのは正に十年あまり以前の所謂「新感覺」の爲に外ならなかつた。かう云ふ所謂「新感覺」を明日の作家たちに期待するのは必しも僕の早計ばかりではあるまい。

若し眞に文藝的に「新しいもの」を求めるとすれば、それは或はこの所謂「新感覺」の外にないかも知れない。(新しいことなどは何でもないと云ふ議論は勿論この問題の埒外にある訣である。)所謂「目的意識」を持つた文藝さへ「目的意識」そのものの新舊を暫く問はないとすれば、(たとひ新舊を問つたとしても、バアナアド・ショウの現れたのは千八百九十年代である。)實は大勢の前人の歩いて行つた道である。況や僕等の人生觀は、――恐らくは「いろは骨牌」の中に悉く數へ上げられてゐることであらう。のみならずそれ等の新舊は文藝的な――或は藝術的な新舊ではない。

僕は所謂「新感覺」の如何に同時代の人々に理解されないかを承知してゐる。たとへば佐藤春夫氏の「西班牙犬の家」は未だに新しさを失つてゐない。況や同人雜誌「星座」(?)に揭げられた頃は

どの位新しかつたことであらう。しかしこの作品の新しさは少しも文壇を動かさずにしまつた。僕は或はその爲に佐藤氏自身さへこの作品の新しさを――引いてはこの作品の價値を疑つてゐはしなかつたかと思つてゐる。かう云ふ事實は日本以外にも勿論未だに多いことであらう。しかし殊に甚しいのは僕等の日本ではないであらうか？

三十四　解嘲

僕は何度も繰り返して言ふやうに「筋のない小說」ばかり書けと言つてゐる訣ではない。從つて何も谷崎潤一郎氏と對蹠點に立つてゐる訣ではない。唯かう云ふ小說の價値も認めて貰ひたいと言つてゐるのである。若し全然認めない論者があるとすれば、その論者こそ眞に論敵である。僕は谷崎氏と議論を上下する上に誰にも僕の肩を持つて貰ひたくない。（同時に又谷崎氏の肩を持つて貰ひたくないことも勿論である。）僕等の議論の是非を辯ずるのでないことは僕等自身誰よりも知つてゐるつもりである。僕はこの頃雜誌の廣告などに僕の「筋のある小說」さへ「筋のない小說」と云ふ名をつけられてゐるのを見、俄かにこの文章を作ることにした。「筋のない小說」とはどう云ふものかも容易に理解しては貰はれないらしい。僕は僕の辯じられるだけは辯じた。又二三の僕の知人は正當に僕の說を理解してゐる。あとはもう勝手にしろと言ふ外はない。

三十五　ヒステリイ

僕はヒステリイの療法にその患者の思つてゐることを何でも彼でも書かせる――或は言はせると云ふことを聞き、少しも常談を交へずに文藝の誕生はヒステリイにも負つてゐるかも知れないと思ひ出した。虎頭燕頷の羅漢は暫く問はず、何びとも多少はヒステリックである。殊に詩人たちは餘人よりもはるかにヒステリックな傾向を持つてゐるであらう。このヒステリイは三千年來いつも彼等を苦しめつづけた。彼等の或ものはその爲に死し、又彼等の或ものはその爲にとうとう發狂してしまつたであらう。が、彼等はその爲に彼等の喜びや悲しみを一生懸命にうたひ上げた。――かうも決して考へられないことはない。

若し殉教者や革命家の中に或種のマゾヒストを數へ得られるとすれば、詩人たちの中にもヒステリイの患者は必しも少くはないであらう。「書かずにはゐられぬ心もち」は、即ち樹下の穴の中へ「王樣の耳は馬の耳」と叫んだ神話中の人物の心もちである。若しこの心もちがなかつたとしたならば、少くとも「痴人の告白」（ストリントベリイ）などは生まれなかつたのに違ひない。のみならずかう云ふヒステリイは往々一時代を風靡してゐる。「ウエルテル」や「ルネ」を生んだのもやはりこの時代的ヒステリイであらう。更に又全ヨオロツパを擧げて十字軍に加はらせたのも、――

しかしそれは「文藝的な、餘りに文藝的な」問題ではないかも知れない。癲癇は古來「神聖な病」と云ふ名を與へられてゐる。するとヒステリイもことによれば、「詩的な病」と呼ばれるであらう。ヒステリイを起してゐるシエクスピイアやゲエテを想像するのは滑稽である。從つてから云ふ想像をするのは彼等の大を傷けると思はれるかも知れない。が、彼等の大を成すものはこのヒステリイの外にある彼等の表現力そのものである。彼等の何度ヒステリイを起したかは心理學者には或は問題であらう。しかし僕等の問題は表現力そのものに存してゐる。僕はこの文章を作りながら、ふと太古の森の中に烈しいヒステリイを起してゐる無名の詩人を想像した。彼は彼の部落の人々の嘲笑の的になつたであらう。けれどもこのヒステリイの促進した彼の表現力の產物だけは丁度地下の泉のやうに何代も後に流れて行つたであらう。

僕はヒステリイを尊敬してゐるのではない。ヒステリツクになつたムツソリニは勿論國際的に危險である。けれども若し何びともヒステリイを起さなかつたとしたらば、僕等を喜ばせる文藝上の作品はどの位數を減じたであらう。僕は唯この爲にヒステリイを辯護したいと思つてゐる。いつか女人の特權になつた、――しかし事實上何びとにも多少の可能性のあるヒステリイを。

前世紀の末も文藝的には確かに時代的ヒステリイに陷つてゐた。ストリントベリイは「青い本」の中にこの時代的ヒステリイに「惡魔の所爲」の名を與へてゐる。惡魔の所爲か善神の所爲かは勿

論僕の知る所ではない。しかし兎に角詩人たちはいづれもヒステリイを起してゐた。現にビルコフの傳記によれば、あの逞しいトルストイさへ半狂亂になつて家出したのは、つい近頃の新聞に出てゐた或女人のヒステリイ患者と殆ど寸分も變つてゐない。

三十六　人生の從軍記者

僕は島崎藤村氏のみづから「人生の從軍記者」と呼んでゐたことを覺えてゐる。が、近頃又廣津和郎氏の同じ言葉を正宗白鳥氏にも加へてゐると云ふことを仄聞した。僕は兩氏の用ひられる「人生の從軍記者」と云ふ言葉をはつきり知つてゐない訣ではない。それは恐らくは近來の造語「生活者」に對する意味を持つてゐるのであらう。けれども若し嚴密に言へば、苟くも娑婆界に生まれたからは何びとも「人生の從軍記者」になることは出來ない。人生は僕等に嫌應なしに「生活者」たることを強ひるのである。嫌應なしに生存競爭を試みさせなければ措かないのである。或人びとは自ら進んで勝利を得ようとするであらう。それから又或人びとは冷笑や機智や詠嘆の中に防禦的態度をとるであらう。最後に或人びとはどちらも格別はつきりした意識を持たずに「世を渡る」であらう。しかしいづれも事實上はやむにやまれない「生活者」である。遺傳や境遇の支配を受けた人間喜劇の登場人物である。

彼等の或ものは勝ち誇るであらう。彼等の或ものは又敗北するであらう。但しどちらも壽命のある限りは、——僕等は皆ペエタアの言つたやうに確かに「いづれも皆執行猶豫中の死刑囚である」。この執行猶豫の間を何の爲に使ふかは僕等自身の自由である。自由である？——しかしそこにもどの位の自由のあるかは疑はしいであらう。僕等は實に種々雜多の因緣を背負つて生まれてゐる。その又種々雜多の因緣は必しも僕等自身さへ悉く意識するとは定まつてゐない。古人はとうにこの事實を Karma の一語に說明した。あらゆる近代の理想主義者たちは大抵このカルマに挑戰してゐる。しかし彼等の旗や槍は畢に彼等のエネルギイを示したのにとどまるばかりだつた。彼等のエネルギイを示すことはそれ自身勿論意味を持つてゐる。單に近代の理想主義者たちばかりではない。僕等はカアネギイのエネルギイにも力丈夫に感ずることは確かである。若し力丈夫に感じないとすれば、誰も實業家や政治家の立志譚は讀みたがりはしないであらう。しかしカルマはその爲に少しも脅威を失つたのではない。カアネギイのエネルギイを生んだものはカアネギイの背負つて來たカルマである。僕等は皆僕等のカルマの爲に頭を下げる外はないであらう。若し僕等に、——少くとも僕に「あきらめ」の天惠の下るとすれば、それは唯ここにだけある訣である。

僕等は皆多少の「生活者」である。從つて逞ましい「生活者」にはおのづから敬意を生ずるもので

ある。即ち僕等の永遠の偶像は戰鬪の神マルスに歸らざるを得ない。カアネギイは暫く問はず、ニイチエの「超人」も一皮剝いで見れば、實にこのマルスの轉身だつた。ニイチエのセザアル・ボルヂアにも讃嘆の聲を洩らしたのは偶然ではない。正宗白鳥氏は「光秀と紹巴」の中に「生活者」中の「生活者」だつた光秀に紹巴を嘲らせてゐる。(かう云ふ正宗白鳥氏の「人生の從軍記者」と呼ばれるのは正に逆説的であると云はなければならぬ。)これは一光秀の嘲笑ではない。僕等は何も考へずにいつもかう云ふ嘲笑を放つてゐるのである。

僕等の悲劇は、――或は喜劇はこの「人生の從軍記者」にとどまり難いことに潜んでゐる。しかも僕等「生活者」のカルマを背負つてゐることに潜んでゐる。けれども藝術は人生ではない。ヴィヨンは彼の抒情詩を殘す爲に「長い敗北」の一生を必要とした。敗るる者をして敗れしめよ。彼は社會的習慣即ち道德に背くかも知れない。或は又法律にも背くことであらう。況や社會的禮節には人一倍餘計に背く筈である。それ等の約束に背いた罰は勿論彼自身に背負はなければならぬ。社會主義者バアナアド・ショウは彼の「醫者のディレンマ」の中に不德義な天才を救ふよりも平凡な醫者を救ひ上げることにした。ショウの態度は少くとも合理的であると言はなければならぬ。僕等は博物館の硝子戸の中に剝製の鰐を見ることを愛してゐる。しかし一匹の鰐を救ふよりも一匹の驢馬を救ふことに全力を盡すのに不思議はない。動物愛護會も未だ嘗猛獸毒蛇を愛護するほ

ど寛大ではないのはこの爲であらう。が、それは人生に於ける、言はば Home Rule の問題である。もう一度ヴィヨンを例に引けば、彼は第一流の犯罪人だつたものの、やはり第一流の抒情詩人だつた。

或女人は「わたしの一家に天才のないことは仕合せです」と言つた。しかもその「天才」と云ふ言葉は少しも皮肉な意味を持つてゐなかつた。僕も亦僕の一家に天才のないことに安んじてゐる。（勿論僕のかう云ふのは天才の屬性に背德性を數へてゐる訣でも何でもない。）田園や市井の人々には古今の天才たちよりも「生活者」の美德を具へてゐるものも多いであらう。紅毛人は「人として」の名のもとに度たび古今の天才たちの中にも「生活者」の美德を數へてゐる。が、僕はこの新らしい偶像崇拜も信用してゐない。「藝術家として」のヴィヨンは暫く問はず、「藝術家として」のストリントベリイは僕等の愛讀に價してゐる。しかし「人として」のストリントベリイは、――恐らくは僕の尊敬する批評家XYZ君よりもはるかにつき合ひ惡いことであらう。從つて僕等の文藝上の問題はいつも畢に「この人を見よ」ではない。寧ろ「これ等の作品を見よ」である。尤も「これ等の作品を見よ」と言つても、何世紀かは大河のやうにこれ等の作品を見る前に流れ去つてしまふであらう。しかもその又何世紀かは或は一本の藁のやうにこれ等の作品を忘却の中へずんずん押し流してしまふであらう。若し藝術至上主義を信じないとすれば、（かう云ふ信仰を持つてゐ

ることは必ずしも食ふ爲に書いてゐることと矛盾しない。少くとも食ふ爲にばかり書いてゐない限りは。）詩を作るのは古人も言つたやうに田を作るのに越したことはない。

僕は島崎藤村氏は勿論、正宗白鳥氏も「人生の從軍記者」でないことを信じてゐる。如何に兩大家の才力を以てしても、古來一人もゐなかつたものに忽ちなつてしまふ道理はない。僕等は皆僕等の中に「光秀と紹巴」とを持ち合せてゐる。少くとも僕は僕自身に關することには多少の紹巴になる代りに僕以外の人々に關することには多少の光秀になる傾向を持ち合せてゐる。從つて僕の中の光秀は必しも僕の中の紹巴を嘲笑しない。けれども幾分か嘲笑したい心もちのあることは確かである。

三十七　古典

「選ばれたる少數」とは必しも最高の美を見ることの出來る少數かどうかは疑はしい。寧ろ或作品に現れた或作者の心もちに觸れることの出來る少數であらう。從つてどう云ふ作品も、――或は又どう云ふ作品の作者も「選ばれたる少數」以外に讀者を得ることの出來るものではない。が、それは「選ばれざる多數の讀者」を得ることと少しも矛盾してゐないのである。僕は「源氏物語」を褒める大勢の人々に遭遇した。が、實際讀んでゐるのは（理解し、享樂してゐるのを問はないに

もせよ)僕と交つてゐる小說家の中ではたつた二人、――谷崎潤一郎氏と明石敏夫氏とばかりだつた。すると古典と呼ばれるのは或は五千萬人中滅多に讀まれない作品かも知れない。

しかし萬葉集は源氏物語よりもはるかに大勢に讀まれてゐる。それは必しも萬葉集の源氏物語を抜いてゐる所以ではない。のみならず又兩者の間に散文と韻文と云ふ堀割りの横はつてゐる所以でもない。單に萬葉集中の作品は一つ一つとり離して見れば、源氏物語よりもずつと短いからである。元來東西の古典のうち、大勢の讀者を持つてゐるものは決して長いものではない。少くとも如何に長いにもせよ、事實上短いものの寄せ集めばかりである。ポオは詩の上にこの事實に依つた彼の原則を主張した。それからビイアス(Ambrose Bierce)は散文の上にもやはりこの事實に依つた彼の原則を主張した。僕等東洋人はかう云ふ點では理智よりも知慧に導かれ、おのづから彼等の先驅をなしてゐる。が、生憎彼等のやうに誰もかう云ふ事實に依つた理智的建築を築いたものはなかつた。若しこの建築を試みるとすれば、長篇源氏物語さへ少くとも聲價を失はない點では丁度善い材料を與へたであらう。(しかし東西兩洋の差はポオの詩論にも見えないことはない。彼は彼是百行の詩を丁度善い長さに數へてゐる。十七音の發句などは勿論彼には「エピグラム的」の名のもとに排斥されることであらう。)

あらゆる詩人の虛榮心は言明すると否とを問はず、後代に殘ることに執してゐる。いや、「あら

ゆる詩人の虛榮心は」ではない。「彼等の詩を發表した、あらゆる詩人の虛榮心は」である。一行の詩も作らずに彼自身の詩人であることを知つてゐる人々もないことはない。（彼等は大小は暫く問はず、彼等の詩的生涯の上に最も平和だつた詩人たちである。）しかし性格や境遇の爲に兎に角韻文か散文かの詩を作つてしまつた人々だけに詩人の名を與へるとすれば、あらゆる詩人たちの問題は恐らくは「何を書き加へたか」よりも「何を書き加へなかつたか」にある訣であらう。それは勿論原稿料による詩人たちの生活に不便である。若し不便であるとすれば、――封建時代の詩人、石川六樹園は同時に又宿屋の主人だつた。僕等も賣文と云ふことさへなければ、何か商賣を見つけるかも知れない。僕等の經驗や見聞もその爲に或は廣まるであらう。僕は時々賣文だけでは活計を立てることの出來なかつた昔に多少の羨しさを感じてゐる。しかしかう云ふ現世も亦後代には古典を殘してゐるであらう。勿論食ふ爲に書いたものも古典にならないと限つた訣ではない。（若し或作家の姿勢として見れば、唯「食ふ爲に書いてゐる」のは最も趣味の善い姿勢である。）唯アナトオル・フランスの言つたやうに後代へ飛んで行く爲には身輕であることを條件としてゐる。すると古典と呼ばれるものは或はどう云ふ人々にも容易に讀み通し易いものかも知れない。

三十八　通俗小說

所謂通俗小說とは詩的性格を持つた人々の生活を比較的に俗に書いたものであり、所謂藝術小說とは必しも詩的性格を持つてゐない人々の生活を比較的詩的に書いたものである。兩者の差別は誰でも言ふやうにはつきりしてゐないのに違ひない。けれども所謂通俗小說中の人々は確かに詩的性格の持ち主である。これは決して逆說ではない。若し逆說的であるとすれば、かう云ふ事實そのものの逆說的に出來てゐる爲である。唯何びとも青年時代には多少彼の性格の上に詩的陰影を落し易い。しかしそれは年をとるのにつれ、次第に失はれてしまふのである。(抒情詩人はこの點では實に永遠の少年である。)從つて所謂通俗小說中の人々は老人ほど滑稽に陷り易い。(但しこの所謂通俗小說は探偵小說や大衆文藝を含んでゐない。)

追記。この文章を草し終つた後、僕は新潮座談會に出席した爲に鶴見祐輔氏の啓發を受け、所謂通俗小說と紅毛人の所謂 Popular novel との差別を考へ出した。僕は所謂通俗小說論はポピユラア・ノヴェルには通用しない。ベンネツト(Arnold Bennett)は彼のポピユラア・ノヴェルに Fantasies の名を與へてゐる。それは事實上あり得ない世界を讀者の爲に廣げて見せるからであらう。かう云ふ意味は必しも幻怪の氣のあると云ふ意味ではない。唯人物なり事件なりの上に文藝的に眞の刻印を打つてゐない世界と云ふ意味であらう。

三十九　獨創

現世は明治大正の藝術上の總決算をしてゐる。なぜかは僕の知る所ではない。何の爲かも僕には不可解である。しかし現代日本文學全集と云ひ、明治大正文學全集と云ふ文藝上の總決算は勿論、明治大正名作展覽會も亦やはり繪畫上の總決算である。僕はこれ等の總決算を見、如何に獨創と云ふことの困難であるかと云ふことを感じた。古人の糟粕を嘗めないなどとは誰でも易々と放言し易い。が、彼等の仕事を見ると、(或は仕事を見てもかも知れない。)今更のやうに獨創と云ふことの手輕に出來ないのを感じるのである。

僕等はたとひ意識しないにもせよ、いつか前人の蹤を追つてゐる。僕等の獨創と呼ぶものは僅かに前人の蹤を脱したのに過ぎない。しかもほんの一歩位、――いや、一歩でも出てゐるとすれば、度たび一時代を震はせるのである。のみならず故意に叛逆すれば、愈前人の蹤を脱することは出來ない。僕は義理にも藝術上の叛逆に贊成したいと思ふ一人である。が、事實上叛逆者は決して珍らしいものではない。或は前人の蹤を追つたものよりも遙かに多いことであらう。彼等は成程叛逆した。しかし何に叛逆するかをはつきりと感じてゐなかつた。大抵彼等の叛逆は前人よりも前人の追從者に對する叛逆である。若し前人を感じてゐたとすれば、――彼等はそれでも

反叛したかも知れない。けれどもそこには必然に前人の蹤を殘してゐるであらう。傳説學者は海彼岸の傳説の中に多數の日本の傳説のプロトタイプを發見してゐる。藝術も亦穿鑿して見れば、やはり粉本に乏しくない。（僕は前にも言つたやうに必しも作家たちは彼等の粉本を用ひてゐないことを意識してゐなかつたことを信じてゐる。）藝術の進步も——或は變化も如何に大人物を待つたにもせよ、一足飛びには面目を改めないのである。

しかしこの遲い步みの中にも多少の變化を試みたものは僕等の尊敬に價してゐる。（菱田春草はこの一人だつた。）新時代の青年たちは獨創の力を信じてゐるであらう。僕はそのいやが上にも信じることを望んでゐる。多少の變化はそこ以外にどこにも生じて來るものではない。昔から世界には前人の造つた大きな花束が一つあつた。その花束へ一本の花を插し加へるだけでも大事業である。その爲には新らしい花束を造る位の意氣込みも必要であらう。この意氣込みは或は錯覺かも知れない。が、錯覺と笑つてしまへば、古來の藝術的天才たちもやはり錯覺を追つてゐたのであらう。

唯この意氣込みにもはつきりと錯覺を認めるものは不幸である。はつきりと錯覺を認めるものは？——しかし彼等も亦おのづから多少の錯覺を持つてゐるかも知れない。僕はかう云ふ問題には何とも言はれない一人である。けれども明治大正の藝術上の總決算を見、如何に獨創と云ふこ

との容易に出來ないかを感じずにはゐられなかつた。明治大正名作展覽會を觀た人々はいろいろの畫の可否を論じてゐる。しかし少くとも僕一人は可否を論じてゐる餘裕さへない。

四十　文藝上の極北

文藝上の極北は――或は最も文藝的な文藝は僕等を靜かにするだけである。僕等はそれ等の作品に接した時には恍惚となるより外に仕かたはない。文藝は――或は藝術はそこに恐しい魅力を持つてゐる。若しあらゆる人生の實行的側面を主とするとすれば、どう云ふ藝術も根柢には多少僕等を去勢する力を持つてゐるとも言はれるであらう。

ハイネはゲエテの詩の前に正直に頭を垂れてゐる。が、圓滿具足したゲエテの僕等を行動に驅りやらないことに滿腔の不平を洩らしてゐる。これは單にハイネの氣もちと手輕に見て通ることの出來るものではない。ハイネはこの「ドイツ・ロマン主義運動」の一節の中に藝術の母胎へ肉迫してゐる。あらゆる藝術は藝術的になるほど、僕等の情熱(實行的な)を靜まらせてしまふ。この力の支配を受けたが最後、容易にマルスの子になることは出來ない。そこに安住出來るものは――純一無雜の藝術家たちは勿論、阿呆たちもやはり幸福である。しかしハイネは不幸にもかう云ふ寂光土を得られなかつた。

僕はプロレタリアの戰士諸君の藝術を武器に選んでゐるのに可也興味を持つて眺めてゐる。諸君はいつもこの武器を自由自在に揮ふであらう。(勿論ハイネの下男ほども揮ふことの出來ないものは例外である。)しかし又この武器はいつの間にか諸君を靜かに立たせるかも知れない。ハイネはこの武器に抑へられながら、しかもこの武器を揮つた一人である。ハイネの無言の呻吟は或はそこに潛んでゐたであらう。僕はこの武器の力を僕の全身に感じてゐる。從つて諸君のこの武器を揮ふのも人ごとのやうには眺めてゐない。就中僕の尊敬してゐる一人はかう云ふ藝術の去勢力を忘れずにこの武器を揮つて貰ひたいと思つてゐた。が、それは仕合せにも僕の期待通りになつたやうである。

他人は或はかう云ふことも一笑に附してしまふであらう。それは僕も覺悟の前である。僕の見る所は淺いかも知れない。よし又淺くなかつたにしろ、十年前の經驗は一人の言葉の他人には容易にのみこまれないのを敎へてゐる。しかし僕は兎も角も人並みに努力をつづけながら、やつとこの藝術の去勢力の大きいことに氣づき出した。從つて唯これだけのことでも僕にはやはり一大事である。文藝の極北はハイネの言つたやうに古代の石人と變りはない。たとひ微笑は含んでゐても、いつも唯冷然として靜かである。

(昭和二年二月—七月)

續文藝的な、餘りに文藝的な

一　「死者生者」

「文章俱樂部」が大正時代の作品中、諸家の記憶に殘つたものを尋ねた時、僕も返事をしようと思つてゐるうちについその機會を失つてしまつた。僕の記憶に殘つてゐるものはまづ正宗白鳥氏の「死者生者」である。これは僕の「芋粥」と同じ月に發表された爲、特に深い印象を殘した。「芋粥」は「死者生者」ほど完成してゐない。唯幾分か新しかつただけである。が、「死者生者」は不評判だつた。「芋粥」は——「芋粥」の不評判だつたのは吹聽せずとも善い。「讀後感とでも云ふのかな。さう云ふものの深い短篇だね。」——僕は當時久米正雄君の「死者生者」を讀んだ後、かう言つたことを覺えてゐる。が、「文章俱樂部」の問に應じた諸家は誰も「死者生者」を擧げてゐなかつたらしい。しかも「芋粥」は幸か不幸か諸家の答への中にはいつてゐる。

この事實の證明する通り、世人は新らしいものに注目し易い。從つて新らしいものに手をつけさへすれば、兎に角作家にはなれるのである。しかしそれは必ずしも一爪痕を殘すことではない、

僕は未だに「死者生者」は「芋粥」などの比ではないと思つてゐる、のみならず又正宗氏自身も短篇作家としては、「死者生者」を書いた前後に最も藝術的ではなかつたかと思つてゐる。が、當時の正宗氏は必ずしも人氣はなかつたらしい。

二　時代

僕は時々かう考へてゐる。――僕の書いた文章はたとひ僕が生まれなかつたにしても、誰かきつと書いたに違ひない。從つて僕自身の作品よりも寧ろ一時代の土の上に生えた何本かの艸の一本である。すると僕自身の自慢にはならない。(現に彼等は彼等を待たなければ、書かれたかつた作品を書いてゐる。勿論そこに一時代は影を落してゐるにしても。)僕はかう考へる度に必ず妙にがつかりしてしまふ。

三　日本の文藝の特色

日本の文藝の特色、――何よりも讀者に親密(intime)であること。この特色の善惡は特に今は問題にしない。

四　アナトオル・フランス

Nicolas Ségur の「アナトオル・フランスとの對話」によれば、この微笑した懷疑主義者は實に徹底した厭世主義者である。かう云ふ一面は Paul Gsell の「アナトオル・フランスとの對話」(?)にも現はれてゐない。彼は「あなたの作中人物は皆微笑してゐるではないか?」といふ問に對し、野蠻にもかう返事をしてゐる。——「彼等は憐憫の爲に微笑してゐる。それは文藝上の技巧に過ぎない。」

このアナトオル・フランスの説によれば人生は唯意志する力と行爲する力との上に安定してゐる。しかも我々は意志する爲には一點に目を注がなければならぬ。それは何びとにも出來ることではない。殊に理智と感受性との呪ひを受けた我々には。

「エピキュウルの園」の思想家、ドレフイイユ事件のチャンピオン、「ペングインの島」の作家だつた彼もここでは面目を新たにしてゐる。尤も唯物主義的に解釋すれば、彼の頽齡や病なども或は彼の人生觀を暗いものにしてゐたかも知れない。しかしこれは彼の作品中、比較的等閑に附せられたものを、——或は事實上出來の惡いものを(たとへば「赤い卵」の如き)彼の一生の文藝的體系に結びつける綱を與へてゐる。病的な「赤い卵」なども彼には必然な作品だつたのであらう。僕は

この對話や書簡集から更に新らしい「アナトオル・フランス論」の書かれることを信じてゐる。

　このアナトオル・フランスは十字架を背負つた牧羊神である。尤も新時代は彼の中に唯前世紀から今世紀に渡る橋を見出すばかりかも知れない。が、世紀末に人となつた僕はやはりかう云ふ彼の中に有史以來の僕等を見出してゐる。

五　自然主義

　自然は僕等が一定の年齡に達した時、僕等に「春の目ざめ」を與へてゐる。それから僕等が餓ゑた時、烈しい食慾を與へてゐる。それから僕等が戰場に立つた時、彈丸を避ける本能を與へてゐる。それから何年か（或は何箇月か）同棲生活の後、その女人と交ることに對する嫌惡の情を與へてゐる。それから、……………

　しかし社會の命令は自然の命令と一致してゐない。のみならず屢反對してゐる。そればかりならば差支へない（？）。しかし僕等は僕等自身の中に自然の命令を否定する何か不思議なるものを持ち合せてゐる。從つてあらゆる自然主義者は理論上最左翼に立たなければならぬ。或は最左翼の向うにある暗黑の中に立たなければならぬ。

「地球の外へ！」と云ふボオドレエルの散文詩は決して机の上の產物ではない。

六　ハムズン

性慾の中に詩のあることは前人もとうに發見してゐた。が、食慾の中にも詩のあることはハムズンを待たなければならなかつたのである。何と云ふ僕等の間拔けさ加減！

七　語彙

「夜明け」と云ふ意味の「平明」はいつか「手のこまない」と云ふ意味に變り、「死んだ父」と云ふ意味の「先人」はいつか「古人」と云ふ意味に變つてゐる。僕自身も「姿」とか「形」とか云ふ意味に「ものごし」と云ふ言葉を使ひ、凄まじい火災の形容に「大紅蓮」と云ふ言葉を使つた。僕等の語彙はこの通り可也混亂を生じてゐる。「隨一人」と云ふ言葉などは誰も「第一人」と云ふ意味に使はないものはない。が、誰も皆間違つてしまへば、勿論間違ひは消滅するのである。從つてこの混亂を救ふ爲には、――一人殘らず間違つてしまへ。

八　コクトオの言葉

「藝術は科學の肉化したものである」と云ふコクトオの言葉は中つてゐる。尤も僕の解釋によれ

ば「科學の肉化したもの」と云ふ意味は「科學に肉をつけた」と云ふ意味ではない。科學に肉をつけることなどは職人でも容易に出來るであらう。藝術はおのづから血肉の中に科學を具へてゐる筈である。いろいろの科學者は藝術の中から彼等の科學を見つけるのに過ぎない。藝術の――或は直觀の尊さはそこに存してゐるのである。

僕はこのコクトオの言葉の新時代の藝術家たちに方向を錯らせることを惧れてゐる。あらゆる藝術上の傑作は「二二が四」に終つてゐるかも知れない。しかし決して「二二が四」から始まつてゐるとは限らないのである。僕は必ずしも科學的精神を抛つてしまへと云ふのではない。が、科學的精神は詩的精神を重んずる所に逆說的にも潛んでゐると云ふ事實だけを指摘したいのである。

九 「若し王者たりせば」

「我若し王者たりせば」と云ふ映畫によれば、あらゆる犯罪に通じてゐた抒情詩人フランソア・ヴィヨンは立派な愛國者に變じてゐる。それから又シヤロツト姫に對する純一無雜の戀人に變じてゐる。最後に市民の人氣を集めた所謂「民衆の味かた」になつてゐる。が、若しチヤプリンさへ非難してやまない今日のアメリカにヴィヨンを生じたとすれば、――そんなことは今更のやうに言はずとも善い。歷史上の人物はこの映畫の中のヴィヨンのやうに何度も轉身を重ねるのであら

う。「我若し王者たりせば」は實にアメリカの生んだ映畫だつた。

僕はこの映畫を見ながら、ヴィヨンの次第に大詩人になつた三百年の星霜を數へ、「蓋棺の後」などと云ふ言葉の怪しいことを考へずにはゐられなかつた。「蓋棺の後」に起るものは神化か獸化（？）かの外にある筈はない。しかし何世紀かの流れ去つた後には、――その時にも香を焚かれるのは唯「幸福なる少數」だけである。のみならずヴィヨンなどは一面には愛國者兼「民衆の味かた」兼模範的戀人として香を焚かれてゐるではないか？

しかし僕の感情は僕のかう考へるうちにもやはりはつきりと口を利いてゐる。――「ヴィヨンは兎に角大詩人だつた。」

十　二人の紅毛畫家

ピカソはいつも城を攻めてゐる。ジアン・ダアクでなければ破れない城を。彼は或はこの城の破れないことを知つてゐるかも知れない。が、ひとり石火矢の下に剛情にもひとり城を攻めてゐる。かう云ふピカソを去つてマティスを見る時、何か氣易さを感じるのは必しも僕一人ではあるまい。マティスは海にヨットを走らせてゐる。武器の音や煙硝の匂はそこからは少しも起つて來ない。唯桃色に白の縞のある三角の帆だけ風を孕んでゐる。僕は偶然この二人の畫を見、ピカソ

に同情を感ずると同時にマティスには親しみや羨ましさを感じた。マティスは僕等素人の目にもリアリズムに叩きこんだ腕を持つてゐる。その又リアリズムに叩きこんだ腕はマティスの畫に精彩を與へてゐるものの、時々畫面の裝飾的效果に多少の破綻を生じてゐるかも知れない。若しどちらをとるかと言へば、僕のとりたいのはピカソである。兜の毛は炎に燒け、槍の柄は折れたピカソである。………

（昭和二年五月六日）

僻見

廣告

この數篇の文章は何人かの人人を論じたものである。いや、それらの人人に對する僕の好惡を示したものである。

この數篇の文章の中に千古の鐵案を求めるのは勿論甚だ危險である。僕は少しも僕の批判の公平を誇らうとは思つてゐない。實際又公平なるものは生憎僕には惠まれてゐない、――と云ふよりも寧ろ惠まれることを潔しとしない美德である。

この數篇の文章の中に謙讓の精神を求めるのはやはり甚だしい見當違ひである。あらゆる批判の藝術は謙讓の精神と兩立しない。就中僕の文章は自負と虛榮心との吸ひ上げポンプである。

この數篇の文章の中に輕佻の態度を求めるのは最も無理解の甚だしいものである。僕は締切り日に間に合ふやうに、匆忙とペンを動かさなければならぬ。かう云ふ事情の下にありながら、しかも輕佻に振舞ひ得るものは大力量の人のあるばかりである。

この數篇の文章は僕の好惡を示す以外に、殆ど取り柄のないものである。唯僕は僕の好惡を出

來るだけ正直に示さうとした。もし取り柄に近いものを擧げれば、この自ら僞るの陋を敢てしたかつたことばかりである。

晉書禮記は「正月元會、白獸樽を殿庭に設け、樽蓋上に白獸を施し、若し能く直言を獻ずる者あらば、この樽を發して酒を」飲ましめたことを語つてゐる。僕はこの數篇の文章の中に直言即ち僻見を獻じた。誰か僕の爲に白獸樽を發し一杓の酒を賜ふものはないか？ 少くとも僕の僻見に左袒し、僻見の權威を樹立する爲に一臂の力を假すものはないか？

一 齋藤茂吉

齋藤茂吉を論ずるのは手輕に出來る藝當ではない。少くとも僕には餘人よりも手輕に出來る藝當ではない。なぜと云へば齋藤茂吉は僕の心の一角にいつか根を下してゐるからである。僕は高等學校の生徒だつた頃に偶然「赤光」の初版を讀んだ。「赤光」は見る見る僕の前へ新らしい世界を顯出した。爾來僕は茂吉と共におたまじやくしの命を愛し、淺茅の原のそよぎを愛し、青山墓地を愛し、三宅坂を愛し、午後の電燈の光を愛し、女の手の甲の靜脈を愛した。かう云ふ茂吉を冷靜に見るのは僕自身を冷靜に見ることである。僕自身を冷靜に見ることは、――いや、僕は他見

を許さぬ日記をつけてゐる時さへ、必ず第三者を豫想した虚榮心を抱かずにはゐられぬものである。到底行路の人を見るやうに僕自身を見ることなどの出來る筈はない。

僕の詩歌に對する眼は誰のお世話になつたのでもない。齋藤茂吉にあけて貰つたのである。もう今では十數年以前、戸山の原に近い借家の二階に「赤光」の一卷を讀まなかつたとすれば、僕は未だに耳木兎のやうに、大いなる詩歌の日の光をかい間見ることさへ出來なかつたであらう。ハイネ、ヴェルレエン、ホイツトマン、——さう云ふ紅毛の詩人の詩を手あたり次第讀んだのもその頃である。が、僕の語學の素養は彼等の內陣へ踏み入るには勿論淺薄を免れなかつた。のみならず僕に上田敏と厨川白村とを一丸にした語學の素養を與へたとしても、果して彼等の血肉を啖ひ得たかどうかは疑問である。(僕は今もなほ彼等の詩の音樂的效果を理解出來ない。稀に理解したと思ふのさへ、指を折つて見れば十行位である。)この故に當時彼等の詩を全然讀まずにゐたとしても、必しも後悔はしなかつたであらう。けれども萬一何かの機會に「赤光」の一卷をも讀まなかつたとすれば、——これも實は考へて見れば、案外後悔はしなかつたかも知れない。その代りに幸福なる批評家のやうに、彼自身の色盲には頓着せず、「歌は到底文壇の中心的勢力にはなり得ない」などと高を括つてゐたことは確かである。

且又茂吉は詩歌に對する眼をあけてくれたばかりではない。あらゆる文藝上の形式美に對する

眼をあける手傳ひもしてくれたのである。眼を？——或は耳をとも云はれぬことはない。僕はこの耳を得なかつたとすれば、「無精さやかき起されし春の雨」の音にも無關心に通り過ぎたであらう。が、差當り恩になつたものは眼でも耳でも差支へない。兎に角僕は現在でもこの眼に萬葉集を見てゐるのである。この眼に猿蓑を見てゐるのである。この眼に「赤光」や「あら玉」を、——もし正直に云ひ放せば、この眼に「赤光」や「あら玉」の中の幾首かの惡歌をも見てゐるのである。

齋藤茂吉を論ずるのは上に述べた理由により、少くとも僕には餘人よりも手輕に出來る藝當ではない。且又茂吉の歌の價値を論じ、歌壇に對する功罪を論じ、短歌史上の位置を論ずるのはおのづから人のゐる筈である。(たとひ今はゐないにしろ、百年の後には一人位、必ず茂吉を讃美するか、或は茂吉を罵倒するか、どの道眞劍に「赤光」の作者を相手どるものの出る筈である。)かたがた嚴然たる客觀の舞臺に齋藤茂吉を眺めることは少時他日に讓らなければならぬ。僕の此處に論じたいのは何故に茂吉は後輩たる僕の精神的自敍傳を左右したか、何故に僕は歌人たる茂吉に藝術上の導者を發見したか、何故に僕等は知らず識らずのうちに一縷の血脈を相傳したか、——つまり何故に當時の僕は茂吉を好んだかと云ふことだけである。

けれどもこの「何故に？」も答へるのは問ふのよりも困難である。と云ふ意味は必しも答の見つからぬと云ふのではない。寧ろ答の多過ぎるのに茫然たらざるを得ないのである。たとへば天滿

の紙屋治兵衛に、何故に彼は曾根崎の白人小春を愛したかと尋ねて見るが好い。治兵衛は忽ち算盤を片手に、髪が好いとか眼が好いとか或は又手足の優しいのが好いとか、いろいろの特色を並べ立てるであらう。僕の茂吉に於けるのもやはりこの例と同じことである。茂吉の特色を説明し出せば、それだけでも數頁に及ぶかも知れない。茂吉は「おひろ」の連作に善男子の戀愛を歌つてゐる。「死にたまふ母」の連作に娑婆界の生滅を語つてゐる。「口ぶえ」の連作に何ものをも避けぬ取材の大膽を誇つてゐる。「乾草」の連作に未だ嘗なかつた感覺の雋鋭を弄んでゐる。「この里に大山大將住むゆゑにわれの心のうれしかりけり」におほどかなる可笑しみを傳へてゐる。「くろぐろと圓らに熟るる豆柿に小鳥はゆきぬつゆじもはふり」に素朴なる畫趣を想はせてゐる。「かうかう」「しんしん」の Onomatope に新しい息吹きを吹きこんでゐる。「父母所生」「海此岸」の佛語に生なましい紅血を通はせてゐる。…………

かう云ふ特色は多少にもせよ、一一「何故に？」に答へるものである。が、その全部を數へ盡したにしろ、完全には「何故に？」に答へられぬものである。成程小春の眼や髮はそれぞれ特色を具へてゐるであらう。しかし治兵衛の愛するのは小春と云ふ一人の女人である。眼や髮の特色を具へてゐるのも實は小春と云ふ一人の女人を現してゐるからに外ならぬ。すると小春なるものを摑まへない以上、完全に「何故に？」と答へることは到底出來る筈のものではない。その又小春なる

ものを摑まへることは、――治兵衛自身も摑まへたかどうかは勿論千古の疑問である。少くとも格別摑まへた結果を文章に作りなどはしなかつたらしい。けれども僕は僕の好んだ茂吉なるものを摑まへた上、一篇の文章を作らなければならぬ。たとひはつきり摑まへることは人間業には及ばないにもしろ、兎に角義理にも一應は眼鼻だけを明らかにした上、寄稿の約束を果さなければならぬ。この故に僕はもう一度あり餘る茂吉の特色の中へ、「何故に？」と同じ問を投げつけるのである。

「光は東方より來たる」さうである。しかし近代の日本には生憎この言葉は通用しない。少くとも藝術に關する限りは屢西方より來てゐるやうである。藝術――と大袈裟に云はないでも好い。文藝だけを考へて見ても、近代の日本は見渡す限り、大抵近代の西洋の恩惠を蒙つてゐるやうである。或は近代の西洋の模倣を試みてゐるやうである。尤も模倣などと放言すると、忽ち非難を蒙るかも知れない。現に「模倣に長じた」と云ふ言葉は日本國民に冠らせる惡名の代りに使はれてゐる。しかし何びとも模倣する爲には模倣する本ものを理解しなければならぬ。たとひ深淺の差はあるにしろ、兎に角本ものを理解しなければならぬ。その理解の淺い例は所謂猿の人眞似である。（善良なる猿は人間の所業に深い理解を持つた日には二度と人眞似などはしないかも知れない。）その理解の深い例は藝術の士のする模倣である。即ち模倣の善惡は模倣そのものにあるのではな

い。理解の深淺にある筈である。よし又淺い理解にもせよ、無理解には勝ると云はなければならぬ。猿の孔雀や大蛇よりも進化の梯子の上段に悠悠と腰を下ろしてゐるのは明らかにこの事實を教へるものである。「模倣に長じた」と云ふ言葉は必しも我我日本人の面目に關はる形容ではない。

　藝術上の模倣は上に述べた通り、深い理解に根ざしてゐる。況やこの理解の透徹した時には、模倣はもう殆ど模倣ではない。たとへば今は古典になつた國木田獨歩の「正直者」はモオパスサンの模倣である。が、「正直者」を模倣と呼ぶのはナポレオンの事業をアレクサンダアの事業の模倣と呼ぶのと變りはない。成程獨歩は人生をモオパスサンのやうに見たであらう。しかしそれは獨歩自身もモオパスサンになつてゐた爲である。或は獨歩自身の中に微妙なる獨歩モオパスサン組合の成立してゐた爲である。更に又警句を弄すれば、人生も亦モオパスサンを模倣してゐた爲と云はれぬことはない。「人生は藝術を模倣す」と云ふ、名高いワイルドのアフォリズムはこの間の消息を語るものである。人生？――自然でも勿論差支へない。ワイルドは印象派の生まれぬ前にはロンドンの市街に立ち罩める、美しい鳶色の霧などは存在しなかつたと云つてゐる。青あをと燃え輝いた糸杉もやはりゴツホの生まれぬ前には存在しなかつたのに違ひない。少くとも水水しい耳隠しのかげに薄赤い頰を光らせた少女の銀座通りを歩み出したのは確かにルノアルの生まれた後、――つい近頃の出來事である。

便宜上もう一度繰り返せば、藝術上の理解の透徹した時には、模倣はもう殆ど模倣ではない。寧ろ自他の融合から自然と花の咲いた創造である。模倣の痕跡を尋ねれば、如何なる古今の作品と雖も、全然新しいと云ふものはない。が、又獨自性の地盤を尋ねれば、如何なる古今の作品と雖も、全然古いと云ふものはない。「正直者」は上に述べた通り、獨歩モオパスサン組合の製品である。と云ふのは何も署名だけは獨歩であると云ふのではない。全篇に獨歩の獨自性をにじませてゐると云ふのである。すると獨歩の見た人生は必しもモオパスサンを模倣することに終始してゐた訣ではない。これはワイルド自身にしても、人生の藝術を模倣する程度を嚴密に規定はしなかつた筈である。實際又自然や人生はワイルドのアフォリズムを應用すれば、甚だ不正確に複製した三色版と云はなければならぬ。就中銀座街頭の少女などは最も拙劣なる三色版である。

近代の日本の文藝は横に西洋を模倣しながら、竪には日本の土に根ざした獨自性の表現に志してゐる。苟くも日本に生を享けた限り、齋藤茂吉も亦この例に洩れない。いや、茂吉はこの兩面を最高度に具へた歌人である。正岡子規の「竹の里歌」に發した「アララギ」の傳統を知つてゐるものは、「アララギ」同人の一人たる茂吉の日本人氣質をも疑はないであらう。茂吉は「吾等の脈管の中には祖先の血がリズムを打つて流れてゐる。祖先が想に堪へずして吐露した詞語が、祖先の分身たる吾等に親しくないとは吾等にとつて虚僞である。おもふに汝にとつても虚僞であるに相

違ない」と天下に呼號する日本人である。しかしさう云ふ日本人の中にも、時には如何にありありと萬里の海彼にゐる先達たちの面影に立つて來ることであらう。

あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり
かがやけるひとすぢの道遙けくてかうかうと風は吹きゆきにけり
野のなかにかがやきて一本の道は見ゆここに命をおとしかねつも

ゴッホの太陽は幾たびか日本の畫家のカンヴァスを照らした。しかし「一本道」の連作ほど、沈痛なる風景を照らしたことは必しも度たびはなかつたであらう。

かぜむかふ欅太樹の日てり葉の青きうづだちしまし見て居り
いちめんにふくらみ圓き粟畑を潮ふきあげし疾風とほる
あかあかと南瓜ころがりゐたりけりむかうの道を農夫はかへる

これらの歌に對するのは宛然後期印象派の展觀會の何かを見てゐるやうである。さう云へば人物畫もない訣ではない。

狂人のにほひただよふ長廊下まなこみひらき我はあゆめる
すき透り低く燃えたる濱の火にはだか童子は潮にぬれて來

のみならずかう云ふ畫を描いた畫家自身の姿さへ寫されてゐる。

　ふゆ原に繪をかく男ひとり來て動くけむりをかきはじめたり、

幸福なる何人かの詩人たちは或は薔薇を歌ふことに、或はダイナマイトを歌ふことに彼等の西洋を誇つてゐる。が、彼等の西洋を茂吉の西洋に比べて見るが好い。茂吉の西洋はおのづから深處に徹した美に充ちてゐる。これは彼等の西洋のやうに感受性ばかりの産物ではない。正直に自己をつきつめた、痛いたしい魂の産物である。僕は必しも上に擧げた歌を茂吉の生涯の絶唱とは云はぬ。しかしその中に磅礴する茂吉の心熱の凄じさを感ぜざるを得ないのは事實である。同時に又さう云ふ熔鑛爐の底に火花を放つた西洋を感ぜざるを得ないのも事實である。

僕は上にかう述べた。「近代の日本の文藝は横に西洋を模倣しながら、竪には日本の土に根ざした獨自性の表現に志してゐる。」僕は又上にかう述べた。「茂吉はこの竪横の兩面を最高度に具へた歌人である。」茂吉よりも秀歌の多い歌人も廣い天下にはゐることであらう。しかし「赤光」の作者のやうに、近代の日本の文藝に對する、――少くとも僕の命を託した同時代の日本の文藝に對する象徴的地位に立つた歌人の一人もゐないことは確かである。歌人？――何も歌人に限つたことではない。二三の例外を除きさへすれば、あらゆる藝術の士の中にも、茂吉ほど時代を象徴したものは一人もゐなかつたと云はなければならぬ。これは單に大歌人たるよりも、もう少し壯大なる何ものかである。もう少し廣い人生を震蕩するに足る何ものかである。僕の茂吉を好ん

だのも畢竟この故ではなかつたであらうか？

あが母の吾を生ましけむうらわかきかなしき力おもはざらめや

菲才なる僕も時時は僕を生んだ母の力を、——近代の日本の「うらわかきかなしき力」を感じてゐる。僕の歌人たる齋藤茂吉に藝術上の導者を發見したのは少しも僕自身には偶然ではない。

二　岩見重太郎

岩見重太郎と云ふ豪傑は後に薄田隼人の正兼相と名乘つたさうである。尤もこれは講釋師以外に保證する學者もない所を見ると、或は事實ではないのかも知れない。しかし事實ではないにもせよ、岩見重太郎を輕蔑するのは甚だ輕重を失したものである。

第一に岩見重太郎は歷史に實在した人物よりもより生命に富んだ人間である。その證據には同時代の人物、——たとへば大阪五奉行の一人、長束大藏の少輔正家を岩見重太郎と比べて見るが好い。武者修業の出立ちをした重太郎の姿はありありと眼の前に浮かんで來る。が、正家は大男か小男か、それさへも我々にははつきりしない。且又かう云ふ關係上、重太郎は正家に十倍するほど、我々の感情を支配してゐる。我々は新聞紙の一隅に「長束正家儀、永々病氣の處、藥石效無

くしと云ふ廣告を見ても、格別氣の毒とは思ひさうもない。しかし重太郎の長逝を報ずる號外か何か出たとすれば、戯曲「岩見重太郎」の中にこの豪傑を飜弄した、無情なる菊池寛と雖も、憮然たらざるを得ないことであらう。のみならず重太郎は感情以上に我々の意志をも支配してゐる。戰ごつこをする小學生の重太郎を眞似るのは云ふを待たない。僕さへ論戰をする時などには忽ち大蛇を退治する重太郎の意氣ごみになりさうである。

第二に岩見重太郎は現代の空氣を呼吸してゐる人物、――たとへば後藤子爵よりもより生命に富んだ人間である。成程子爵は日本の生んだ政治的豪傑の一人かも知れない。が、如何なる豪傑にもせよ、子爵後藤新平なるものは恰幅の好い、鼻眼鏡をかけた、時々哄然と笑ひ聲を發する、――兎に角或制限の中にちやんとをさまつてゐる人物である。甲の見た子爵は乙の見た子爵よりも眼が一つ多かつたなどと云ふことはない。それだけに頗る正確である。同時に又頗る窮屈である。もし甲は象の體重を理想的の體重としてゐるならば、象よりも體重の輕い子爵は當然甲の要求に十分の滿足を與へることは出來ぬ。もし又乙は麒麟の身長を理想的の身長としてゐるならば、麒麟よりも身長の短かい子爵はやはり乙の不贊成を覺悟しなければならぬ筈である。けれども岩見重太郎は、――岩見重太郎もおのづから武者修業の出立ちをした豪傑と云ふ制限を受けてゐないことはない。が、この制限はゴム紐のやうに伸びたり縮んだりするものである。甲乙二人の見

る重太郎は必しも同一と云ふ訣には行かぬ。それだけに頗る不正確である。同時に又頗る自由である。象の體重を惝怳する甲は必ず重太郎の體重の象につり合ふことを承認するであらう。麒麟の身長を謳歌する乙もやはり重太郎の身長の麒麟にひとしいことを發見する筈である。これは肉體上の制限ばかりではない。精神上の制限でも同じことである。たとへば勇氣と云ふ美德にしても、後藤子爵は我々と共にどの位勇士になり得るかを一生の問題としなければならぬ。しかし天下の勇士なるものはどの位重太郎になり得るかを一生の問題にしてゐるのである。この故に重太郎は後藤子爵よりも一層我々の情意の上に大いなる影響を及ぼし易い。我々は天の橋立に大敵と戰ふ重太郎には衷心の不安を禁ずることは出來ぬ。けれども衆議院の演壇に大敵と戰ふ後藤子爵には至極に冷淡に構へられるのである。

　岩見重太郎の輕蔑出來ぬ所以はあらゆる架空の人物の輕蔑出來ぬ所以である。架空の人物と云ふ意味は傳説的人物を指すばかりではない。俗に藝術家と稱へられる近代的傳説製造業者の造つた架空の人物をも加へるのである。カイゼル・ウイルヘルムを輕蔑するのは好い。が、一穂のともし火のもとに錬金の書を讀むフアウストを輕蔑するのは誤りである。フアウストの書いた借金證文などは何處の圖書館にもあつたことはない。しかしフアウストは今日もなほベルリンのカフエの一隅に麥酒を飲んでゐるのである。ロイド・ヂヨオヂを輕蔑するのは好い。が、三人の妖婆

の前に運命を尋ねるマクベスを輕蔑するのは誤りである。マクベスの帶びた短刀などは何處の博物館にもあつたことはない。しかしマクベスは相不變ロンドンのクラブの一室に葉卷を薰ゆらせてゐるのである。彼等は過去の人物は勿論、現在の人物よりも油斷はならぬ。いや彼等は彼等を造つた天才よりも長命である。耶蘇紀元三千年の歐羅巴はイブセンの大名さへも忘却するであらう。けれども勇敢なるピイア・ギユントはやはり黎明の峽灣を見下してゐるのに違ひない。現に古怪なる寒山拾得は薄暮の山巒をさまよつてゐる。が、彼等を造つた天才は——豐干の乘つた虎の足跡も天台山の落葉の中にはとうの昔に消えてゐるであらう。

　僕は上海のフランス町に章太炎先生を訪問した時、剝製の鰐をぶら下げた書齋に先生と日支の關係を論じた。その時先生の云つた言葉は未だに僕の耳に鳴り渡つてゐる。——「予の最も嫌惡する日本人は鬼が島を征伐した桃太郎である。桃太郎を愛する日本國民にも多少の反感を抱かざるを得ない。」先生はまことに賢人である。僕は度たび外國人の山縣公爵を嘲笑し、葛飾北齋を賞揚し、澁澤子爵を罵倒するのを聞いた。しかしまだ如何なる日本通もわが章太炎先生のやうに、桃から生まれた桃太郎へ一矢を加へるのを聞いたことはない。のみならずこの先生の一矢はあらゆる日本通の雄辯よりもはるかに眞理を含んでゐる。桃太郎もやはり長命であらう。もし長命であるとすれば、暮色蒼茫たる鬼が島の渚に寂しい鬼の五六匹、隱れ蓑や隱れ笠のあつた祖國

の昔を嘆ずるものも、——しかし僕は日本政府の植民政策を論ずる前に岩見重太郎を論じなければならぬ。

前に述べた所を繰り返せば、岩見重太郎は古人はもとより、今人よりも生命に富んだ、輕蔑すべからざる人間である。成程豐臣秀吉は岩見重太郎に比べても、少しも遜色はないかも知れない。けれどもそれは明らかに繪本太閤記の主人公たる傳說的人物の力である。さもなければ同じ歷史の舞臺に大芝居を打つた德川家康もやはり豐臣秀吉のやうに光彩を放つてゐなければならぬ。且又今人も無邪氣なる英雄崇拜の的になるものは大抵彼等の頭の上に架空の圓光を頂いてゐる。廣い世の中には古往今來、かう云ふ圓光の製造業者も少からぬことは云ふを待たない。たとへばロマン・ロオラン傳を書いた、善良なるステファン・ツワイグは正に彼等を代表するものである。

僕の岩見重太郎に輕蔑を感ずるのは事實である。重太郎も國粹會の壯士のやうに思索などは餘りしなかつたらしい。たとへば可憐なる妹お辻の牢内に命を落した後、やつと破牢にとりかかつたり、妙に夢知らせを信用したり、大事の讐打ちを控へてゐる癖に、狒退治や大蛇退治に力瘤を入れたり、いつも無分別の眞似ばかりしてゐる。その點は菊池寛氏の爲に飜弄されるのもやむを得ない。けれども岩見重太郎は如何なる惡德をも償ふ位、大いなる美德を持ち合せてゐる。いや、必しも美德ではない。寧ろ善惡の彼岸に立つた唯一無二の特色である。岩見重太郎は人間以上

に強い。(勿論重太郎の同類たる一群の豪傑は例外である。)重太郎の憤怒を發するや、太い牢格子も苧殼のやうに忽ち二つにへし折れてしまふ。狒や大蛇も一撃のもとにあへない最期を遂げる外はない。千曳の大岩を轉がすのなどは朝飯前の仕事である。由良が濱の沖の海賊は千人ばかり一時に俘になつた。天の橋立の讐打ちの時には二千五百人の大軍を斬り崩してゐる。兎に角重太郎の強いことは天下無敵と云はなければならぬ。かう云ふ強勇はそれ自身我々末世の衆生の心に大歡喜を與へる特色である。

小心なる精神的宦官は何とでも非難を加へるが好い。天つ神の鉾から滴る潮の大和島根を凝り成した以來、我々の眞に愛するものは常にこの強勇の持ち主である。常にこの善惡の觀念を脚下に蹂躙する豪傑である。我々の心は未だ嘗罪惡の意識を逃れたことはない。青丹よし奈良の都の市民は卵を食ふことを罪惡とした。と思へば現代の東京の市民は卵を食はないことを罪惡としてゐる。これは勿論卵ばかりではない。「我」に對する信仰の薄い、永久に臆病なる我々は我々の中にある自然にさへ罪惡の意識を抱いてゐる。が、豪傑は我々のやうに罪惡の意識に煩はされない。實踐倫理の教科書はもとより、神明佛陀の照覽さへ平然と一笑に附してしまふ。一笑に附してしまふのは「我」に對する信仰のおのづから強い結果である。たとへば神代の豪傑たる素戔嗚の尊に徴すれば、尊は正に千位置戸の刑罰を受けたのに相違ない。しかし刑罰を受けたにしろ、罪

悪の意識は寸毫も尊の心を煩はさなかつた。さもなければ尊は高天が原の外に刑餘の姿を現はすが早いか、あのやうに恬然と保食の神を斬り殺す勇氣はなかつたであらう。我々はかう云ふ旺盛なる「我」に我々の心を暖める生命の炎を感ずるのである。或は我々の到達せんとする超人の面輪を感ずるのである。

まことに我々は熱烈に岩見重太郎を愛してゐる。のみならず愛するのに不思議はない。しかしかう云ふ我々の愛を唯所謂強者に對する愛とばかり解釋するならば、それは我々を誣ひるものである。如何にも何人かの政治家や富豪は善悪の彼岸に立つてゐるかも知れない。が、彼岸に立つてゐることは常に彼等の祕密である。おまけに又彼等はその祕密に對する罪悪の意識を逃れたことはない。祕密は必しも咎めるのに足らぬ。現に古來の豪傑も家畜に似た我々を驅使する爲には屢假面を用ひたやうである。けれども罪悪の意識に煩はされるのは明らかに豪傑の所業ではない。彼等は強いと云ふよりも寧ろ病的なる欲望に支配されるほど弱いのである。もし嘘だと思ふならば、試みに彼等を三年ばかり監獄の中に住ませて見るが好い。彼等は必ずニイチエの代りに親鸞上人を發見するであらう。我々の愛する豪傑は最も彼等に遠いものである。もし彼等に比へるとすれば、活動寫眞の豪傑さへ數等超人の面影を具へてゐると云はなければならぬ。現に我々は彼等よりも活動寫眞の豪傑を愛してゐる。ハリケエン・ハツチの近代的富豪にはり倒される光

景は見るに堪へない。しかし近代的富豪のハリケエン・ハッチに、――ハリケエン・ハッチは腹り倒すほど、臆病なる彼等の一團に興味を持つかどうかは疑問である。

岩見重太郎の武勇傳の我々に意味のあることは既に述べた通りである。が、重太郎の冒險はいづれも末世の我々に同じ興味を與へる訣ではない。その最も興味のあるものは牢破りと狒退治との二つである。一國の牢獄を破るのは國法を破るのと變りはない。狒も單に狒と云ふよりは、年年人身御供を受けてゐた、牛頭明神と稱する妖神である。すると重太郎は牢破りと共に人間の法律を蹂躙し、更に又次の狒退治と共に神と云ふ偶像の法律をも蹂躙したと云はなければならぬ。これは重太郎一人に限らず、上は素戔嗚の尊から下はミカエル・バクウニンに至る豪傑の生涯を象徴するものである。いや、更に一歩を進めれば、あらゆる單行獨歩の人の思想的生涯をも象徴するものである。彼等は皆人間の虚僞と神の虚僞とを蹂躙して來た。將來も亦あらゆる虚僞を蹂躙することを辭せぬであらう。重太郎の退治した狒の子孫は未だに人身御供を貪つてゐる。牢獄も、――牢獄は市が谷にあるばかりではない。囚人たることにさへ氣のつかない、新時代の服裝をした囚人の夫婦は絡繹と銀座通りを歩いてゐる。

人間の進歩は遲いものである。或は蝸牛の歩みよりも更に遲いものかも知れない。が、如何に遲いにもせよ、アナトオル・フランスの云つたやうに、「徐ろに賢人の夢みた跡を實現する」こと

は事實である。いにしへの支那の賢人は車裂の刑を眺めたり、牛鬼蛇神の像を眺めたりしながら、堯舜の治世を夢みてゐた。(將來を過去に求めるのは常に我々のする所である。我々の心の眼なるものはお伽噺の蛙の眼と多少同一に出來てゐるらしい。)堯舜の治世は今日もなほ雲煙のかなたに横はつてゐる。しかし車はいにしへのやうに車裂の刑には使はれてゐない。牛鬼蛇神の像なども骨董屋の店か博物館に陳列されてゐるばかりである。よし又かう云ふ變化位を進歩と呼ぶことは出來ないにしろ、人間の文明は有史以來僅々數千年を閲したのに過ぎない。けれども地球の氷雪の下に人間の文明を葬るのは六百萬年の後ださうである。人間も悠久なる六百萬年の間には著しい進歩をするかも知れない。少くともその可能性を信ずることは痴人の談とばかりも言はれぬであらう。もしこの確信を事實とすれば、人間の將來は我々の愛する岩見重太郎の手に落ちなければならぬ。牢を破り狒を殺した超人の手に落ちなければならぬ。

僕の岩見重太郎を知つたのは本所御竹倉の貸本屋である。いや、岩見重太郎ばかりではない。羽賀井一心齋を知つたのも、妲妃のお百を知つたのも、國定忠次を知つたのも、祐天上人を知つたのも、八百屋お七を知つたのも、髪結新三を知つたのも、原田甲斐を知つたのも、佐野次郎左衛門を知つたのも、——閭巷無名の天才を造つた傳說的人物を知つたのは悉くこの貸本屋である。僕はかう云ふ間にも、夏の西日のさしこんだ、狹苦しい店を忘れることは出來ぬ。軒先には硝子

の風鈴が一つ、だらりと短尺をぶら下げてゐる。それから壁には何百とも知れぬ講談の速記本がつまつてゐる。最後に古い葭戸のかげには梅干を貼つた婆さんが一人、内職の花簪を拵へてゐる。――ああ、僕はあの貸本屋に何と云ふ懐しさを感ずるのであらう。僕に文藝を教へたものは大學でもなければ圖書館でもない。正にあの蕭條たる貸本屋である。僕は其處に並んでゐた本から、恐らくは一生受用しても盡きることを知らぬ教訓を學んだ。超人と稱するアナアキストの尊嚴を學んだのもその一つである。成程超人と言ふ言葉はニイチエの本を讀んだ後、やつと僕の語彙になつたかも知れない。しかし超人そのものは――大いなる岩見重太郎よ、傳家の寶刀を腰にしたまま、天下を睨んでゐる君の姿は夙に僕の幼な心に、敢然と山から下つて來たツアラトストラの大業を教へてくれたのである。あの貸本屋はとうの昔に影も形も失つたであらう。が、岩見重太郎は今日もなほ僕の中に潑剌と命を保つてゐる。いつも人生の十字街頭に悠々と扇を使ひながら。

三　大久保湖州

或秋の夜、僕は本郷の大學前の或古本屋を覗いて見た。すると店先の陳列臺に古い菊判の本が一冊、「大久保湖州著、家康と直弼、引ナシ金五十錢」と云ふ貼り札の帶をかけたまま、雜書の上

に拋り出してあつた。僕はこの本の埃を拂ひ、ちよつと中をひろげて見た。中は本の名の示す通り、徳川家康と井伊直弼とに關する史論を集めたものらしかつた。が、偶然開いた箇所は附錄に添へてある雜文だつた。「人の一生」――僕はその雜文の一つにかう云ふ名のあるのを發見した。

人の一生

徳川家康

急ぐべからず。

心に望おこらば困窮したる時を思ひ出すべし。

怒は敵と思へ。

勝つ事ばかり知てまくる事をしらざれば害其身に至る。

及ばざるは過ぎたるより勝れり。

大久保余所五郎

後るべからず。

心に望失なはば得意なりし時を思ひ出すべし。

卑屈は敵と思へ。

負くる事に安んじて勝つ事を知らざれば損其身に至る。

成すは成さざるより勝れり。

僕は思はず微笑した。この湖州大久保余所五郎なるものは征夷大將軍徳川家康と處世訓の長短を比べてゐる。しかも彼の處世訓は不思議にも坊間に行はれる教科書の臭氣を帶びてゐない。何處か彼自身の面接した人生の息吹きを漂はせてゐる。「心に望失はば得意なりし時を思ひ出すべ

し。」――情熱に富んだ才人の面かげはかう云ふ一行にも見えるやうである。僕は漫然とその次の「鎌倉漫筆」へ目を移した。漫然と――しかし僕の好奇心は忽ち近來にない刺戟を感じた。まづ僕を喜ばせたものは歴史家を評した數行である。

「若し徂徠にして白石の如く史を究めたらんには、其の史眼は必ず白石の上に出づべし。『南留別志』を一讀して知るべし。

「賴山陽を歴史家と念ふは非なり。日本政記の論文にも、取るに足らざる淺薄の見多し。」

次に興味を感じたのは半頁にも足りない史論である。

「大日本史の主旨は勤王に在りといふ。水戸黄門この書を思ひ立ちしは、伯夷傳を讀みて感ずる所ありてなりといふ。周の武王は時の強者なり。伯夷は時の強者を制し、名分を正さんとして用ゐられざりし男なり。黄門何とてさる支那の一不平黨に同感して、勤王の精神を現せる國史を編まんとはしけるぞ。幕府は時の強者なり。之を制して名分を正さんとしけるにや。されど徳川は正に其の宗家なり。宗家の不利を顧みざりしにや。黄門は世に賢明の人なりと嘖々す。さる人にして、いかで朝廷重くなれば徳川輕くなるの理見えずやあるべき。是に於て黄門の眞意は甚だ疑ふべし。不平黨に同意せし胸中、穿鑿を要する所なり。時の將軍綱吉と黄門の不快なりしは、亦世に傳ふる所なり。得意なりしならんには、大日本史を編みしや否や、我れ識らず。美はしき表

口上より、裏の邊見まほしくこそ。」
「家康の朝廷に對する精神は、敬して遠ざくるに在りしなり。信長秀吉等は皆朝廷を擔ぎて事を圖りしかど、家康にはさる事なし。關ケ原大坂の軍にも、朝旨を受けて、王師皇軍などいふ體を裝はず。武家と武家との戰と做して、朝廷の力を假らず。是れ實に家康の深慮の存する所なり。徳川の末世に及びて、勤王を唱へし徒は、朝廷尊崇をもて東照宮の遺意なるが如く說きて、幕府を責めしかど、實を知らぬ者の迂說なりけり。朝廷に權力を持たせて、將軍政治の行はるると思ふは笑ふべし。流石に新井白石は此の間の消息を解せしが如し。家康また至て公卿風を嫌ひし男なりけり。」

しかし最も愉快だつたのは鮮かに著者自身の性格を示したやはり數行の感想である。

「人三十にして老人にも少年にも交はるを得べし。

「我れ酒を飲まざれど、人に酒を呑(原)ませて語るは面白し。

「始めて人を訪へば、知らぬ顏して室内の模樣を見屆け置くべし。爾後訪ふ每に亦其の室内の變化に注目せよ。やがて主人の口には掩ひける性癖のをかしきふしを看出すべし。

「人物を知らんには、其の人の金のつかひやうと、妻に對する振舞との二つこそ尤も見まほしけれ。若し世に細君の自ら筆を染めて、細かに良人が日常の振舞を書き取れる日記と、金銀出納帳

とだにあらば、之れに優る傳記の材料はなかるべし。
「世評に善くいはるる人も、實際はそれ程の大人物に非らず、惡くいはるる人も、亦それ程の惡人にあらず。古今皆然り。個人の貫目を量らんには、世評の封袋を除くことを忘るべからず。
「智慧できて、氣性の強くなりしものあり、弱くなりしものあり。
「成るべく勞力を節約して、成るべく多く成功するの工風を運らすべし。さりとて相場師に爲れと言ふには非らず。但し人事なべて多少投機の性質を帶ぶるものと念ふべし。
「愚人を相手にして得々然たること能はざる政治家は、輿論政治の世に政治家たる資格なきものと識るべし。」

男女とも尻つ尾さへぶら下げてゐなければ、一人前の人間だと考へるのは三千年來の誤謬である。一人前の人間となる爲には、まづ腦髓と稱へられる灰白色の塊にも一人前の皺襞を具へなければならぬ。この大久保湖州と云ふ書生は確かに孔雀や猿を脫した一人前の腦髓を所有してゐる。いや、一人前所ではないかも知れない。彼の文章は冷然とした中に不思議にも情熱を漲らせてゐる。天下にかう云ふ文章ほど、一人前以上の腦髓の所在を歷々と敎へる指道標はない。のみならず——實價は五十錢である。僕は皺くちやになつた五十錢札を出し、青黑いクロオスの表紙のついた「家康と直弼」を買ふことにした。

買つた後に開いて見ると、巻頭には近衛公の題字を始め、重野成齋、坪内逍遙、島田沼南、徳富蘇峰、田口鼎軒等の序文だの水谷不倒の「大久保湖州君小傳」だの明治趣味の顋髯を生やした著者の寫眞だのもはひつてゐる。無名の書生だと思つた湖州は思ひの外知己に富んでゐたらしい。が、現代に生まれた我々の湖州を知らぬことも亦事實である。すると諸名士の金玉の序文も「家康と直弼」を傳へることには失敗したと云はなければならぬ。これは讀者たる僕の勇氣を沮喪せしめるに足る發見である。才人だと思つた大久保湖州も或は大學の教授に多い、莊嚴たる阿呆の一人だつたかも知れない。僕は夜長の電燈の下にかう云ふ疑惑を抱きながら、まづ彼の大作たる家康篇を讀みはじめた。…………

これはもう一昨年、――念の爲に書いて置けば、大正十一年の秋のことである。爾來僕は何かの機會にこの忘れられた歷史家を紹介したいと思ひながら、とうとう今日に及んでしまつた。紹介したいと云ふ以上、湖州大久保余所五郎の才人だつたことは云ふを待たない。いや、湖州は明治の生んだ、必しも多からざる才人中、最も特色のある一人である。諸君は勿論かう云ふ讚辭に懷疑的な微笑を浮べるであらう。諸君の確信する所によれば、古今の才人は一人殘らず諸君の愛顧を辱うしてゐる。況や最も特色のある才人などと云ふものの等閑に附せられてゐる筈はない。それは諸君の云ふ通りである。第一古今の才人は何も才人だつた故に諸君の御意にかなつたので

はない。諸君の御意にかなつた故に才人になることも出來たのである。つまり才人を才人にするのは才人自身と云ふよりも諸君であると云はなければならぬ。諸君はまことにその點だけは神よりも全智全能である。如何なる才人も諸君の爲に門前拂ひを食はされたが最後、露命さへ繫げぬのに違ひない。この故に尾形乾山は蕭條たる陋巷に窮死した。この故に亦大久保湖州も明治三十四年出版、正價一圓二十錢の著書を、――しかも彼の唯一の著書を「引ナシ五十錢」に賣られてゐるのである。

僕は湖州を才人だと云つた。が、諸君の微笑の前には少時この言葉を見合せても好い。その代りに僕は諸君の愛顧を辱うする光榮を得なかつた湖州の薄命を弔はなければならぬ。湖州もその後聞いた所によれば、少くとも識者の間には全然忘れられた次第ではない。しかし湖州の母校たる當年の早稻田專門學校――現在の早稻田大學は片上伸の如き、本間久雄の如き、或は又宮島新三郎の如き、有爲の批評家を世に出してゐる。けれども大久保湖州の名は未だ彼等の椽大の筆に一度たりと雖も上つたことはない。彼等は皆彼等の職に甚だ忠なる批評家である。或は聊か彼等の職に忠過ぎる憾みさへあるかも知れない。しかも湖州を逸してゐるのは怠慢の罪と云ふよりも、やはり我々と同じやうに無知の罪と云はなければならぬ。彼等は萬里の波濤を隔てた佛蘭西、英吉利、露西亞等の群小作家の名をも心得てゐる。が、彼等の先輩たる大才の名だけは心得てゐ

ない、かう云ふ湖州を薄命と呼ぶのは必しも誇張とは咎め難いであらう。且又湖州は早稻田大學の前に銅像か何か建てられたとしても、依然たる薄命の歴史家である。成程「家康と直弼」は彼の面目を傳へるかも知れない。しかし彼の畢生の事業は「井伊直弼傳」の大成である。彼はこの事業の爲に三十六年の心血を濺いだ。が、死は彼の命と共に「井伊直弼傳」をも奪ひ去つてしまつた。「こころざしなかばもとげぬ我身だにつひに行くべき道にゆきけり」――水谷不倒の湖州君小傳によれば、死に臨んだ彼は滿腔の遺憾をかう云ふ一首に託したさうである。これをしも薄命と呼ばないとすれば、何ごとを薄命と呼ぶのであらう？　僕は少くとも中道に仆れた先達の薄命を弔はなければならぬ。

大久保湖州の作品は第一に「德川家康篇」である。第二に「井伊直弼篇」である。第三に「遺老の實歷談に就きて」である。第三の「遺老の實歷談に就きて」は「明治維新の前後に際會して國事に與りし遺老の實歷談多く世に出づる」に當り、その史料的價値を考へた三十頁ばかりの論文に過ぎない。第二の「井伊直弼篇」も「井伊大老は開國論者に非ずといふに就て」「岡本黃石」「長野主膳」の三篇の論文を寄せ集めた、たとへば「井伊直弼傳」と云ふ計畫中の都市の一部分である。しかし第一の「德川家康篇」だけは幸ひにも未成品に畢つてゐない。いや僕の信ずる所によれば、寧ろ前人を曠うした、戞々たる獨造底の完成品である。

一部の「德川家康篇」は年少の家康を論じた「德川家康」、中年の家康を論じた「鬼作左」、老年の家康を論じた「本多佐渡守」の三篇の論文から成り立つてゐる。(尤も湖州はから云ふ順序に是等の論文を書いた訣ではない。「德川家康」は明治三十一年、「鬼作左」は明治三十年、「本多佐渡守」は明治二十九年、――卽ち作品の順序とは全然反對に筆を執つたのである。)是等の論文は必しも金玉の名文と云ふ訣ではない。同時に又格別新らしい史料に立脚してゐると云ふ次第でもない。しかし是等の論文の中から我々の目の前に浮かんで來る征夷大將軍德川家康は所謂歴史上の家康よりも數等に家康らしい家康である。たとへば「德川家康」の中に女人に對する家康を論じた下の一節を讀んで見るが好い。

「家康の子、男女合はせて十六人、之れを生みし腹は十人、夫人の產みし二子を除きては、余は皆側妾の所出なり。(中略)其の最後にお勝が腹に末女を擧げさせしは、既に將軍職を倅に渡して、駿府に隱居せし身にて、老いても壯なる六十六歳の時なりとぞ識られける。其の他この豪傑が戲に手折られながら、子を結ばで空しく散りにし花は亦一二に止まらざるべし。實に家康も英雄色を好むの古則に漏るゝ能はじ。秀吉は北條征伐の陣中より淀君が許に一書を寄せて、『廿日ごろに、かならず參候て、わかぎみ(鶴松)だき可申候。そのよさに、そもじをも、そばにねさせ申候可候。せつかく御まち候可候。』とは言ひ越しき。天眞爛漫といはばいへ、又痴情めきた

る嫌なからずやは。家康には表面さる事見えざりしかど、所詮言ふと言はぬとの相違にて、實は兩雄共に多情の男なりけん。深きは言はぬ方なるべし。

「さはれ流石に思慮深き家康は、秀吉の如く閨門の裡に一家滅亡の種を蒔かず。其が第一の禁物たる奢は女中にも嚴に假さで、奥向にも儉素の風行はれしは、彼の本多佐渡守が秀忠將軍の乳母なる大婆に一言咎められて、返す詞も無かりし一場の話に徴して知るべし。駿府にて女房等が大根の漬物の鹽辛きに困じて、家康に歎きけるを、廚の事をば沙汰しける松下常慶を召して、今少し鹽加減よくすべしと諭しゝかば、此の老人主が側に進み寄りて、何事をかさゝやきしに、主は言葉なくして唯笑ひけるを、彼れ其の儘退きしとなん。

「老人ささやきしは、『今の如く鹽辛く漬けさせ候てさへ、朝夕の用夥しきものを、女房達の好みの如く、鹽加減いたし候はゞ、何ほどの費用に及ぶべきも計りがたし。女房達の申す詞など聞し召さぬ様にて、わたらせ給ふこそ然るべけれ。』とは曰ひしなりけり。常慶も鹽辛き男なれば、家康が笑ひし腹加減も大に鹽辛かりけり。天下を取りし後だに此くの如し。三河の事想ふべし。

（中略）

「近年日課を六萬遍唱へ候事、老人いらぬ過役にて候。遍數へらし候様に、皆々申し候。成程遍數をへらし候へば、樂に成り候得共、幼少より戰國に生れ、多くの人を殺し候得ば、せめて

罪ほろぼしにもなり候半。且年若より一日も隙に暮したる事なき身故、何ぞの業を致度候得ども、それもいらぬ事故、念佛を日々の稽古事の樣に致し候ゆへ、毎日朝起いたし夜もはやくは休不申、おこたらぬやうにこゝろ懸候事。夫故食事の中りもなく健にて、念佛の影と存候』と言へるを看ても、裏面の行跡に大に放縱の振舞なかりしは察すべし。但し彼の秀吉すら「女に心不レ可レ免」と戒めたれば、家康が清淨潔白の念佛談も、曾て一時に數人の侍妾を設け置きし覺えある男の言と識るべし。人を殺しゝ罪ほろぼしの外に、言ひ難き懺悔の珠數をは繰らざりしにや。徒士の者奥の女中に文を送りしとて、徒士頭松平若狹守改易の罪に處せられきと傳ふれば、奥向の規律の嚴正なりしを窺ふべし。亦窮屈なる規則の内にても、主人には之れを潜りて融通の道ありしを忘るべからず。三河に在りし頃は特に何事も手輕なりしなるべし。家康年積みて處世の道に熟しては、（中略）

「おのれ常に老臣共の衆評を聽きて、一人に權を占めさせじと努めし跡は、歷々として史上に殘りけるが、表の政治に用ゐし此筆法は、奥の女中を制御するにも應用して、一人の女に寵を專にさせじと抑えしは疑あらず。十六人の子を擧げし十人の妻妾、二人より多くを產みし者なかりしは、深き仔細ありぬるにや。強ち偶然の事のみにあらざるべし。」（胡麻點は原文のを保存したのである。）

この徳川家康は女色を愛する老爺たるばかりか、産兒制限をも行ふ政治家である。これは明らかに三百年來、我々の見慣れた家康ではない。我々の見慣れた家康よりもはるかに人間らしい家康である。はるかに人間らしい、——諸君は或は僕の言葉の平凡過ぎるのに微笑するであらう。「人間らしい」と云ふ言葉は勿論非凡でも何でもない。あらゆる新刊の小說や戲曲は必ずその廣告の中に「人間らしい苦しみ」とか「人間らしい生活」とか、人間らしい萬事を賣りものにしてゐる。が、それらの小說や戲曲は果してどの位廣告通り、人間らしい何ものかを捉へてゐるであらうか？　殊に英雄の傳記の作者は無邪氣なる英雄崇拜者でなければ、古色蒼然たるモオラリストである。成程彼等の或者は人間らしさを說いてゐるかも知れない。しかし彼等の人間らしさも實際彼等の吹聽するやうに、人間らしいかどうかは疑問である。彼等はいつも嚴然と諸君にかう云ふであらう。——「英雄も勿論凡人ではない。が、神には生れない以上、やはり凡人たる半面をも具へてゐたことは確かである。すると我々の目の前に何の某と云ふ人物を立たせ、その何の某の英雄たることを認めさせる爲には、凡人たらざる半面を指摘すると同時に凡人たる半面をも指摘しなければならぬ。在來の傳記の英雄に人間らしさの缺けてゐるのはかう云ふ用意の足りぬ爲である。………」

けれどもこれだけの用意さへすれば、果して彼等の云ふやうに、人間らしい英雄を示し得るで

あらうか？　たとへば諸君の輕蔑する「漢楚軍談」を披いて見るが好い。「漢楚軍談」の漢の高祖は秦の始皇の夢に入つたり、白帝の子たる大蛇を斬つたり、凡人ならざる半面を大いに示してゐるかと思へば、女樂を好んだり、士に傲つたり、凡人に劣らぬ半面をもやはり大いに示してゐる。しかし「漢楚軍談」の漢の高祖に王者の眞面目を發見するものは三尺の童子ばかりと云はなければならぬ。もう一つ次手に例を擧げれば、諸君の「漢楚軍談」よりも常に一層信用せぬ歷史、——新聞の記事を讀んで見るが好い。新聞の記事の大臣も民意を體したり、憲政を擁護したり、凡人たらざる半面を大いに示してゐるかと思へば、譃をついたり、金を盜んだり、大凡下たる半面さへやはり大いに示してゐる。が、新聞の記事の大臣に英雄の眞面目は少時問はず、凡人の眞面目さへ發見するものは三尺の童子——ではないにもしろ、六尺の童子ばかりと云はなければならぬ。すると彼等の云ふやうに、凡人たらざる半面と共に凡人たる半面をも指摘することは少しも英雄の英雄たる所以を明らかにしない道理である。彼等はこの道理にも頓着せず、神經衰弱に罹つたエホバのやうに彼等の所謂人間らしい英雄なるものを創造した。その結果はどうだつたか？　山積する彼等の傳記の中から我々の目の前に浮んで來るものは、丁度兩頭の蛇のやうに凡人たらざる半面と凡人たる半面とを左右へ出した、滑稽なる精神的怪物である。英雄崇拜者の英雄は英雄よりも寧ろ神であらう。モオラリストの英雄も餘りに善玉でないとすれば、餘りに悪玉であるか

も知れない。しかし彼等の英雄は或統一を保つてゐる限り、人間らしいとは云ひ難いにもしろ、人形らしい可愛らしさを示してゐる。けれども一部の傳記の作者の所謂人間らしい英雄はかう云ふ可愛らしささへ示してゐない。就中彼等の創造した征夷大將軍徳川家康は最も不快なる怪物である。聖アントニウスを誘惑した、如何なる地獄の眷屬よりも一層不快なる怪物である。

湖州の徳川家康は是等の怪物に比べずとも、おのづから人間らしい英雄である。この相違は何處から來たか？　湖州は家康を論ずるのに、凡人たらざる半面と共に凡人たる半面をも指摘したのではない。唯凡人たる半面と凡人たらざる半面との融合する一點を指摘した、――と云ふよりも寧ろ英雄の中に默々と生を營んでゐる人間全體を指摘したのである。これは言葉の穿鑿だけすれば、凡人たらざる半面と共に凡人たる半面をも指摘するのと毫釐の相違に過ぎないかも知れたい。が、事實は千里の山河を隔絶したにもひとしい相違である。凡人たらざる半面と共に凡人たる半面をも指摘するのは凡庸なる作者にも成し得るであらう。しかし神彩奕々たる人間全體を指摘するのは一代の才人を待たなければならぬ。湖州の前人を凌駕する所以はこの人間全體を指摘した烱眼に存してゐる。湖州自身も史上の人物に人間全體を發見することは絶えず工夫を凝らしたものらしい。たとへば明治二十七八年頃の「隨感錄」と題する隨筆は次の一節を錄してゐる。

「一書を讀て、心緒忽然として古人に觸れ、靜夜月を仰ぎて、感慨湧然として古人に及ぶ。同情の

念沸々として起る。是時彼を觀察し、彼を沈思す、大抵誤まらざるを得。」

更に略同時代に成つた「傳記私言數則」は悉このことに及んでゐる。

「事實に依りて心術を悟り、心術を悟りて更に事實を解す。然れども其間往々矛盾するものあり。人は外界の事情に制せられて、己れの意志を枉げて心ならざる事を行ふ。此隱祕の關繫を說明するを至要とす。

「人は短所と長所との縫合物なり。一の長所あれば、必ず之れに短所伴ふ。短所を視れば、乃ち其長所を知るべし。君子は其過を見て其仁を知る、亦此の意なり。能と不能とを明識するもの、始めて人を談ずべし。

「人の世に立つ、各自皆一個の位地を占む。之を見るもの同等の地位に立ちて見るを要す。決して上より見るべからず、下より見るべからず。一鄕の人は一鄕の眼を以て見るべく、一國の人は一國の眼を以て見るべく、天下の人は天下の眼を以て見るべし。」

是等の言葉は湖州によれば、いづれも史上の人物に對する觀照の態度を述べたものである。けれども湖州は古人にばかり、かう云ふ觀照を加へたのであらうか？　いや、德川家康をも冷眼に眺めた大久保湖州に唯史上の人物にばかり、かう云ふ觀照を加へろと云ふのは出來ない相談ではないであらうか？　水谷不倒の湖州君小傳によれば、「君、（中略）人に接するや寛容にして能く客

を遇す。故に君の門を叩くもの日に絶えず。而して客の種類を問へば、概ね未來に屬する政治家、文學者、詩人、美術家、史家、哲學者、事業家等あり。」だつたさうである。未來に屬する政治家、文學者、詩人、美術家、史家、哲學者、事業家などと云ふものは勿論書生だつたのに違ひない。湖州は必ず是等の人々に獨特の炯眼を注いだのであらう。同時に又是等の人々の中に、貪欲なる、奸譎なる、野卑なる、愚昧なる、放漫なる、が、常に同情を感ずる人間全體を見出したのであらう。僕の信ずる所によれば、湖州の湖州たる所以は德川家康と云ふ英雄の中に人間全體を發見する前に、この所謂未來に屬する政治家、文學者、詩人、美術家、史家、哲學者、事業家などの一群の中に人間全體を發見したことである。大いなる支那の賢人は「古きを溫ね、新らしきを知る」と云つた。成程神功皇后の古きを溫ね奉ることは勇敢なる婦人參政權論者の新らしきを知ることになるかも知れない。しかし又逆に新らしきを溫ね、古きを知ることも確かである。のみならず新らしきも知らない癖に、古きばかり溫ねるのは新古ともに茫々たる魔境に墮ちることも確かである。不幸にも當世の傳記の作者は大抵この魔境に安住した。彼等は史上の人物を知つてゐると信じてゐる。が、彼等自身をはじめ、彼等の父母妻子の人間たることさへ一度も眞に知らずに來た彼等に、模糊たる史上の人物はどの位心臟を窺はせるであらうか？　湖州はかう云ふ出發點から、旣に彼等とは反對の道へ精進の歩みを運んでゐる。湖州の德川家康の人間らしい英雄となり

得たのも偶然ではないと云はなければならぬ。

「家康(中略)、おのが庶子於義丸を遣し、石川數正が子の勝千代と、作左衛門が子の仙千代(おせんの事)とを附添へて都に登しぬ。(僕曰、小牧山の戰後、都にゐる秀吉に事實上の人質を出した時である。)於義丸は卽ち黄門秀康の幼稱にして、家婢お萬の生む所、家康之を愛して孕みしかば、嫉妬深き築山夫人の怨を避けて、本多豐後守廣孝が家老本多半右衛門が許に忍びしを、作左衛門密かに家康に訴へて之を營救せしなりとぞ。(中略)生まれし兒は作左またおのが子として之れを養ひ、三歳のとき、兄信康この愛弟を連れて家康に見え、始めて實の父の膝に抱かれぬ。之れを尤も喜びしは、父よりも兄よりも、將た其の幼兒よりも、實は他人の作左衛門なるべし。(中略)

「許多の武士味方の大家に遣はすめでたき養子と喜ばで、一時和したる敵國に遣はす質子なりと思ひ做しゝ中にも、作左衛門特に此念強かるべく、許さぬ仇敵の詐術と見ては、縱ひ戰國の世の習ひながらも、豪鋭の性いかで一冷笑に附し去るべき。而かも今は此の作左が身に、己れ多年養ひ進らせし公子をば、そが犧牲に供せざるべからざる難題、直接に降り懸りぬ。(中略)鯁諤の作左を首肯せしめしには、家康必ず若干の苦勞ありしなるべく、作左も亦己れを抑へて、もだし難き君命を奉ぜしには、千鈞の力をもて勇斷せしなるべし。而して僅に十一歳の幼者をば、識らぬ人に托して遣るに忍びで、遂におのが一人の愛兒をもさし出だして、其の行を共にせしむるに至

りき。奉公の衷心亦何ぞ美なるや。離別の際作左が武骨の哀情眼前に髣髴たり。是より作左が心は常に上方に馳せて、二人が身の上に到ると共に、秀吉が振舞を注目することも、一層嚴刻となりしなるべし。(中略)

「さる程に(中略)德川の家中にては、彌増す敵意と猜念とをもて、上方の空を眺めつゝ、變心測られぬ秀吉、いつ攻め來んも知り難しと、衆情枕をさへ安んぜざりし折柄、とり〴〵の流言傳はり、中にも秀吉於義丸等を殺すべしとの風聞は、痛く一家の人心をぞ刺しにける。(中略)家康は流石に忍刻の人、冷然として言へらく、『秀康今は我子にあらで、秀吉が子なり。之れを殺すは秀吉の不義なり。殺さば殺せ。』と。想ふに秀吉往々威喝を用ゐて人を屈するを慣術とすれども、亦敢て籠裡の小禽をば無益に殺生せん暴人にはあらじ。家康の智いかで之れを識らざることのあるべき。其の自若として無慙の蜚說に意を留めざるは、恐らくは此の邊の洞察もあるに依るなるべし。されど作左はまた斯くの如く冷酷に看過する能はずして、以爲へらく、『いや〳〵仙千代丸都におきて、人の疑うけん事も詮なし。たゞひとりある子、うしなはんも不便なり。』と。直に母の大病に言よせて、永訣のためにとて呼び還しぬ。蓋し作左我が子の愛情もさることながら、おのが多年育て上げし公子が身危しと聽きては、其の痛傷の感いかで仙千代を念ふにも劣るべき。既に秀吉に與へし上は、今更これを取返さんやうも無けれど、其の儘都に置きては、不安の想ひに

得堪へで、仙千代が身に先だちて、必ず家康に公子が事を訴へしなるべく、坐上無道の秀吉を罵りし憤慨の豪氣も察せられたり。家康も於義丸は兎も角、仙千代招還せんことは、作左が老情を憫みて、喜びて許しゝなるべく、母が大病とは圓滑に聞こえて、否み難き好辭柄なりけり。猛き作左も子さへ還らばと、斯くは穩便に言ひ倣しゝなるべし。腹黑き主人の注意もありなん乎。且つ夫れ仙千代と共に隨ひ行きし勝千代が父は、彼の秀吉が覺よき石川伯耆守にして、德川の家中には兼ねてより、竊に其の貳心を疑へる者さへありければ、作左は素より忠侃一邊の男なれど、當時雜說紛々の折柄、伯耆守と共に、子思ひの作左が心底も動かずやと、家中の噂にも上りしことあるべく、疚しからぬ腹を揣摩せられて、潔白を傷けんも口惜しと、さてこそ思へば待てぬ作左衛門、急に疑の種をば引き戾すに至りしなるべけれ。」

これは本多作左衛門と共に秀吉に雌伏する家康を論じた「鬼作左」の中の一節である。諸君は今もなほ大久保湖州を明治の才人の一人に數へる僕の蒙を笑殺するであらうか？ 笑殺するとしたいとは勿論諸君の隨意である。唯僕は前に擧げた「傳記私言數則」の中に、「天自ら言はず、人をして言はしむ。されど人の聲は、必ずしも天の聲と一致せず。人の褒貶毀譽は、數々天の公裁と齟齬す。人世尤も憐むべきは、生前天の聲を聞かずして死に入るものと爲す。後人は彼れが爲めに天に代りて死後の知己たらざるべからず。」の語を讀んだ時、我々の忘れてゐた湖州の爲に愴然の

感を深うした。僕の文章は何であるにもしろ、嚴粛なる天の聲などを代辯しないことは確かである。いや、得々と諸君の前に僕の發見を誇らうとする人の聲に外ならぬかも知れない。しかし僕の文章を機會に、正眞正銘の天の聲の「家康と直弼」を讃美することは必しもないとは云ひ難いであらう。して見れば僕の文章は中道に倒れた先達の爲にも多少の回向にはなる筈である。云はば僕は孤墳の所在を出來るだけ叮嚀に指し示した。この寂しい孤墳の前に、人々の禮するのはいつのことであらう？　更に又無數の花束の手向けられるのはいつのことであらう？

四　木村巽齋

今年の春、僕は丁度一年ぶりに京都の博物館を見物した。が、生憎その時は元來酸過多の胃嚢が一層異狀を呈してゐた。韶を聞いて肉味を忘れるのは聖人のみに出來る離れ業である。僕は駱駝のシャツの下に一匹の蚤でも感じたが最後、たとひ坂田藤十郎の演ずる「藤十郎の戀」を見せられたにしろ、到底安閑と舞臺の上へ目などを注いでゐる餘裕はない。況や胃嚢に押し浸した酸はあらゆる享樂を不可能にしてゐた。のみならず當時の陳列品には餘り傑作も見えなかつたらしい。僕はまづ佛畫から、陶器、佛像、古墨蹟と順々に惡作を發見して行つた。殊に龔半千か何かの掛

物に太い字のべたべた並んでゐるのは殆ど我々胃病患者に自殺の誘惑を與へる爲、筆を揮つたものとしか思はれなかつた。

その内に僕の迷ひこんだのは南畫ばかりぶら下げた陳列室である。この室も一體にくだらなかつた。第一に鐵翁の山巒は輕石のやうに垢じみてゐる。第二に藤本鐵石の樹木はフオクのやうに殺氣立つてゐる。第三に浦上玉堂の瀑布は琉球泡盛のやうに煮え返つてゐる。第四に――兎に角南畫と云ふ南畫は大抵僕の神經を苛いらさせるものばかりだつた。僕は顏をしかめながら、大きい硝子戸棚の並んだ中を殉教者のやうに歩いて行つた。すると僕の目の前へ奇蹟よりも卒然と現れたのは小さい紙本の山水である。この山水は一見した所、筆墨縱横などと云ふ趣はない。寧ろ何處か素人じみた罷軟の態さへ帶びてゐる。其處だけ切り離して考へて見れば、玉堂鐵翁は姑く問はず、たとへば小室翠雲にも數歩を讓らざるを得ないかも知れない。しかし山石の苔に青み、山杏の花を發した景色は眇たる小室翠雲は勿論、玉堂鐵翁も知らなかつたほど、如何にも駘蕩と出來上つてゐる。僕はこの山水を眺めた時、忽ち厚い硝子越しに脈々たる春風の傳はるのを感じ、更に又胃嚢に漲つた酸の大潮のやうに干上るのを感じた。木村巽齋、通稱は太吉、堂を蒹葭と呼んだ大阪町人は實にこの山水の素人作者である。

巽齋は名は孔恭、字は世肅と云ひ、大阪の堀江に住んでゐた造り酒屋の息子である。巽齋自身

「余幼年より生質軟弱にあり。保育を專とす」と言つてゐるのを見ると、兎に角體は脾弱かつたらしい。が、少數の例外を除けば、大抵健全なる精神は不健全なる肉體に宿るやうに、巽齋の精神も子供の時から逞しい力を具へてゐた。其處へ幸福なるブウルヂョアの家庭は教養の機會を與へるのに殆ど何ものをも吝まなかつた。今試みに巽齋自身のその間の消息をもの語つた傳記の數節を抄記すれば、――

「余幼年より生質軟弱にあり。保育を專とす。家君余を憫んで草木花樹を植うることを許す。親族に藥舖の者ありて物産の學あることを話し、稻若水、松岡玄達あることを聞けり。十二三歲の頃京都に松岡門人津島恒之進、物産に委しきことを知り、此の頃家君の京遊に從つて、始めて津島先生に謁し、草木の事を聞くこと一回。翌年余十五歲、家君の喪にあひ、十六歲の春余家母に從つて京に入り、再び津島氏に從學し、門人と爲ることを得たり。」

「余五六歲の頃より、頗る畫事を解き、我鄕の大岡春卜、狩野流の畫に名あり。因つて從つて學ぶ。春卜嘗て芥子園畫傳に傚ひ、明人の畫を模寫し、「明朝紫硯」と云ふ彩色の繪本を上木す。余之れを見て始めて唐畫の望あり。此頃家君の友人、和洲郡山柳澤權太夫（即ち柳里恭である。）每每客居す。因つて友人に托し、柳澤の畫を學ぶ。（中略）十二歲の頃、長崎の僧鶴亭と云ふ人あり。浪華に客居す。長崎神代甚左衞門（即ち熊斐である。）の門人なり。始めて畿内に南蘋流の弘まり

たるは此の人に始まれり。余從つて花鳥を學び、池野秋平（即ち大雅である。）に從つて山水を學ぶ。」

「余十二歳の比、親族兒玉氏片山忠藏（即ち北海である。）の門人たるを以て、余を引いて名字を乞ふ。片山余が名を命じ、名鵠字は千里とす。其の後片山氏京に住す。余十八九歳の頃片山再び浪華に下り、立賣堀に住す。余從つて句讀を受く。四書六經史漢文選等を讀むことを得たり。」

是等の數節の示してゐる通り、巽齋の學藝に志したのは弱冠に滿たない時代であり、巽齋の師事した學者や畫家も大半は當時の名流である。そればかりではない。南蠻臭い新知識に富んだ物産の學に傾倒したのは勿論、一たび「明朝紫硯」を見るや、忽ち長江の蘆荻の間に生じた南宋派の畫法に心醉したのも少年らしい情熱を語つてゐる。

この聰明なる造り酒屋の息子はかう云ふ幸福なる境遇のもとに徐ろに自己を完成した。その自己は大雅のやうに純乎として純なる藝術家ではない。寧ろ人に師たるの藝十六に及んだと傳へられる柳里恭に近いディレッタントである。が、柳里恭のディレッタンティズムは超凡の才力を負うてゐると共に、デカダンスの臭味もない譯ではない。少くとも隨筆「獨寢」の中に男子一生の學問をも傾城の湯卷に換へんと言つた通人の面目のあることだけは兎も角も事實と言はたければならぬ。しかし巽齋のディレッタンティズムは變通自在の妙のない代りに、如何にも好箇の讀書人

らしい清白なる風格を具へてゐる。柳里恭は乞食の茶を飲んだり、馬上に瞽女の三味線を彈いたり、あらゆる奇行を恣にした。或は恣にしたと傳へられてゐる。けれども巽齋に關する傳說は少しも常軌を逸してゐない。まづ世人を驚かしたと云ふのも「江戶の筆工鳳池堂のあるじ浪華に遊びしところ、蒹葭堂を訪ひしに、しばし待たせ給はれ、その中の慰みにとて一帖を出せり。いかなるものぞと開き見れば、江戶の筆工の家號をしるしたる名紙といふものを一枚の遺漏もなく集めたりしとぞ」（山崎美成）と云ふ程度の逸話ばかりである。尤もこの逸話にしても「その好事の勝れたる想像すべし」と云ふより外に考へられない次第ではない。巽齋は明らかに鳳池堂の主人へ無言の一拶を與へてゐる。更に無造作に言ひ換へれば、アルバムに滿載した筆屋の名刺を「どうだ？」とばかりに突きつけてゐる。その邊は勿論辛辣なる機鋒を露はしてゐるのに違ひない。しかし柳里恭に比べれば、——殊に「獨寢」の作者たる柳里恭に比べれば、はるかに溫乎たる長者の風を示してゐることは確かである。

「余幼年より絕えて知らざること、古樂、管絃、猿樂、俗謠、碁棋、諸勝負、妓館、聲色の遊、總て其の趣を得ず。況や少年より好事多端暇なき故なり。勝負を好まざるは余頤養の意あればなり。」

巽齋の所謂娛樂なるものに少しも興味のなかつたことはこの一節の示す通りである。

「余が嗜好の事專ら奇書にあり。名物多識の學、其他書畫碑帖の事、余微力と雖も數年來百費を省き收る所書籍に不足なし。過分と云ふべし。其の外收藏の物、本邦古人書畫、近代儒家文人詩文、唐山眞蹟書畫、本邦諸國地圖、唐山蠻方地圖、草木金石珠玉點介鳥獸、古錢古器物、唐山器物、蠻方異產の類ありと雖も、皆考索の用とす。他の艶飾の比にあらず。」

巽齋は是等のコレクションを愛し、蒹葭堂に訪れる遠來の客に是等のコレクションを示すことを愛した。いや、コレクションと云ふよりも寧ろ宛然たる博物館である。年少の友だつた田能村竹田の「收藏せる法書、名畫、金石、彜鼎、及び夷蠻より出づる所の異物奇品棟宇に充積す」と言つたのも必しも誇張ではなかつたであらう。巽齋は是等のコレクションを「皆考索の用とす」と言つた。唐山蠻方の地圖の中には歐羅巴亞米利加の大陸もはるかに横はつてゐた筈である。いや、蠻方異產の類の中には更紗だの、銅版畫だの、虫眼鏡だの、「ダラアカ」と云ふ龍の子のアルコオル漬だの、或は又クレオパトラの金髮だのも（勿論これは贋物である）交つてゐたのに違ひない。是等のコレクションを「考索した、」この聰明なるディレツタントは不可思議なる文明の種々相の前に、どう云ふ感慨を催したであらうか？　少くとも世界の大の前にどう云ふ夢を夢みたであらうか？

「京子浪華の地、古より藝園に名高きもの輩出し、海內に聞ゆるものありといへども、その該博

精通。蒹葭堂の如きもの少し。（中略）曾て長崎に遊歴せしところ、唐山の風俗を問ひこゝろみ、歸りて後常に黄檗山にいたり、大成禪師に隨ひ遊べることありしに、人ありて唐山の風俗を禪師に問ふものあり。禪師蒹葭堂をさして、この人よくこれを知れり。吾れ談を費すに及ばずといはれたりき。禪師はもと唐山の人にて、投化して黄檗山に住せしなり。」（山崎美成）

「この人よくこれを知れり。吾れ談を費すに及ばず」の言葉は讃辭かどうか疑問である。或は生死の一大事をも外に、多聞を愛するディレッタントへ一棒を加へたものだつたかも知れない。しかも一棒を加へられたにもせよ、如何に巽齋の支那風に精通してゐたかと云ふことは疑ひを容れない事實である。巽齋は云はば支那に關する最大の權威の一人だつた。支那の畫を愛し、支那の文藝を愛し、支那の哲學を愛した時代のかう云ふ蒹葭堂主人の多識に聲譽を酬いたのは當然である。果然海内の文人墨客は巽齋の大名の擧がると共に、續々とその門へ集まり出した。柴野栗山、尾藤二洲、古賀精里、賴春水、桑山玉洲、釧雲泉、立原翠軒、野呂介石、田能村竹田等は、悉その友人である。殊に田能村竹田は、——大いなる藝術家といふよりも寧ろ善い藝術家だつた竹田はこの老いたるディレツタントの前に最も美しい敬意を表した。

「余甫めて冠して、江戸に東遊し、途に阪府を經、木世肅（卽ち巽齋である。）を訪はんと欲す。偶々人あり、余を拉して、將に天王寺の浮屠に登らんとす。日、豐聰耳王の創むる所にして、年

を閲すること既に一千餘、唯魯の靈光の巍然として獨り存するのみならずと。余肯かず。遂に世肅を見る。明年西歸し、再び到れば、卽ち世肅已に沒し、浮屠も亦焚滅せり。」

巽齋はかう云ふ名聲のうちに悠々と六十年の生涯を了した。この六十年の生涯は無邪氣なる英雄崇拜者には或は平凡に見えるかも知れない。巽齋の後代に傳へたものは名高い蒹葭堂コレクシヨンを除けば、僅かに數卷の詩文集と數幀の山水とのあるばかりである。しかし大正の今日さへ、帝國大學圖書館の藏書を平然と灰燼に化せしめた、恬淡無欲なる我等の祖國は勿論蒹葭堂コレクションをも無殘なる散佚に任せてしまつた。アルコオル漬のダラアカは何處へ行つたか？　大雅や柳里恭の畫は何處へ行つたか？　クレオパトラの金髮は、――そんなものはどうなつても差支ない。が、畢竟蒹葭堂主人は寥々たる著書と畫との外に何も傳へなかつたと言はなければならぬ。何も？――いや、必しも「何も」ではない。豐富なる蒹葭堂コレクションは――殊にその萬卷の藏書は當代の學者や藝術家に大いなる幾多の先例を示した。是等の先例の彼等を鼓舞し、彼等を新世界へ飛躍せしめたのは丁度ロダンだのトルストイだの或は又セザンヌだのの我々を刺戟したのも同じことである。このペエトロン兼蒐集家たる木村巽齋の恩惠もやはり後代に傳へた遺產、――謹嚴なる前人の批判によれば、最大の遺產に數へなければならぬ。けれども冷酷に言ひ放せば、それは丸善株式會社の我々に與へた恩惠と五十歩百歩の間にあるものである。少くとも所謂

趣味に富んだ富豪或は富豪の息子の我々に與へ得る恩惠と五十歩百歩の間にあるものである。僕はかう云ふ恩惠の前に感謝の意を表するのを辭するものではない。しかし唯その爲にのみ蒹葭堂主人を讚美するのは――第一に天下のペエトロンなるものを己惚れさせるだけでも有害である！
もう一度便宜上繰り返すと、巽齋の後代に傳へたものは僅かに數卷の詩文集と數幀の山水とのあるばかりである。もし蒹葭堂コレクションの當代に與へた恩惠の外に、巽齋の眞價を見出ださうとすれば、どうしても是等の作品に――少くともちよつと前に擧げた一幀の春山圖に立ち歸らなければならぬ。あの畫中に磅礴する春はたとへば偉大なる大雅のやうに、造化を自家の鍋の中に溶した無上の甘露味には富んでゐない。と云つて又蕪村のやうに、獨絕の庖丁を天地に加へた俊爽の風のないことも確かである。が、少しも凡庸ではない。丁度大きい微笑に似た、うらうらと明るい何ものかはおのづから紙の上に溢れてゐる。僕はその何ものかの中に蒹葭堂主人の眞面目を、――靜かに人生を樂しんでゐるディレツタントの魂を發見した。たとひ蒹葭堂コレクションは當代の學者や藝術家に寸毫の恩惠を與へなかつたとしても、そんなことは僕の問ふ所ではない。僕は唯このディレツタントに、――如何に落寞たる人生を享樂するかを知つてゐた、風流無双の大阪町人に親しみを感ぜずにはゐられないのである。
我々はパスカルの言つたやうに、ものを考へる蘆である。が、實はそればかりではない。一面

にはものを考へると共に、他面には又しつきりなしにものを感ずる蘆である。尤も感ずると斷らないにもせよ、風にその葉をそよがせるのは風を感ずるのと似てゐるであらう。しかし我々のものを感ずるのは必しもそれほど機械的ではない。いや、黄昏の微風の中に萬里の貿易風を感ずることも案外多いことは確かである。たとへば一本の絲杉は微風よりも常人を動かさないかも知れない。けれども天才に燃えてゐたゴツホはその一本の絲杉にも凄まじい生命を感じたのである。この故に落寞たる人生を十分に享樂する爲には、微妙にものを考へると共に、微妙にものを感じなければならぬ。或は腦髓を具へてゐると共に、神經を具へてゐなければならぬ。果然古來のディレツタントは多少の學者であると共に、多少の藝術家であるのを常としてゐた。物產の學を究めると共に、畫道に志した巽齋も正にかう云ふ一人である。微妙にものを考へると共に、微妙にものを感ずる蘆、――さう言へば巽齋は不思議にも蒹葭堂主人と號してゐた！

しかし棘のない薔薇はあつても、受苦を伴はない享樂はない。微妙にものを考へると共に、微妙にものを感ずる蘆は卽ち微妙に苦しむ蘆である。この故に聰明なるディレツタントは地獄の業火を免れる爲に、天堂の莊嚴を捨てなければならぬ。更に手短かに言ひ換へれば、あらゆる惡徹底を避けなければならぬ。無邪氣なる英雄崇拜者は勿論かう云ふディレツタントの態度を微溫底とか何とか嘲るであらう。けれども微溫底に住するの可否は享樂的態度の可否である。享樂的態

度を否定するのは、――古來如何なる哲學と雖も、人生の使命を闡明するのに成功しなかつたことは事實である。昔はその不可なるを知つて、しかも仁を說いた孔丘さへ微溫底なる中庸を愛してゐた。今はカフエに出沒する以外に一事を成就しない少年までも灼熱底なる徹底を愛してゐる。が、それは兎も角も、貪慾に歡喜を求めるのは享樂を全うする所以ではない。巽齋も亦この例に洩れず、常に中庸を愛してゐた。巽齋自身行狀を記した一卷の「蒹葭堂雜錄」は如何にその心の秤の平衡を得てゐたかを示すものである。由來貧富のロマンティシズムほど文人墨客を捉へたものはない。彼等は大抵淸貧を誇るか、或は又豪奢を誇つてゐる。しかしひとり巽齋だけは恬然と儉素に安んじてゐた。

「余家君の餘資に因つて、每歲受用する所三十金に過ぎず。其の他親友の相憐を得るが爲めに、少しく文雅に耽ることを得たり。百事儉省にあらずんば、豈今日の業を成んや。世人は余が貲を知らず。豪家の徒に比す。余が本意にあらず。」

一年に三十兩の收入と言へば、一月に二兩二分の收入である。如何に寶曆明和の昔にもせよ、一月に二兩二分の收入では多錢善く買ふ訣にも行かなかつたであらう。しかもなほ文雅に耽つたばかりか、蒹葭堂コレクションさへ殘したのはそれ自身豪奢の俗惡なる所以を示してゐるものと言はなければならぬ。(生憎今は旅先にゐるから、參考する書物を持つてゐない。が、寶曆明和の

昔はざつと米一石に銀六十匁位の相場である。假に金一兩を銀四十匁位に考へた上、米價を標準に換算すれば、當時の一年に三十兩は僅かに今日の千圓未滿であらう。尤もこれは當推量以上に信用の出來る計算ではない。）

「寶曆六年余廿一歳、森氏を娶る。生質微弱にして余が多病を給するに堪へず。況や十年を歷と雖も、一子を產せず。故に家母甚だこれを愁ふ。明和二年家人に命じ、山中氏の女を娶り、給仕せしむ。（中略）三年を經て妻森氏明和五年冬一女を產す。又明和八年一女を產す。妾山中氏より妻の微質を助け、二女を憐愛す、故に妻妾反更和好にして嫌惡の事なし。」

儉素に安んじた巽齋の偏愛を避けたのは勿論である。恐らくは妻妾の妬忌しなかつたのも貞淑の爲ばかりではなかつたであらう。

「余弱冠より壯歳の頃まで、詩文を精究す。應酬の多に因つて贈答に勞倦す。況や才拙にして敏捷なること能はず。大に我が胸懷に快ならず。交誼に親疎あり。幸に不才に托し、限つて作爲せば、偶興の到にあひ、佳句を得て快樂の事とす。」

詩文は巽齋の愛する所である。しかも巽齋はその詩文にさへ、妄に才力を弄さうとしない。たとひ應酬の義理は缺いても、唯好句の嗒然と懷に入る至樂を守つてゐる。かう云ふ態度の窺はれるのは何も上に擧げた數節ばかりではない。巽齋の一生を支配するものは實にこの微妙なる節制

である。この己を抑へると共に己を恣にした手綱加減である。蒹葭堂主人の淸福のうちに六十年の生涯を了したのも偶然ではないと言はなければならぬ。

前にも度たび擧げた春山圖は老木や巨巖の横はつた奥へ一條の幽徑を通じてゐる。その幽徑の窮まる處は百年の雪に埋もれた無人の峯々に違ひない。天才と世に呼ばれるものはそれ等の峯々へ攀づることを辭せない勇往果敢の孤客である。百年の雪を踏破することは勿論千古の大業であらう。が、崖花の發したのを見、澗水の鳴るのを聞きながら、雲と共に徂來するのもやはり一生の快事である。僕の愛する蒹葭堂主人はこの寂寞たる春山に唯一人杖を曳いて行つた。春山圖の逸趣に富んでゐるのも素より怪しむに足りないかも知れない。……

（大正十三年三月―七月）

芭蕉雜記

一　著書

芭蕉は一巻の書も著はしたことはない。所謂芭蕉の七部集なるものも悉門人の著はしたものである。これは芭蕉自身の言葉によれば、名聞を好まぬ爲だつたらしい。

「曲翠問、發句を取りあつめ、集作ると云へる、此道の執心なるべきや。翁曰、これ卑しき心より我上手なるを知られんと我を忘れたる名聞より出る事也。」

かう云つたのも一應は尤もである。しかしその次を讀んで見れば、おのづから微笑を禁じ得ない。

「集とは其風體の句句をえらび、我風體と云ふことを知らするまで也。我俳諧撰集の心なし。しかしながら貞德以來其人人の風體ありて、宗因まで俳諧を唱來れり。然ども我云所の俳諧は其俳諧にはことなりと云ふことにて、荷兮野水等に後見して『冬の日』『春の日』『あら野』等あり。」

芭蕉の說に從へば、蕉風の集を著はすのは名聞を求めぬことであり、芭蕉の集を著はすのは名聞を求めることである。然らば如何なる流派にも屬せぬ一人立ちの詩人はどうするのであらう？

且又この說に從へば、たとへば齋藤茂吉氏の「アララギ」へ歌を發表するのは名聞を求めぬことであり、「赤光」や「あら玉」を著はすのは「これ卑しき心より我上手なるを知られんと……」である！

しかし又芭蕉はかう云つてゐる。――「我俳諧撰集の心なし。」芭蕉の說に從へば、七部集の監修をしたのは名聞を離れた仕業である。しかもそれを好まなかつたと云ふのは何か名聞嫌ひの外にも理由のあつたことと思はなければならぬ。然らばこの「何か」は何だつたであらうか？

芭蕉は大事の俳諧さへ「生涯の道の草」と云つたさうである。すると七部集の監修をするのも「空」と考へはしなかつたであらうか？　同時に又集を著はすのさへ、實は「惡」と考へる前に「空」と考へはしなかつたであらうか？　寒山は木の葉に詩を題した。が、その木の葉を集めることには餘り熱心でもなかつたやうである。芭蕉もやはり木の葉のやうに、一千餘句の俳諧は流轉に任せたのではなかつたであらうか？　少くとも芭蕉の心の奧にはいつもさう云ふ心もちの潜んでゐたのではなかつたであらうか？

僕は芭蕉に著書のなかつたのも當然のことと思つてゐる。その上宗匠の生涯には印税の必要もなかつたではないか？

二　裝幀

芭蕉は俳書を上梓する上にも、いろいろ註文を持つてゐたらしい。たとへば本文の書きざまにはかう云ふ言葉を洩らしてゐる。

「書やうはいろいろあるべし。唯さわがしからぬ心づかひ有りたし。『猿蓑』能筆なり。されども今少し大なり。作者の名大にていやしく見え侍る。」

又勝峯晋風氏の教へによれば、俳書の装幀も芭蕉以前は華美を好んだのにも關らず、芭蕉以後は簡素の中に寂びを尊んだと云ふことである。芭蕉も今日に生れたとすれば、やはり本文は九ポイントにするとか、表紙の布は木綿にするとか、考案を凝らしたことであらう。或は又ウイリアム・モリスのやうに、ペエトロン杉風とも相談の上に、Typography に新意を出したかも知れぬ。

三　自釋

芭蕉は北枝との問答の中に、「我句を人に説くは我頬がまちを人に云がごとし」と作品の自釋を却けてゐる。しかしこれは當にならぬ。さう云ふ芭蕉も他の門人にはのべつに自釋を試みてゐる。時には大いに苦心したなどと手前味噌さへあげぬことはない。

「鹽鯛の齒ぐきも寒し魚の店。此句、翁曰、心づかひせずと句になるものを、自讚に足らずとな

り。又かまくらを生て出でけん初松魚と云ふこそ心の骨折人の知らぬ所なり。又曰猿の齒白し峯の月といふは其角なり。鹽鯛の齒ぐきは我老吟なり。下を魚の店と唯いひたるもおのづから句なりと宣へり。」

まことに「我句を人に說くは我頰がまちを人に云がごとし」である。しかし藝術は頰がまちほど、何びとにもはつきりわかるものではない。いつも自作に自釋を加へるバアナアド・ショウの心もちは芭蕉も亦多少は同感だつたであらう。

四　詩人

「俳諧なども生涯の道の草にしてめんどうなものなり」とは芭蕉の惟然に語つた言葉である。その他俳諧を輕んじた口吻は時時門人に洩らしたらしい。これは人生を大夢と信じた世捨人の芭蕉には寧ろ當然の言葉である。

しかしその「生涯の道の草」に芭蕉ほど眞劍になつた人は滅多にゐないのに違ひない。いや、芭蕉の氣の入れかたを見れば、「生涯の道の草」などと稱したのはポオズではないかと思ふ位である。「土芳云、翁曰、學ぶ事は常にあり。席に臨んで文臺と我と間に髮を入れず。思ふこと速に云出て、爰に至てまよふ念なし。文臺引おろせば即反故なりときびしく示さるる詞もあり。或時は

大木倒すごとし。鍔本にきりこむ心得、西瓜きるごとし。梨子くふ口つき、三十六句みなやり句などといろいろにせめられ侍るも、みな巧者の私意を思ひ破らせんの詞なり。」

この芭蕉の言葉の氣ぐみは殆ど劍術でも敎へるやうである。到底俳諧を遊戯にした世捨人などの言葉ではない。更に又芭蕉その人の句作に臨んだ態度を見れば、愈情熱に燃え立つてゐる。

「許六云、一とせ江戸にて何がしが歳旦びらきとて翁を招きたることあり。予が宅に四五日逗留の後にて侍る。其日雪降て暮にまゐられたり。其俳諧に、

人聲の沖にて何を呼やらん　　桃鄰
鼠は舟をきしる曉　　翁

予其後芭蕉庵へ參とぶらひける時、此句をかたり出し給ふに、予が云、さてさて此曉の一字ありがたき事、あだに聞かんは無念の次第也。動かざること、大山のごとしと申せば師起き上りて曰、此曉の一字聞きとどけ侍りて、愚老が滿足かぎりなし。此句はじめは

須磨の鼠の舟きしるおと

と案じける時、前句に聲の字有て、音の字ならず、依て作りかへたり、須磨の鼠とまでは氣を廻し侍れども、一句連續せざると宣へり。予が云、是須磨の鼠よりはるかにまされり。(中略)曉の一字つよきこと、たとへ侍るものなしと申せば、師もうれしく思はれけん。これほどに聞てく

れる人なし、唯予が口よりいひ出せば、肝をつぶしたる顏のみにて、善惡の差別もなく、鮒の泥に醉たるごとし、其夜此句したる時、一座のものどもに我遲參の罪ありと云へども、此句にて腹を醫せよと自慢せしと宣ひ侍る。」

知己に對する感激、流俗に對する輕蔑、藝術に對する情熱、――詩人たる芭蕉の面目はありありとこの逸話に露はれてゐる。殊に「この句にて腹を醫せよ」と大氣焰を擧げた勢ひには、――世捨人は少時問はぬ。敬虔なる今日の批評家さへ辟易しなければ幸福である。

「翁凡兆に告て曰、一世のうち秀逸三五あらん人は作者、十句に及ぶ人は名人なり。」

名人さへ一生を消磨した後、十句しか得られぬと云ふことになると、俳諧も亦閑事業ではない。しかも芭蕉の說によれば、つまりは「生涯の道の草」である！

「十一日。朝またまた時雨す。思ひがけなく東武の其角來る。(中略)すぐに病床にまゐりて、皮骨連立したまひたる體を見まゐらせて、且愁ひ、且悅ぶ。師も見やりたまひたるまでにて、ただただ涙ぐみたまふ。(中略)

鬮とりて菜飯たたかす夜伽かな　木節
皆子なり蓑蟲寒く鳴きつくす　乙州
うづくまる藥のもとの寒さかな　丈艸

吹井より鶴をまねかん初時雨　其角

「一一惟然吟聲しければ、師丈艸が句を今一度と望みたまひて、丈艸でかされたり、いつ聞いてもさびしをり整ひたり、面白し面白しと、しは嗄れし聲もて讃めたまひにけり。」

これは芭蕉の示寂前一日に起つた出來事である。芭蕉の俳諧に執する心は死よりもなほ強かつたらしい。もしあらゆる執着に罪障を見出した謠曲の作者にこの一段を語つたとすれば、芭蕉は必ず行脚の僧に地獄の苦艱を訴へる後ジテの役を與へられたであらう。

かう云ふ情熱を世捨人に見るのは矛盾と云へば矛盾である。しかしこれは矛盾にもせよ、たまたま芭蕉の天才を物語るものではないであらうか？　ゲエテは詩作をしてゐる時にはDaemonに憑かれてゐると云つた。芭蕉も亦世捨人になるには餘りに詩魔の飜弄を蒙つてゐたのではないであらうか？　つまり芭蕉の中の詩人は芭蕉の中の世捨人よりも力強かつたのではないであらうか？

僕は世捨人になり了せなかつた芭蕉の矛盾を愛してゐる。同時に又その矛盾の大きかつたことも愛してゐる。さもなければ深草の元政などにも同じやうに敬意を表したかも知れぬ。

五　未來

「翁遷化の年深川を出給ふ時、野坡問て云、俳諧やはり今のごとく作し侍らんや。翁曰、しばらく今の風なるべし。五七年も過なば一變あらんとなり。」

「翁曰、俳諧世に三合は出たり。七合は殘たりと申されけり。」

かう云ふ芭蕉の逸話を見ると、如何にも芭蕉は未來の俳諧を歷歷と見透してゐたやうである。又大勢の門人の中には義理にも一變したいと工夫したり、殘りの七合を拵へるものは自分の外にないと己惚れたり、いろいろの喜劇も起つたかも知れぬ。しかしこれは「芭蕉自身の明日」を指した言葉であらう。と云ふのはつまり五六年も經れば、芭蕉自身の俳諧は一變化すると云ふ意味であらう。或は又既に公にしたのは僅僅三合の俳諧に過ぎぬ、殘りの七合の俳諧は芭蕉自身の胸中に横はつてゐると云ふ意味であらう。すると芭蕉以外の人には五六年は勿論、三百年たつても、一變化することは出來ぬかも知れぬ。七合の俳諧も同じことである。芭蕉は妄に街頭の賣卜先生を眞似る人ではない。けれども絶えず芭蕉自身の進歩を感じてゐたことは確かである。――僕はかう信じて疑つたことはない。

六　俗語

芭蕉はその俳諧の中に屢俗語を用ひてゐる。たとへば下の句に徴するが好い。

洗馬にて

梅雨ばれの私雨や雲ちぎれ

「梅雨ばれ」と云ひ、「私雨」と云ひ、「雲ちぎれ」と云ひ、悉く俗語ならぬはない。しかも一句の客情は無限の寂しみに溢れてゐる。(成程かう書いて見ると、不世出の天才を褒め揚げるほど手數のかからぬ仕事はない。殊に何びとも異論を唱へぬ古典的天才を褒め揚げるのは！)から云ふ例は芭蕉の句中、枚擧に堪へぬと云つても好い。芭蕉のみづから「俳諧の益は俗語を正すなり」と傲語したのも當然のことと云はなければならぬ。「正す」とは文法の教師のやうに語格や假名遣ひを正すのではない。靈活に語感を捉へた上、俗語に魂を與へることである。

「じだらくに居れば涼しき夕かな。宗次。猿みの撰の時、宗次今一句の入集を願ひて數句吟じ侍れど取るべき句なし。一夕、翁の側に侍りけるに、いざくつろぎ給へ、我も臥なんと宣ふ。御ゆるし候へ、じだらくに居れば涼しく侍ると申しければ、翁曰、これこそ發句なれとて、今の句に作て入集させさせ給ひけり。」(小宮豐隆氏はこの逸話に興味のある解釋を加へてゐる。同氏の芭蕉研究を參照するが好い。)

この時使はれた「じだらくに」はもう單純なる俗語ではない。紅毛人の言葉を借りれば、芭蕉の情調のトレモロを如實に表現した詩語である。これを更に云ひ直せば、芭蕉の俗語を用ひたのは

俗語たるが故に用ひたのではない。詩語たり得るが故に用ひたのである。すると芭蕉は詩語たり得る限り、漢語たると雅語たるとを問はず、如何なる言葉をも用ひたことは辯ずるを待たぬのに違ひない。實際又芭蕉は俗語のみならず、漢語をも雅語をも正したのである。

佐夜の中山にて

命なりわづかの笠の下涼み

杜牧が早行の殘夢、小夜の中山にいたりて忽ち驚く

馬に寢て殘夢月遠し茶のけぶり

芭蕉の語彙はこの通り古今東西に出入してゐる。が、俗語を正したことは最も人目に止まり易い特色だつたのに違ひない。又俗語を正したことに詩人たる芭蕉の大力量も窺はれることは事實である。成程談林の諸俳人は、――いや、伊丹の鬼貫さへ芭蕉よりも一足先に俗語を使つてゐたかも知れぬ。けれども所謂平談俗話に錬金術を施したのは正に芭蕉の大手柄である。

しかしこの著しい特色は同時に又俳諧に對する誤解を生むことにもなつたらしい。その一つは俳諧を解し易いとした誤解であり、その二つは俳諧を作り易いとした誤解である。俳諧の月並みに墮したのは、――そんなことは今更辯ぜずとも好い。月並みの喜劇は「芭蕉雜談」の中に子規居士も既に指摘してゐる。唯芭蕉の使つた俗語の精彩を帶びてゐたことだけは今日もなほ力說せね

ばならぬ。さもなければ所謂民衆詩人は不幸たるウォルト・ホイツトマンと共に、芭蕉をも彼等の先達の一人に數へ上げることも憚らぬであらう。

七 耳

芭蕉の俳諧を愛する人の耳の穴をあけぬのは殘念である。もし「調べ」の美しさに全然無頓着だつたとすれば、芭蕉の俳諧の美しさも殆ど半ばしかのみこめぬであらう。

俳諧は元來歌よりも「調べ」に乏しいものでもある。僅僅十七字の活殺の中に「言葉の音樂」をも傳へることは大力量の人を待たなければならぬ。のみならず「調べ」にのみ執するのは俳諧の本道を失したものである。芭蕉の「調べ」を後にせよと云つたのはこの間の消息を語るものであらう。しかし芭蕉自身の俳諧は滅多に「調べ」を忘れたことはない。いや、時には一句の妙を「調べ」にのみ託したものさへある。

夏の月御油より出でて赤坂や

これは夏の月を寫す爲に「御油」「赤坂」等の地名の與へる色彩の感じを用ひたものである。この手段は少しも珍らしいとは云はれぬ。寧ろ多少陳套の譏りを招きかねぬ技巧であらう。しかし耳に與へる效果は如何にも旅人の心らしい、悠悠とした美しさに溢れてゐる。

年の市線香買ひに出でばやな

假に「夏の月」の句をリブレツトオよりもスコアのすぐれてゐる句とするならば、この句の如きは兩者ともに傑出したものの一例である。年の市に線香を買ひに出るのは物寂びたとは云ふものの、懷しい氣もちにも違ひない。その上「出でばやな」とはずみかけた調子は、宛然芭蕉その人の心の小躍りを見るやうである。更に又下の句などを見れば、芭蕉の「調べ」を驅使するのに大自在を極めてゐたことには呆氣にとられてしまふ外はない。

秋ふかき隣は何をする人ぞ

かう云ふ莊重の「調べ」を捉へ得たものは茫茫たる三百年間にたつた芭蕉一人である。芭蕉は子弟を訓へるのに「俳諧は萬葉集の心なり」と云つた。この言葉は少しも大風呂敷ではない。芭蕉の俳諧を愛する人の耳の穴をあけねばならぬ所以である。

八　同上

芭蕉の俳諧の特色の一つは目に訴へる美しさと耳に訴へる美しさとの微妙に融け合つた美しさである。西洋人の言葉を借りれば、言葉の Formal element と Musical element との融合の上に獨特の妙のあることである。これだけは蕪村の大手腕も畢に追隨出來なかつたらしい。下に擧

げるのは几董の編した蕪村句集に載つてゐる春雨の句の全部である。

春雨やものかたりゆく蓑と笠

春雨や暮れなんとしてけふもあり

柴漬や沈みもやらで春の雨

春雨やいざよふ月の海半ば

春雨や綱が袂に小提灯

西の京にばけもの栖みて久しくあれ果たる家有りけり。
今は其沙汰なくて、

春雨や人住みて煙壁を洩る

物種の袋濡らしつ春の雨

春雨や身にふる頭巾着たりけり

春雨や小磯の小貝濡るるほど

瀧口に灯を呼ぶ聲や春の雨

ぬなは生ふ池の水かさや春の雨

夢中吟

春雨やもの書かぬ身のあはれなる

この蕪村の十二句は目に訴へる美しさを、――殊に大和繪らしい美しさを如何にものびのびと表はしてゐる。しかし耳に訴へて見ると、どうもさほどのびのびとしない。おまけに十二句を續けさまに讀めば、同じ「調べ」を繰り返した單調さを感ずる憾みさへある。が、芭蕉はかう云ふ難所に少しも澁滯を感じてゐない。

春雨や蓬をのばす草の道

赤坂にて

無性さやかき起されし春の雨

僕はこの芭蕉の二句の中に百年の春雨を感じてゐる。「蓬をのばす草の道」の氣品の高いのは云ふを待たぬ。「無性さや」に起り、「かき起されし」とたゆたつた「調べ」にも柔媚に近い懶さを表はしてゐる。所詮蕪村の十二句もこの芭蕉の二句の前には如何とも出來ぬと評する外はない。兎に角芭蕉の藝術的感覺は近代人などと稱するものよりも、數等の洗練を受けてゐたのである。

九　畫

東洋の詩歌は和漢を問はず、屢畫趣を命にしてゐる。エポスに詩を發した西洋人はこの一有聲

の畫」の上にも邪道の貼り札をするかも知れぬ。しかし「遙知郡齋夜　凍雪封松竹　時有山僧來　懸燈獨自宿」は宛然たる一幀の南畫である。又「藏並ぶ裏は燕のかよひ道」もおのづから浮世繪の一枚らしい。この畫趣を表はすのに自在の手腕を持つてゐたのもやはり芭蕉の俳諧に見のがされぬ特色の一つである。

涼しさやすぐに野松の枝のなり
夕顔や醉て顔出す窓の穴
山賤のおとがひ閉づる葎かな

第一は純然たる風景畫である。第二は點景人物を加へた風景畫である。第三は純然たる人物畫である。この芭蕉の三樣の畫趣はいづれも氣品の低いものではない。殊に「山賤の」は「おとがひ閉づる」に氣味の惡い大きさを表はしてゐる。かう云ふ畫趣を表現することは蕪村さへ數歩を遜らなければならぬ。（度たび引合ひに出されるのは蕪村の爲に氣の毒である。が、これも芭蕉以後の巨匠だつた因果と思はなければならぬ。）のみならず最も蕪村らしい大和畫の趣を表はす時にも、芭蕉はやはり樂樂と蕪村に負けぬ效果を收めてゐる。

粽ゆふ片手にはさむひたひ髮

芭蕉自身はこの句のことを「物語の體」と稱したさうである。

十　衆道

芭蕉もシエクスピイアやミケル・アンジエロのやうに衆道を好んだと云はれてゐる。この談は必しも架空ではない。元祿は井原西鶴の大鑑を生んだ時代である。芭蕉も亦或は時代と共に分桃の契りを愛したかも知れない。現に又「我も昔は衆道好きのひが耳にや」とは若い芭蕉の筆を執つた「貝おほひ」の中の言葉である。その他芭蕉の作品の中には「前髪もまだ若草の匂かな」以下、美少年を歌つたものもない譯ではない。

しかし芭蕉の性慾を倒錯してゐたと考へるのは依然として僕には不可能である。成程芭蕉は明らかに「我も昔は衆道好き」と云つた。が、第一にこの言葉は巧みに諧謔の筆を弄した「貝おほひ」の判詞の一節である。するとこれをものものしい告白のやうに取り扱ふのは多少の早計ではないであらうか？　第二によし又告白だつたにせよ、案外昔の衆道好きは今の衆道好きではなかつたかも知れない。いや、今も衆道好きだつたとすれば、何も特に「昔は」と斷る必要もない筈である。しかも芭蕉は「貝おほひ」を出した寛文十一年の正月にやつと二十九歳だつたのを思ふと、昔と云ふのも「春の目ざめ」以後數年の間を指してゐるであらう。かう云ふ年頃の Homo-Sexuality は格別珍らしいことではない。二十世紀に生れた我我さへ、少時の性慾生活をふり返つて見れば、

大抵一度は美少年に恍惚とした記憶を蓄へてゐる。況や門人の杜國との間に同性愛のあつたなどと云ふ說は畢竟小說と云ふ外はない。

十一　海彼岸の文學

「或禪僧、詩の事を尋ねられしに、翁曰、詩の事は隱士素堂と云ふもの此道に深きすきものにて、人の名を知れるなり。かれ常に云ふ、詩は隱者の詩、風雅にてよろし。」

「正秀問、古今集に空に知られぬ雪ぞ降りける、人に知られぬ花や咲くらん、春に知られぬ花ぞ咲くなる、一集にこの三首を撰す。一集一作者にかやうの事例あるにや。翁曰、貫之の好める言葉と見えたり。かやうの事は今の人の嫌ふべきを、昔は嫌はずと見えたり。もろこしの詩にも左樣の例あるにや。いつぞや丈艸の物語に杜子美に專ら其事あり。近き詩人に于鱗とやらんの詩に多く有る事とて、其詩も、聞きつれど忘れたり。」

于鱗は嘉靖七子の一人李攀龍のことであらう。古文辭を唱へた李攀龍の芭蕉の話中に擧げられてゐるのは杜甫に對する芭蕉の尊敬に一道の光明を與へるものである。しかしそれはまづ問はないでも好い。差當り此處に考へたいのは海彼岸の文學に對する芭蕉その人の態度である。是等の逸話に窺はれる芭蕉には少しも學者らしい面影は見えない。今假に是等の逸話を當代の新聞記事

に改めるとすれば、質問を受けた芭蕉の態度はこの位淡泊を極めてゐるのである。——

「某新聞記者の西洋の詩のことを尋ねた時、芭蕉はその記者にかう答へた。——西洋の詩に詳しいのは京都の上田敏である。彼の常に云ふ所によれば、象徴派の詩人の作品は甚だ幽幻を極めてゐる。」

「……芭蕉はかう答へた。……さう云ふことは西洋の詩にもあるのかも知れない。この間森鷗外と話したら、ゲエテにはそれも多いさうである。又近頃の詩人の何とかイッヒの作品にも多い。實はその詩も聞かせて貰つたのだが、生憎すつかり忘れてしまつた。」

これだけでも返答の出來るのは當時の俳人には稀だつたかも知れない。が、兎に角海彼岸の文學に疎かつた事だけは確である。のみならず芭蕉は言詮を絶した藝術上の醍醐味をも嘗めずに、徒らに萬卷の書を讀んでゐる文人墨客の徒を嫌つてゐたらしい。少くとも學者らしい顏をする者には忽ち癇癪を起したと見え、常に諷刺的天才を示した獨特の皮肉を浴びせかけてゐる。

「山里は萬歳遲し梅の花。翁去來へ此句を贈られし返辭に、この句二義に解すべく候。山里は風寒く梅の盛に萬歳來らん。どちらも遲しとや承らん。又山里の梅さへ過ぐるに萬歳殿の來ぬ事よと京なつかしき詠や侍らん。翁此返辭に其事とはなくて、去年の水無月五條あたりを通り候に、あやしの軒に看板を懸けて、はくらんの妙藥ありと記す。伴ふどち可笑しがりて、くわくらん

(霍亂)の藥なるべしと嘲笑ひ候まま、それがし答へ候ははくらん(博覽)病が貰ひ候はんと申しき。」

これは一門皆學者だつた博覽多識の去來には德山の棒よりも手痛かつたであらう。(去來は儒醫二道に通じた上、「乾坤辯說」の飜譯さへ出した向井靈蘭を父に持ち、名醫元端や大儒元成を兄弟に持つてゐた人である。)なほ又次手に一言すれば、芭蕉は一面理智の鋭い、惡辣を極めた諷刺家である。「はくらん病が貰ひ候はん」も手嚴しいには違ひない。が、「東武の會に盆を釋教とせず、嵐雪是を難ず。翁曰、盆を釋教とせば正月は神祇なるかとなり。」――から云ふ逸話も殘つてゐる。兎に角芭蕉の口の惡いのには屢門人たちも惱まされたらしい。唯幸ひにこの諷刺家は今を距ること二百年ばかり前に腸加答兒か何かの爲に往生した。さもなければ僕の「芭蕉雜記」なども定めし得意の毒舌の先にさんざん飜弄されたことであらう。

芭蕉の海彼岸の文學に餘り通じてゐなかつたことは上に述べた通りである。では海彼岸の文學に全然冷淡だつたかと云ふと、これは中中冷淡所ではない。寧ろ頗る熱心に海彼岸の文學の表現法などを自家の藥籠中に收めてゐる。たとへば支考の傳へてゐる下の逸話に徴するが好い。

「ある時翁の物がたりに、此ほど白氏文集を見て、老鶯と云ひ、病蠶といへる言葉のおもしろければ、

黄鳥や竹の子藪に老を啼

さみだれや飼蠶煩ふ桑の畑

斯く一句を作り侍りしが、鶯は筍藪といひて老若の餘情もいみじく籠り侍らん。蠶は熟語をしらぬ人は心のはこびをえこそ聞くまじけれ。是は筵の一字を入れて家に飼ひたるさまあらんとなり。」

白樂天の長慶集は「嵯峨日記」にも掲げられた芭蕉の愛讀書の一つである。かう云ふ詩集などの表現法を換骨奪胎することは必しも稀ではなかつたらしい。たとへば芭蕉の俳諧はその動詞の用法に獨特の技巧を弄してゐる。

一聲の江に横たふや時鳥

立石寺（前書略）

閑さや岩にしみ入る蟬の聲

鳳來寺に參籠して

木枯に岩吹とがる杉間かな

是等の動詞の用法は海彼岸の文學の字眼から學んだのではないであらうか？　字眼とは一字の工の爲に一句を穎異ならしめるものである。例へば下に引用する岑參の一聯に徴するがよい。

孤燈燃客夢　寒杵擣郷愁

けれども學んだと斷言するのは勿論頗る危險である。芭蕉はおのづから海彼岸の詩人と同じ表現法を捉へたかも知れない。しかし下に擧げる一句もやはり暗合に外ならないであらうか？

鐘消えて花の香は撞く夕べかな

僕の信ずる所によれば、これは明らかに朱飲山の所謂倒裝法を俳諧に用ひたものである。

紅稻啄殘鸚鵡粒　碧梧棲老鳳凰枝

上に擧げたのは倒裝法を用ひた、名高い杜甫の一聯である。この一聯を尋常に云ひ下せば、「鸚鵡啄殘紅稻粒　鳳凰棲老碧梧枝」と名詞の位置を顚倒しなければならぬ。芭蕉の句も尋常に云ひ下せば、「鐘撞いて花の香消ゆる夕べかな」と動詞の位置の顚倒する筈である。すると一は名詞であり、一は又動詞であるにもせよ、これを俳諧に試みた倒裝法と考へるのは必しも獨斷とは稱し難いであらう。

蕪村の海彼岸の文學に學ぶ所の多かつたことは前人も屢云ひ及んでゐる。が、芭蕉のはどう云ふものか、餘り考へる人もゐなかつたらしい。（もし一人でもゐたとすれば、この「鐘消え―」の句のことなどはとうの昔に氣づいてゐた筈である。）しかし延寶天和の間の芭蕉は誰でも知つてゐるやうに、「憶老杜、髭風ヲ吹テ暮秋歎ズルハ誰ガ子ゾ」「夜着は重し呉天に雪を見るあらん」以下、

多數に海彼岸の文學を飜案した作品を殘してゐる。いや、それぱかりではない、芭蕉は「虚栗」(天和三年上梓)の跋の後に「芭蕉洞桃青」と署名してゐる。「芭蕉庵桃青」は必しも海彼岸の文學を聯想せしめる雅號ではない。しかし「芭蕉洞桃青」は「凝烟肌帶綠　映日瞼粧紅」の詩中の趣を具へてゐる。(これは勝峯晉風氏も「芭蕉俳句定本」の年譜の中に「洞」の一字を見落してならぬ」と云つてゐる。)すると芭蕉は――少くとも延寶天和の間の芭蕉は、海彼岸の文學に少なからず心醉してゐたと云はなければならぬ。或は多少の危險さへ冒せば、談林風の鬼窟裡に墮在してゐた芭蕉の天才を開眼したものは、海彼岸の文學であるとも云はれるかも知れない。かう云ふ芭蕉の俳諧の中に、海彼岸の文學の痕跡のあるのは、勿論不思議がるには當らない筈である。偶、「芭蕉俳句定本」を讀んでゐるうちに、海彼岸の文學の影響を考へたから、「芭蕉雜記」の後に加へることにした。

附記。芭蕉は夙に伊藤坦庵、田中桐江などの學者に漢學を學んだと傳へられてゐる。しかし芭蕉の蒙つた海彼岸の文學の影響は寧ろ好んで詩を作つた山口素堂に發するのかも知れない。

十二　詩人

蕉風の付け合に關する議論は樋口功氏の「芭蕉研究」に頗る明快に述べられてゐる。尤も僕は樋口氏のやうに、發句は蕉門の龍象を始め蕪村も甚だ芭蕉には劣つてゐなかつたとは信ぜられない。が、芭蕉の付け合の上に古今獨歩の妙のあることはまことに樋口氏の議論の通りである。のみならず元祿の文藝復興の蕉風の付け合に反映してゐたと云ふのは如何にも同感と云はなければならぬ。

芭蕉は少しも時代の外に孤立してゐた詩人ではない。いや、寧ろ時代の中に全精神を投じた詩人である。たまたまその間口の廣さの芭蕉の發句に現れないのはこれも樋口氏の指摘したやうに、發句は唯「わたくし詩歌」を本道とした爲と云はなければならぬ。蕪村はこの金鎖を破り、發句を自他無差別の大千世界へ解放した。「お手打の夫婦なりしを衣更」「負けまじき相撲を寢物語かな」等はこの解放の生んだ作品である。芭蕉は許六の「名將の橋の反見る扇かな」にさへ、「此句は名將の作にして、句主の手柄は少しも無し」と云ふ評語を下した。もし「お手打の夫婦」以下蕪村の作品を見たとすれば、後代の豎子の惡作劇に定めし苦い顏をしたことであらう。勿論蕪村の試みた發句解放の善惡はおのづから問題を異にしなければならぬ。しかし芭蕉の付け合を見ずに、蕪村の小說的構想などを前人未發のやうに賞揚するのは甚だしい片手落ちの批判である。

念の爲にもう一度繰り返せば、芭蕉は少しも時代の外に孤立してゐた詩人ではない。最も切實

に時代を捉へ、最も大膽に時代を描いた萬葉集以後の詩人である。この事實を知る爲には芭蕉の付け合を一瞥すれば好い。芭蕉は茶漬を愛したなどと云ふのも譃ではないかと思はれるほど、近松を生み、西鶴を生み、更に又師宣を生んだ元祿の人情を曲盡してゐる。殊に戀愛を歌つたものを見れば、其角さへ木強漢に見えぬことはない。況や後代の才人などは空也の瘦せか、乾鮭か、或は腎氣を失つた若隱居かと疑はれる位である。

狩衣を砧の主にうちくれて　　路通
わが稚名を君はおぼゆや　　芭蕉
宮に召されしうき名はづかし　　曾良
手枕に細きかひなをさし入て　　芭蕉
殿守がねぶたがりつる朝ぼらけ　　千里
兀げたる眉を隱すきぬぎぬ　　芭蕉
足駄はかせぬ雨のあけぼの　　越人

きぬぎぬやあまりか細くあでやかに　芭蕉
上置の干菜きざむもうはの空　野坡
馬に出ぬ日は内で戀する　芭蕉
やさしき色に咲るなでしこ　嵐蘭
よつ折の蒲團に君が丸くねて　芭蕉

是等の作品を作つた芭蕉は近代の芭蕉崇拜者の芭蕉とは聊か異つた芭蕉である。たとへば「きぬぎぬやあまりか細くあでやかに」は枯淡なる世捨人の作品ではない。菱川の浮世繪に髣髴たる女や若衆の美しさにも鋭い感受性を震はせてゐた、多情なる元祿びとの作品である。「元祿びとの」、——僕は敢て「元祿びとの」と言つた。是等の作品の抒情詩的甘露味はかの化政度の通人などの夢寐にも到り得る境地ではない。彼等は年代を數へれば、「わが稚名を君はおぼゆや」と歌つた芭蕉と、僅か百年を隔つるのに過ぎぬ。が、實は千年の昔に「常陸少女を忘れたまふな」と歌つた萬葉集中の女人よりも遙かに縁の遠い俗人だつたではないか？

十三　鬼趣

芭蕉もあらゆる天才のやうに時代の好尚を反映してゐることは上に擧げた通りである。その著しい例の一つは芭蕉の俳諧にある鬼趣であらう。「剪燈新話」を飜案した淺井了意の「御伽婢子」は寛文六年の上梓である。爾來かう云ふ怪談小説は寛政頃まで流行してゐた。たとへば西鶴の「大下馬」などもこの流行の生んだ作品である。正保元年に生れた芭蕉は寛文、延寳、天和、貞享を經、元祿七年に長逝した。すると芭蕉の一生は怪談小説の流行の中に終始したものと云はなければならぬ。この爲に芭蕉の俳諧も――殊にまだ怪談小説に對する一代の興味の新鮮だつた「虛栗」以前の俳諧は時時鬼趣を弄んだ、巧妙な作品を殘してゐる。たとへば下の例に徴するが好い。

小夜嵐とぼそ落ちては堂の月　信徳
古入道は失せにけり露　桃青

から尻沈む淵はありけり　信徳
小蒲團に大蛇の恨み鱗形　桃青

氣違を月のさそへば忽に　桃青
尾を引ずりて森の下草　似春
夫は山伏あまの呼び聲　信徳
一念の鱣となつて七まとひ　桃青
骨刀土器鍔のもろきなり　其角
痩せたる馬の影に鞭うつ　桃青
山彦嫁をだいてうせけり　其角
忍びふす人は地藏にて明過し　桃青
釜かぶる人は忍びて別るなり　其角
槌を子に抱くまぼろしの君　桃青

今其とかげ金色の王　峡水

袖に入る蜻蛉夢を契りけむ　桃青

是等の作品の或ものは滑稽であるのにも違ひない。が、「痩せたる馬の影」だの「槌を子に抱く」だのの感じは當時の怪談小説よりも寧ろもの凄い位である。芭蕉は蕉風を樹立した後、殆ど鬼趣には縁を斷つてしまつた。しかし無常の意を寓した作品はたとひ鬼趣ではないにもせよ、常に云ふ可らざる鬼氣を帶びてゐる。

骸骨の畫に

夕風や盆挑灯も糊ばなれ

本間主馬が宅に、骸骨どもの笛、鼓をかまへて能する所を畫きて、
壁に掛けたり(下略)

稲妻やかほのところが薄の穗

（大正十二年—十三年）

續芭蕉雜記

一　人

僕は芭蕉の漢語にも新しい命を吹き込んだと書いてゐる。「蟻は六本の足を持つ」と云ふ文章は或は正硬であるかも知れない。しかし芭蕉の俳諧は度たびこの飜譯に近い冒險に功を奏してゐるのである。日本の文藝では少くとも「光は常に西方から來てゐた。」芭蕉も亦やはりこの例に洩れない。芭蕉の俳諧は當代の人々には如何に所謂モダアンだつたであらう。

ひやひやと壁をふまへて晝寐かな

「壁をふまへて」と云ふ成語は漢語から奪つて來たものである。「踏壁眠」と云ふ成語を用ひた漢語は勿論少くないことであらう。僕は室生犀生君と一しよにこの芭蕉の近代的趣味（當代の）を一世を風靡した所以に數へてゐる。が、詩人芭蕉は又一面には「世渡り」にも長じてゐた。芭蕉の壘を摩した諸俳人、——凡兆、丈艸、惟然等はいづれもこの點では芭蕉に若かない。芭蕉は彼等のやうに天才的だつたと共に彼等よりも一層苦勞人だつた。其角、許六、支考等を彼に心服させた

ものは彼の俳諧の群を拔いてゐたことも決して少くはなかつたのであらう。（世人の所謂「德望」などは少くとも、彼等を御する上に何の役に立つものではない。）しかし又彼の世渡り上手も、――或は彼の英雄的手腕も巧みに彼等を籠絡した筈である。芭蕉の世故人情に通じてゐたことは彼の談林時代の俳諧を一瞥すれば善い。或は彼の書簡の裏にも東西の門弟を操縱した彼の機鋒は窺はれるのであらう。最後に彼は元祿二年にも――「奥の細道」の旅に登つた時にもかう云ふ句を作る「したたか者」だつた。

夏山に足駄を拜む首途かな

「夏山」と言ひ、「足駄」と言ひ、更に「カドデ」と言つた勢にはこれも亦「したたか者」だつた一茶も顏色はないかも知れない。彼は實に「人」としても文藝的英雄の一人だつた。芭蕉の住した無常觀は芭蕉崇拜者の信ずるやうに弱々しい感傷主義を含んだものではない。寧ろやぶれかぶれの勇に富んだ不具退轉の一本道である。芭蕉の度たび、俳諧さへ「一生の道の草」と呼んだのは必しも偶然ではなかつたであらう。兎に角彼は後代には勿論、當代にも滅多に理解されなかつた、（崇拜を受けたことはないとは言はない。）恐しい糞やけになつた詩人である。

二　傳記

芭蕉の傳記は細部に亙れば、未だに判然とはわからないらしい。が、僕は大體だけは下に盡きてゐると信じてゐる。――彼は不義をして伊賀を出奔し、江戸へ來て遊里など〈出入しながら、いつか近代的(當代の)大詩人になつた。なほ又念の爲につけ加へれば、文覺さへ恐れさせた西行ほどの肉體的エネルギイのなかつたことは確かであり、やはりわが子を緣から蹴落した西行ほどの神經的エネルギイもなかつたことは確かであらう。芭蕉の傳記もあらゆる傳記のやうに彼の作品を除外すれば格別神祕的でも何でもない。いや、西鶴の「置土產」にある蕩兒の一生と大差ないのである。唯彼は彼の俳諧を、――彼の「一生の道の草」を殘した。……

最後に彼を生んだ伊賀の國は「伊賀燒」の陶器を生んだ國だつた。かう云ふ一國の藝術的空氣も封建時代には彼を生ずるのに或は力のあづたことであらう。僕はいつか伊賀の香合に閭々しくも枯淡な芭蕉を感じた。禪坊主は度たび褒める代りに貶す言葉を使ふものである。ああ云ふ心もちは芭蕉に對すると、僕等にもあることを感ぜざるを得ない。彼は實に日本の生んだ三百年前の大山師だつた。

三　芭蕉の衣鉢

芭蕉の衣鉢は詩的には丈艸などにも傳はつてゐる。それから、――この世紀の詩人たちにも或

は傳つてゐるかも知れない。が、生活的には伊賀のやうに山の多い信濃の大詩人、一茶に傳はつたばかりだつた。一時代の文明は勿論或詩人の作品を支配してゐる。一茶の作品は芭蕉の作品とその爲にいゝ同じ峯に達してゐない。が、彼等は肚の底ではどちらも「糞やけ道」を通つてゐた。芭蕉の門弟だつた惟然も亦或はかう云ふ一人だつたかも知れない。しかし彼は一茶のやうに圖太い根性を持つてゐなかつた。その代りに一茶よりも可憐だつた。彼の風狂は芝居に見るやうに酒脫とか趣味とか云ふものではない。彼には彼の家族は勿論、彼の命をも賭した風狂である。

秋晴れたあら鬼貫の夕べやな

僕はこの句を惟然の作品中でも決して名句とは思つてゐない。しかし彼の風狂はこの句の中にも見えると思つてゐる。惟然の風狂を喜ぶものは、——就中輕妙を喜ぶものは何とでも勝手に感服して善い。けれども僕の信ずる所によれば、そこに僕等を動かすものは畢に芭蕉に及ばなかつた、芭蕉に近い或詩人の慟哭である。若し彼の風狂を「とり亂してゐる」と言ふ批評家でもあれば、僕はこの批評家に敬意を表することを吝まないであらう。

追記。これは「芭蕉雜記」の一部になるものである。

（昭和二年七月）

今昔物語に就いて

「今昔物語」三十一卷は天竺、震旦、本朝の三部に分れてゐる。本朝の部の最も面白いことは、恐らくは誰も異存はあるまい。その又本朝の部にしても最も僕などに興味のあるのは「世俗」並びに「惡行」の部である。――即ち「今昔物語」中の最も三面記事に近い部である。しかし、――

しかし僕は佛法の部にも多少の興味を感じてゐる。それは佛法そのものは勿論、天台や眞言の護摩の煙に興味を感じてゐると云ふことではない。唯當時の人々の心に興味を感じてゐると云ふことである。道命阿闍梨は阿闍梨と言ふものゝ、和泉式部の情人だつた。しかし彼の經を誦する時には諸天善神も歡喜の餘り、法輪寺の前へ下つて來た。(本朝の部卷十二、天王寺別當道命阿闍梨語第卅六)のみならず金峯山の藏王、熊野の權現、住吉の大明神等の下つて來たのは必しも經そのものゝ功徳に浴したかつた爲ばかりではない。「就レ中に其の音微妙にして聞く人皆首を低て不レ貴と云ふ事」のなかつた爲である。當時の諸天善神も勿論護法に熱心だつたであらう。

が、彼等の情熱の中にはやはり僕等の音樂に對する情熱もまじつてゐない訣ではなかつた。

更に又佛法の部の僕に教へるのは如何に當時の人々の天竺から渡つて來た超自然的存在、――佛菩薩を始め天狗などの超自然的存在を如實に感じてゐたかと云ふことである。僕等は畢に彼等ではない。法華寺の十一面觀音も、扶桑寺の高僧たちも、乃至は金剛峯寺の不動明王（赤不動）も僕等には唯藝術的、――美的感激を與へるだけである。が、彼等は目のあたりに、――或は少くとも幻の中にかう云ふ超自然的存在を目撃し、その又超自然的存在に恐怖や尊敬を感じてゐた。たとへば金剛峯寺の不動明王はどこか精神病者の夢に似た、氣味の悪い莊嚴を具へてゐる。あの氣味の悪い莊嚴は果して想像だけから生まれるであらうか？

「今は昔、河内の國若江の郡の遊宜の村の中に、一人の沙彌の尼有けり。……佛の像を寫す。………而る間尼聊に身に營む事有るに依て、暫く寺に不レ詣ざる程に、其の繪像盗人の爲に被レ盗ぬ。尼此れを悲び歎て、堪ふるに隨て、東西を求むと云へども尋得る事無し。……亦知識を引て放生を行ぜむと思ふ。攝津の國の難波の邊に行ぬ。河の邊を徘徊する間、市より返る人多かり。見れば荷へる箱を樹の上に置けり。主は不レ見えず尼聞けば此の箱の中に種々の生類の音有り。此れ畜生の類を入れたる也けりと思て、必ず此れを買て放たむと思ふ。……良久く有て箱の主來れり。尼此れに會て云く、『此の箱の中に種々の生類の音有り。我れ放生の爲に來れり。此れを買はむと

思ふ故に汝を待也』と。箱の主答て云く、『此れ更に生類を入たるに非ず』と。……其の時に市人等來り集りて此の事を聞て云く、『速に其箱を開て其虚實を可レ見し』と。箱の主白地に立去る樣にて箱を棄て失ぬ。……早く逃げぬる也けりと知て、其後箱を開て見れば、中に被レ盗にし繪佛の像在ます。……」(同上。尼所被盗持佛自然奉値語　第十七)

この話も樹の上の箱の中に畜生の音の聞えると云ふことに美しい生まなましさを漲らせてゐる。金剛峯寺の不動明王を描いたのも或は職業的畫工ではなかつたかも知れない。しかしこの話を作つたものは(若し「作つた」と言はれるとすれば)小說家でも何でもない當時の民の一人である。彼等は必ず佛菩薩の地上を步いてゐるのを見たことであらう。それから又鳶に似た天狗の空中を飛んでゐるのを見たことであらう。

僕は前の話を批評するのに「美しい生まなましさ」と云ふ言葉を使つた。美しいか美しくないかは暫く問はず、この「生まなましさ」は「今昔物語」の藝術的生命であると言つても差し支へない。たとへば「三獸行菩薩道兎燒身語　第十三」(天竺の部。卷五)を見ても、「今昔物語」の作者は兎の爲にかう云ふ形容を加へてゐる。――

「兎は勵の心を發して……耳は高く癌せにして目は大きに前の足短かく尻の穴は大きに開いて東西南北求め行けども更に求め得たる物无し。」

「耳は高く」以下の言葉は同じ話を載せた「大唐西域記」や「法苑珠林」には發見出來ない。(この話は誰でも知つてゐる通り、釋迦佛の生まれない過去世の話、——Jātaka 中の話である。)從つてかう云ふ生まなましさは一に作者の寫生的手腕に負うてゐると思はなければならぬ。遠い昔の天竺の兎はこの生まなましさのある爲に如何にありありと感ぜられるであらう。

この生まなましさは、本朝の部には一層野蠻に輝いてゐる。一層野蠻に？——僕はやつと「今昔物語」の本來の面目を發見した。「今昔物語」の藝術的生命は生まなましさだけには終つてゐない。それは紅毛人の言葉を借りれば、brutality（野性）の美しさである。或は優美とか華奢とかには最も縁の遠い美しさである。

「今は昔、京より東の方に下る者有けり。何れの國郡とは不レ知で一の郷を通ける程に、俄に婬欲盛に發て、女の事の物に狂が如に思ければ、心を難レ靜めくて、思ひ繚ける程に、大路の邊に有ける垣の内に、青菜と云物糸高く盛に生滋たり。十月許の事なれば、蕪の根大きにして有けり。此の男忽に馬より下て、其の垣内に入て蕪の根の大なるを一つ引て取て、其を彫て、其の穴を婜て婬を成してけり。……其の後其の畠の主青菜を引取らむが爲に、下女共數具し、亦幼き女子共など具して、其の畠に行て青菜を引取る程に、年十四五許なる女子の、未だ男には不レ觸りける有て、其の青菜を引取る程に、垣の廻を行て遊けるに、彼の男の投入たる蕪を見付て、此に穴を彫

たる蕪の有ぞ。此は何ぞ』など云て暫く翫ける程に、皺干たりけるを搔削て食てけり。然て皆従者共具て家に返ぬ。其の後此の女子何むと無く悩まし気にて、物なども不レ食で心地不レ例有ければ、……奇異くて月來を経る程に、月既に滿て糸嚴し気なる男子を平かに産つ。……」（本朝の部巻十六。東方行者娶蕪生子語第二）

この話そのものに野趣のあるのは今更言葉を加へずとも善い。しかし作者の寫生的筆致は「其の穴を娶て婬を成し」とか、「皺干たりけるを搔削て」とか云ふ二三の言葉にも現れてゐる。かう云ふ表現上の特色は勿論この話ばかりにある訣ではない。たとへば源の頼光の四天王の女車に乗つた話にしても、（本朝の部巻十八。頼光郎等共紫野見物語第二）彼等の車に醉つた光景を如何にも無遠慮に描き出してゐる。

「今昔物語」の作者は事實を寫すのに少しも手加減を加へてゐない。これは僕等人間の心理を寫すのにも同じことである。尤も「今昔物語」の中の人物は、あらゆる傳説の中の人物のやうに複雑な心理の持ち主ではない。彼等の心理は陰影に乏しい原色ばかり並べてゐる。しかし今日の僕等の心理にも如何に彼等の心理の中に響き合ふ色を持つてゐるであらう。銀座は勿論朱雀大路ではない。が、モダアン・ボオイやモダアン・ガアルも彼等の魂を覗いて見れば、退屈にもやはり「今昔物語」の中の青侍や青女房と同じことである。

「今は昔、年若くして形美麗なる男有けり。……其の男何れの所より來けるにか有りけむ、二條朱雀を行くに、朱雀門の前を渡る間、年十七八歳許なる女の形端正にして姿美麗なる、微妙の衣を重ね着たる大路に立てり。……門の内に人離れたる所に女を呼び寄せて、……男女に云く、『……君我が云はむ事に隨へ。此れ懃に思ふ事也』と。女の云く、『此れ可レ辭事に非ず。云はむ事に可レ隨しと云へども、我若し君の云はむ事に隨ひてば、命を失はむ事疑ひ無き也』と。男何事を云ふとも不二心得一ずして、只辭ぶる言也と思ひて、强に此の女と懐抱せむとす。女泣々く云く、『君は世の中に有て家に妻子を具せるらむに、只行ずりの事にてこそ有れ。我れは君に代て、戲れに永く命失はむ事の悲き也。』如此く諍ふと云へども、女遂に男の云ふに隨ひぬ。……」(本朝の部卷四。爲救野干死寫法花人語第五)

この話の中の女は實は狐の化けてゐたのである。が、彼等の問答は長椅子の上にも行はれるであらう。狐は一夜を明かした後、扇に顏を隱したまゝ、武德殿の中に倒れてゐた。しかもその扇は形見の爲に男の贈つた扇だつた。僕はこの話を「今昔物語」の中でも最も抒情詩的な話の一つに數へてゐる。秋の日のさしこんだ武德殿の外には或は野菊の花なども咲いてゐたであらう。……

かう云ふ作者の寫生的筆致は當時の人々の精神的爭鬪もやはり鮮かに描き出してゐる。彼等もやはり僕等のやうに娑婆苦の爲に呻吟した。「源氏物語」は最も優美に彼等の苦しみを寫してゐる。

それから「大鏡」は最も簡古に彼等の苦しみを寫してゐる。最後に「今昔物語」は最も野蠻に、――或は殆ど殘酷に彼等の苦しみを寫してゐる。僕等は光源氏の一生にも悲しみを生じずにはゐられないであらう。まして兼通卿の一生にはもの凄さを感じるのに違ひない。が、「今昔物語」の中の話――たとへば「參河守大江定基出家語」（本朝の部卷九。）には何かもつと切迫した息苦しさに迫られるばかりである。

「……女の美麗也し形も衰へ持行く。定基此れを見るに、悲の心譬へむ方無。而るに女遂に病重く成て死ぬ。其後定基悲び心に不レ堪して、久く葬送する事無くして、抱て臥たりけるに、日來を經るに口を吸けるに、女の口より奇異き臰き香の出來たりけるに、疎む心出來て泣々く葬してけり。……亦雉を生け乍ら捕て人の持來れるを、守の云く、『去來此の鳥を生乍ら造て食はむ。……』物も不レ思えぬ郎等共、此れを聞て云く、『極く侍りけむ。……』と勸め云ければ、……而るに雉を生乍ら持來て揃にするに、暫くはふたふたと爲るを引かへて、只揃に揃れば、鳥目より血の涙を垂れて目をしば叩きて、彼れ此れが貌を見るを見て、不レ堪して立去く者も有けり。鳥此く泣くよとて咲て、情無氣に揃る者も有りけり。揃り畢てつれば下せけるに、刀に隨て、血つふつふと出來けるを、刀を打巾ひ打巾ひ下しければ、奇異く難レ堪氣なる音を出して死畢にければ……」

「今昔物語」は前にも書いたやうに野性の美しさに充ち滿ちてゐる。其又美しさに輝いた世界は

宮廷の中にばかりある訣ではない。從つて又此世界に出沒する人物は、上は一天萬乘の君から下は土民だの盗人だの乞食だのに及んでゐる。いや、必しもそればかりではない。觀世音菩薩や大天狗や妖怪變化にも及んでゐる。若し又紅毛人の言葉を借りるとすれば、これこそ王朝時代のHuman Comedy（人間喜劇）であらう。僕は「今昔物語」をひろげる度に當時の人々の泣き聲や笑ひ聲の立昇るのを感じた。のみならず彼等の輕蔑や憎惡の（例へば武士に對する公卿の輕蔑の）それ等の聲の中に交つてゐるのを感じた。

僕等は時々僕等の夢を遠い昔に求めてゐる。が、王朝時代の京都さへ「今昔物語」の教へる所によれば、餘り東京や大阪よりも娑婆苦の少ない都ではない。成程、牛車の往來する朱雀大路は華やかだつたであらう。しかしそこにも小路へ曲れば、道ばたの死骸に肉を爭ふ野良犬の群れはあつたのである。おまけに夜になつたが最後、あらゆる超自然的存在は、――大きい地藏菩薩だの女の童になつた狐だのは春の星の下にも歩いてゐたのである。修羅、餓鬼、地獄、畜生等の世界はいつも現世の外にあつたのではない。……

　な醒めそねや、さ公だちや。
　市に立ちたるはたものに
　鴉はさはに騒ぐとも、

豊の大御酒つきぬまは
な醒めそねや、さ公だちや。

（昭和二年四月）

明治文藝に就いて

一

明治の文章家として紅葉、一葉を推すは何びとも異存なかるべし。次いでは誰を推さんとする乎。僕は先づ指を綠雨に屈せんとす。批評家綠雨は讀むに足らず。小說家綠雨は一笑して已むべし。俳人綠雨は俳人たるか非俳人たるかを詳かにせず。唯文章家綠雨に至つては必しも輕蔑すべからざるに似たり。「みだれ箱」「雨蛙」等の文は暫く問はず、試みに小說「(三字分缺)」の冒頭の數行を味讀せよ。

二

綠雨は寧ろ諷刺詩人たるべし。その諷刺詩人たらざりしは、――或は諷刺詩人たるに終始せざりしは主として未だ日本には諷刺詩なるものの發達せざりしに依る。綠雨の可憐なる所以なるべし。

三

紅露を明治の兩大家と做すは誤れるも亦甚しと言ふべし。露伴は唯古今の書を讀み、和漢の事に通ぜるのみ。紅葉の才に及ぶべからず。文章亦遙かに紅葉の下にあり。大作「ひげ男」の庸劣なるに至つては畢に卷を擲たざる能はず。

四

鏡花は古今獨歩の才あり。唯時に遇はざりしのみ。鷗外の鏡花を批評するや、往々にして言の苛刻なるを見る。是既に鷗外の西洋文學に通ずること深く、トウルゲネフ、ドオデ、モオパスサン等の尺度を以て鏡花の小說を測りしに依る。後年日本の自然主義者の鏡花を目して邪道とせるは必しも怪しむに足らざるべし。公等、碌々人に依りて功を成せるもの、何ぞ鏡花を罵るに足らんや。

五

綠雨は右に鷗外を携へ、左に露伴を提げつつ、當時の文壇に臨みたるが如し。是その東西の學

に昧く、識見の高からざらんことを恐れしに依る。黠は即ち黠なれども、明は即ち明ならん乎。

六

一葉の「たけくらべ」の傑作たるは何びとも異存なかるべし。爾餘の小說（恐らくは「濁り江」を除き）は讀むに足らず。唯この女子の文を行るは渠成つて水自ら至るの妙あり。天稟と稱するも不可なからん乎。

七

鷗外の西洋文學を飜譯したるは明治の文藝に影響すること、少からざりしは言ふを待たず。然れども亦森田思軒の飜譯小說ありしをも忘るべからず。思軒の文は語格を無視し、假名遣ひの何たるかを顧みざれど、頗る簡勁奇峭の趣を得たり。是漢文脈と倭文脈との調和に苦しめる明治の文章に影響すること、少からざりし所以なるべし。鏡花の初期の作品には往々にして思軒の影響あるを見る。

八

憐むべし、老櫻痴。更に憐むべし、老逍遙。過去世は既に逍遙を推して櫻痴の上にあらしめたり。現世はその先後を知るべからず。未來世は櫻痴を推して逍遙の上にあらしめん乎。

九

根岸に饗庭篁村あり、又正岡子規ありしは明治年間の好一對なるべし。蕪村の句に曰、「菜の花や月は東に日は西に」と。子規は卽ち昇らんとするの月、篁村は卽ち沈まんとする――或は既に沈みたるの日のみ。（大正十四年十月）

〔遺稿〕

文壇小言

一

文藝の士の歿するや、その歿後に墓穴を守る門下の群小なかるべからず。正岡子規の「アララギ」同人に於ける、又ポオのボオドレエルに於ける、更にその生前を以てすれば徳田秋聲の中村武羅夫に於ける、皆この事實を證するに足るべし。既にその歿後の名聲は、――少くとも三十年間の名聲は（敢てここに三十年間と言ふは著作權の未だ存するが故なり。）墓穴を守るものの力によるとすれば、子分を養ふも徒爾ならずとせず。勿論子分にして高材ならん乎、その效亦愈大なりと謂ふべし。然れども高材を門下に致すは何びとも能くする所にあらず。泡鳴の門下に人無きを見るべし。人事の天命に及ばざる所以、所詮は偶然に任かするに若かず。

二

文壇と云ふも一社會のみ。文才のみを以てすれば、必しも文壇に雄たる能はず。世故に長ぜざ

る可からざる所以なり。作家としての某々は世間の人としての某々に若かず。これを某々は人としても遙かに儕輩を拔けりと云ふ。當に掌を拊つて大笑すべし。

三

資本主義の社會にありては一枚何圓何十錢の原稿料制度を免るべからず。大小を以て優劣に換ふるの不公平たるは勿論なるべし。かかる社會に生れ合せたる小說家、戲曲家、批評家等は先づ大量生產に堪ふる實業家的能力を有せざる可からず。或は永井荷風氏の言へるが如く、親子兄弟を養はざる可からざるものは如上の職業に從事す可からず。老來文筆益〻健、壯者も及ぶべからずと言ふは唯この實業家的能力を有すること、儕輩に超えたる作家を指すのみ。しかもその作品を見れば、太倉の粟陳々相依り、殆ど百年一日の如し。この輩を目するに老大家と做す。これ亦掌を拊つて大笑すべし。

四

社會學者の言によれば、社會は如何に變化するも、かの乞食、浮浪者の如き襤褸階級は依然たるべしと。こは文壇なる社會に於けるも亦大差あらざらん乎。甲大家は去り、乙大家は來るも、

片々たる雜文家は依然たり。若し眞に文壇に不朽不滅のものありとせば、それは文壇の襤褸階級なるべし。

五

依然たるかな、文壇や。作家に新舊を數ふれども、文壇は變化することなし。たとひ社會主義の治下となるとも、文壇は尚依然たるべし。若し夫れ無政府主義の治下とならん乎、多少の變化なきを期すべからず。（大正十四年八月）

〔遺稿〕

小說作法十則

一　小說はあらゆる文藝中、最も非藝術的なるものと心得べし。文藝中の文藝は詩あるのみ。卽ち小說は小說中の詩により、文藝の中に列するに過ぎず。從つて歴史乃至傳記と實は少しも異る所なし。

二　小說家は詩人たる以外に歴史家乃至傳記作者なり。從つて人生（一時代に於ける一國の）と相亙らざるべからず。紫式部より井原西鶴に至る日本の小說家の作品はこの事實を證明すべし。

三　詩人は常に自己の衷心を何人かに向つて訴ふるものなり。（女人をくどく爲に戀歌の生じたるを見よ。）既に小說家は詩人たる以上に歴史家乃至傳記作者なりとせん乎、傳記の一つなる自敍傳作者も小說家自身の中に存在すべし。從つて小說家は彼自身暗澹たる人生に對することも常人より屢々ならざるべからず。そは小說家自身の中の詩人は實行力乏しきを常とすればなり。若し小說家自身の中の詩人にして歴史家乃至傳記作者よりも力强からん乎、彼の一生は愈出でて

愈悲慘なるを免れざるべし。ポオの如きはこの好例なり。(ナポレオン乃至レニンをして詩人たらしめば、不世出の小説家を生ずるは言を待たず)

四　小説家的才能は前に擧げたる三條により、詩人的才能、歴史家的乃至傳記作者的才能、處世的才能の三者に歸着すべし。この三者を相剋せしめざることは前人も至難の業としたり。(至難の業とせざりしものは凡庸の才なり。)小説家たらんとするものは自動車學校を卒業せざる運轉手の自動車を街頭に驅るがごとし。一生の平穩無事なるを期すべからず。

五　既に一生の平穩無事なるを期すべからずとせば、體力と金錢と單身立命(卽ちボヘミアニズム)とに賴まざるべからず。但しこの兩者の效ある程度も存外少なるを覺悟すべし。比較的平和なる一生を得んと欲せば、畢に小説家とならざるに若かず。比較的平和なる一生を送れる小説家は常に彼等の傳記の細部に亙りて判然せざる小説家なるを記憶すべし。

六　然れども若し現世にありて比較的平和なる一生を送らんとせば、小説家は如何なる才能よりも處世的才能を錬鍛すべし。但しそは戛々たる獨造底の作品を殘す所以とは同意義にあらず。(矛盾せざるも亦勿論なり。)處世的才能とは上は運命を支配するより(但し支配し得るや否やを保證せず)下は如何なる阿呆をも丁寧にとり扱ふに至るものなり。

七　文藝は文章に表現を托する藝術なり。從つて文章を鍛錬するは勿論小説家は怠るべからず。

若し一つの言葉の美しさに恍惚たること能はざるものは、小說家たる資格の上に多少の缺點ありと覺悟すべし。西鶴の「阿蘭陀西鶴」の名を得たるは必しも一時代の小說上の約束を破りたる爲にあらず。彼の俳諧より悟入したる言葉の美しさを知りゐたる爲なり。

八　一時代に於ける一國の小說はおのづから種々の約束のもとにあり。(こは歷史の決定する所による。)小說家たらんとするものは努めてこの約束に從ふべし。この約束に從ふ利益は一に前人の肩の上に乘りて自己の小說を作り得ること、二に眞面目に見ゆる爲に文壇の犬どもに吼えられざることなり。但しこれ亦獨造底の作品を殘すことと同意義にあらず。(矛盾せざるは言を待たず。)天才にはかかる約束を脚下に蹂躙するもの多かるべし。(然れども世人の考ふるほど蹂躙せるや否やは保證せず。)彼等はその爲に多少にもせよ、天命卽ち文藝の社會的進步(或は變化)の外に走り、水の溝を流るるが如く能はず。文藝的太陽系の外にある一遊星たるにとどまるべし。從つて當代に理解せられざるは勿論、後代にも知己を得れば見つけものなるべし。(こは單に小說の上のみにあらず、あらゆる文藝に通用すべし。)

九　小說家たらんとするものは常に哲學的、自然科學的、經濟科學的思想に反應することを警戒すべし。如何なる思想乃至理論も人間獸の依然たる限りは人間獸の一生を支配する能はず。從つてかかる思想に反應するは(少くとも意識的に)人間獸の一生、――卽ち人生に相亙るに不便な

りと知るべし。ありのままに見、ありのままに描くを寫生と言ふ。小說家たる便法は寫生するに若かず。但しここに「ありのまま」と言ふは「彼自身の見たるありのまま」なり。――借用證文を入れたるありのまま」にあらず。

十　あらゆる小說作法は黃金律にあらず。この「小說作法十則」の黃金律たらざるも勿論なり。所詮小說家になり得るものはなり、なり得ざるものはなり得ざるべき乎。

附記。僕は何ごとにも懷疑主義者なり。唯如何に懷疑主義者ならんと欲するも、詩の前には未だ嘗懷疑主義者たる能はざりしことを自白す。同時に又詩の前にも常に懷疑主義者たらんと努めしことを自白す。（大正十五・五・四）

〔遺稿〕

小論文

「私」小說論小見

——藤澤清造君に——

文藝上の作品はいろいろの種類に分たれてゐます。詩と散文と、敍事詩と抒情詩と、「本格」小說と「私」小說と、——その他まだ數へ立てれば、いくらでもあるのに違ひありません。しかしそれ等は必しも本質的に存在する差別ではない、唯量的な標準に從つた貼り札に近いものばかりであります。たとへば詩と言ふものを考へて見ても、若し或形式に從つたものだけに詩と言ふ名前を與へようとすれば、あらゆる自由詩や散文詩は除外しなければなりません。若し又自由詩や散文詩にも詩と言ふ名前を與へるとすれば、それ等の作品に共通した特色は廣い意味の「詩的な」こと、——畢竟文藝的なことになるだけであります。韻文藝術と散文藝術との差別もやはりこの詩と散文との差別の複雜になつただけでありませう。成程散文藝術は、——たとへば小說は一見した所、何か詩とは異つてゐます。が、その差別はどこにありませう？ 小說は屢詩に比べると、もつと僕等の實生活に卽した感銘を與へると言はれてゐます。又かう言ふ感銘は小說以外にある

としても、唯韻文を用ひた小說、——敍事詩にあるばかりだと言はれてゐます。しかし敍事詩と抒情詩との差別も、——客觀的文藝と主觀的文藝との差別もやはり本質的には存在しません。例を西洋に求めないにしても、「アララギ」派の短歌の連作は抒情詩であると共に敍事詩であります。旣に敍事詩と抒情詩との差別も消え失せてしまふものとすれば、あらゆる詩は忽ち春のやうにあらゆる散文の埒の中へも流れこんで來るでありませう。

これだけのことを述べた後、僕はまづ久米正雄君によつて主張され、近頃又宇野浩二君によつて多少の聲援を與へられた「散文藝術の本道は『私』小說である」と言ふ議論を考へて見たいと思ひます。が、この議論を考へて見るには「私」小說とは何であるかを明らかにしなければなりません。本家本元の久米君によれば、「私」小說とは西洋人のイッヒ・ロマンと言ふものではない、一人稱でも三人稱でも作家自身の實生活を描いた、しかも單なる自敍傳に了らぬ小說であると言ふことであります。けれども、自敍傳或は告白と自敍傳的或は告白的小說との差別も、やはり本質的には存在しません。これもやはり久米君によれば、たとへばルッソオの懺悔錄は單なる自敍傳に過ぎないものであり、ストリントベルグの「痴人の懺悔」は自敍傳的小說であると言ふことであります。しかし兩者を讀み比べて見れば、僕等は偶々「懺悔錄」の中に「痴人の懺悔」のプロット・タイプを感じることはあるにもしろ、決して本質的に異つたものを感じることはありません。成程兩者

は描寫の上とか或は又敍述の上とかにはいろいろ異つてゐるでありませう。（その最も外面的に異つてゐる點を擧げて見れば、ルッソオの「懺悔錄」はストリントベルグの「痴人の懺悔」のやうに會話を別行に印刷してゐません！）しかしそれは自敍傳と自敍傳的小說との差別ではない、時代や地理をも勘定に入れたルッソオとストリントベルグの差別であります。すると「私」小說の「私」小說たる所以は自敍傳ではないことに存在するのではない、唯その「作家自身の實生活を描いた」こと――即ち逆に自敍傳であることに存在すると言はなければなりますまい。しかし又自敍傳であることは抒情詩よりも複雜した主觀的文藝であると言ふことであります。僕は前に抒情詩と敍事詩との差別は――主觀的文藝と客觀的文藝との差別は本質的には存在しない、唯量的な標準に從つた貼り札であると言ひました。既に敍事詩は抒情詩と本質的に異つてゐないとすれば、「私」小說も同じやうに本質的には「本格」小說と少しも異つてゐない筈であります。從つて「私」小說の「私」小說たる所以は本質的には全然存在しない、若しどこかに存在するとすれば、それは「私」小說中の或事件は作家の實生活中の或事件と同一視することの出來ると言ふ或實際的事實の中に存在すると言はなければなりません。即ち「私」小說は久米君の定義の如何に關らず、かう言ふものになる訣であります。――「私」小說は譃ではないと言ふ保證のついた小說である。

もう一度念の爲に繰り返せば、「私」小說の「私」小說たる所以は「譃ではない」と言ふことであり

ます。これは何も僕一人の誇張による言葉ではありません。現に「どんなに巧妙でも、『私』小說以外の小說は信用する訣に行かない」とは久米君自身も一度ならず力說してゐる所であります。しかし「譃ではない」と言ふことは實際上の問題は兎に角、藝術上の問題には何の權威をも持つてゐません。これは文藝以外の藝術、——たとへば繪畫を考へて見れば、誰も高野の赤不動の前にかう言ふ火を背負つた怪物は實際ゐるかどうかなどと考へて見ないのでも明らかであります。けれどもこれだけの理由により、「譃ではない」と言ふことを一笑に附してしまふのは餘りに簡單でありませう。實際又「譃ではない」と言ふことは何か特に文藝の上には意味ありげに見えるのに違ひありません。ではなぜ意味ありげに見えるかと言へば、それは文藝は他の藝術よりも道德や功利の考へなどと深い關係のあるやうに考へられてゐるからでありませう。が、文藝もかう言ふものと全然緣のないことはやはり他の藝術と異りません。成程僕等は實際的には、——何をいつ誰に公にするか等の問題には道德や功利の考へをも顧慮することになるでありませう。しかしそこを通り越した文藝それ自身としての文藝は何の拘束も持つてゐない、風のやうに自由を極めたものであります。若し又自由を極めてゐないとすれば、僕等は文藝の內在的價値などを云々することは出來ますまい。從つて文藝はおのづから上は「文藝化せられたる人生觀」より下は社會主義の宣傳機關に至る奴隸的地位に立つ訣であります。既に文藝を風のやうに自由を極めたものとすれ

ば、「譃ではない」と言ふことも勿論一片の落葉のやうに吹き飛ばされてしまはなければなりません。いや、「譃ではない」と言ふことばかりではない、「私」小說の問題に多少緣のある謬見を擧げれば、「作家はいつも作品の中では正直にならなければならぬ」と言ふことも、やはり吹き飛ばされてしまふ筈であります。元來「正直になる」或は「他人を欺かぬ」と言ふことは道德上の法律ではあるにしても、文藝上の法律ではありません。のみならず作家と言ふものは旣に彼自身の心の中にちやんと存在してゐるものの外は何も表現出來ぬ訣であります。たとへば或「私」小說の作家はその小說の主人公に彼自身の持つてゐない孝行の美德を與へたとして見ませう。成程その小說の主人公は彼と異つてゐる以上、道德的に彼を譃つきと言ふのは當つてゐるかも知れません。が、かう言ふ主人公を具へた或「私」小說はまだ表現されない前に旣に彼の心の中に存在してゐたのでありますから、彼は譃つきどころではない、唯內部にあつたものを外部へ出して見せただけであります。若し又譃をついたとすれば、それは彼が何かの爲に彼の天才を賣淫し、彼の內部的「私」小說を十分に外部化することを(或は表現することを)怠つた場合だけでありませう。

「私」小說と言ふものは上に述べた通りの小說であります。かう言ふ「私」小說を散文藝術の本道であると言ふのは勿論謬見でありませう。しかしこの議論の誤つてゐるのは必しもそれだけではありません。一體散文藝術の本道とは何のことでありませう? 僕は前に散文藝術と韻文藝術と

の差別は本質的に存在する差別ではない、唯量的な標準に從つた貼り札であると言ひました。すると散文藝術の本道と言ふことも「最も文藝的な散文藝術」などと解釋することは出來ません。若しかう解釋することは出來ないとすれば、それは唯「最も散文藝術的な散文藝術」と言ふことに落ちて來なければなりますまい。けれども「最も散文藝術的な散文藝術」と言ふことは畢竟散文藝術と言ふことだけであります。たとへば散文藝術の代りに紙卷煙草を置いて見ても、紙卷は煙草と言ふ本質の上では少しも葉卷と異りません。從つて紙卷の本道と言ふことを「最も煙草的な紙卷」とするのはおのづから滑稽になるでありませう。そこで「最も紙卷的な紙卷」とする外はないとなると、――僕は常識の名前により、諸君に問ひたいと思ひます、――「最も紙卷的な紙卷」とは當り前の紙卷以外に何を指してゐるのでありませう？　散文藝術の本道と言ふのはこの「最も紙卷的な紙卷」と言ふのと同じことであります。かう言ふ例の示す通り、「散文藝術の本道は「私」小說である」と言ふ議論は單に散文藝術の本道を「私」小說に置いた所に破綻を生じたのではありません。散文藝術の本道と言ふ空中樓閣を築いた所に抑々の破綻を生じてゐるのであります。では散文藝術の本道などと言ふものは全然存在しないかと言へば、それは或意味では必しも存在しないとは言はれません。あらゆる藝術の本道は唯傑作の中にだけ橫はつてゐます。散文藝術の本道も若しどこかにあるとすれば、恐らくはこの傑作と言ふ山上にあるのかも知れません。

僕は久米君によつて主張された「散文藝術の本道は『私』小說である」と言ふ議論を略々批評し了りました。僕の立ち場は久米君の立ち場と生憎兩立出來ぬものであります。しかし僕は久米君の議論に少しも敬意のない訣ではありません。たとへば久米君は「私」小說から截然と自敍傳を分ちました。この差別それ自身に僕の贊成出來ないことは既に述べた通りであります。しかしこの差別を立てたことは或意味では最も文壇の時弊に當つてゐると言はなければなりません。僕も亦多少の暇さへ得れば、この差別から出發した小論文を書きたいと思つてゐます。なほ又僕は徹頭徹尾宇野君の議論を閑却しました。それは宇野君は久米君のやうに「散文藝術の本道は『私』小說である」と言ふことを斷々乎と言つてゐない爲であります。尤も宇野君の議論の中にも「僕等日本人の文藝的素質は『本格』小說よりも『私』小說に適してゐる」と言ふことだけは力說されてゐるのに違ひありません。しかしそれは宇野君の常談と見なければなりますまい。なぜ又常談と見るかと言へば、僕は僕等日本人の生んだ「本格」小說的作品の中に源氏物語は暫く問はず、近松の戲曲、西鶴の小說、芭蕉の連句等を數へることを、――いや、それよりも宇野君自身の二三の小說を數へることを大慶に思つてゐるからであります。

最後につけ加へておきたいことには僕の異議を唱へるのは決して「私」小說ではない、「私」小說論であると言ふことであります。若し僕を目するのに「本格」小說だけに禮拜する小乘營糞の徒と

するならば、それは僕の寃ばかりではない、同時に又日本の文壇に多い「私」小説の諸名篇に泥を塗ることにもなるでありませう。

（大正十四年十月）

「わたくし」小說に就いて

わたしは久米正雄君の「わたくし」小說論に若干の興味を持つてゐる。今その議論を分析して見れば――

（一）「わたくし」小說は小說になつてゐなければならぬ。

（二）「わたくし」小說は「わたくし」を主人公にしなければならぬ。（この「わたくし」は必しも一人稱の意味でないことは勿論である。）

（一）は單なる人生記錄は小說ではないことを力說するものである。が、この立ち場は何びとにも異議のない立ち場ではないであらう。實際又小說と非小說との境を如何なる一線に求めるかは好箇の論爭點と言はなければならぬ。わたしの所見に從へば、散文藝術に關する諸問題はいづれも多少この立ち場に關係を持つてゐるやうである。

（二）は「わたくし」を主人公にする藝術的必要を力說するものである。これも亦恐らくは何びとと

にも異議のない立ち場ではないであらう。しかし今日の短歌や俳諧は大抵「わたくし」短歌であり、同時に又「わたくし」俳諧である。若しこの事實を何等かの藝術的必要によつたとすれば、何ゆゑにひとり小説だけは「わたくし」小説に終始しないか、その點も十分に考へなければならぬ。

この短い文章の目的は必しも「わたくし」小説論に贊否の説を表することではない。唯「わたくし」小説論の如何に特色のある議論かと言ふことに匆匆たる一瞥を加へることである。わたしの所見に從へば、久米君の「わたくし」小説論は更に論爭の的になつても好い。又論爭の的になることは確かに我等文藝の士の批評的精神を深める上にも少からぬ利益を與へるであらう。即ち上記の二點を擧げ、久米君を始め大方の君子の高論を聽かんとする所以である。

（大正十四年六月）

藤澤清造君に答ふ

僕は「不同調」第一號に「わたくし小説に就いて」と言ふものを書いた。「わたくし小説に就いて」は久米正雄君の「わたくし小説論」の特色を指摘せんと試みた文章である。然るに藤澤清造君は「不同調」第二號に「何ゆゑに汝は汝自身わたくし小説論を試みないか？　汝の「わたくし小説に就い

て』はわづか一二個所へ少しばかり解剖のメスをいれただけである」と書いた。（、印を施したのは藤澤君の文章である。）藤澤君の所謂解剖のメスは果して久米正雄君の議論の特色に觸れたかどうか、その是非を檢するのは文藝批評上の問題である。しかし所謂解剖のメスを入れるだけに止めて置いたものかどうか、その曲直を檢することは文藝批評上の問題ではない。では何の問題かと言へば、勿論實踐倫理上の問題である。從つて僕は藤澤君に答へるにも、多言を費す必要を見ない。僕は唯「わたくし小說に就いて」の中に僕の所期を果たした以上、毫も更にわたくし小說是非の論をもしなければならぬ義務のないことを告げるだけである。若し又不幸にも藤澤君にしてかかる義務のないことを認めないならば、紙上たると口頭たるとを問はず、更に何回でも論戰しよう。但しその時は醉つてゐてはいけない。（十四・八・五）

發句私見

一　十七音

發句は十七音を原則としてゐる。十七音以外のものを發句と呼ぶのは、――或は新傾向の句と呼ぶのは短詩と呼ぶのの勝れるに若かない。(勿論かう言ふ短詩の作家、河東碧梧桐、中塚一碧樓、荻原井泉水等の諸氏の作品にも佳作のあることは事實である。)若し單に内容に即して、かう云ふ短詩を發句と呼ぶならば、發句は他の文藝的形式と、――たとへば漢詩などと異らないであらう。

初月波中上(勿論日本風に讀むのである)　何遜

明月の波の中より上りけり　子規

單に内容に即すれば、子規居士の句は即ち何遜の詩である。同じく茶を飲むのに使ふとしても茶碗は畢に湯呑みではない。若し湯呑みを湯呑みたらしめるものを湯呑みと云ふ形式にありとすれば、又茶碗を茶碗たらしめるものを茶碗と云ふ形式にありとすれば、發句を發句たらしめるものもやはり發句と云ふ形式、――即ち十七音にある訣である。

二　季題

發句は必しも季題を要しない。今日季題と呼ばれるものは玉葱、天の川、クリスマス、薔薇、蛙、ブランコ、汗、――いろいろのものを含んでゐる。從つて季題のない發句を作ることは事實上反つて容易ではない。しかし容易ではないにもせよ、森羅萬象を季題としない限り、季題のない發句も出來る筈である。

元來季題とは何かと云へば、名月、夜長などと云ふ詩語の外は大抵僕等の家常茶飯に使つてゐる言葉ばかりである。詩語は勿論詩語としての文藝的價値を持つてゐるであらう。しかしその他の當り前の言葉――たとへば玉葱、天の川等を特に季題とすることは寧ろ句作には有害である。僕等はこれ等の當り前の言葉を特に季題とする爲に季感と呼ばれるものを生じ、反つて流俗の見に陷り易い。それから今日の農藝や園藝は在來の春夏秋冬のうちに草花や果物や蔬菜などを收められぬ位に發達してゐる。

發句は少しも季題を要しない。寧ろ季題は無用である。現に短歌は發句のやうに季題などに手よつてゐない。これは何も發句よりも十四音だけ多いのにはよらぬ筈である。

三　詩語

季題は發句には無用である。しかし季題は無用にしても、詩語は決して無用ではない。たとへば行春と云ふ言葉などは僕等の祖先から傳へ來つた、美しい語感を伴つてゐる。かう云ふ語感を輕蔑するのは僕等自身を輕蔑するに等しい。

行春を近江の人と惜しみける　芭蕉

追記。詩語と詩語でない言葉との差別は勿論事實上ぼんやりしてゐる。

四　調べ

發句も旣に詩であるとすれば、おのづから調べを要する筈である。元祿びとには元祿びとの調べがあり、大正びとには大正びとの調べがあると言ふのは必しも謬見と稱し難い。しかしその調べと云ふ意味を十七音か否かに限るのは所謂新傾向の作家たちの謬見である。

年の市線香買ひに出でばやな　芭蕉
夏の月御油より出でて赤坂や　同上
早稻の香やわけ入る右は有磯海　同上

これ等の句は悉く十七音でありながら、それぞれ調べを異にしてゐる。かう云ふ調べの上の妙は大正びとは畢に元祿びとに若かない。子規居士は俊邁の材により、頗る引き緊つた調べを好んだ。しかしその餘弊は子規居士以後の發句の調べを粗雜にした。單にその調べの上の工夫を凝らしたと云ふ點から言へば所謂新傾向の作家たちは十七音によらないだけに或は俳人たちに勝つてゐるであらう。（十五・四・二十三）

附記。この文を艸した後、山崎樂堂氏の「俳句格調の本義」（詩歌時代所載）を讀み、恩を受けたことも少くない。殊に十七音に從へと言ふ僕の形式上の考へなどはもつと考へても好いと思つてゐる。次手と云つては失禮ながら、次手に感謝の意を表する次第である。

藝術その他

×

藝術家は何よりも作品の完成を期せねばならぬ。さもなければ、藝術に奉仕する事が無意味になつてしまふだらう。たとひ人道的感激にしても、それだけを求めるなら、單に說教を聞く事からも得られる筈だ。藝術に奉仕する以上、僕等の作品の與へるものは、何よりもまづ藝術的感激でなければならぬ。それには唯僕等が作品の完成を期するより外に途はないのだ。

×

藝術の爲の藝術は、一步を轉ずれば藝術遊戲說に墮ちる。
人生の爲の藝術は、一步を轉ずれば藝術功利說に墮ちる。

×

完成とは讀んでそつのない作品を拵へる事ではない。分化發達した藝術上の理想のそれぞれを完全に實現させる事だ。それがいつも出來なければ、その藝術家は恥ぢなければならぬ。從つて又偉大なる藝術家とは、この完成の領域が最も大規模な藝術家なのだ。一例を擧げればゲエテの如き。

×

勿論人間は自然の與へた能力上の制限を越える事は出來ぬ。さうかと云つて怠けてゐれば、その制限の所在さへ知らずにしまふ。だから皆ゲエテになる氣で、精進する事が必要なのだ。そんな事をきまり惡がつてゐては、何年たつてもゲエテの家の馭者にだつてなれはせぬ。尤もこれからゲエテになりますと吹聽して歩く必要はないが。

×

僕等が藝術的完成の途へ向はうとする時、何か僕等の精進を妨げるものがある。偸安の念か。いや、そんなものではない。それはもつと不思議な性質のものだ。丁度山へ登る人が高く登るのに從つて、妙に雲の下にある麓が懷しくなるやうなものだ。かう云つて通じたければ——その人

は遂に僕にとつて、縁無き衆生だと云ふ外はない。

×

樹の枝にゐる一匹の毛蟲は、氣溫、天候、鳥類等の敵の爲に、絶えず生命の危險に迫られてゐる。藝術家もその生命を保つて行く爲に、この毛蟲の通りの危險を凌がなければならぬ。就中恐る可きものは停滯だ。いや、藝術の境に停滯と云ふ事はない。進歩しなければ必退歩するのだ。藝術家が退歩する時、常に一種の自動作用が始まる。と云ふ意味は、同じやうな作品ばかり書く事だ。自動作用が始まつたら、それは藝術家としての死に瀕したものと思はなければならぬ。僕自身「龍」を書いた時は、明にこの種の死に瀕してゐた。

×

より正しい藝術觀を持つてゐるものが、必しもより善い作品を書くとは限つてゐない。さう考へる時、寂しい氣がするものは、獨り僕だけだらうか。僕だけでない事を祈る。

×

內容が本で形式は末だ。――さう云ふ說が流行してゐる。が、それはほんたうらしい譃だ。作品の內容とは、必然に形式と一つになつた內容だ。まづ內容があつて、形式は後から拵へるものだと思ふものがあつたら、それは創作の眞諦に盲目なものの言なのだ。簡單な例をとつて見てもわかる。「幽靈」の中のオスワルドが「太陽が欲しい」と云ふ事は、誰でも大抵知つてゐるに違ひない。あの「太陽が欲しい」と云ふ言葉の內容は何だ。嘗て坪內博士が「幽靈」の解說の中に、あれを「暗い」と譯した事がある。勿論「太陽が欲しい」と「暗い」とは、理窟の上では同じかも知れぬ。が、その言葉の內容の上では、眞に相隔つ事白雲萬里だ。あの「太陽が欲しい」と云ふ莊嚴な言葉の內容は、唯「太陽が欲しい」と云ふ形式より外に現せないのだ。その內容と形式との一つになつた全體を的確に捉へ得た所が、イブセンの偉い所なのだ。エチエガレイが「ドン・ホアンの子」の序文で、激賞してゐるのも不思議ではない。あの言葉の內容とあの言葉の中にある抽象的な意味とを混同すると、其處から誤つた內容偏重論が出て來るのだ。內容を手際よく拵へ上げたものが形式ではない。形式は內容の中にあるのだ。或はそのヴアイス・ヴアサだ。この微妙な關係をのみこまない人には、永久に藝術は閉された本に過ぎないだらう。

×

藝術は表現に始つて表現に終る。畫を描かない畫家、詩を作らない詩人、などと云ふ言葉は、比喩として以外には何等の意味もない言葉だ。それは白くない白墨と云ふよりも、もつと愚な言葉と思はなければならぬ。

×

しかし誤つた形式偏重論を奉ずるものも災だ。恐らくは誤つた内容偏重論を奉ずるものより、實際的には更に災に違ひあるまい。後者は少くも星の代りに隕石を與へる。前者は螢を見ても星だと思ふだらう。素質、教育、その他の點から、僕が常に戒心するのは、この誤つた形式偏重論者の喝采などに浮かされない事だ。

×

偉大なる藝術家の作品を心讀出來た時、僕等は屢その偉大な力に壓倒されて、爾餘の作家は悉有れども無きが如く見えてしまふ。丁度太陽を見てゐたものが、眼を外へ轉ずると、周圍がうす暗く見えるやうなものだ。僕は始めて「戰爭と平和」を讀んだ時、どんなに外の露西亞の作家を輕蔑したかわからない。が、これは正しくない事だ。僕等は太陽の外に、月も星もある事を知

らなければならぬ。ゲエテはミケル・アンジエロの「最後の審判」に嘆服した時も、ヴアテイカンのラフアエルを輕蔑するのに躊躇するだけの餘裕があつた。

×

藝術家は非凡な作品を作る爲に、魂を惡魔へ賣渡す事も、時と場合ではやり兼ねない。これは勿論僕もやり兼ねないと云ふ意味だ。僕より造作なくやりさうな人もゐるが。

×

日本へ來たメフイストフエレスが云ふ。「どんな作品でも、惡口を云つて云へないと云ふ作品はない。賢明な批評家のなすべき事は、唯その惡口が一般に承認されさうな機會を捉へる事だ。さうしてその機會を利用して、その作家の、前途まで巧に呪つてしまふ事だ。かう云ふ呪は二重に利き目がある。世間に對しても。その作家自身に對しても。」

×

藝術が分る分らないは、言詮を絶した所にあるのだ。水の冷暖は飲んで自知する外はないと云

ふ。藝術が分るのも之と違ひはない。美學の本さへ讀めば批評家になれると思ふのは、旅行案内さへ讀めば日本中どこへ行つても迷はないと思ふやうなものだ。それでも世間は瞞着されるかも知れぬ。が、藝術家は――いや恐らくは世間もサンタヤアナだけでは――。

×

僕は藝術上のあらゆる反抗の精神に同情する。たとひそれが時として、僕自身に對するものであつても。

×

藝術活動はどんな天才でも、意識的なものなのだ。と云ふ意味は、倪雲林が石上の松を描く時に、その松の枝を悉途方もなく一方へ伸したとする。その時その松の枝を伸した事が、どうして或效果を畫面に與へるか、それは雲林も知つてゐたかどうか分らない。が、伸した爲に或效果が生ずる事は、百も承知してゐたのだ。もし承知してゐなかつたとしたら、雲林は、天才でも何でもない。唯、一種の自働偶人なのだ。

無意識的藝術活動とは、燕の子安貝の異名に過ぎぬ。だからこそロダンはアンスピラシオンを輕蔑したのだ。

×

昔セザンヌは、ドラクロアが好い加減な所に花を描いたと云ふ批評を聞いて、むきになつて反對した事がある。セザンヌは唯、ドラクロアを語るつもりだつたかも知れぬ。が、その反對の中にはセザンヌ自身の面目が、明々白地に顯れてゐる。藝術的感激を齎すべき或必然の方則を捉へる爲なら、白汗百回するのも辭せなかつた、あの恐るべきセザンヌの面目が。

×

この必然の方則を活用する事が、卽ち謂ふ所の技巧なのだ。だから技巧を輕蔑するものは、始から藝術が分らないか、さもなければ技巧と云ふ言葉を惡い意味に使つてゐるか、この二者の外に出でぬと思ふ。惡い意味に使つて置いて、いかんいかんと威張つてゐるのは、菜食を吝嗇の別

名だと思つて、天下の菜食論者を悉しみつたれ呼はりするのと同じ事だ。そんな輕蔑が何になる。凡て藝術家はいやが上にも技巧を磨くべきものだ。前の倪雲林の例で云へば、或效果を生ずる爲に松の枝を一方に伸すと云ふこつをいやが上にも呑みこむべきものだ。靈魂で書く。生命で書く。――さう云ふ金箔ばかりけばけばしい言葉は、中學生にのみ向つて說教するが好い。

×

單純さは尊い。が、藝術に於ける單純さと云ふものは、複雜さの極まつた單純さなのだ。〆木をかけた上にも〆木をかけて、絞りぬいた上の單純さなのだ。その單純さを得るまでには、どの位創作的苦勞を積まなければならないか、この局所に氣のつかないものは、六十劫の流轉を閱しても、まだ子供のやうに喃々としやべり乍ら、デモステネス以上の雄辯だと己惚れるだらう。そんな手輕な單純さよりも、寧ろ複雜なものの方が、どの位ほんたうの單純さに近いか知れないのだ。

×

危險なのは技巧ではない。技巧を驅使する小器用さなのだ。小器用さは眞面目さの足りない所

を胡麻化し易い。御恥しいが僕の惡作の中にはさう云ふ器用さだけの作品も交つてゐる。これは恐らく如何なる僕の敵と雖も、喜んで認める眞理だらう。だが――

×

僕の安住したがる性質は、上品に納り返つてゐるとその儘僕を風流の魔子に墮落させる惧がある。この性質が吹き切らない限り、僕は人にも僕自身にも僕の信ずる所をはつきりさせて、自他に對する意地づくからも、殼の出來る事を禦がねばならぬ。僕がこんな饒舌を弄する氣になつたのもその爲だ。追々僕も一生懸命にならないと、浮ばれない時が近づくらしい。（八・十・八）

一批評家に答ふ

一批評家は新潮の九月號に、芥川龍之介の藝術を論じた。僕の藝術に與へられた評價は、少時辯ずる必要を見ない。僕が今辯じたいのは、僕の感想に關する部分である。論理さへちやんと考へれば、水掛論に終らない部分である。

一　僕はかう書いた。「作品の內容とは必然に形式と一つになつた內容である。」一批評家もこれは認めてゐるらしい。僕は又かうも書いた。「內容がもとで形式が末だ。——さう云ふ說が流行してゐるが、これはほんたうらしい噓だ。」その批評家はこれを認めないと云ふ。しかし形式と內容と一つになつてゐる以上、いづれがもと、いづれが末とは當然云ふ事が出來ぬ筈である。もし本末を分ち得るとすれば、双手相拍つて聲ある時も、右が鳴つたか左が鳴つたか、容易に判斷が出來るであらう。その批評家の云ふ「はつきりしない內容」の如きも、必「はつきりしない形式」を伴つてゐた筈である。

二　僕は又から書いた。「畫を描かない畫家、詩を作らない詩人などと云ふ言葉は、比喩として以外には何の意味もない言葉だ。」その批評家はこれも謬見だと云ふ。しかし藝術の本質を表現にありとする以上、表現を得ない藝術家は、藝術家たる事を得ぬ筈である。又實際いづれの處に、畫を描かないレムブランド、句を作らない芭蕉がゐたか？　ゐたのは不幸なる夢想家に過ぎない。のみならずその批評家は、上揭の僕の文章に勝手な解釋を加へてゐる。その一つは芥川龍之介には、「詩を作らない時の詩人、畫を描かない時の畫家すらも、それは詩人でもなく畫家でもなく思はれるであらう」と云ふ事である。その二つは芥川龍之介は、「描かれたる畫、作られたる詩は認めても、描かれない畫、作られない詩の存在することを知り得ない」とする事である。上揭の僕の文章はそんな解釋を許すものではない。

一批評家は未小兒である。これ以上僕には云ふ事はない。

（大正十一年）

小説の戯曲化

賣文に關する法律は不備を極めてゐるやうである。たとへば或雜誌社に若干枚の短篇を一つ渡し、若干圓を貰つたとする。その時その若干金は小說そのものだけを賣つた金か、それとも小說の書いてある若干枚の原稿用紙を賣つた金か、法律には何とも規定されてゐない。これは我我の原稿ならば兎も角、夏目先生の原稿にでもなれば當然問題を生ずる筈である。が、まあそんなことはどうでも好い。差當り頗る困ることは或種の著作權侵害である。

たとへばこの間菊池寬は小說「義民甚兵衞」を三幕の戯曲に書直した。あれを菊池自身はやらずに、僕でも戯曲に書直したとする。その場合僕は友誼上、或は慣例上一應菊池の許可を待つた後、戯曲に書直すのに違ひない。のみならずその原稿料乃至上場料の何割かはちやんと菊池にも奉納するであらう。しかし萬一許可を受けず、原稿料乃至上場料をすつかり着服してしまつたにしろ、僕は必しも罰金を出したり、監獄へはいつたりしないでも好い。いや、日本の法律にかう

云ふ著作權侵害に關する明文の存在しない以上、明日も亦昨日のやうに平然と散歩位は出來さうである。

それも芥川龍之介に著作權侵害を蒙つたのならば、まだしも菊池はあきらめられるであらう。少くとも絶交さへ申渡せば、大抵片はついてしまひさうである。が、何處の馬の骨ともわからぬ君子に素早い仕事をやられた時にも、やはり泣寢入りになり兼ねないと云ふのは、――勿論菊池は身代限りをしても、法廷に權利を爭ふかも知れない。しかし訴訟を起したにしろ、敗訴になる可能性を持つてゐると云ふのは明らかに不合理の行止まりである。

尤もこれは日本ばかりではない。英吉利も亦同じことである。少くとも Shaw の Admirable Bashville の始めて書物の形になつた千九百十三年迄は同じことだつた筈である。(これはショオ自身の小説 Cashel Byron's Profession を戲曲に書直したものである。ショオは勿論この戲曲の序文にかう云ふ著作權侵害に關する法律上の不備を論じてゐる。さもなければ法律などに疎い僕は永久にこんなことには氣がつかなかつたかも知れない。或は又千九百十年位におのづから氣づいてゐたかも知れない。)

この法律上の不備に應ずる途は菊池寛のしたやうに、或は又ショオのしたやうに、戲曲になる小說のあつた時には作者自身戲曲に書直すことである。しかし戲曲を書かない作者は(一例を擧

げれば僕の如き）おいそれと書直しの出來るものではない。するとかう云ふ一群の作者は丁度亂世の民のやうに、野武士の切取り强盗にも默從しなければならない訣である。これは大正の聖代にも似合はぬ物騷さ加減と云はなければならぬ。

その外著作權の所在なども法規大全を覗いた限りでは甚だ曖昧に出來てゐるらしい。兎に角我我賣文業者は餘り今日の法律の御恩を蒙つてゐないことは確かである。

もう一つ次手に考へられることは作者自身の小說を戲曲に書直す可否である。たとへば菊池は「義民甚兵衞」を小說から戲曲へ書直した。が、「義民甚兵衞」なるものは小說の形式に表現すべきものか、それとも亦戲曲の形式に表現すべきものかと云ふことは豫め菊池の考へる、或は考へなければならぬことである。それを前には小說にし、後には戲曲にすると云ふのは、ゆうべの刺身をぬたにしたのと同じ非難を招かないであらうか？ 少くともぬたになる筈のものをうつかり刺身につくつたのと同じ不明を示す筈である。——と云ふ考へかたも出來ないことはない。

けれども同一の題材を二つに使はれぬと云ふ道理はない。いや、小說から戲曲にせずとも、小說から小說にもなる訣である。たとへば久米正雄などはたつた一つの失戀を無數の小說にしてゐるではないか？（と云ふのは久米を嘲るのではない。無數の失戀をしてゐる癖にたつた一つの小說も書けぬ新時代の青年に比べれば、數等久米は見上げたものである）況や小說から戲曲にする

のは恥辱でも何でもない筈である。勿論どちらか一方の傑出することもあるかも知れない。しかしそれは同一の作者に傑作もあれば悪作もあると少しも變りはない理窟である。

尤も論者はかう云ふに違ひない。それは小説にした場合と異つた見地に立つた上、戯曲に書直した場合だけである。さもなければ如何に割引きしても、不明の非難だけは免れないであらう。――この説は一應尤もである。成程戯曲にした結果、小説よりも傑出したとすれば、過去の不明は咎められるかも知れない。が、戯曲にしさへすれば當然傑出するものを戯曲にせずに置いたとすれば、現在の不明は過去の不明よりも一層非難に價する筈である。又戯曲にした結果、小説よりも効果を缺いたとしても、小説を讀まない讀者にも鑑賞される場合を考へれば、一概に非難するのも考へものであらう。たとへばストラットフォオドの子供たちの爲にお伽噺を書けと云はれたとすれば、シエクスピイアは多少の效果を缺いても、「テムペスト」をお伽噺に書直しさうである。況や前にも書いた通り、或種の著作權侵害だけは法律の庇護を受けてゐない。すると戯曲の書ける作者は戯曲化し得る小説を持合せる以上、さつさと戯曲に書直すのも當を得た處置と云はれぬであらうか？

勿論過去の不明もいかん、多少の效果を損ずるも怪しからんときめつけられるならば――「爾等のうち罪なきものまづ彼を石にて撃つべし」である。僕は唯さう云ふ論者には微苦笑の一撥を

与へる外はない。

（大正十三年二月）

文部省の假名遣改定案について

我文部省の假名遣改定案は既に山田孝雄氏の痛撃を加へたる所なり。（雜誌「明星」二月號參照）山田氏の痛撃たる、尋常一様の痛撃にあらず。その當に破るべきを破つて寸毫の遺憾を止めざるは殆どサムソンの指動いてペリシテのマツチ箱のつぶるるに似たり。この山田氏の痛撃の後に假名遣改定案を罵らむと欲す、誰か又蒸氣ポンプの至れる後、龍吐水を持ち出すの歎なきを得むや。然れども思へ、火を滅せむには一杓の水も用なしと做さず。況や一條龍吐水の水をや。是僕の創見なきを羞ぢず、消防に加はらむとする所以なり。

我文部省の假名遣改定案は漫然と「改定」を稱すれども、何に依つて改定せるかを明らかにせず。勿論政府の命ずる所の何に依るかを明らかにせざるは必しも咎むべからざるに似たり。僕は銀座街頭を行くに常に左側を通行すれども、何に依つて右側を歩まず左側を歩むかを明らかにせず。然れども左側を歩む所以は便宜に出づることを信ずればなり。

試みに僕等に命ずるに日比谷公園の躑躅を伐り、家鴨を殺すことを以てせよ。誰かその何の故に伐り何の故に殺すかを問はざらむや。卽ち政府の命ずる所の何に依るかを明らかにせざるは必しも咎むべからずと雖も、まづその便宜に出づる所以を僕等「大みたから」に信ぜしめざる可らず。假名遣改定案を制定したる國語調査會の委員諸公は悉聰明練達の士なり。何ぞこの明白なる理の當然を知らざることあらむや。然らば諸公は假名遣改定案の便宜たるを信ずるのみならず、僕等も亦便宜たることを信ずること、諸公の如くなるを信ずるなるべし。諸公の便宜たるを信ずるは諸公の隨意に任ずるも可なり。然れども僕等も諸公の如く便宜たることを信ずべしとするは——少くとも諸公の樂天主義も聊か過ぎたりと言はざるべからず。

僕は勿論假名遣改定案の便宜たることを信ずる能はず。假名遣改定案は——たとへば「ゐ」「ゑ」を廢するは繁を省ける所以なるべし。然れども繁を省けるが故に直ちに便宜なりと考ふるは最も危險なる思想なり。天下何ものか暴力よりも容易に繁を省くものあらむや。若し僕にして最も手輕に假名遣改定案を葬らむとせむ乎、僕亦區々たる筆硯の間に委員諸公を責むるに先だち、直ちに諸公を暗殺すべし。僕の諸公を暗殺せず、敢てペンを驅る所以は——原稿料の爲と言ふこと勿れ。——一に諸公を暗殺するの簡は卽ち簡なりと雖も、便宜ならざるを信ずればなり。「ゐ」「ゑ」を廢して「い」「え」のみを存す、誰か簡なるを認めざらむや。然れども敷島のやまと言葉の亂れむ

とする危險を顧みざるは斷じて便宜と言ふべからず。國語調査會の委員諸公は悉く聰明練達の士なり。豈陽に忠孝を說き、陰に爆彈を懷にする超僞善的恐怖主義者ならむや。しかも諸公の爲す所を見れば、諸公の簡を尊ぶこと、土蠻の生殖器を尊ぶが如くなるは殆ど恐怖主義者と同一なり。雜誌「明星」同人は諸公を以て便宜主義者と做す。（雜誌「明星」三月號所載）便宜主義者乎。便宜主義者乎。僕は寧ろ諸公を目するに不便宜主義者を以てするものなり。

我文部省の假名遣改定案の便宜に出づることを認め難きは上に辯じたる所なり。卒然として二の改定案を示し、恬然として責任を果したりと做す、誰か我謹嚴なる委員諸公の無邪氣に驚かさらむや。然れども簡を尊ぶは滔々たる時代の風潮なり。甘粕大尉の大杉榮を殺し、中岡艮一の原敬を刺せるも皆この時代の風潮に從へるものと言はざるべからず。然らば我委員諸公の簡を愛すること、醍醐の如くなるも或は驚くに足らざるべし。宜なるかな、南園白梅の花、壽陽公主の面上に落ちて、梅花粧の天下を風靡したるや。然れども假名遣改定案は單に我が日本語の墮落を顧みざるのみならず、又實に天下をして理性の尊嚴を失はしむるものなり。たとへば「ぢ」「づ」を廢するを見よ。「ぢ」「づ」にして絕對に廢せられむ乎。「常常小面憎い葉茶屋の亭主」は「つねずねこずら憎い葉じや屋の亭主」と書かざるべからず。「つね」の「づね」に變ずるは理解すべし。「ずね」に變ずるは理解すべからず。「毛脛」を「けずね」といふよりすれば、「つねずね」亦「常脛」ならざらむや。

「小面」の「ずら」も亦然り。若し夫「葉じや」屋に至つては、誰か「茶屋」を「ちやや」と書き、「葉茶屋」を「葉じや屋」と書かむとするものぞ。これを強ひて書かしめむとするは僕等の理性の尊嚴を失はしめむとするものなり。東京人の發音の不正確なる、常に「じ」と「ぢ」とを分たず、「ず」と「づ」とを分たざるは事實たるに近かるべし。然れども直ちにこれを以て「ぢ」「づ」を廢し去るも可なりと言はば、天日豈長安よりも遠からむや。國語調査會の委員諸公は悉聰明練達の士なり。理性の尊嚴を無視するの危險は諸君も亦明らかに知る所なるべし。然れども諸公の爲す所を見れば、殆ど地球の泥團たるを信ぜず、二等邊三角形の頂角の二等分線は底邊を二等分するをも信ぜざるに似たり。雜誌「明星」同人は諸公を以て「新しがり」と做す。「新しがり」乎。「新しがり」乎。僕は寧ろ諸公を目するに素朴觀念論に心醉したる原始文明主義者を以てするものなり。

我文部省の假名遣改定案は金光燦然たる一「簡」字の前に日本語の墮落を顧みず、理性の尊嚴をも無視するものなり。我謹嚴なる委員諸公は眞にこの案を小學教育に實施せむとするものなりや否や。否、僕はこの案の常談たることを信ずるものなり。若し常談たらずとすれば、實施するの不可は言ふを待たず、たとひ實施せずとするも、我國民の精神的生命に白刃の一擊を加へむとしたるの罪は人天の赦さざる所なるべし。我國語調査會の委員諸公は悉聰明練達の士なり。何ぞ大正の聖代にこの暴擧を敢てせむや。僕は正直に白狀すれば、諸公の喜劇的精神に尊敬と同情と

を有するものなり。然れども、誰かこれを言はずや、「常談にも程がある」と。僕は諸公の常談の大規模なるは愛すれども、その世道人心に害あるの事實は認めざる能はず。

我日本の文章は明治以後の發達を見るも、幾多僕等の先達たる天才、——言ひ換へれば偉大なる賣文の徒の苦心を待つて成れるものなり。羅馬は一日に成るべからず。文章亦羅馬に異らむや。この文章の興廢に關する假名遣改定案の如き、輕々にこれを行はむとするは紅葉、露伴、一葉、美妙、蘇峰、樗牛、子規、漱石、鷗外、逍遙等の先達を侮辱するも甚しと言ふべし。否、彼等の足跡を踏める僕等天下の賣文の徒を侮辱するも甚しと言ふべし。僕等は句讀點の原則すら確立せざる言語上の暗黑時代に生まれたるものなり。この混沌たる暗黑時代に一縷の光明を與ふるものは僕等の先達並びに民間の學者の纔かに燈心を加へ來れる二千年來の常夜燈あるのみ。若しこの常夜燈にして光明を失はむ乎、僕等の命休すべく、日本の文章衰ふべし。我謹嚴なる委員諸公は僕等の命休するも泰然たらむは疑ふべからず。(同時に又僕等の墓上の松颯々の聲を生ずるの時に當り、僕等の作品を教科書に加へ、併せて作者の夢にも知らざる註釋を附せむも疑ふべからず。)然れども思へ。中堂の猛火、東叡山の天を焦がしてより日本の文章に貢獻したるものは文部省なるか僕等なるかを。明治三十三年以來文部省の計畫したる幾多の改革は一たびも文章に裨益したるを聞かず。却つて語格假名遣の誤謬を天下に蔓延せしめたるのみ。その弊害を知らむとするも

のは今に至つて誤謬に富める新聞雜誌書籍等——たとへば僕の小說集を見るべし。しかも文部省はこれを以て未だその破壞慾を滿たしたりと做さず、たとひ常談にも何にもせよ、今度の假名遣改定案を發表したるはかの爆彈事件なるものと軌を一にしたる常談なり。僕は警視廳保安課のかかる常談を取締まるに甚だ寛なるを怪まざる能はず。

僕は勿論山田孝雄氏の驥尾に附する蒼蠅なり。只雜誌「明星」の讀者を除ける一天四海の恆河沙人は必しも假名遣改定案の愚擧たるを知れりと言ふべからず。卽ち豫言者ヨハネの如く、或は救世軍の太鼓の如く山田氏の公論を廣告するに聲を大にせる所以なり。然れども野人禮に嫻はず、妄りに猥雜の言を弄し、上は山田孝雄氏より下は我謹嚴なる委員諸公を辱めたるはその罪素より少からず。今ペンを擱かむとするに當り、謹んで海恕を乞ひ奉る。死罪々々。

（大正十四年二月）

雜纂

文藝雜談

僕等の小說を載せるものは、月刊雜誌や新聞である。それは昔と變つたことは無い。然し、西洋に居る友達の寄越したノウトルダムの繪葉書を見てゐると、斯う云ふことも考へずにはゐられぬ。斯ういふこととは、どう云ふことかと云へば、由來、繪といふものは建築に支配されないことは無い。あのミケル・アンジエロの大壁畫を生んだのも、ロマネスクの建築のあつた爲である。同時に又、フアン・アイクの小油繪を生んだのもゴシツクの建築のあつた爲である。すると、文藝上の作品も、その作品の掲げられる月刊雜誌や、新聞の支配を受けてゐるかも知れぬ。現に今日の長篇小說は、どこか新聞紙の匂をもつてゐる。もし後代から見たとすれば、やはり今日の短篇小說もその行と行との間に、月刊雜誌を感じさせるだらう。之は僕一人の空想かも知れぬ。然し、僕等の作品の中から、新聞や雜誌の浮び上ると云ふことは、どこか表現派の映畫じみた空想であるに相違なからう。

×

それらの新聞や雜誌に載る、小說の數を勘定すれば、一年に千を越えるだらう。然し、小說の生命と云ふものは、考へてみれば短いものである。あらゆる文藝の形式中、小說ほど一時代の生活を表現出來るものはない。同時に又、一面では生活樣式の變化と共に小說ほど力を失ふものはない。なるほど、昨日の生活を知る爲には、昨日の小說を讀まなければならぬ。然し、それは「知る爲に」である。僕等の心を震蕩する小說の生命を感ずる爲ではない。

僕と同時代の作家達は、より人間らしい忠直卿や俊寬僧都を描いて居る。然しそれらは、遲かれ早かれ「より、より人間らしい」忠直卿や俊寬僧都に改められるであらう。最も素朴な心持は——譬へば男女相愛の情は源氏物語の中にあつても、やはり僕等を動かす筈である。けれども、誰も眞實の溢れた數行の文章を讀む爲に、數百頁を讀破する根氣のある者はないに違ひない。この素朴な心持を切實に表現したものだけ、時代を超えると云ふことは、卽ち、抒情詩の生命が小說よりも長い所以である。實際又、日本文學多しと雖も、萬葉集中の短歌程、長い生命をもつものは一つも他には無いことだらう。

すると小說は、——恐らくは戲曲も頗るジヤアナリズムに近いものである。もし嚴密に云ふとすれば、一人の作家なり、一篇の作品なりは、一時代の外に生きることは出來ない。これは最も

切實に一時代の生活を表現する爲に小說の支拂ふ租稅である。前にも一度云つた樣に、あらゆる文藝の形式中、小說ほど短命に終るものはない。同時に又、一面では小說ほど痛切に生きるものはない。從つて又、その點から見れば小說の生命は抒情詩よりも、更に抒情詩的色彩を帶びて居る。つまり小說と云ふものは、丁度稻妻の光の中に僕等の目前を掠めて飛ぶ火取蟲に近いものなのだらう。

×

それから又、僕は大正十五年度には正宗白鳥氏の時評以外に、批評は無いと云ふ文章を讀んだ。正宗氏の時評の鋭いことには誰も異存のある筈はない。しかし、正宗氏の時評以外に全然時評の無いやうに云ふのは、尠くとも僕には疑問である。第一あるかないかを知る爲には、先づ批評を讀まなければならぬ。然し、僕の見受るところでは、誰もあまり批評家の批評と云ふものを、讀んでゐない。(批評家自身は讀んでゐるとしても、或はそのペンに觸れた作家自身は讀んでゐるとしても)讀まずに批評は無いと云はれるのは、批評家自身にも氣の毒である。のみならず、事實上ない訣では無い。譬へば、若い批評家達は「詩的精神の缺乏」と云ふことに反對して居る。この言葉などは幾分でも耳を傾けるに足るものであらう。

もし自敍傳と云ふものから私小說を引離すとすれば、それは只、詩的精神の有無、或は多少に

依つて決せらるべきものである。尤も僕の詩的精神といふのは、必しも西洋詩的精神ばかりではなく、東洋詩的精神もやはりその中に入るものである。譬へば葛西善藏氏の私小說にしても、僕は或人々の樣に如實に人生を描いたから尊いものであるとは思つてない。同時に又、或人々の云ふ樣に、如實に人生を描いてゐないから尊いものでないとも思つてゐない。ただ雨中の風景に似た或美しさを捕へて居るところは、容易に誰も眞似の出來ない特色であると思つて居る。然し、葛西氏の私小說に贊辭を惜まない人々さへ、誰も皆この美しさを感じてゐるかどうか疑問である。之は又、瀧井孝作氏の作品などに就いても云はれることだらう。僕はこの美しさ――詩的精神の無いところには、如何なる文藝上の作品も成り立たないとさへ思つて居る。

×

僕は又、プロレタリア文藝にもかなり、希望を持つてゐる。之は反語でも何でもない。昨日のプロレタリア文藝は、ただ作家が社會的意識のあることを、唯一無二の條件としてゐた。然し、源氏物語を源氏物語たらしめたものは、作家が貴婦人たる爲でもなければ、取材が宮廷生活たる爲でもない。これは云ふまでもないことであらう。批評家達は所謂ブルジョア作家達に社會的意識を持てと云つてゐる。僕もその言葉に異存などはない。然し又、所謂プロレタリア作家にも詩的精神をもてと云ひ度いのである。

僕は近頃、斯ういふ希望が徒でなかつたことを感じてゐる。譬へば中野重治氏の詩などは昨日の所謂プロレタリア作家の作品の樣に精彩を缺いだものではない、どこか今迄に類少い、生ぬきの美を具へて居る。斯ういふ小說や戲曲なども、明日はもつと生れるかも知れない。或は僕の目の屆かぬところに、すでに續々と生れてゐるのであらう。(尙次手に一言すれば、僕は近頃中野氏が久米正雄の「萬年大學生」に對し、萬年小僧よと云つて居る詩を讀んだ。然し久米はあの作品の主人公が、社會主義者になつたのを輕蔑して居る次第ではない。それを萬年小僧よときめつけられては久米も迷惑に思ふだらう。斯ういふのは久米への會釋ではない。久米は僕等の間では當時の社會主義者的感激を一番もつてゐた大學生だつた。そんなことを考へると、今昔の感に堪へないから一寸附け加へる氣になつたのである。)

×

何も話の次手だから、久米正雄のことに及ぶと、僕は批評上の印象主義者として久米程、いろいろのものを、理解する批評家は少くはないかと思つてゐる。久米はいつかチエホフのことを、チエホフは今日の作家でもなければ明日の作家でもないかも知れない。しかし、いつの時代になつても昨日の作家である。」と云つて居た。僕等に親しいチエホフを批評した言葉として、如何にも肯綮を得たものである。若し久米に文藝時評を書かせるとすれば、正宗白鳥氏のやうに、思想的

な個性は強くないにしても、丁度煙草を愛する人が紙卷や葉卷を吸ひわける樣に、いろいろの作品の特色を、巧に味ひわけるであらう。(但し僕の作品だけは褒める場合は兎も角も、何か悪口を云ふ場合は必ずしも、久米の批評的烱眼を認めないことは勿論である。)僕はどの雜誌の編輯者も、何故久米に文藝時評を依賴せぬのかと思つてゐる。尤も久米は億劫がりだから依賴しても、月々は務められないかも知れない。

×

バアナアド・ショウは老來益々健在のやうである。ノベル賞金を貰つたのも、その人を得てゐるのに違ひない。しかしショウの「セント・ジョン」は、ショウの作品の中でも傑作かどうか疑問である。「バック・トウ・メスウズラ」ほどではないにしても、「ハアト・ブレエク・ハウス」よりも惡作だらう。僕はショウの最高水準はやはり「カンデイダ」時代ではないかと思つてゐる。ショウは自から任じてゐるやうに藝術的作家ではない。寧ろ道德的な作家である。ショウが一時代を席捲したのもかういふ爲であらう。しかし又、或は後代から見ればやはり斯ういふ爲に、案外興味を引かないかも知れない。ショウはその傳記作者に既にヘンダアソンを得てゐるやうである。けれどもヘンダアソンも、ジョンソンに於けるボオズウエルほどの、力量を持つてゐるかどうか。若し持つてゐないとすれば(是は多分持つてゐないかと思ふが)ショウの死後の聲名は勿論、

それだけ縮まる訣である。或は現在のショウの問題は「如何なる戲曲を書くか」よりも「如何なる傳記作者を得るか」かも知れない。

×

これも話の次手だが、ショウは確か「バック・トウ・メスウズラ」の序文にいろいろクリストのことを論じ、クリストがヱルサレムへ赴いて自殺的に十字架に懸つたのは、精神錯亂といふ外に解し方はないと云つて居る。しかし僕はさう思はない。クリストを十字架に驅りやつた者はクリスト自身の宗教だつたらう。斯ういふのは單に新しい宗教を說いた爲に、十字架に懸つたといふ意味ではない。新しい宗教を說いてゐるうちに、十字架に懸らねばならぬ氣持ちになつて仕舞つたのだと云ふのである。僕は昔アンドレエフの「イスカリオテのユダ」と云ふ小說を讀んだ。近頃また評判のパピニの「クリスト傳」と云ふものを讀んだ。しかしどちらもこの點では僕の解釋とは違ふものである。僕は僕の解釋を唯一無二の解釋とは思つてゐない。が、僕の解釋のやうに十字架につかなければならなくなつたクリストの氣持を想像すれば、そこに僕等の日常の氣持にも近いものがありはしないかと思つて居る。

×

僕は明治のクリスト教文學といふものには、殆ど親しんだことがない。（德富蘆花氏の作品は例

外だ。）しかしクリスト教文學と云ふ言葉から思ひ出すのは、文祿慶長のキリシタン文學である。僕の知つてゐる限りでは、キリシタンの徒に詩的感情を寄せたのは、先づ北原白秋氏や木下杢太郎氏だつたやうである。齋藤茂吉氏にも初版「赤光」には南蠻男などと云ふ連作があつて、僕などはそれらの先輩の造つた畝を歩いて行つた鴉である。しかし僕がキリシタン小說を書いた頃は、キリシタン文學の活字本も殆ど世に出てゐなかつた。僕は「鮮血遺書」を手に入れるために、隨分古本屋を廻つたものである。是は僕の苦心談ではない。ただ「紅毛雜話」などさへ無暗に高價になつたことに多少の愚痴をこぼしたいのである。

（昭和六年十二月）

芝居漫談

芝居とはどう云ふものか？――それは僕の言ひたいことではない。唯僕の言ひたいのは僕の見たい芝居のことである。

僕は芝居らしい芝居には、――所謂戲曲的興味の多い芝居には今はもう飽き飽きしてゐる。僕は出來るだけ筋を省いた、空氣のやうに自由な芝居を見たい。芝居と云ふものは性質上、或はかう云ふ要求を容れることは出來ないかも知れぬ。しかし又或程度までは容れることも出來るかも知れぬ。

×

これは芝居ばかりではない。僕は今は小説にもかう云ふ要求を感じてゐる。勿論僕の言ふ所は筋のない小説ばかり書けと言ふのではない。同時に又筋のない小説を最高のものと言ふのでもな

い。唯筋らしい筋のない小說や芝居に出合ひたいのである。ジユウル・ルナアルはかう云ふ點では、たとへば岸田君の飜譯した「葡萄畑の葡萄作り」の中でも前人未踏の地を開拓した。あれは一見「思ひつき」のやうでも容易に「思ひつき」だけでは出來る仕事ではない。緻密な觀察の上に立つた詩的精神の所有者だけが僅かに成就出來る仕事である。この仕事の獨創的なことはフランス人自身も認めてゐるかどうか？

×

しかしそれは僕等には或は危險な罠かも知れぬ。若し或る論者の言ふやうにセザンヌを繪畫の破壞者とすれば、ルナアルも小說の破壞者である。けれどもルナアルの登つた峯は兎に角前人の登つた峯ではない。僕は誰かかう云ふ峯へ登る人はないかと思つてゐる。いや、實はかう云ふ峯へ登つた人もゐるかも知れぬ。唯僕の言ひたいのはもつと登つても善いと云ふことである。殊に日本の芝居には一層この要求を投げつけたい。

「もつと澤山の idea を」——僕は日本の文壇にいつもかう言ひたい氣を持つてゐる。筋らしい筋のない小說だの芝居だのを欲しいと云ふ心持も或はかう云ふ要求の一部の流れ出たものかも知れぬ。

×

あらゆる文藝は廣い意味の詩的精神を具へなければならぬ。芝居も亦恐らくは例外ではあるまい。ジヨン・ガブリエル・ボルクマンを第一回に上場した自由劇場は次第にイブセンからメエテルリンクへ――メエテルリンクからアンドレエフへ移つて行つた。僕はかう云ふ小山内さんの氣もちに――詩を求める小山内さんの氣もちに少からず同情を感じてゐる。しかし僭越にも批評するとすれば、或はイブセンからメエテルリンクへ――メエテルリンクからアンドレエフへ移るよりもイブセン自身の中にある詩的精神へ踏み入ることが最も喫緊な問題だつたかも知れぬ。

×

僕は歌舞伎劇は歌舞伎劇のまゝ保存したいと思つてゐる。しかし大道具や小道具を始め、役者の化粧さへいつの間にか現代の空氣にかぶれるらしい。この流轉の力に對抗することは或は絕望に了るかも知れぬ。けれども若し出來るならば、やはり火入りの月の前に縫ひぐるみの犬を吠えさせて置きたい。

日本の文藝は、――殊に芝居（新劇）はしつかりと傳統に根ざしてゐない。しかしいつかは歌舞伎劇のやうに完成した芝居も生まれる筈である。成程日本の新劇運動は一本筋には進まなかつたかも知れぬ。しかし川上音二郎のオセロを演じた時を思へば、――又川上貞奴のモンナ・ヴアンナを演じた時を思へば、必しも進歩の遲いことを歎いてばかりゐることはない。僕はもう十四五年以前、（或はもつと前だつたかも知れぬ。）忠臣藏を現代にした芝居を見たことを覺えてゐる。僕の記憶を信用するとすれば、鹽谷商會の主人鹽谷高貞は藤澤淺次郎、支配人大石良雄は高田實、ロシヤ人モロノツフ（！）は五味國太郎――大體から云ふ役割だつたであらう。しかもこの芝居の「城明け渡しの場」は芝浦の工場を閉鎖する場合であり、門前につめ寄せる諸士の代りには職工の押し寄せたことも覺えてゐる。かう云ふ芝居もあつたことを思へば、今昔の感に堪へないものは恐らくは何も僕一人ではあるまい。僕等の祖先は支那の雜劇を世界に比類を絕したオペラ、――能樂にさへ完成した。一人の作家は滅びても、きつと又誰かその代りにその作家の殘して行つた鋤の柄を握るのに違ひあるまい。僕は他事は暫く問はず、かう云ふ日本人の藝術的素質には未だに希望を失はないものである。（昭和改元二・四）

萩原朔太郎君

萩原朔太郎君の「純情詩集」のことは「驢馬」の何月號かに中野重治君も論じてゐる。僕はその論文を愉快に讀んだ。すると何週間かたつた後、堀辰雄君が話の次手に「萩原さんの詩には何か調べと云つたものがありますね。それも西洋音樂から來た調べと云つたものですが」と言つた。僕はその言葉にも同感した。中野君の論文は社會主義者の視點から萩原君の詩を論じたものである。僕はあの論文の上に屋上屋を架さずとも好い。又堀君の所謂「調べ」を云々せずとも好いのである。しかしそれ等の因縁から萩原君の詩のことを考へ出した。

「月に吠える」「青猫」等の萩原君は病的に鋭い感覺を自由に表現した詩人である。これは誰も認めてゐるであらう。しかしそれ等の作品にも詩人の耳を感ずることは堀君の言葉の通りである。日本の詩人の多い中にも韻律を說かない詩人はない。けれども彼等の作品の上に眞に韻律を提へた詩人は十指を屈するのに足りないであらう。萩原君はギタアを愛してゐる。が、それ等の作品

に「言葉の音樂」のあることは萩原君自身も認めてゐるかどうか、その邊の消息ははつきりしない。萩原君は嘗佐藤春夫君の詩に「十年前の詩」と云ふ苦言を呈した。（佐藤君はその言葉に「十年以前のものではない、千八百九十年代のものである」と答へてゐる。千八百九十年代は僕の信ずる所によれば、最も藝術的な時代だつた。僕も亦千八百九十年代の藝術的雰圍氣の中に人となつた。かう云ふ少時の影響は容易に脱却出來るものではない。僕は近頃年をとるにつれ、しみじみこの事實を感じてゐる。）しかし「十年前の詩」であることは「詩である」ことほど重大ではない。「詩である」ことの條件の一つは韻律を具へてゐることである。僕は萩原君の苦言を讀み、萩原君は君自身の耳をはつきり意識してゐないのではないか？――少くとも左程重大に思つてゐないのではないかと思つた。若しなぜと問はれるならば、「琴唄」「秋刀魚の歌」等の詩人はやはり萩原君と同じやうに紀の國の渚の貝殼に似た耳を具へてゐる詩人だからである。

萩原君は君自身の耳をはつきり意識してゐないかどうか、――それは枝葉の問題かも知れない。しかし同時に又萩原君の情熱のどこへ向つてゐるかと云ふことに多少の暗示を與へる筈である。萩原君の情熱の耳よりも目に向つてゐることは勿論特に言はずとも好い。それよりも更に重大なのは萩原君には論文集「新らしき欲情」のあることである。僕の信ずる所によれば、「新らしき欲情」は「純情詩集」の情熱を思想に錬金したものであらう。

萩原君は詩人たると共にこの情熱を錬金することに熱中せずにはゐられぬ思想家である。萩原君が室生犀星君と最も懸絶してゐる所はこの點にあると言つても好い。室生君は天上の神々の與へた詩人の智慧に安住してゐる。が、宿命は不幸にも萩原君には理智を與へた。僕は敢て「不幸にも」と言ひたい。理智はいつもダイナマイトである。時にはその所有者自身をも粉砕せずには置かぬダイナマイトである。しかも萩原君はその理智の上に少からずニイチェの影響を受けた。萩原君が室生君ほど清福を樂しまないのは偶然ではない。これは萩原君の「純情詩集」を室生君の「抒情小曲集」と比較すれば、誰にもはつきりとわかることである。「純情詩集」は一面には必しも純情詩集ではない。たとひ抒情詩的表現を經てゐるにもせよ、理智はその至る所に鋭い鋒芒を露してゐる。僕は「純情詩集」を讀んだ時、前橋の風物を歌ひ上げた詩に沈痛と評したい印象を受けた。同時に又「月に吠える」「青猫」等よりも萩原君の眞面目はここにあるかも知れないと云ふ印象を受けた。では萩原君の眞面目は何かと言へば、それは人天に叛逆する、一徹な詩的アナアキストである。

萩原君は詩的アナアキストである。このアナアキツクな魂は萩原君の藝術に見えるばかりではない。萩原君の藝術觀にも見えるやうである。佐藤春夫君は十年前から日本文學の傳統におのづから根を下してゐた。室生犀星君も「忘春詩集」以後、やはり傳統に根を下してゐる。が、ひとり

萩原君は全然傳統に目を觸れない。稀に傳統を顧みた(?)と思へば、それは「蝶」は言葉通りにTefu と發音しろと言ふだけである。いや、日本文學の傳統ばかりではない。萩原君は古今東西を絶した藝術上の傳統さへ顧みない勇氣を具へてゐる。「月に吠える」「青猫」等の一代の人目を聳動した、病的に鋭い感覺もその表現を導き出したものは或はこの藝術上のアナアキズムに發してゐるのであらう。

萩原君は詩人としても、或は又思想家としても、完成するかどうかは疑問である。少くとも「月に吠える」「青猫」「純情詩集」等は「完成」の極印を打たれる作品を存外多く含んでゐない。これは萩原君の悲劇であり、同時に又萩原君の榮光である。萩原君は今日の詩人たちよりも恐らくは明日の詩人たちに大きい影響を與へるであらう。その又影響は今日の詩人たちが既に萩原君から受けてゐるものとは遙かに趣を異にするであらう。僕はいつか萩原君が故山村暮鳥君の「聖三稜玻璃」を讃めてゐるのを讀んだ。が、僕に言はせれば、萩原朔太郎君自身こそ正に「聖三稜玻璃」である。或は天上の神々が「詩」を造らうとした試驗管である。

僕は「純情詩集」の現れた時、何か批評を草することを萩原君に約束した。が、とうとう今日までその約束を果さなかつた。今この文章を草するのは前約に背かない爲である。必しも「近代風景」に原稿を求められた爲ばかりではない。（十五・一一・二七）

近松さんの本格小說

僕は正直に白状すると、餘り近松さんのものを讀んでゐない。現についこの間までは「別れたる妻」や「秋江隨筆」を近松さんの傑作と信じてゐた。が、この頃「現代小說全集」中の近松秋江集を讀み、或感動を禁じ得なかつた。それは世間に近松さんほど、自然に己を語るものは一人もあるまいと思つたからである。しかし新潮合評會の記事などを見ると、この事は誰も言つてゐるらしい。隨つて僕の言などは陳腐を極めてゐるのであらう。けれども近松さんの己を語るのは正直とか何とか言ふものではない。前に言つたやうに、「自然に」である。そこには世を呪ふ心もちもなければ、己たるを羞づる心もちもない。若し眞に一讀するに足る自敍傳を得たいと思ふとすれば、僕はまづ近松さんの自敍傳に指を屈するであらう。

しかし僕の言ひたいのは近松さんの本格小說である。近松さんの本格小說は文壇では好評を得てゐないらしい。けれども僕などの所見によれば、近松さんの本格小說は決して價値の乏しいも

のではない。最近の「燐を飲んで死んだ男」にしてもちやんと出來上つた作品である。ではなぜ廣い文壇の中に好評の聲を聞かなかつたのであらうか？　それは單に批評家諸君が近松さんの「私」小說に對するのと同じ尺度を以て臨んだからである。近松さんの「私」小說は「私」小說の上乘なるものではない。（自敍傳或は「私」小說との間の差別は他日改めて書かうと思つてゐる。）その我々を動かすのは近松さんの己の流露する爲である。けれども單に作品としては必しも常に完成してゐない。時にはニュアンスに失したり、時には情緒に失したりしてゐる。それを讀者に忘れさせるのは勿論近松さんの一得であらう。けれども近松さんの本格小說もそれと同じやうに取り扱ふのは丸善の洋書を論ずるのに丸善のレエン・コオトを以てするものである。成程己の流露する爲に我々を動かさずに措かないのは「私」小說に若かないかも知れない。しかし單にこの點だけ「私」小說に若かない爲、本格小說を一蹴し去るのは丸善はいつも洋書ばかり賣つてゐ給へと云ふのも同じことである。尤も丸善のレエン・コオトはどこのレエン・コオトよりも惡いから、洋書ばかり賣つてゐ給へと云ふ議論も成り立たぬ次第ではない。しかし近松さんの本格小說は——少くとも最近の本格小說は從來餘り近松さんの本格小說に親しまなかつた僕の如きものの所見に從へば、その簡にして要を得てゐることは故森鷗外先生の「里芋の芽と不動の目」の筆致に近いものを持つてゐる。たとひ可否を問はないにもせよ、かう云ふ味はひの本格小說は近頃の文壇に多かつたで

あらうか？

僕は前にも書いたやうに近松さんの作品に感心するのに最も遲かつた一人である。從つて僕の感心しかたは多少ヒステリツクになつてゐるかも知れない。しかし世間の不評判を意外に思つたことは事實である。又「燐を飲んで死んだ男」などを近松さん自身どう思つてゐるか、それも僕は知らない爲、或は作者の身になつて見れば不快に感ずることも言つたかも知れない。けれどもその邊は近松さんの寬恕を請ひたいと思つてゐる。（十五・五・二十・鵠沼にて）

瀧井君の作品に就いて

「辻馬車」同人諸君の中に瀧井君の小説を悪評をしてゐるのを見、ちよつと愚見を述べることにしました。どうか神の審判を下す前に悪魔の辯護も聞いて見て下さい。但し愚見は辯護と云ふほど、堅固しいものではありません。

第一に瀧井君の文章です。あれは晦澁を極めてゐるやうですが、決して下手な文章ではありません。のみならず非常に凝つた文章です。わたしは「養子」の文章などには南畫めいた筆使ひさへ感じました。手もとに本がありませんから、例を引く訣には行きません。しかしあのごつごつした、飛騨の國に産する手織木綿の如き、蒼老の味のある文章は容易に書けるものではないのです。或は容易不容易を問はず、書けないのは寧ろ幸福だとお言ひになるかたもあるかも知れません。それでもわたしには結構です。唯わたしはさう言はれる前にああ云ふ文章の味はひも知つてゐて頂きたいと思ふだけです。

第二に瀧井君の作品は Trivialism に落ちてゐると云ふことです。成程志賀さんの作品などに比べれば、兎角瀧井君の作品はトリヴィアルな事實を並べることに偏してゐるかも知れません。しかし瀧井君の作品の面白味は一つには又トリヴィアルな事實を並べることに存するのです。たとへばいつか瀧井君のお父さんのことを書いた小說にしても、艶つぽい坊さんが出て來たり何かするのは或はトリヴィアリズムとも言はれるでせう。けれどもあのトリヴィアリズムを除いたとしたならば、瀧井君の作品はどの位美しさを減ずるかわかりません。

さうです。わたしはこの文章を書いてゐるうちにやつと適當な言葉にぶつかりました。瀧井君の作品は少くとも古畫(足利時代の畫と云ふ意味ではなしに)や古俳諧に共通した美しさの上に立つてゐるのです。尤もかう云ふ美しさばかりを目的にしてゐるとは言ひません。しかしかう云ふ美しさを必要條件の一つとしてゐるのです。若しかう云ふ美しさの代りにたとへばドンゲンの畫やコクトオの詩などに共通した、西洋的美しさの上に立つてゐたとすれば、瀧井君の作品はもつと容易に認められたでせう。實際又瀧井君の作品は瀧井君自身も意識しないほど、極めて詩的なものですから。或は更に細かに言へば、極めて東洋詩的なものですから。

若しここにブルンティエエル流の批評家があり、小說とは斯くならざるべからずと云ふ定木の下に瀧井君の小說を排するならば、それはその定木を檢べて見ない限り、一應は尤もと言はなけ

ればなりません。しかしここに批評上の印象主義者があり、現代の諸家の小説を諸家の小説の味はひにより、それぞれ特色を認めてゐる場合、ひとり瀧井君の作品を認めないのは甚だ瀧井君に氣の毒です。若しユニイクと云ふ點から云へば、瀧井君の作品などは頗るユニイクなものなのですから。

わたしは瀧井君の作品をユニイクであると言ひました。ユニイクであると云ふ意味は誰も外に眞似手のない價値を持つてゐると云ふ意味です。瀧井君の作品は決して志賀さんの作品を模倣したばかりでは出來ません。寧ろ志賀さんの作品を模倣した人々の作品よりも異色を持つてゐることこそ瀧井君の作品の身上なのです。

「辻馬車」同人諸君の作品は度たび詩的精神に溢れてゐます。尤も詩的精神にも東西の懸隔のある以上、瀧井君の作品に興味のないのは或は自然かも知れません。しかしもう少し同情して讀んで貰ふと、存外理解し合ふ點も出來るのではないかと思ひます。その爲に懷爐を腹に入れたまま、神崎君の煽動により、この文章を艸しました。實はもう少し書きたいのですが、目下腹を下してゐる爲、精しく考へてゐる餘裕がありません。（六・十四）

（大正十五年）

〔未定稿〕

凡兆に就いて

文章俱樂部の八月號に、室生犀星君が凡兆の句に評釋を書いてゐる。僕もその眞似をして、凡兆のことを話したいと思ふ。

凡兆は非常に銳い頭を持つてゐたらしい。例へば

　　物の音ひとり倒るる案山子かな

と云ふ句などを見ても、何かピシリと僕等の心を打つものがある。同じ案山子の句でも、太祇の「夜嵐の吹き細りたる案山子哉」などに比べると格段に犀利な趣きに富んでゐるやうに思ふ。これは又、「蕉門古人眞蹟集」にある凡兆の筆蹟、

　　捨舟のうちそとこほる入江かな

に徴しても、明らかな事實ではあるまいか。

それから又、凡兆は銳い頭の持主だけに、負けぬ氣の強い人だつたらしい。「雪積む上の夜の

雨」と云ふ句の上五を芭蕉に訊ねた時、芭蕉が「下京や」と置いたのでも尚服されなかつたと云ふ逸話は、確かに凡兆の一面を語るものであらう。凡兆が牢から出た時の句と云ふ

猪の首の強さよ花の春

も、やはり斯う云ふ凡兆の性格を示してゐるやうに思はれる。

僕は天分を論ずれば、芭蕉の門人の中では、丈草がもつともすぐれてゐたと思ふ。しかし凡兆の才力も群を抜いてゐることは確かである。凡兆の句を見て、凡兆の人となりを思ふ時、凡兆が獄に下つたのは偶然でない氣もしないことはない（凡兆が何の罪の爲めに入牢したかは別問題として）。

僕は昔、凡兆の

時雨るるや黒木積む屋の窓明り

と云ふ句を讀んで、なるほど俳諧とは斯う云ふものかと、大いに感心したことがあつた。とにかく、凡兆は只ものではない。

（大正十五年）

思ふままに

最も水に憧れるものは水嚢に水を貯へない駱駝背上の旅客である。尤も正義に憧れるものは社會に正義を發見しない資本主義治下の革命家である。このやうに我我人間の最も熱心に求めるものは最も我我に不足したものである。此處までは誰も疑ふものはあるまい。

しかしこれを眞理だとすれば、最も足に憧れるものは足を切斷した癈兵である。最も愛に憧れるものは愛を失つた戀人である。最も眞面目さに憧れるものは――予は論理に從はざるを得ない。眞面目さに憧れる小說家、眞面目さに憧れる評論家、眞面目さに憧れる戲曲家等は悉く彼等自身の心に眞面目さを缺いてゐる俗漢である。彼等は元來他人のことを不眞面目だなどと云はれた義理ではない。況や喜劇的精神の持ち主に兎角の非難を加へるのは僣上を極めた暴行である。

又歷史の教へるところによれば、古來眞面目なる藝術家は少しも眞面目さを振りかざさない。彼等の作品には多少によらず、抑へ切れない笑ひが漂つてゐる。辛辣の名の高いイブセンさへ、

眞面目さを看板に苦りきる程、人間離れのした怪物ではない。「ピイア・ギュント」は少時間はず、「鴨」の中から迸しるものは神鳴のやうな笑ひ聲である。「鰐」や「叔父の夢」のドストエフスキイも常談を好むことは人後に落ちない。御亭主と接吻をする間さへ、着物の皺になるのを心配するのはトルストイの描いた女である。義眼の片目に人生を見ながら、道徳を說いてやまないものはストリントベルグの描いた男である。

所謂眞面目なる小說家、評論家、戯曲家等に眞面目さの缺けてゐることは論理の證するところにより疑ふ餘地のない事實である。尤もかう云ふ結論だけは誰も氣づかずにゐる譯ではない。實は大抵暗暗の裡にかんづいてゐることはゐるのである。

たとへば武者小路實篤氏は眞面目なる藝術家の一人である。これは誰一人疑ふものはあるまい。しかし思想のみならず、文體さへ武者小路氏に酷似した倉田百三氏の場合になると、疑ひなきを得ないものも多さうである。武者小路氏と倉田氏と、どちらが手腕があるかは問はないでも好い。唯眞面目さを問題とすれば、兩氏とも大抵同一に認められさうなものである。それが不思議にもさうならないのは、何か武者小路氏と倉田氏との間に異なつたものがなければならない。では何處が異るかと云へば、武者小路氏の眞面目さの中には愛すべきヒュウモアの閃きがある。一休和尙や曾呂利新左衞門は今更說明する必要もあるまい。大蛇を退治した素戔嗚の尊は踊りにさへ加

はる雅量を持つてゐる。地球を創造した神様も滑稽天使を呼ぶ時には「コツケイ！」と叫ぶことを憚らない。しかし倉田氏の親鸞上人は悲しさうな顏を片づけてゐる。いや、親鸞上人に限つたことではない。俊寛は平家を呪つてゐる。布施太子は悄然と入山してゐる。父は――まだ讀んだことはない。しかし廣告に僞りがなければ、兎に角父も心配してゐる。

武者小路氏は「常に」眞面目ではない。倉田氏は「常に」眞面目である。常に眞面目に構へてゐるのは生死さへ多少疑はしい。山椒の魚は常に眞面目である。サンドウイツチ・マンも常に眞面目である。埃及の王樣の木乃伊などは就中常に眞面目である。倉田氏の眞面目さを疑はれるのは當然のことと云はざるを得ない。

人間はパスカルの言葉によれば、ものを考へる蘆である。蘆はものを考へないかどうか――それは予には斷言出來ない。しかし蘆は人間のやうに笑はないことだけは確かである。予は笑ひ顏の見えないところには、獨り眞面目さのみならず、人間性の存在をも想像出來ない。眞面目さに憧れる小說家、評論家、戲曲家等に敬意を持たないのは當り前である。

――淺香三四郎の假名のもとに――

（大正十二年六月）

プロレタリア文藝の可否

文藝は俗に思はるる程、政治と緣なきものにあらず。寧ろ文藝の特色は政治にも緣のあり得るところに存在すとも云ふを得べし。プロレタリアの文藝と云ふものこの頃やつと始まりしは、反つて遲すぎる位なり。Crainquebille の世に出でしは今よりざつと二十年前なれば、遲すぎる位と云ふことは決して僕の誇張ならず。

且又プロレタリアの文藝、――でも何でもよし、政治的色彩ある文藝と云へば兎角輕蔑を買ひ易けれど、パルナサスの頂上に達する途も東京市中の道路と同樣、必しも藝術至上主義者の滿足を買ふやうには出來て居らず。古來の雄篇と云ふ中には、實は種種なる政治的理由にその聲價の一半を負うてゐるものも澤山あり。もし嘘と思ふ人はユウゴオの人氣を考ふべし。それも面倒と思ふ人は山陽の評判を考ふべし。日本外史を有名にせしは詩人たり歷史家たる山陽よりも、尊王家たる山陽に依りしにあらずや。して見ればプロレタリアの文藝家の中にも、第二の山陽やユウ

ゴオを得ること、必しもなしと云ふべからず。

勿論藝術至上主義者は政治的理由を待つて後、文明を後代に傳ふるは恥辱なりと云ふなるべし。僕はこの種の藝術至上主義者に尊敬と好意とを有するものなり。（ひとり藝術至上主義者に限らず、僕はあらゆる至上主義者、――たとへばマッサアジ至上主義者にも好意と尊敬とを有するを常とす）されどかのユウゴオの如く、或はわが山陽の如く、蒼生と悲喜を同うするは輕蔑すべきことなりや否や。僕は如何に考ふるも、彫蟲の末技に誇るよりは高等なることを信ずるものなり。

唯僕の望むところはプロレタリアたるとブルジョアたるとを問はず、精神の自由を失はざることなり。敵のエゴイズムを看破すると共に、味方のエゴイズムをも看破することなり。こは何人も絶對的にはなし能はざるところなるべし。されど不可能なることにあらず。プロレタリアは悉く善玉、ブルジョアは悉く惡玉とせば、天下はまことに簡單なり。簡單なるには相違なけれど、――否、日本の文壇も自然主義の洗禮は受けし筈なり。誰か又賢明なる諸公に自明の理を云云せんや。

人類は進歩するものなりや否や、多少の疑問なき能はず。僕は四道將軍とシベリア派遣軍の將軍諸公といづれが進歩せる人間なりや、常に判斷に苦しむものなり。されどたとひ遲遲たるにせよ、進歩せざるにもあらざる如し。よし又進歩せずとするも、將來は進歩せしめざるべからず。

この故に僕は何ものよりも精神の自由を尊重するなり。獨逸國民は――或は歐羅巴洲民は、――更に又或は人類は、ベルネに負ふところなきにあらず。されどゲエテに負ふところは啻に數倍のみにあらざるべし。しかもベルネはゲエテを罵るに、民衆の幸福を顧みざる冷血動物を以てしたり。

（但し僕を咎むるにゲエテを氣取るものとすること勿れ。僕はゲエテのみならず、多數の前人を氣取るものなり。）

されどプロレタリアの文藝至上主義者はプロレタリアの文藝以外に、人類の進歩に役立つべき文藝なしと云ふかも知れず。もし然りとせば片意地なる僕は事の文藝に關する限り「どうだか」と諸公に答ふるあるのみ。唯幸ひに記憶せよ。僕はあらゆる至上主義者――たとへばマッサアジ至上主義者にも尊敬と好意とを有することを。

（大正十二年一月）

佛蘭西文學と僕

僕は中學五年生の時に、ドオデエの「サツフオ」と云ふ小說の英譯を讀んだ。勿論どんな讀み方をしたか、當てになつたものではない。まあ好い加減に辭書を引いては、頁をはぐつて行つただけであるが、兎も角それが僕にとつては、最初に親しんだ佛蘭西小說だつた。「サツフオ」には感心したかどうか、確な事は覺えてゐない。唯あの舞踏會から歸る所に、明け方の巴里の光景を描いた、たつた五六行の文章がある。それが嬉しかつた事だけは覺えてゐる。

それからアナトオル・フランスの「タイス」と云ふ小說を讀んだ。何でもその頃早稻田文學の新年號に、安成貞雄君が書いた紹介があつたものだから、それを讀むとすぐに丸善へ行つて買つて來たと云ふ記憶がある。この本は大いに感服した。(今でもフランスの著作中、一番面白いのは何かと問はれれば、すぐに僕は「タイス」と答へる。その次に「女王ペドオク」を擧げる。名高い「赤百合」なぞと云ふ小說は、更にうまいと思はれない。)尤も議論の面白さなぞは、所々しか通じな

かつたらしい。しかし僕は「タイス」の行の下へ、無暗に色鉛筆の筋を引いた。その本は今でも持つてゐるが、當時筋を引いた所は、ニシアスの言葉が一番多い。ニシアスと云ふのは警句ばかり吐いてゐるアレクサンドリアの高等遊民である。――これも僕が中學の五年生の時分だつた。

高等學校へはひつた後は、語學も少し眼鼻がついたから、時々佛蘭西の小說も讀んで見た。但しその道の人が讀むやうに、系統的に讀んだのでも何でもない。手當り次第どれでも御座れに、ざつと眼を通したのである。その中でも覺えてゐるのは、フロオベルに「聖アントワンの誘惑」と云ふ小說がある。あの本が何度とりかかつても、とうとうしまひまで讀めなかつた。尤もロオタス・ライブラリイと云ふ紫色の英譯本で見ると、無茶苦茶に省略してあるから、造作なくしまひまで讀んでしまふ。當時の僕は「聖アントワンの誘惑」も、ちやんと心得てゐるやうな顏をしてゐたが、實はあの紫色の本の御厄介になつてゐたのである。近頃ケエベル先生の小品集を讀んで見たら、先生もあれと「サラムボオ」とは退屈な本だと云つてゐる。僕は大いに嬉しかつた。しかしあれに比べると、まだ「サラムボオ」なぞの方が、どの位僕には面白いか知れない。それからド・モオパスサンは、敬服しても嫌ひだつた。(今でも二三の作品は、やはり讀むと不快な氣がする。)それからどう云ふ因緣か、ゾラは大學へはひるまでに、一冊も長篇を讀まずにしまつた。それからドオデエはその時代から、妙に久米正雄と似てゐる氣がした。尤もその時分の久米正雄は、や

つと一高の校友會雜誌に詩を出す位な事だつたから、餘程ドオデエの方が偉く見えた。それからゴオティエは面白がつて讀んだ。何しろ絢爛無双だから、長篇でも短篇でも愉快だつた。しかし評判の「マドモアゼル・モオパン」も西洋人の云ふ程難有くはなかつた。「アヴアタアル」とか「クレオパトラの一夜」とか云ふ短篇も、ヂョオヂ・ムウアなぞが忝ながるやうに、渾然玉の如しとは思はれなかつた。同じカンダウレス王の傳説からも、ヘツベルはあの恐るべき「ギイゲスの指環」を造り出してゐる。が、飜つてゴオティエの短篇を見ると、主人公の王様でも何でも、一向潑剌たる趣がない。但しこれはずつと後に、ヘツベルの芝居を讀んでゐた時、その編輯者の序文の中に、事によるとゴオティエの短篇が、ヘツベルにヒントを與へたのかも知れないと云ふ、尤もらしい説を擧てゐたから、又ゴオティエを引張り出して見て、その感を深くしたやうな次第である。それから、――もう面倒臭くなつた。

一體僕が高等學校時代に、どれこれの本を讀みましたと云つた所が、面白い事も何もある筈はない。精々人を煙に捲く位が落ちである。唯折角饒舌つたものだから、これだけの事はつけ加へて置きたい。と云ふのは當時或は當時以後五六年の間に、僕が讀んだ佛蘭西の小說は、大抵現代に遠くない。或は現代の作家が書いたものである。ざつと溯つて見た所が、シヤトオブリアンとか、――ぎりぎり決着の所と云つても、ルツソオとかヴオルテエルとか、より古い所へは行つて

ゐない。(モリエエルは例外である。)勿論文壇にも篤學の士が多いから、中には Cent nouvelles Nouvelles du roi Louis XI までも讀んでゐると云ふ大家があるかも知れない。しかしさう云ふ例外を除くと、まづ僕の讀んだやうな小說が、文壇一般にも讀まれてゐる佛蘭西文學だと云つても好い譯である。すると僕の讀んだ小說の事を話すのは、廣い文壇にも大いに關係があるのだから、莫迦にして聞いたり何かしてはいけない。――これでもまだ勿體がつかなければ、僕がそんな本しか讀んでゐないと云ふことは、文壇に影響を與へた佛蘭西文學は、大體そんな本の外に出ないと云ふ事になりはしないか。文壇はラブレエの影響も、ラシイヌやコルネイユの影響も受けてゐない。唯おもに十九世紀以後の作家たちの影響を受けてゐる。その證據には佛蘭西文學に最も私淑してゐる諸先輩の小說にも、所謂レスプリ・ゴオロアの磅礴してゐるやうな作品は見えない。たとひ十九世紀以後の作家たちの中に、ゴオル精神から迸つた笑ひ聲が時々響く事があつても、文壇はそれに啞の耳を借すより外はなかつたのである。この點でも日本のパルナスは、鷗外先生の小說通り、永久に眞面目な葬列だつた。――こんな理窟も云へるかも知れない。だからこの僕の話も、愈莫迦にして聞いてはいけない。

(大正十年二月)

漢文漢詩の面白味

漢詩漢文を讀んで利益があるかどうか？　私は利益があると思ふ。我々の使つてゐる日本語は、たとひ佛蘭西語の拉甸語に於ける關係はなくとも、可成支那語の恩を受けてゐる。これは何も我我が漢字を使つてゐるからと云ふばかりぢやない。漢字が羅馬字になつた所が、遠い過去から積んで來た支那語流のエクスプレツシヨンは、やつぱり日本語の中に殘つてゐる。だから漢詩漢文を讀むと云ふ事は、過去の日本文學を鑑賞する上にも利益があるだらうし、現在の日本文學を創造する上にも利益があるだらうと思ふ。

ぢや漢詩漢文を讀んでどんな利益があるかと云ふと、これははつきりと答へ悪い。何しろ漢詩漢文と云へば、支那文學と云ふのも同樣だから、つまり英吉利文學或は佛蘭西文學を讀んでどんな利益があるかと云ふのと、同じやうに茫漠とした、つかまへ處のない問題になつてしまふ。勿論何とか答へられない事もないだらうが、それには相當な準備をした上でないと、結局出たらめ

に終り易い。文章倶樂部記者に質問されて、始めて考へて見るやうな事ぢや駄目である。

唯ふだん思つてゐる事を一二云へば、漢文漢詩は一樣にみんな極大雜把な枯淡の文字のやうに思はれてゐる。しかし實際は大雜把どころか、頗る細な神經の働いてゐる作品も少くない。たとへば高青邱(明)の、

樹涼うして山意秋なり。
雲淡うして川光夕なり。
林下、人に逢はず。
幽芳、誰と共にか摘まん。

などと云ふ五言絶句は、薄暮の秋の林間が、空氣までもしつとりと描き出されてゐる觀がある。それから抒情詩的な感情は、漢詩に緣が薄いやうに思はれてゐるが、これ亦必しもさうではない。名高い韓偓(唐)の『香奩集』と云ふ詩集は、殆どこの種の詩に充滿してゐるが、その中から一つ引くと、「想得たり」と云ふ七言絶句に、

雨重門裏、玉堂の前
寒食の花枝、月午の天
想得たり、那人手を垂れて立ち、

嬌羞、背じて鞦韆に上らざりしを。

と云ふのがある。羞ぢてブランコに上る事を承知しなかつた少女を想ふ所なぞは、殆ど生田春月君の詩の中にでも出て來さうである。(序ながら云ふが『香奩集』の中には、「手を詠ず」と云ふ、女の手の美しさばかり歌つた詩がある。如何にも凝つたものだから、暇な方は讀んで御覧になると好い。)又さう云ふ戀愛以外の感情を歌つた詩でも、我々の心境に合するものが、思ひの外澤山ある。ずつと新しい所から例を擧げると、孫子瀟(淸)の「雜憶、內に寄す」と云ふ、旅先から家へ送つた詩に、こんな七言絶句がある。

鄕書遙に憶ふ、路漫々。
幽悶聊憑む、鵲語の寬なるを。
今夜合歡花底の月。
小庭の兒女長安を話す。

この詩人のノスタルジアなぞは、至極素直に我々にも受け入れる事が出來さうである。もう一つ淸朝の詩人から例を擧げると、趙甌北の「編詩」と云ふのに、

舊稿叢殘、手自ら編す。
千金の敝帚、護持する事堅し。

憐む可し、賣つて街頭に到つて去る。
盡日、人の一錢を出す無し。

と云ふのがある。これなぞも我々賣文生活をしてゐるものにはまづ同感と云ふ外はない。くどいやうだが、もう一つ例を擧げると、名高い杜牧(唐)の、

江湖に落魄して酒を載せて行く。
楚腰纎細、掌中に輕し。
十年一たび覺む、楊州の夢。
贏ち得たり、青樓薄倖の名。

なぞも吉井勇君を想はせる所がないでもない。こんな具合に漢詩の中には、現在の我々の心もちと可成密接な物が含まれてゐる。決して一概に輕蔑して然るべきものぢやない。單に自然を描いた詩句を拔き出して見ても、

棗熟して人の打つに從ひ、
葵荒れて自ら鋤かんと欲す。(杜甫)

高杉殘子落ち、

深井凍痕生ず。（僧無己）

疎篁晩笋を抽き、

幽藥寒芽を吐く。（雍陶）

とか云ふやうに、秋冬だけでさへ鋭い詩眼を感じさせるものが澤山ある。だから漢詩を讀めば、少くともこれだけの範圍內では、我々の當に學ぶ可き事が、思ひの外多くはないかと思ふ。

その外まだいろいろ益する所もあるだらうが、何分前に云つた通り準備も何もないのだから、今度はこれだけで御免を蒙りたい。それから漢詩の事ばかり云つて、漢文の事を云はなかつたのは、例を引くのが不便でもあり、且その方へ話が延長すると、餘り長くなる事を惧れたのである。その點も大眼に御覽を願ひたい。

（大正九年一月）

短歌雜感

何か書けと云ふ尾山君の註文である。が、歌壇の事はよく知らない。歌もわかるのだかわからないのだか、自分ながら怪しいものである。まあ好い加減に思ひついた事を書いたのだと思つて頂きたい。

×

短歌雜誌には生活派の歌と云ふのが出てゐる。甚だ失禮な申し分だが、僕にはあの派の歌に終始してゐる諸先生の心もちがのみこめない。あんな平俗な、と云つて惡ければ實生活的なとでも、民衆的なとでも云ひ換へるが、兎に角あんな平俗な心もちを歌ふ位なら、何も窮屈な思ひをして、三十一文字を弄してゐなくつても、詩とか小說とか、もつと敍述に便利な形式を選んだ方が好ささうな氣がする。あれぢやいくら善く行つても頭の下がるやうな境致には行けさうもない。況や、三行の社會主義的氣焰を擧げてゐるなどは、寧ろ惡い道樂である。

僕は歌や俳句は巧拙の問題以外に、言詮を絶した心の動きを捉へようとすべきものだらうと思ふ。それが直下に捉へてあればこそ、難有い感じも湧いて來るが、生活派の歌のやうに、散文的な境致を彷徨してゐるのではどう考へても救はれない。

×

生活派の歌でないまでも、一茶などの句が大部分、僕に物足りないのはこの爲である。成程一茶の句は惡くはない。人間らしい感情が横溢してゐると云へば横溢してゐる。しかし元祿の大家にあるやうな蒼古沈痛の趣はない。冷酷な評語を下すと、何處か髮結床の親方が敬服しさうな所さへある。しかも其處が幾分か一茶の聲名を揚げるのに役立つたと云ふ氣もしないではない。

×

僕の觀察だから當てにはならないが、現代の歌は齋藤茂吉氏以後、或は「アララギ」派の擡頭以後、殆ど面目を一新したやうである。その關係は丁度文壇が、武者小路氏或は白樺派の恩惠を蒙つたのと大差ないらしい。文壇では特に僻見を持つてゐる人の外は、誰でもこの武者小路氏或は白樺派の功績を認めてゐる。しかしどうも歌壇の先生たちは、齋藤氏或は「アララギ」派の功績を認めるのに、聊か虚心坦懷でなさすぎる樣な憾もないではない。遠慮なく云ふと齋藤氏或は「ア

ララギ」派の歌壇に與へた影響は、武者小路氏或は白樺派の文壇に與へた影響より一層大きくはないかと思ふ。それなら何も他人の功績を認めた所が、御當人の尊嚴に關らない以上、もつと襟度を寛くしても差支へなささうな心もちもする。（斷つて置くが、僕は白樺派に緣のない如く、未嘗「アララギ」派の恩顧を受けた覺えも何もない。）

×

昔マラルメが Poète des poètes に推された事があるが、あの時はマラルメを薦めた連中の中に、コツペもはひつてゐたやうに思ふ。それ程の素直な心もちが、敢て歌壇ばかりとは云はないが、日本の創作界にあるかどうか、殘念ながら疑問のやうな氣がする。

×

何時か或雜誌を見たら、齋藤氏の歌の惡口が出てゐた。その惡口の中に見本として引いてある歌を見ると

ふゆの日のうすらに照れば並み竹は寒む寒むとして霜しづくすも

と云ふ歌がはひつてゐる。その惡口の當否は問題ぢやないが、この歌が一土塊の價値もないと云つてゐるのを讀むと、かうまで鑑賞上の評價の差は甚しいものかと驚かざるを得ない。歌なぞでさへこの位評價に違ひが出來るのかと思ふと、小說なぞの評判が當てにならないのも尤もだと

云ふ感じがする。こんな惡口は少くとも、緣なき衆生は度し難しと云ふトルイズムを想起させるから、全く益にならない譯ではない。唯惡口を云つてゐる人自身の爲に、妙に氣の毒な心もちがする。

×

僕は歌を澤山も讀んだ事はないが、偉い歌人の中でも赤人や家持にはどうも緣の薄い人間らしい。貫之は勿論、西行法師もどう云ふものか、存外齒ごたへのないと云ふ氣がする。これは山家集の好きな谷崎潤一郎氏に何時か大いに攻擊された。が、その後も時々あけて見るが、やはり恐れ入る所までは行く事が出來ない。西行は芭蕉の先生だが、丁度ヴエルレエヌがテニスンに感服したやうに御弟子の方がちと偉かつたやうな心もちがする。だから芭蕉に感心しながら、同じ樣に西行に感心してゐる先生を見ると、何だか芭蕉に感心してゐるのが本氣かどうか怪しいやうな、甚失禮な事を考へ易い。尤もこれは番附を拵へたがる、素人の心理かも知れないとは思ふが。

×

歌が文壇の中心勢力にならないのは、歌人の罪のやうに思つてゐる人がある。しかし僕に云はせると、實は僕程度にしか歌のわからない連中が、文壇に多いせゐらしい。嘘だと思つたら、作家や批評家に歌の事を書かせて見れば知れると思ふ。事によると僕のこの雜感なども、その好い

證據の一つかも知れない。歌のわからない連中が、揃つてゐて、無暗に我々を感心させろと呼號するのは、丁度目くらが展覽會へ行つて、入場料の拂ひ戻しを請求するやうなものである。それぢや如何に大歌人が輩出しても、歌は永久に文壇のまん中へ乘り出せないのに違ひない。

×

くだらない事を長々と書いたが、間違つた事は澤山あつても、自ら僞つた事だけは云はなかつたつもりである。歌の專門家はその點に免じて無用の所は然るべく大目に見て頂きたいと思ふ。

（大正七年一月）

或惡傾向を排す

一

いつかこの雜誌で里見弴君が、「或惡傾向を排す」と云ふ論文を書いた。批評家が作家の才や腕に輕蔑を持つのが間違ひだと云ふ趣旨である。至極同感である。才は暫く措く、腕なるものに至つては、元來が「うますぎる」などと云ふ評語を許さる可き性質のものではない。

よく人が云ふやうに、藝術は正に表現である。表現されてゐない限りに於て、作者がどんな思想を持つてゐようが、どんな情緒を蓄へてゐようが、それは作品の評價に於ては無いのと全く選ぶ所はない。作者の見た所、感じた所は、すべてそこに表現された上で、始めて、批判に上り得るのである。さうして今世間普通に通用する如く、その表現の手段に腕と云ふ名を與へるとすれば、それが「うますぎる」と云ふのは、抑奇怪千萬ではないか。

もう一度繰り返すと、藝術は正に表現である。さうして表現する所は、勿論作家自身の外はな

い。では如何に腕が達者だからと云つて、如何に巧に技巧を驅使したからと云つて、それは到底作家自身の見た所、或は感じた所を出よう筈がない。尤も世間には往々作品の出來上る順序を、先始に内容があつて、次にそれを或技巧によつて表現する如く考へてゐるものがある。が、これは創作の消息に通じないものか、或は通じてゐても、その間の省察に明を缺いた手合たるに過ぎない。簡單な例をとつて見ても、單に「赤い」と云ふのと、「柿のやうに赤い」と云ふのとは、そこに加はつた小手先の問題ではなくて、始からある感じ方の相違である。技巧の有無ではなくて、内容の相違である。いや、技巧と内容とが一つになつた、表現そのものの問題である。だから腕の問題は、唯うまいか、まづいかによつてのみ決せらる可きもので、いくらすぎたくもすぎられると云ふ譯がない。

それでは「うますぎる」とはどう云ふ意味かと云へば、自分自身さう云つた經驗がないから、確にさうだとは云はれないが、恐らくは「技巧を超越した何かがある」と云ふやうな場合の反對を指すのだらうと思ふ。もしさうだとすると、その場合は明に「まづい」のであつて、少しも「うますぎる」譯ではない。或はもつと適當に云へば、既にその作品が内容と技巧と不即不離な意味の表現に於て失敗してゐるのである。と同樣に、「技巧を超越した何かがある」と云ふやうな批評も、嚴密に云へば單なる比喩にすぎない。事實としてはそれが「技巧を超越した何かがある」が如き技

巧である。さうして勿論「うまい」のである。

が、もし以上の外に「うますぎる」と云ふ意味があるとすれば、それはさう云ふ批評家は、さう云ふ腕が嫌ひなのだと解釋する外はない。かうなれば勿論好惡の問題だから、どうでもその批評家の自由である。但しその場合、なる可くは「うますぎる」などと云ふ誤解され易い語を使はない方が、その批評家の名譽を保護する所以だらうと思ふ。

二

そこで才の問題へ立ちかへるが、厄介な事に腕とちがつて、既に始から才と云ふ語には或褒貶の意味が、含まつてゐる。才は才子の才、才人の才で、まあ輕佻浮薄と云ふ語とシノニム位に使はれてゐるらしい。が、さう云ふ意味に使ふ以上、才なるものが碌でもない事は、論じない先からわかつてゐる。正に才氣のある作品は、唾棄すべき作品に相違ない。そこまでは才を輕蔑する批評家の議論も、（實は議論をしなくつてもわかつてゐるのだから、それでさへ無用の譏は免れない。）重々御尤な次第だと思ふ。唯、それだから、小山内薫君を始として、谷崎潤一郎君や、里見弴君や、佐藤春夫君や、久米正雄君の作品へ落選の赤札を貼らうとするのに至つては、俗惡も亦甚しい。成程彼等の作品に、或意味での才氣がある事は事實である。が、その場合の才なるも

のが、果して才子の才、才人の才、輕佻浮薄の才であるかどうか。――その詮義を後まはしにして、徒に已を高しとするのは、恰も東洋中世の基督教徒が、Deus の音譯なる天主の語をまつかうにふりかざして、既に天主たる以上、佛菩薩も八百萬の神々も悉その眷屬であると稱したのと、語義に囚はれた點から云へば同じ事である。

では上記の諸作家の才とは何かと云へば、これも帝國文學の先月號で秋風嶺なる人の指摘した如く、彼等の個性に從つて一樣でない事は爭れない。が、その一樣でないものの中から强ひて或共通な特色を拾ひ出せば、それは略かう云ふ事に歸著しはしないかと思ふ。――彼等は人生を或特殊な位置に立たせて觀察する。從つてその表現にも或特殊性が伴つて來る。或は更に一步進めて、文章の上にもこの或特殊性が反射されると見て差支へない。何時か問題になつた「多角的表現」なるものも、自分がさう云ふ新熟語を製造したのでない限り、確にさうだとは云ひ兼ねるが、實はこの表現上の或特殊性に與へられた名稱ではなからうか。(新技巧及新技巧派も同斷である。)――差當り所謂才なるものは、かうでも解釋するより外に仕方はあるまい。

所で才の正體がかうだとなると、それを退治する事は、決して批評家自身の考へてゐる如く容易なものでも何でもない。近來一部の人士の間に、リアリズムへ赴けと云ふ呼び聲が、恰も才の蝗を逐ふ銅鑼の如くに鳴らされてゐるが、これ又、昔の客觀主義や平面描寫と同じ樣に、格別才

を退治する恰好な武器ではなささうである。と云ふのはリアリズムと才とが兩立しないと云ふ事は、一應や二應の考では、どうも合點が行き兼ねるからである。そこでこれを辯じる前に、先順序だから、そのリアリズムへ赴けと云ふ主張そのものを拜見して、聊當否を考へて見ようと思ふ。

三

勿論リアリズムへ赴けと云つたつて、今日極端なゾライズムの出店を日本に出さうとしない以上、單なる寫實主義ではないのに違ひない。そこで先月の新小說にある、本間久雄君の文藝時評「浪曼主義か現實主義か」を一讀すると、（生憎その外のリアリズムへ赴け論が手もとになかつたのだから、さやう御承知願ひたい。）「本當のリアリズムは飽くまでもギユヨオの所謂實在を深く穿つた藝術である。實在を穿つて、吾々の眼が習慣を離るる地層へ達するまで突き進んだ藝術である。現實に徹した藝術である。徹底した現實主義の藝術である」さうである。本當のリアリズムが徹底した現實主義の藝術だと云ふのは、えらいジニアスは偉大な天才だと云ふやうなもので、聊滑稽の感があるが、本間君の主張しようとする趣旨は、それでも別段了解に苦しむと云ふ次第ではない。外の問題は知らず、リアリズムの定義に關しては、本間君も亦我黨の士で、本當のリアリズムは直下に實在に徹せんとする、——我々の眞の要求を第一義的に滿足させようとする

藝術だと云つてゐるらしい。ここまでは至極同感である。

が、それからリアリズムへ赴けと云ふ肝腎の主張を承ると、本間君はこの定義を提げて、一方ロマンティシズムを攻撃すると同時に、一方又「リアリズムの中心流派である我が國の自然主義」に、一日も早くリアリズムへ赴けと熱心な鞭撻を與へてゐる。元來、リアリズムとロマンティシズムとが氷炭相容れないものかどうか、それも大に疑はしいが、その問題は暫く措く、差し當り本間君がロマンティシズムはいかんと云ふ因緣を問題にすると、――尤もこの因緣は、さつきのリアリズムの定義が甚だ明快犀利なのに比べて、頗る晦澁なものであるが、略見當をつけた所によると、その理由は二つあつて、一つは今時ロマンティシズムを主張するのは、時代錯誤だと云ふ非難、もう一つはロマンティシズムは「單なる空想によつて、興味を喚起する藝術」で、「單なる遊戲文學」で、「單なるディレッタンティズムの文藝」だと云ふ非難らしい。便宜上二番目の理由から問題にするが、もしロマンティシズムなるものが、御說の如くなイズムならば、それは正に退治すべきものである。この點に於ても、リアリズムの定義とひとしく、本間君が我黨の士である事は疑ひを入れない。しかしそれと、ロマンティシズムが上記の「單なる遊戲文學」だとするのとは、自ら又問題が別である。では本間君がロマンティシズムを罵倒する理由はどこにあるかと云ふと、遺憾ながら「文藝時評」のどの頁を探しても見當らない。唯一ケ所、「私は舊い意味のロ

マンティシズムを排斥する」と云つてゐるから、舊い意味のロマンティシズム卽「單なる遊戲文學」かとも思はれるが、十九世紀の一大精神的運動たるロマンティシズムが、「單なる遊戲文學」だけで片づけられたいと云ふ事は、(たとひ今日から見て、いくらも非難の餘地があるにしても)それこそロマンティシズムと云ふ「言葉の含む文藝史的意義に就いて、今更事新しく詮義立てするまでもなく」明かである。が、それを除いては、本間君は常に「云ふまでもない」とか、「爭はれない」とか傲語して、更に然る可き理窟を並べようとしない。如何に本間君自身には「云ふまでもない」事にしても、聞いてゐる方に通じない以上、その意味を說明してくれる事は、少しも批評家としての本間君の威嚴に關る事ではない。しかしいくら文句を云つても、旣に然る可き理由が判然しない以上、この議論はまあ好い加減に敬遠して、最初の理由を傾聽して見ると、これは「近代の文藝史上に於けるリアリズムと云ひ、ロマンティシズムと云ふ、それらの言葉の含む文藝史的意義に就いて、今更事新しく詮義立てするまでもなく、最近代の文藝の基調がロマンティシズムではなくて、リアリズムである事は爭ふ可らざる事實である。……從つて在來の文藝史家によつて、特色づけられたやうなロマンティシズムを、何等の條件なく今日そのまゝに要求するならば、それは明に時代錯誤」だと云ふのである。かう書き拔いて見ると、頗る堂々としてゐて、如何にも大文章らしい觀があるが、勿論これが大文章となる爲には、或二つの條件がどちらか豫想

されてゐなければならない。と云ふのは、本間君が今の文壇に「在來の文藝史家によつて特色づけられたやうなロマンティシズムを、何等の條件なく今日そのまゝに要求する」傾向を看取したか、或は又今の文壇のあらゆるロマンティックな精神を「在來の文藝史家によつて特色づけられたやうなロマンティシズム」と全く同一なものと認めるか、どちらかを證明すべきだと云ふ事である。もし前者が事實だとしたならば、自分と雖も亦その時代錯誤たるを難ずるのは、敢て本間君の後に居るものではない。及ばずながら驥尾に附して、ロマンティシズム攻撃の火の手をあげる事は、猶シュレエゲル兄弟に對するハインリッヒ・フォッスの如きを以て任じたいと思つてゐる。だから、この點に於ても亦、本間君が我黨の士たるは疑ひないが、見渡した所日本にも西洋にも、「在來の文藝史家によつて特色づけられたやうなロマンティシズムを、何等の條件なく今日そのまま要求する」ものが發見されないのは遺憾である。が、もしこれが自分の寡聞の致す所だとするならば、勿論改めて教を本間君に請はなければならない。唯、君がこの點に關して、今日までの所、何等の高教も垂れなかつた事は事實である。かうなつて來ると、論點は、いやでも後者に移らざるを得ない。しかしこれ又、頗る大膽な理由で、もしこの理由をヂャスティファイしようとするならば、これは各時代のロマンティシズムに、差別を認めようとしないのだから、勢、唯、文藝史上のイズムが新陳代謝した順序によつてでも、時代錯誤呼はりをするより外はない。

現に本間君自身が、さう云ふ口吻を洩らしてゐるやうに思はれる。が、ロマンティシズムの後にリアリズムが起つたと云ふ文藝史上の過去の事實のみによつて、ロマンティシズムを唱導するのが時代錯誤だと云ふならば、リアリズムの後にシムボリズムや、ネオと稱するロマンティシズムが起つたと云ふ、同じく文藝史上の過去の事實のみによつて、本間君自身の唱導するリアリズムも、亦、時代錯誤たる事は免れない筈である。もし本間君の謙讓の德を傷けないならば、君をゲエテと比較して、晩年の彼がクラシシズムを奉じたのは、クラシシズムの後にロマンティシズムが起つたと云ふ同じく文藝史上の過去の事實のみによつて、時代錯誤ではないかと云つても差支へない。云ふまでもなく、これは滑稽なディレムマである。

以上辯じて來た通り、本間君はロマンティシズムにけちをつく可き、何等の根據らしい根據を持つてゐない。唯、始から終まで、投書家でも知つてゐるスウド・ロマンティシズムの悪口を、御苦勞にも並べてゐる丈である。だからその範圍で、「リアリズムの中心流派である我が國の自然主義」でなければ、目下の文壇の頽勢を救ふ事が出來ないと云ふのも、大に怪しくなつて來ざるを得ない。(自然派が、殊に日本の自然派が、ギュヨオの所謂リアリズムの中心流派かどうかと云ふ事は、煩を嫌ふからここに論じない。)して見ると本間君は、ロマンティシズムの攻撃に於て失敗し、從つて自然派にリアリズムの相續權を與へるのにも失敗したから、當初の立論の目的の中

では、唯、僅にリアリズムの定義を與へる事に成功しただけである。勿論一のイズムを定義する事が、決して生やさしい事業ではない以上、本間君の文藝時評のメリツトも、それだけは認めら る可きものであるが、これ又フランスのギユヨオなる人間が同じ事を云つてゐると、本間君自身御吹聽になつて見れば、今更獨創の榮譽を荷ふ譯には行きさうもない。

では本間君の文藝時評は、頭から尻尾まで出たらめかと云ふと、又必しもさうではない。成程論理は狂つてゐる。論旨も一向感服は出來ない。が、その混沌たるシロヂズムの行列の中に、本間君が或眞理を朧げながら直覺してゐると云ふ事は、幾分でも君に同情のあるものだつたら、容易に看取される筈である。そこでその眞理とは、何かと云ふと、リアリズムと云ふものは、自然派やロマン派と同類に屬すべきものではなくて、寧ろそれらの向うにあると云ふ事に外ならない。自分はさつきから本間君の短を責めるのに急だつたから、以下少しく君の長を揚げて、君の文藝時評と雖も、この眞理を藏してゐる以上、侮るべからざる所以を明にしようと思ふ。

君は云ふ。「本當に現實の奥深く探つて行つた幻、本當に現實の底に徹した夢は、最早單なる幻ではない。最早單なる夢ではない。それは實に普通に云ふ現實以上の現實である。」仰せの如く實在に徹すると徹しないとは、そこに描かれた事件とか場景とかに支配される譯のものではない。高師直が湯殿を覗いても、李太白が魚になつても、卽通俗にロマンティツクと呼ばるべ

き材料をとり扱つても、表現にして遺憾がなかつたなら、「普通に云ふ現實以上の現實」を捕へ得るのである。だから本間君の立ち場から云へば、徒に材料上の現實描寫を求めて、リアリズムへ赴けと云ふ主張の如きは、一顧の價値もない俗論となつてしまふ。そこで君は更に事實上の例を擧げて、「リアリズムを標榜したゾラの描いた人生圖よりも、ロマンティシストであつたバルザツクの夢と幻が、遙に多く我々に現實的な味を與へる」と道破した。即、リアリズムなるものは、ロマンティシズムたると、ナテュラリズムたるを問はず、唯「現實に味到した」表現の中にのみ存するのである。既に過去のロマンティシストたるバルザツクは、このリアリズムを持つてゐた。將來のロマンティシストたる日本の諸作家と雖も、勿論その意味でのリアリストになれないと云ふ筈はない。今日の文壇の「現實探求の不徹底と、現實觀照の平板單調と、その卑俗主義と」が、「ロマンティシズムによつて打破し、轉向し得るものでない」と云ふ事は、最早明かな誤謬となつた。「ギュヨオとは別な言葉でリアリズムの眞髓を明かにした」モウパスサンは、「事實それ自身より一層完全なる、一層著しき、一層確乎たる事實の幻影を提供する」事を以て、作家の當に努力すべき所だと云つた。彼の所謂一個の幻影主義者である程、それ程深く現實に徹し、實在を穿つた時、あらゆるイズムの作品は、ひとしくリアリズムの作品となるのである。「從つてこの場合、ロマンティシズムを要求する事は、その要求そのものが既に一種の時代錯誤で」ない「ばかり

でなく、それは事實に於ても、……………現實回避の惡傾向を生ずる惧はない。だから自分が本間君の文藝時評を批評する始に、わざと觸れずに置いた問題、卽、ロマンティシズムとリアリズムとは氷炭相容れないものではないと云ふ問題は、事實として本間君自身が、あの議論の中でちやんと解決してゐるのである。唯、君がロマンティシズムを輕蔑せんとする餘り、或はナテュラリズムの尻押しをせんとする餘り、この半ば直覺せられた眞理を顧ずに、強ひて論理の車を横に押さうとした結果、自分の導き出した結論と全く反對な斷案を下したのは、切に遺憾だと云はざるを得ない。

　昔、豫言者バラムは、イスラエルを呪はうとして、却つてこれを祝福した。今、本間君はロマンティシズムを退治しようとして、却つてこれを鼓舞したのである。勿論かう云ふ事が批評家として、君の名譽とすべき事かどうか、それは自分にもわからない。が、君自身自覺しなかつたとは云へ、これあるが爲に、君の文藝時評は、辛うじて無益の饒舌である事を免れた。自分は少くもこの點を、本間君と共に祝したいと思ふ。

四

　以上の通りリアリズムはイズムの如何によらないと言ふ、パラドックスじみた事實を擧げてか

ら、自分はもう一度、才の問題へ立ち戻り、そこから自己流にロマンティシズムとナテュラリズムとの關係を辯じた上、更にもう一度腕の問題へ行つて、そこで議論の完結をつけるつもりであた。が、本間君の文藝時評で聊か長く道草を食ひすぎた結果、今になつては、所定の紙數も、〆切の日限もとうに切れるやうな羽目になつた。だからやむを得ず、ここで一先打切る事にするが、才の字を惡い意味に解釋しない以上、それはリアリズムへ赴く事と、更に矛盾しないと云ふ事は、これまでの所で略御推察がついたらうと思ふ。(尤も自分の才の解釋がいかんと云へば、それまでであるが、その場合は又改めて御説を承る事にしよう。)

これを要するに、自分が辯じた所は、腕と才とを輕蔑するのは怪しからんと云ふ、里見君の議論の尻馬に乘つて、同じやうな主張を述べたのである。が、議論の趣旨は同じでも、その道すがらや何かの細い部分には、君と自分とで隨分相違した所もあるのに違ひない。これだけの事は、累を里見君に及ぼすのを惧れるから、序ながら御承知を願ひたいと思ふ。(七・十・十六)

わが月評

一　大正八年六月の文壇

月評を書く前に豫め斷つて置きたい事がある。

自分の月評は小說の月評である。戲曲、詩歌、乃至評論の月評ではない。さうしてそれらの文藝の部門に觸れないのは、勿論自分が特に小說ばかりを難有く思つてゐる次第ではない。唯それらの月評を書くべく、新聞には紙面が乏しく、自分には時間が乏しい結果である。從つてそれらの專門家は、如何に日星河嶽の大文字を發表されたにした所で、月評家として自分の無關心には寬大なられん事を希望したい。

それからその小說の月評も、今月發表されたあらゆる小說の批評ではない。唯偶然自分の目に觸れた小說だけの批評である。だから幸か不幸か自分の月評に上らなかつた小說の中にも、筆落ちて風雨を驚かすやうな傑作も決してなかつたとは云へない。如是傑作の作家竝に讀者は、月評家としての自分の怠慢を咎められなければ幸甚である。

最後にその偶然自分の眼に觸れた小說だけの批評も、實はそれらの作品に對する、甚だとりとめのない感想である。從つて自分はこの月評で天下の公論を製造しようなどと云ふ、大それた意思は毛頭ない。よしんばあるにした所で、それを論理の鑄型に嵌めて、讀者の頭に叩きこむだけの用意が出來てゐない以上、そんな事を期待するのは云ふまでもなく莫迦げてゐる。そこで自分も感想を以て自ら任ずる限り、まあ自分がそれらの小說からどんな印象を受けたか位な、手輕な心もちで讀んで頂きたい。さもなければそれらの小說の作家は勿論、自分としても至極迷惑だからである。

かう勝手な注文を竝べて來ると、自分がこの月評を公にし得る資格は、要するに自分と云ふ人間に對する、讀者の興味の有無によつて九分通りは決定されてしまふ。自分はその意味に於て、大方の興味を喚起すべく、餘りに凡庸な自分自身を恥かしく思ふものである。同時に又さう云ふ心細い月評の中にひつぱり出されて來る文壇の諸君子に對して、甚だお氣の毒な思ひに堪へないと云ふ事もつけ加へて置きたい。

そこで本文に取りかかると、まつ先に相馬泰三氏の「さよ子」(新潮)と云ふものを讀んだが、自分はこの小說の中で、兄夫婦の世話になりながら嫁入口を待つてゐる題名通りの女主人公に遇つた。が、そのさよ子なるものは、遺憾ながらさよ子で候と名乘る可く、聊か稀薄に出來すぎてゐ

た。あれは全く兄の家へ落ち着いてからの描寫が、落ち着くまでの描寫程要領を得なかつたせゐだらうと思ふ。自分は鑛山の若い事務員が河鹿に蠅をとつてやる一節を面白く思つた後だから、讀んで末段に至つた時、せめてさよ子もあの河鹿程活躍させたかつたと考へた。

續いて吉田絃二郎氏の「馬鈴薯畑」（新潮）を一讀したが、ここでは情人が戰爭に出るのを惧れてその兩眼をつぶさうとした、猛烈なる九州女に逢着した。自分の如く好奇心の強い人間は、何よりも先づその恐るべき事件を知りたいと思つたが、不幸にして吉田氏は女よりも馬鈴薯に興味があつたと見えて、徹頭徹尾情人たる百姓の事しか話してくれなかつた。それも忠實に心理の陰日向まで話してくれると、大に面白い物が出來たかも知れないが、時時立ち止まつて「コバルト色の空」に敬服したり「紅い寶石のやうな」石榴の花を讚美するので、甚だ物足らない出來に了つたのは殘念である。

その次に讀んだのは加藤武雄氏の「みじめなる戀の話」（雄辯）である。加藤氏は謹厚の長者で、この小說の後にくつ附いてゐる附記を讀むと、自作を廣津和郎氏の「轉落する石」と比較して、抑損の意を洩らしてゐるが、一讀した所何も「轉落する石」なんぞに恐れ入るべき出來映えぢやない。Ｓさんの戀愛心理は冗漫の嫌ひこそあるが、兎に角肯ける丈には書けてゐる。事によると「轉落する石」より好いやうな氣もしないではないが、これは一應廣津氏と相談した上でとり極めよう。

序に一つこの小說の中にあつた面白い文句を紹介する。「私は將棋の駒のやうに堅くなつて、唯もじもじするばかりです。」自分は將棋の駒のやうに堅くなつた人間を想像したら頗る愉快な心もちがした。

それから豐島與志雄氏の「非常線」(雄辯)を讀んで見たら、火事場の景色が手際よく、如何にも潑剌と書いてあつた。と思ふと今度は年をとつた母親と主人公の青年との姿が、その火事場の煙の中からもの哀れに浮んで來た。自分はもうそれで結構だと思つたが、豐島氏はまだその上に主人公の口を藉りて、盛に非常線を張つてゐた巡査諸君を攻擊し出した。この攻擊は更に飛火をして、火事とは直接關係のない主人公の夜業の中ででも、餘焰を吐いてゐるのだから迷惑である。自分はこれを豐島氏の忙中落筆の弊に歸したいと思ふ。

その後で谷崎精二氏の「嗣郎夫妻」(雄辯)を讀んで見ると、これ亦殘念ながら藝術的には瞳孔散大に陷つてゐる小說だつた。嗣郎は苦い顏をしながら、己は長篇にして貰ひたかつたよと云つてゐる。が、冬子は眼を伏せた儘、私は短篇で結構ですと云つてゐる。それぢや讀者の方でも、どちらかに片づけて頂きませうと云はざるを得ない。尤も作者が泰然として、何、この位の長さが丁度好いですと云ふなら、當方では御勝手になさいと云つて引き下るだけの事である。唯、谷崎氏の小說の筆路は何時もながら老實で、妄にかの怪しげな脂粉の態を裝ふ所がない。今度もこの

點だけは大いに賴もしかつた。

續いて佐藤春夫氏の「或晩に」(雄辯)を讀むと、これはあの「田園の憂鬱」の一部で、例の如く內界とも外界とも判然しない、神經の世界を書いた小說だつた。もし天下に氣味の惡い美しさと云ふものが存在するなら、「或晩に」の如きは正にさう云ふ美しさが磅礴してゐるとでも評すべきだらう。自分は佐藤氏と一しよに、いくら探しても無かつたランプを暗い床の間の上で發見したり、犬や猫にとり圍まれて、竈の中に燃える石油の火を何時までもぢつと眺めたり――平凡なだけそれだけ奇怪な經驗をいろいろ重ねて來た後で、やつとあの小說の最後の一行に辿り着いた時は、まるで文明の狐につままれて、夜中蜃氣樓の臺所をうろついて歩いたやうな甚だ妙な心もちがした。この妙な心もちの好きな人は、永當永當「或晩に」を御讀みなさいと吹聽したい。但し自分は佐藤氏が家中の石油の臭がする所をもつと詳しく書いてくれたら、一層妙な心もちが濃くなりはしないかと思つてゐる。

「或晩に」を經驗してから、自分は中戸川吉二氏につれられて、「いぼたの蟲」(新小說)を買ひに行つた。中戸川氏は姉さんの末期を目前に控へて、役にも立たないいぼたの蟲を買ふべく、わざわざ菊坂から御成街道まで出張を命ぜられたのである。自分は菊坂の下宿を出るまでは中戸川氏と一しよに歩き憎い心もちもあつたが、氏が無理に姉さんはもう死んでゐるのだと思ひ込んで、さ

う思ひ込んで置けば反つて姉さんの病氣が奇蹟か何かで快癒しさうな蟲の好い氣を起した時、初めて氏と肩を竝べて瀕死の姉さんの容體を氣遣つてゐるやうな氣がし出した。それから一度電車に乘つた氏が、往來を歩いて行く兄さんの姿を一瞥すると、たまらなくなつて電車を飛び下りた時も、同じく自分は電車から大急ぎで飛び下りた。最後に氏が雪解けの御成街道を、泣きたがら駈け出したり、歩いたりし出した時、自分もやはりべそを搔いて、駈け出して歩いたりしずにはゐられなかつた。斯くして氏はとうとういぼたの蟲を買つたが、氏の文壇的處女作もそれと共に得甲斐のある成功を購ひ得たのである。

それから水上瀧太郎氏の「紐育――リヴアプウル」を讀んで見たが、例によつてなだらかな、頗る氣もちの好い小說だつた。かう云ふ作品は得て平平淡淡他奇なしと云ふやうな評語を下され易い。が、實はその他奇なしの所が身上なので、惡く山を掛けた事件や心理がはひつて來ようものなら、反つて靜かなりに動いてゐる全體の趣はぶち壞されてしまふ。自分は切迫した(中には義理で切迫した形がある)小說ばかり讀んだ後で、この紐育リヴアプウル間の船へ乘つた時、始めて日當りの好い甲板へ這ひ出して蒼い海の色を見たやうな、如何にものびのびした心もちになつた。

船を捨てて陸へ上つたら、岩野泡鳴氏の「山の總兵衞」(文章世界)と云ふものに出會つた。總兵衞とは誰ぞやと云ふと、べらめえとたんべいとを流通無礙に使用する、惡辣無雙なおわい屋であ

る。その總兵衞が子供を盜んだと云ふ嫌疑で、警察へ擧げられてゐながら、おわいを取りに行つて其處の主人と喧嘩をしたり、子を失くした女房が乳を脹らして困つてゐたりする事をいろいろ思ひ出して悄氣てゐる――と云つた甚だ野趣を帶びたもので、「存外いい物を食つてゐるかして、肥やしにいいのを出してあるうちだ」などと糞尿の品評まで加へてある。が、肝腎の總兵衞は徹頭徹尾拵へ物じみてゐて、一向生動したところがない。あれはやつぱり岩野氏が、全然おわい屋のやうな心もちになり切れない結果だらうと思ふ。唯一箇所、總兵衞が女房の張りきつた乳を吸つてやるところだけは、その前後と比べて見て、格段に鮮かな出來映えだつた。これは、天下の男子の一人として、岩野氏にも然る可き經驗があつたせゐかも知れない。

南部修太郎氏の「蟀谷のきず跡」(三田文學)は「少年の日」(新時代)と共に、幼時の追憶を書いた物である。兩方ともちやんと美しく纏まつてゐるが、殊に「蟀谷のきず跡」は子供らしい愛憎に照應する現在の主人公の心もちが、纏綿たる情味を帶びて手際よく書き分けられてゐた。唯、その情味が時として纏綿すぎる感がないでもないが、それと同時に作家ずれのしない純粹さがあるだけでも結構である。序ながら自分は主人公が五月雨の川の水勢を見て、「鰻が困つてゐるだらうな」と思つた時、正に自分の心も昔に返つて、「うん、困つてゐるだらう」と云つた事をつけ加へて置きたい。

翻つて須藤鐘一氏の「廢倉の病者」（早稻田文學）を讀むと、これにも纏綿たる情味があるが、どこか惡く達者な所のある、器用な情味なのには聊か困却した。が、隨所に作者の大童になつた奮鬪の意氣が見えるのは愉快である。これで癩病の彌助の方をもつと詳しく（側面からでも好いから）書いて行つたら、或は立派な力作が出來上つたかも知れないと思ふ。唯、思ひ出しても辟易するのは、彌助が倶梨伽羅紋紋の肌を脫いで、大立廻りをやり始める恐る可き夢の一場である。

夢と云へば藤森成吉氏の「蛙」（帝國文學）も、作者自身最初の一行で、「何だかマルで夢のやうな、ウソのやうな話で御座んす」と斷つてある通り、頗る夢のやうな話だつた。藤森氏は時流を追ふの陋を敢てしない作家として、私かに近き將來の大成を期待してゐたが、この「蛙」のやうな物になると、どこをどう狙つて書いたものだか、遺憾ながら見當のつけやうがない。「山」以來の諸作に比べると、これは又不思議な程調子の狂つた出來映えだと思ふ。

それから谷崎潤一郎氏の「青磁色の女」（改造）を讀んだら、西湖の月夜だの、身投げをした支那美人だのが出て來て、まるで新しい剪燈新話でも讀んでゐるやうな心もちがした。氏の「美食倶樂部」の中にアスパラガスを食つてゐるとだんだんそれが女の指になるところがあるが、この小說も現實の世界が次第に夢のやうな結末へ流れこむ點は、正にこのアスパラガスと同巧異曲である。唯、惜むらくは女の指が思ひの外すくないので、聊かあつけない感がないでもない。だからこれ

を第一回にした長篇を建立して、バルザックを漢譯したやうな新らしい「驢馬の皮」を書き下したら面白からうと思ふ。例の如く手のこんだ、絢爛たる名文字が到る處に百段の綿繡をひろげてゐるのは、つけ加へるだけ蛇足だらう。が、この點に於ても、近來の谷崎氏が一歩を渾成の域に進めてゐると云ふ事には、存外世間も氣がつかずにゐさうな心持がする。

西湖の月夜から自分を拉し去つて、蜀山の薄暮へつれこんだのは、江口渙氏の「巴西侯」(改造)である。これは始めから女の指で、猿だの虎だの、狼だのが、人間に化けてしかつめらしく、宴會などを開くのだから非凡だつた。總じて女の指が女の指であり得る爲には——空想的な作品が空想なりに通用するには、それだけ現實的な描寫とか手法とかで裏打が出來てゐなければならない。「巴西侯」はこの點で少しも心細い所がない譯ぢやないが、それでも全體としては先づ然るべく巧に纏りがついてゐる。但し最後の村夫子の解釋は別にあすこへ點出しなくとも差支へがあらうとは思はれない。のみならずそれが作品全體の註釋じみた感を與へただけ損である。作者は唯、蜀道の暮夜に人立する惡獸を書きたかつた。だから書いた。それで自分はもう結構だと思つてゐる。

正宗白鳥氏の「孝行娘」(大觀)は、簡勁なスケッチで、薄馬鹿のおきちと、手足の利かない母親とが巧に書きこなしてあつた。殊に親子が柏餅を食ひながら話をする一段は、短い會話の中に脈

脈たる哀情があつて甚だ感服した。唯、後半が前半程活躍してゐないのは遺憾である。

小川未明氏の「繪に別れた夜より」(大觀)は、簡單に云ふと、例に依つて例の如き小說である。もう少し詳しく云ふと、子供の如く純粹な感覺と子供の如く幼稚な思想とが雜居してゐる小說である。だから善惡共、懸つて小川氏の子供の如き所にあると云つて差支へない。從つて亦自分も例に依つて例の如き印象を受けただけだつた。

田山花袋氏の「萎れた草」(中央公論)は肺病患者の死に面してゐる心もちを書いた物である。尤も書けてゐるかどうかは保證しない。

上司小劍氏の「黑王の國」(中央公論)は、近來氏の好んで筆にするアレゴリイめいた物である。自分は何時か氏のユウトピアを書いた何とか云ふ小說を讀んで、大いに恐縮した覺えがあるから、「黑王の國」へとりかかる時は、私かに勇氣を振ひ起す必要があつたが、さて讀んで見ると、存外樂に讀み通す事が出來た。のみならず處處は面白かつた。あれで人間を惡魔と呼ぶやうな誇張がなかつたら、もつと精彩があつたらう、と思ふ。近頃でも西洋にはウェルズやフランスのやうに、かう云ふ物を書いて成功してゐる作家がある。日本にも上司氏がゐるのは聊か人意を强うするに足るかも知れない。但しそれは成功した上での話なのだから、その邊は切に誤解のないやうに願ひたい。

加能作次郎氏の「茶碗むし」(太陽)は、平岡氏なる金持を書かうとした限りで成功してゐる事に確だつた。又成功してゐる限りで讀んで面白かつた事も確だつた。が、平岡さんと話しをしてゐるSさんが、時時惡く護摩を擂るやうな所が甚だ好かなかつた。それもSさんが本當の惡黨か、或は本當の莫迦なら我慢も出來るが、滿更さうでもなささうなだけ變な心持がした。もしSさんが加能氏自身だとしたならば、氏は氏自身を書きこなすのに失敗したと云つて過言ではない。氏がSさんの如き安つぽい人間でない事は、天下が既に承知してゐるからである。

有島生馬氏の「噓の果」(解放)は、何分厖大な小説なので、ちよいと手が出し憎かつた。けれども世評が惡いとか云ふ事を聞いたから、それぢや存外特色のある作品かも知れないと云ふ氣も出て、最後にあの小説を讀んで見た。すると常子と云ふ女の手紙が、無暗に出て來るので驚歎した。事によると作者は、ラヴ・レタアの蒐集に興味を持つてゐるのぢやないかとも思つた。のみならずその紛紛たる常子の手紙をやつと仕舞まで切りぬけたら、これだけがほんの前篇だと云ふので、更に又驚歎した。勿論後篇を見ない限り、確な事は申し兼ねるが、兎に角餘り前途に望みを囑させる前篇でない事は事實である。

久しぶりに月評をする事になつた。但しこの頃の忙しさの中に、やつと讀み得た作品の批評だけをするのである。

長田秀雄氏の「大佛開眼」(人間)は五幕十二場の大作である。これだけの史實を集めた上、これだけの戲曲を組み上げるのは、容易ならない仕事だらうと思ふ。が、僕に云はせると、この戲曲は二つの大筋が――大佛開眼の壯業と平城宮裡の黨爭とが、兩々互に相俟ちながら、發展して行くと云ふ趣に乏しい。その爲に折角の感銘が、集中力を殺がれる憾がある。かう云ふ難を救ふ爲には、この經緯に干かる人物をもつと相互に密接な關係に立たせて置かなければならぬ。(既に史實に拘泥しない以上、行基と眞備との對立の如きも、もつと利用しても好ささうに思ふ。)部分的の出來から云へば、概して始めの所が巧なやうである。殊に第一幕第二場の市場の光景などは可也美しい。最後の幕に狂氣した葛城若女が大佛の掌上に載つてゐる所は、作者得意の著想らしいが、僕自身にはあまり好ましいとも思はれぬ。

中村吉藏氏の「井伊大老の死」(早稻田文學)も、やはり是非を數行に述べるのがお氣の毒な程の大作である。これは戲曲の中心が井伊大老の一人にあるせゐか、比較的樂々と全局の纏まりがついてゐる。唯、技巧は如何にも古い。井伊大老が感慨に沈んで、「ア、葵は枯れる?……葵は枯れる?……」と云ふ幕切れの如きは、大佛開眼の狂女以上に僕の趣味にはショツキングである。

三宅幾三郎氏の「死へ」（行路）は、この種の同人雜誌には稀に見る佳作である。これ程冗雜を剪り去つて急所だけ鋭く捉へて行くのは、決して凡骨に出來る仕事ではない。僕は氏の素質を頼もしく思ふ。もし氏がその素質を長養したら、文壇は恐らく遠からず、更に一人の囑目すべき青年作家を得るに相違ない。

正宗白鳥氏の「破壞前」（改造）は、不相變老手である。可也多人數な一家の人間が、例の如く巧妙に、しかも造作なく描かれてゐる。

德田秋聲氏の「或些やかな恥」（改造）も、同じく老手の名に背かない。が、平淡の極まる所、歌人の所謂「ただごと」の餘りに「ただごと」に墮した憾もある。

志賀直哉氏の「山の生活にて」（改造）は、何となく心もちの好い作品である。末段は殊に美しい。

藤森成吉氏の「盜人」（改造）は、面白い材料を捉へてゐる。が、どうも作者のおかげで、シヤウヤンの上にレンズの燒點を据ゑて貰つたと云ふ感じがしない。云ひ換ると紙數の割に、存外印象が散漫である。唯、シヤウヤン自身の言葉の中には、時時成程その人らしい、破顏されるやうな調子が盛りこんである。

室生犀星氏の「蒼ざめたる人と車」（改造）も、愉快に讀んだ。雪の外景も、貧乏な詩人も、しんみりと快く描いてゐる。氏の作品は概して云ふと、何處までも詩人の書いた小說で、小說家の書

いた小說ではない。其處が一方では僕等を感服させる。同時に他所では食ひ足りない氣がしたいでもない。もし氏の眼がこの上に一層の鋭さを加へたら、——と思ふのは果して望蜀の嘆のみであらうか。

室生犀星氏の「二本の毒草」（雄辯）も、愛すべき小品である。室生氏の感覺描寫は佐藤春夫氏のそれと共に、殆どユニイクだと云つて差支へない。この作品の中でも三階の古家、美しい猿のやうな不良青年、それから金緣の眼鏡をかけた、餅肌の三十女などが、水水しく器用に描かれてゐる。が、時時氏がその感覺描寫に沈湎すると、反つて折角の印象が全體の鮮かさを失つてしまふ。上記の女の描寫の如きは、幾分さう云ふ氣味がないでもない。

岩野泡鳴氏の「美人」（雄辯）は、良家の細君の妹で、高等淫賣を副業にしてゐると云ふ、變な女を書いた小說である。こんな女もゐさうな氣もする限り、作者は確に成功してゐると許すべきものに違ひあるまい。が、どうもこの小說を讀んでゐると、作者の主觀がこの女を買ふ實業家の主人公と大差なささうな氣がして不快である。

上司小劍氏の「石童丸」（大觀）も、危な氣のない作品である。しかし最初の一回の描寫は、妙に釘が緩んでゐる。あれがもつと緊張して、最後の一回と照應してゐたら、遙に讀み心地が好かつたのに違ひない。

廣津和郎氏の「三人の患者」(文章世界)も、決して拙い作品ではない。尤も中學三年の時だと斷つてあるが、やはり主人公は現在の廣津氏らしい心もちがする。

鍋井克之氏の「心の蟲」(文章世界)は、餘技とは思へぬ程達者なものである。殊に主人公が父親の事を想起するあたりの一段は、ちやんと摑むべきものを摑んでゐる。事によるとこの一段だけをもつと詳しく描寫した方が、より傑れた作品を得たかも知れない。

水守龜之助氏の「樹を伐る」(文章世界)も、才筆は中中才筆である。が、樹を伐る一段の感銘は、思ひの外強くない。あれをもつと生かさうと思つたら、祖母や何かの心もちへ更に食ひ入らなければ駄目である。

舟木重信氏の「煙」(新潮)も、氏の特色は窺ひ得べき短篇である。しかし主人公の心もちなどは、どうも僕には食ひ足りない、少くとも末梢的な物だけしか、生きてゐないと云ふ心もちがする。

加能作次郎氏の「發狂前」(新潮)は、これから加能氏が打開しようとする、新領域の一角を示したものらしい。出來は從來の氏の物より、遺憾ながら餘程劣つてゐる。殊に夕刊の青波事件以後は、到底不自然の譏を免れ得ない。しかし苟も殼を破らうとする以上、加能氏は僕の惡口なぞに辟易せず、勇往邁進した方が好いと思ふ。

細田民樹氏の「極みなき破局」(新小說)は、堂堂たる力作である。層層累累讀者の目前へ、大幅

な局面を展開させる手腕は、殆ど有島武郎氏と好一對だと云つても誇張ではない。その點は敬服に價する。が、これだけ縱横に揮灑しながら、存外感銘が鋭くない。筆は隅隅迄行き渡つてゐても、頭はそれ程隅隅まで行き渡つてゐないと云ふ心もちがする。たとへば主人公廉吉が、情婦たる叔母の墮胎を助けた後、たつぷり二頁に亙る感慨を洩してゐる所でも、何となくその感慨にデイクラマトリイな趣があつて、心のどん底から湧き上つた呻吟だと云ふ感じがしない。僕はこの缺點を惜しむべき事だと思ふ。殊に細田氏のやうな有爲の作家にあつては、一層惜しむべき事だと思ふ。健筆の士は由來油潤佻達の弊に陷り易い。此の病竇を免れる爲には、それこそ屢提唱されるリアリズムにまで還らねばならぬ。氏の當に留意すべき點は、この間の消息にあるのではあるまいか。

泉鏡花氏の「新江戸土産」(新小說)も、例によつて巧なものである。唯、どう云ふものか、一つ二つ現象的と云ふやうな生新らしい言葉の出て來るのが、少からず僕には耳障りだつた。

南部修太郎氏の「疑惑」(太陽)は、一通りはなだらかに出來上つてゐる。が、作品の內容は要するに細君が昏睡中、外の男の名を呼んだ爲に良人が疑惑を起したと云ふ、唯それだけの出來事である。勿論それだけの出來事でも、絕對に小說にならなくはないが、から表面だけ滑に仕上げたのでは、結局凡作と評するより外はない。もし良人の心もちを生かさうと思つたら、もう一足ど

ころではない、二足三足も踏みこむべきものである。

島崎藤村氏の「齋藤先生」（太陽）は、安らかに筆を運んで行く所に、さすがに大家らしい落ち着きはある。と同時に僕なぞには餘り羨ましくない低回趣味もある。

岡田三郎氏の「兵營時代」（太陽）は、全篇六回に分れてゐるが、お稻と云ふ賣笑婦の出て來る「五」が、最も出來がよろしくない。が、三人の兵卒が雪の平野を歩いて行く「二」は鋭く描かれてゐる。序ながら書き添へるが、僕は岡田氏のテムペラメントに氏獨得な冴えがあるやうに思ふ。その妙に澄んだ冷たさは、僕がこれまで讀んだ氏の小說中、最も失敗した作品にも滲み渡つてゐる。それが僕には氏の將來に、何かを約束させるやうでないこともない。さうしてこの「兵營時代」は、幸にその期待の念を強くさせるのに足る作品であつた。

久米正雄氏の「工廠裏にて」（中央公論）は、樂樂と善く書いてある。代叔父の挿話が少し長すぎるが、その外にまづ不足はない。二三行の光景の描寫にも、作者獨得の鮮かさは十分に窺はれる。唯、冷酷に批評すると、パンの大きい割にバタが薄い。作者も御同樣にまだ若いのだから、もう少し題材へ食ひこんで行く修行をしてもよささうな氣がする。

里見弴氏の「夜櫻」（中央公論）も、作者の覘ひ所は頷かれる。が、里見氏としては、佳作ではない。尺五の絹を立派にこなせる畫描きが、色紙へ夜櫻の畫を描いて、反つて絹程滿足に出來上ら

なかつたと云ふ形がある。これに比べると「活辯に間違へられる」(改造)の方が、出來は確に好いに違ひない。しかし僕は「夜櫻」の方に、少くとも作者の企圖の上では、同情すべき多くがあるやうに思ふ。

菊池寛氏の「盜者被盜者」(中央公論)は、氏のこの種の作品の例に洩れず、しつかりと手堅く組上つてゐる。この作者にかう云ふ物を書かせれば、もう何處へ出しても危げはない。所謂テエマ小說の境地を卒業してゐる事は、「若杉裁判長」などと比べて見たら、誰でも納得が行くだらうと思ふ。

宇野浩二氏の「迷へる魂」(中央公論)は、例に依つて達者なものである。「一」「二」よりは「三」「四」の方が好い。「三」だけでも短篇が一つ出來さうな氣がする。唯、これだけ讀んでゐると好いが、たとひ完結しないでも、「苦の世界」だけ一冊の本になつた時に、存外作中の題材に重複した所が出來て來て、單調になりさうな懸念も起らないではない。これは杞憂かも知れないが、念の爲に此處へつけ加へる。

葛西善藏氏の「千人風呂」(解放)は、久しぶりで氏の作品を讀んだせゐか、妙に懷しい心もちがした。宇野氏から葛西氏へ轉ずると、空也念佛を聞いた耳に、「安心ほこりたたき」を聞くやうな氣がする。僕はこんな味もまんざら嫌ひではない。「千人風呂」は徹頭徹尾この味で持つてゐる小

說(せつ)である。

月評(げつぴやう)もこれでおしまひである。

有島生馬君に與ふ

十二月號の新潮を見ると、有島生馬君は君の小說「嘘の果」に對する僕の批評を、嫌味だつたと云つてゐる。それは一應君の自由かも知れない。が、その後君は或會合の席上で、僕が君に遇つた時、僕が「隨分まごまごしてゐたが、此間は批評で大變失敬しましたと云つて一つ頭を下げた」と云つてゐる。これも成程僕の態度はまごまごしてゐると見えたかも知れない。しかし君はその次に「僕自身はあれより百倍も猛烈な直接法な酷評を公にした事が度々あるが、一度も未だその作者に逢つた時頭を下げた覺えがない。だから自分は剛慢で、芥川君は人が好いと竊かに思つた」と云つてゐる。かうなると廣い世間には有島生馬君は硬骨の士で、芥川龍之介は軟骨の漢だと早飲込みをするものがないとは云へない。僕にとつては迷惑至極である。

僕は君に「失敬しました」と云つた。云つたのは私交上の禮儀である。妄評多罪の意味である。

もし君があの言葉を、僕が君の面前へ出て、恐懼措く能はざる餘り、「失敬しました」と云つたと思つたなら、それは君の誤解である。君は「作物の批評と對人關係とを混同して感情を害する程偏狭ではない積りだ」と云つてゐる。それなら僕が「作物の批評と對人關係とを混同しないで、君と顔を合せた時、失敬しましたと云つた心もちも必了解出來るだらうと思ふ。が、誤解したなら、誤解したで已むを得ない。唯、僕は將來の爲に、一言僕の態度を明かにして置く必要がある。僕は君の面前たると面前たらざるとを問はず、君の小説「嘘の果」を惡作と做すに躊躇しない。これは今日と雖も昨日と更に變りないのである。さう思つてくれ給へ。

が、君の誤解は誤解としても、僕は君に問はなくてはならぬ事がある。君は當夜僕が「失敬しました」と云つた時、「皮肉でなくあの批評は大變結構でした」と云つた。「皮肉でなく」と云ふ意味は、結構だつたと云ふ事が皮肉でないのか「嘘の果」に對する僕の批評が皮肉でなくつて結構だつたのか、それはどちらでも差支へない。兎に角君が僕の批評に結構なる讃辭を與へたのは事實である。爾來數ケ月を經た今日、君が結構な批評と呼んだものは、果然嫌味で下等な批評になつた。僕は君の「結構でした」と云ふ言葉をも、僕の「失敬しました」の如く、私交上の禮儀と解釋すべきものだらうか。が、嫌味で下等なるべき批評を結構でしたと稱するのは、餘りに私交上の禮儀に富み過ぎた辭令である。殊に君は自ら許して傲慢とする人ではないか。僕は君の小説「嘘の果」を

罵倒した。罵倒せざるを得なかつたからこそ、知人たる君に「失敬しました」と云つたのである。君は僕の批評を嫌味で下等な批評だと思つた。思はざるを得なかつたからこそ、知人たる僕に「結構でした」と云つた――とは勿論云はれない筈である。が、僕はそれも一笑に附せない事はない。しかし君が君の面從腹非の上に立つて、僕を面從腹非なるかの如く非難するに至つては、殆言語道斷である。忌憚なく云へば、僕は君の心事にも一點の疑なきを得ない。

この文章は作物の批評ではない。從つてこれが君との對人關係に影響するのは勿論である。これ又さう思つてくれ給へ。

最後に君は僕に語を寄せて、「無意味にあやまられるよりも、作物の惡い所をもつと具體的に、明瞭に說明して敎へて貰ふ方が望ましい」と云つた。僕が「無意味にあやまつた」のでない事は、既に辯じた通りである。が、「作物の惡い所をもつと具體的に、明瞭に說明」する事だけは、確に僕が引き受けた。暇さへあれば近い將來に、喜んで君の希望に應じたいと思ふ。

（大正八年十二月）

大正八年の文壇

今年の新進作家では、「永い戀仲」の作者宇野浩二君が一番人氣を惹いてゐるらしい。所が文壇の樂屋には、宇野君の小說はふざけてゐるとか云ふ事で、存外惡く云ふ連中もあるやうである。が、あの程度のふざけ方を非難するとなると、苟くも小說を書く以上、小說家は皆儀容を正しくして、義理にも治國平天下の經綸が胸中にあるやうな顏をしなければなるまい。小說の世界は夢想兵衞の哀傷鄕ではない。宇野君と雖も、若しふざけたければ、今までに又輪をかけて、大ふざけにふざけても好いのである。

ジル・ブラスがある限り、或は又八笑人がある限り、たとひ天下を擧げて攻擊しても、宇野君たるもの、亦以て意を安んずるに足ると云はねばならぬ。

いや、遠く例を海外往時に求めるまでもない。君が好個の先蹤としては、つい鼻の先に愛すべき海賀變哲君がゐるではないか。

書物では齋藤茂吉君の「童馬漫語」が大に有難かつた。實はその當座何か感想でも書いて見ようかと思つたが、齋藤君は我我などよりずつと立派な歌壇の第一人者だから、差出がましいと云ふ遠慮もあつて、無精なりに面倒な筆を抛つてしまつたのである。

所が今日になつて見ると、存外何處にも然るべきこの書物の批評が現れない。これも歌壇の拔裏や露路に一通り通じてゐると諦めがつく事かも知れないが、門外漢たる自分には多少の不平なきを得ないのである。×

そこでその門外漢が「童馬漫語」に感服した理窟を二三申述べると、まづ齋藤君の作歌態度が、如何にも眞劍なのが愉快だつた。眞劍と云つても、觀兵式の大將のやうな、語氣ばかり嚴しい眞劍ぢやない。齋藤君は人が素通りをして行く所を、二度も三度も立止つて考へてゐる。あんな眞劍な態度に住するのは、一かどの英靈を具へてゐないと、到底出來る譯のものぢやない。

急ぐから先を書くが、その次には文章の氣品が高いのも有難かつた。

最後に齋藤君自身の面目が、字句の後に彷彿してゐるのも、愉快だつた事の一つである。

「童馬漫語」の中の歌論や何かに就いても、もつと書きたい事はあるが、今は皆後日に讓るより外はない。と同時にこんな門外漢を勞さずとも、もつとその道の修業を積んだ歌人なり批評家な

りが、堂々と褒めるなり貶すなりしてくれれば、この上もなく結構だと思つてゐる。

×

同人雜誌「人間」の創刊も、本年度の文壇では注目すべき出來事には違ひない。愈もう紙數が乏しいから、詳しい事は何も云へないが、「人間」の特色は何かと云ふと、雜誌としての特色に乏しい所が特色である。

かう云ふと聊か人聞きが悪いが、これは同人諸君の顔ぶれに一種の特色が存する程、諸君の作品に特色ある共通點がないと云ふ意味だから、別に不名譽でも何でもない。寧ろ獨自の地歩を有する作家諸君を同人とした以上、當然さうなくてはならない筈の、名譽赫々たる特色である。その點だけは、今日の「白樺」や昨日の「スバル」の如き同人雜誌も、到底この特色なき特色ある「人間」の古今獨歩なのには及ばないと云はねばならぬ。

序ながら「人間」の同人諸君は、悉く自分の面識である。だから今筆を擱くのに當つても、昔のエホバの神の如く、この「非凡なる凡人」たる「人間」の賣行の多いやうに「生めよ、殖えよ。地に滿てよ」と祝福したい。

大正八年度の文藝界

一　概觀

予は本年度に於ける文壇の諸家の創作に、鳥瞰的一瞥を與へるのに先立つて、一應文壇全體が如何なる氣運の下にあつたかを、大づかみに論じて見ようと思ふ。

本年度の文壇、殊に小說界は、別に目ざましい變動も起らなかつたらしい。文壇以外、殊に政治經濟の方面では、今年の如く波瀾の重疊した年は、珍しかつた位であらう。が、それらの波瀾は文壇に對して、殆ど幾何の影響も及ぼしてゐない。偶詩歌戲曲の方面に、多少の反響はあつたやうであるが、それとても大局に關係する程、格別著しい火の手は擧げずにしまつた。つまり今年度の文壇は、此處二三年の傾向を持續した儘、暗遷默移の過程にあつたのである。だから本年度文壇の概觀を論ずる以上、嫌でも此處二三年の傾向なるものを說明して置かなければならぬ。

では此處二三年の傾向とは何かと云へば——予は便宜上、その前にもう一時代前を振返つて、

自然主義以來の文壇の大勢へ、ざつと眼を通して置きたいと思ふ。自然主義がその文藝上の理想を「眞」の一字に置いた事は、云ふまでもない事實であらう。當時評判の高かつた長谷川天溪氏の評論「現實暴露の悲哀」の如きは、雄辯にこの事實を證明するものである。が物窮まれば變ずと云ふ如く、田山花袋氏の文壇に君臨する事が久しくなつて來るにつれてこの自然主義の「眞」の崇拜に慊焉たる一團の作家たちは、新に「美」を標語とする反旗を文壇に飜した。これが永井荷風氏の歸朝後、氏を中心的人物として一代を風靡した、所謂唯美主義の運動である。同時に又この主義の作家の作品の中には、享樂的、惡魔的、少くとも氣分本位の色彩を帶びてゐないものは殆どない。故上田敏氏の「渦卷」の如き、鈴木三重吉氏の「小鳥の巣」の如き、谷崎潤一郎氏の「刺青」の如き、乃至永井荷風氏の「冷笑」の如きは、皆この主義の名に背かない、唯美的傾向に富んだ作品である。所がその内にこの反動に促されて、徐にもう一つの新運動が、文壇の一角に起り出した。これは面白い事にやはり反自然主義的傾向ではあるが、同時に又「善」の理想に奉仕して「美」の崇拜の前には頸を屈しない連中だから、つまり反自然主義的傾向の大波の中に、各々反對の方向を執つた二つの波が起つた譯である。この新運動を率ゐて立つたのは、云ふまでもなく武者小路實篤氏であつた。氏によつて代表される所謂人道主義なるものは、その反自然主義的傾向に於て、一時期前に起つた耽美主義に比べると、一層内容的には徹底してゐたと云はなければならぬ。何

故と云へば、自然主義と唯美主義とは、その物質主義的人生觀の一面から云ふと、存外一味の相通ずる所があつた。(今日から見れば滑稽であるが、永井荷風氏は自然主義者かどうかと云ふ問題が、氏の歸朝後間もなく文壇の論爭點になつたのは、この間の消息を語るものだらうと思ふ。)が、人道主義はその理想主義的人生觀を以て、明快に自然主義との連鎖を截斷してゐる。と同時に又人道主義はその一種の排技巧論を以て、一方極端に唯美主義と相反した代り、反つて技巧的方面では、他方幾分自然主義に近かつたと云はねばならぬ。

それが兩三年以前になつて、又ぞろ一團の新進作家が、文壇へ新機運を齎すやうになつた。今度の連中は今までの運動のやうに同一旗幟の下に結束された團體の形を成してゐない。顏ぶれから云へば、學習院出身の白樺派、早稻田大學出身の新早稻田派、帝國大學出身の新赤門派と大別する事が出來さうだが、その各派乃至個々の作家の主張は、殆ど共通點を見出す事が出來なからうと思はれる程、相互に甚しく懸隔してゐる。その證據には有島武郎、里見弴、廣津和郎、葛西善藏、菊池寛、久米正雄等の諸氏の名を並べて見れば、一見誰も類似よりは相違が眼につくのに違ひない。が、彼等を一括して、彼等以前の諸作家と比較すると、こんな特色がありはしないかと思ふ。と云ふのは彼等が全體として、意識的に或は無意識的に、自然主義以來代る代る日本の文壇に君臨した「眞」と「美」と「善」との三つの理想を調和しようとしてゐる事である。勿論彼等

はその個性の赴く所に從つて、三つの理想のいづれの上に、力點を置くかの差はあるかも知れない。新技巧派と云ひ、新現實派と云ふが如き評語は、その結果として彼等の二三者に附される事になつたのであらう。が、槪して云へば、彼等は是等三つの理想のいづれに對しても冷淡ではない。彼等は人間がその一を缺いた所に、安住出來ないと云ふ事を、多少にもせよ感じてゐる。だから彼等の作品には、彼等に先立つた諸作家のそれよりも、より深刻と云ふ事は出來ないにしろ、少くともより複雜な、より豐富な特色が具はつてゐると云つても誇張ではない。この綜合的傾向を雄辯に語つてゐるものは、一に彼等の取材の多方面な事であり、二に彼等の技巧の變化に富んでゐる事であらうと思ふ。これが此處二三年來の文壇を支配するやうになつた、五六の作家が代表する最も新しい勢力である。

予が前に大正八年度の文壇は、此處兩三年來の傾向を持續してゐると云つたのは、まだこれに代るべき運動乃至傾向が生じないと云ふ意味に外ならぬ。勿論單に月々創作を發表する作家たちの上から云へば、本年度の文壇と雖も、まだ自然主義、唯美主義、人道主義、その他中間色の諸傾向は、恰も戰國時代の群雄の如く各々門戶を張つてゐる觀がある。が、これらの作家の上にも、淘去淘來した文壇の波瀾は、能動的に或は反動的に、何等かの痕跡を殘して行つた。その限りに於てやはり現代の文壇は、上記人道主義以後の新傾向に對して、求心的に動きつゝあると云つて

も、大過なきを得るだらうと思ふ。これを要するに大正八年度の文壇は、此處二三年來の傾向を持續して、潑溂たる綜合的精神を孕んだ儘、竈の中の麵麭の如く、棚からぶら下つた葡萄の如く、乃至は父卵を抱いた牝鷄の如く、靜に膨みつゝあるのである。

予は以下數節に亙つて、各主義の絛下に、文壇の諸家の創作を論ずるが、斯くの如き主義の貼り札は、勿論一時の便宜に過ぎない。讀者がこの區別に拘泥して、諸家の眞を誤る事がなければ幸甚である。

二　自然主義の諸作家

往年自然主義の指揮者だつた田山花袋氏は、今年度に至つて殆ど長篇の創作のみに終始してしまつたらしい。短篇も中央公論、新小說等に二三度發表した事があるが、それらは氏自身から云つても閑餘の筆戲であり、作品としては勿論屑々たるものに過ぎなかつた。では長篇の方はどうかと云ふと、「河ぞひの春」「白い鳥」「弓子」等の如きも、觀照表現の兩面に亙つて、畢竟するに在來の花袋氏を一歩も出でてゐない憾がある。が、これらの長篇は、往年文壇を騷がした「妻」「田舍教師」等の諸作に比して、必ずしも遜色あるものではない。いや、たとひ其創作的情熱に於ては缺くる所があるにもせよ、手腕は寧ろ近來の花袋氏の方が遙に進步してゐるやうである。それ

が文壇的に何等の反響を喚起しないやうになつたのは、偏に文壇的主潮の變遷した結果と云はざるを得ない。

この派の驍將たる德田秋聲氏も、やはり花袋氏の如く本年度から、殆ど短篇に筆を絕つてしまつた。のみならず長篇作家としての秋聲氏も、遺憾ながら今日までの所「あらくれ」以上に飛躍する機會は、一度も得ずに終つたやうである。

花袋、秋聲の二氏に比すれば、正宗白鳥氏の健在は、正に自然主義の殘壘の爲に、萬丈の光焰を吐いてゐる觀がある。白鳥氏は本年度に於て、「あり得べからざる事」以下錯落として多くの短篇を發表したが、そのいづれにも基調を成してゐるものは、白鳥氏の虛無思想である。しかもそれが本年度の諸作に至つて、一層冷鐵の如き響を加へ出したやうである。既に白鳥氏は人生に生活の歡喜を認めてゐない。と云つて又人生の彼岸に、常寂光土の存在を信じてゐない事も勿論である。この限りに於て白鳥氏の藝術は、否定に始まつて否定に終る藝術と云ふ事を憚らない。明らさまに云へば予は人生を殘賊するものとして、如是態度を憎むものの一人である。が、如是態度に住した作家として、白鳥氏の作品に對する時、予は常にその手腕の非凡なのに推服せざるを得ない。この點、白鳥氏は秋聲氏と共に、正に滔々たる自然主義の諸作家中、雙絕の名に價するものであらうと思ふ。

白鳥氏に次いで、比較的著しい活動ぶりを示したものは、社會主義的自然主義者とも云ふべき上司小劍氏であつた。小劍氏が本年度に發表した作品中、異色あるものとして注目に價するのは、氏の社會改良論を寓した「黑王の國」以下の諸作である。が、これらの作品は唯異色あるものと云ふに止まつて、その藝術的完成の點になると、モリス、ウエルス、フランス等のユウトピア・ロマンスとは殆ど同日の談ではない。寧ろ小劍氏として成功の作と見るべきものは、自然主義の諸作家中、唯一のヒユウモリストたる氏を彷彿せしめる「愛國者」如き短篇であるかも知れぬ。

中村星湖氏も亦、本年度に於て相當多數の作品を發表したやうである。それらの諸作に現れた星湖氏は、氏獨特の抒情味が一分を減じてゐると共に、觀照上の理智的傾向が新に又一分を增してゐるらしい。が、今日までの所、これと云つて、文壇の視聽を惹くに足る作品は一つも發表しなかつた。

最後に自然主義の巨擘たる島崎藤村氏は長篇「新生」の一作に、全一年間の勞力を傾注したと云つても差支へない。又「新生」は藤村氏の如き老大家が、空前の努力を試むべき好箇の材料を捉へたものである。が、叔姪の戀愛と云ふ如き大問題でありながら、「新生」の主人公の自己批判は、餘りに容易なる憾がある。從つてこれを肯定しようとする主人公の心もちも餘りに蟲が好すぎる觀なきを得ない。忌憚なく云へばこの觀照上の甘さが、今日の文壇をして藤村氏を遠からしむる

所以ではあるまいか。

自然主義の諸作家を論じた序に、岩野泡鳴氏に言及するのは、單に氏の年輩及文壇的位置からする便宜の手段たるに過ぎない。泡鳴氏は最近一二年間、殊に目ざましい健闘を續けて來た。氏の活動は思想的並に藝術的に比較的多端に亙つてゐるが、差當り問題にする必要があるものは、氏の所謂一元描寫論と其理論の實例たる多數の短篇との二つに過ぎぬ。一元描寫論の要點は、作者が作中の一人物となり切る事が、人生の藝術的再現には、絶對的必要條件だと云ふのにある。この一元描寫論は、殆ど論理の容喙を許さぬ位、泡鳴氏の信仰に立脚してゐる觀があるが、更に角氏がこの理論を提げて、多元的描寫の小説家たるトルストイや、ドストエフスキイにさへも、痛棒を與へて顧みないのは、一種の壯觀に相違あるまい。が、泡鳴氏の短篇は、一元描寫論の正否に關らず、存外佳作に富んでゐたやうである。殊に「お常」の如きは、善く卑俗な女性を活描し得た點で、本年度に於ける氏の作品中最も傑出したものであらう。

三　唯美主義の諸作家

この主義の作家として、鬼才の名を擅にする谷崎潤一郎氏は、本年度殊に其後半期に於て、在來の惡魔的傾向以外に一歩を踏出さうと試みたらしい。しかもその一歩の方向は、より健全な、

より人間的な、更に形容を加へれば、より日光と空氣との流通する天地にあつたやうである。その爲か、本年度に於ける氏の作品には、渾成したものが殆どない。支那紀行の諸篇を除いては、いづれにも破綻を生じ易い焦燥の氣が漲つてゐる。好評を博した「或少年の怯れ」の如きも、やはりこの種の動搖が紙背に感ぜられる所があつた。同時に又それだけ潤一郎氏の未來には、注目すべきものが少くない。もし氏にして現在の氏が面してゐる難關を透過するとしたら、予等は日本のバルザックを予等の中に持つ事となるからである。

潤一郎氏に反して、在來の傾向を更に一歩遠く追はうとするものは、正に佐藤春夫氏である。春夫氏は一面に於て極めて纖細な感覺の所有者であると共に、他面に於ては又文壇稀に見る話上手の作家であつた。この兩方面をそれぞれ代表するものは、一に「田園の憂鬱」があり、二に「お絹とその兄弟」がある。本年度に於ける春夫氏は、その話上手の側面を發揮すべき作品こそ一つも出さなかつたが、氏獨自の異常なる感覺の世界へは愈奧深く進んで行つた。「海邊の望樓」の如きは、實にその間の消息を雄辯に語るものであらう。唯春夫氏の獨擅場は、ユニイクなだけそれだけ狹隘だから未來の氏が作家として善く大を致す事が出來るかどうか、疑問なきを得ないのは遺憾である。

硯友社時代以來、終始この主義の作家として立つてゐる文壇の耆宿泉鏡花氏も、本年度は格

別氏としての傑作を發表する機會がなかつたらしい。唯強ひて語を着ければ、昨年度に起稿され、本年度に上梓された長篇「芍藥の歌」が、此處數年間の氏の勞作を集大成した觀があるだけである。

最後に久保田万太郎氏、小川未明氏、小山内薰氏の三人をこの主義の名の下に列するのは、前の岩野泡鳴氏の場合同樣、多少の躊躇なきを得ない。が、「本年度文壇の槪觀」を論じた理由から、便宜上此處へ引合に出せば、久保田万太郎氏は「末枯」以來、暫く好手の響を絕つたし、小山内薰氏も二三の短篇を發表したに過ぎないから、共に本年度はこれと云ふ活躍も示さなかつたやうである。唯小川未明氏は十年一日の如く、氏獨特の感覺の世界に住してゐながら、本年度になつて作品中社會問題に對する感想めいたものが、屢交じるやうになつて來た。未明氏のこの新傾向は、勿論思潮の汐先を窺ふのに敏なる故とは思はれない。寧ろ其處に氏の成長の努力を彷彿すべきものであらう。が、予は氏の如き天稟の藝術家が、時に幼稚なる論客の口吻を用ふる時、殆ど一種の悲哀さへも感ずる事を告白したい。其他長田幹彥氏の如き、この主義に屬すべき作家もあるが、氏の創作が所謂通俗小說の領域に存する以上、且又その通俗小說が花袋氏などの長篇より更に非藝術的である以上、此處には多くを語るべき必要を見出さない。

四　人道主義並にその以後の諸作家

（一）「白樺派」　武者小路實篤氏は本年度に至つて、愈作家としてより社會改革家として活動する事になつてしまつた。從つて實篤氏の作品として、多少とも文壇に反響を喚起したのは、「へんな原稿」の一篇に過ぎない。が、これも小說と云ふよりは、寧ろ感想に屬すべきもので、「その妹」の作家たる氏の藝術的天稟を彷彿するに足らなかつたのは遺憾である。予は寧ろ同樣の意味に於ても、「白樺」に連載された氏の長篇「幸福者」の渾厚朴樸なのを推したいと思ふ。

志賀直哉氏は今年の前半期に三篇の作品を發表したのに過ぎなかつた。が、「十一月三日午後の事」「流行感冒と石」の二篇の如きは、依然として直哉氏の名を重からしむべき、簡勁を極めた作品である。氏は筆を執るに當つて、當に描くべきものの外は、殆ど一石一草の贅をも描かない。その代り其處に描かれたものは文字通り潑溂たる自然そのものの一部である。もしセザンヌを畫家の畫家と云ひ得べくんば正に志賀直哉氏は小說家の小說家と呼んで差支へない。本年度の文壇が比較的落寞の觀があるのも、一つは氏の如き作家が後半期に筆を絕つたせゐがあるのであらう。

有島武郎氏の本年度の收穫は、「或女」の一作に盡きるらしい。「或女」は嘗て「或女のグリンプス」として、白樺に連載された長篇に、殆ど面目を一新する程、改竄の筆を加へた作品である。予は勿論「或女」にも、武郎氏の定評たる所謂スケエルの大を認めるのに吝なるものではない。が、同時に又この中にも、純眞なる藝術的感激の寂光土が見出されないのを悲しむものである。

里見弴氏は長篇「今年竹」を除いては、二三の短篇を發表したのに過ぎない。が、「強氣弱氣」の如き、魄力に富んだ心理描寫の逸品を成した事は、氏の前途を期待せしむるに足るべきものがあると思ふ。

長與善郎氏も本年度に於て、特に文壇の視聽を惹くべき作品は、遂に發表する事がなかつたらしい。が、氏の單刀鐵門に迫るが如き努力は、懈怠なく續けられてゐるやうである。善郎氏は決して一般批評家が考へてゐる如く、無器用一點張りの作家ではない。氏の精進にして頓挫しなかつたなら、案外早くヘツベルを想はせるやうな、力強い戲曲なり小說なりが出現しないものでもあるまいと思ふ。

有島生馬氏は長篇「嘘の果」の一部を公にしただけである。が、氏獨特の描寫の清新は、杳として再び尋ぬべくもない。獨り氏自身の爲のみならず、文壇の爲にも惜まざるを得ない次第である。其他この派の新進作家の中には、近藤經一氏を數ふる事が出來るが、氏の作品を論ずべき機會は、寧ろ現在よりも遠からぬ未來にあるのに相違ない。

(二)「新早稻田派」　廣津和郎氏の作品は、氏自身の實生活上の革命に材を採つた諸作を主としてゐるらしい。その中、事實に卽さない「死兒を抱いて」は、事實に卽した「お光」よりも成功したかつたやうである。予はこの成敗の跡に、和郎氏の長所と短所とを二つながら看取する事が出來る。

と思ふ。

谷崎精二、相馬泰三、吉田絃二郎の三氏は、その纏綿たる情味に富んでゐる點で、殆ど等差級數的繼列を作つてゐる。が、小説道の定石とも云ふべきものは、最も情味の少ない精二氏が最も善く心得てゐるらしい。三氏共本年度は特別目ぼしい作品も公にしなかつたが、精二氏の短篇には、往々九仞の功を一簣に缺いたやうな、遺憾を感じさせるものがあつた。それだけ精二氏には、立派な定石打ちになるべき日が近きにあるやうな氣もしないことはない。

加能作次郎氏の作品は、本年度に於ても、氏自身の立志傳的生涯を材料としたものが多かつた。作次郎氏の小説には、殆ど一毫の嫌味もない。老實と云ふ點から見れば、精二氏以上の老實である。その代り又時として、板にして靈ならざる場合も少くない。蓋し「追放」の如きは、この病弊を脱し得た作品の一つであらう。

葛西善藏氏は東洋的テムペラメントに富んだ作家である。氏の作品にユニイクな氣品を與へるものは、正にこのテムペラメントだと云つても差支へない。予は善藏氏の短篇を讀む時に、屢世道の艱險を歌つた山上憶良の歌を想起する。氏は本年度に於ても、層一層この獨自の世界の開拓に從事したらしい。「馬糞石」の如き、「不能者」の如き、皆この意味で善藏氏の成長を雄辯に語つてゐる作品であつた。

本年度の新進作家として、しかもその雄なるものとして、この派に新な光彩を與へてゐるのは、實に宇野浩二氏である。浩二氏は作品の氣品に於て、到底善藏氏の敵ではない。が、その擒縱自在なる筆力に至つては、多士濟々たる新早稻田派中、善く浩二氏の右に出で得るものは、殆ど一人もないであらう。氏は「苦の世界」「轉々」「長い戀仲」の諸篇によつて、一擧文壇の一角に所謂エスプリ・ガウロアの世界を打開した。唯憾むらくは、浩二氏の作品には氏をして眞正のヒユウモリストたらしむべく餘りに泣き笑ひの妙味がない。予は氏の前途の爲に、氏の中にある戲奴の眼にも、一滴の涙の宿る日を切に期待したいと思ふ。

宇野浩二氏に次いで、本年度の文壇に漸く頭角を顯したのは、「鄕愁」の著者加藤武雄氏である。その他、水守龜之助、須藤鐘一の諸氏も、それぞれこの派の一人として、應分の活動振りを示したが、此處には唯その名前だけを錄して置く事としよう。

(三)「新赤門派」　菊池寛氏は本年度に於て、愈々人間性の活描に腐心したらしい。寛氏の屬する「新思潮」同人の作品には、いづれも或ポイントを藏してゐる所謂主題小說が多きを占めるが、その傾向が最も明に看取されるのは、氏の作品であらうと思ふ。その中世評の最も囂しかつたのは、「恩讐の彼方に」の一篇であるが、量に於ても質に於ても、善く現在の氏を代表してゐるものは、寧ろ大阪毎日新聞に連載された「友と友の間」であらう。

久米正雄氏は今春の大患以後、その作品に一脈の純眞な味を加へたやうである。元來生れながらの詩人として、淸新な感覺描寫に長じてゐる氏が、永くこの純眞な味を失はなかつたなら、ツルゲニエフの如き藝術も、やがては氏によつて建立されるかも知れない。唯、この期待を强調すべく、僅に「山鳥」の一篇が存在するのみなのは、遺憾である。

この派の新進作家として、同時に文壇へ打つて出たのは、「異象」同人たる舟木重信、第五次「新思潮」同人たる中戶川吉二、佐治祐吉の三氏である。舟木重信氏は素質教養共、殆ど病的に近い神經の局所に逼つて、傷ましい人生の內面を示唆する道に立つてゐるらしい。が、憾むらくは筆力の未だ至らない結果、氏のデビウたる「悲しき夜」も、格別著しい文壇的反響は惹起する事なく終つてしまつた。それから中戶川吉二氏は、里見弴氏の風格を傳へた、毛彫りの如き心理描寫に長じてゐる。が、未だ年少な氏はその人生觀上缺ける所があるせゐか時としては心理描寫に於ける瑣末主義に陷り易い。出世作「いぼたの蟲」の如きも、善くこの病弊に陷る事を避け得たからこその佳作であつた。最後に佐治祐吉氏はまだ僅に「萎びた林檎」の一篇を發表したのみだから、此處には唯氏の感傷主義に多少の新味ある事を擧げるだけにしよう。

これは新進作家ではないが、創作家としての江口渙氏が文壇の注目を惹き出したのも、本年度に始まると云つて差支へない。渙氏の作品はどれを見ても、暗澹たる情熱が磅礴してゐる。「馬

丁」の如き、「惡靈」の如き、悉くこの烙印が押されてゐないものはない。唯、その情熱が時として、作品の調和を破壞する爲に、肝腎の效果を減殺するのは、まだ寬氏の藝術が完成してゐない證據である。

寬氏に比べると、山間の湖の如く靜なのは、豐島與志雄氏の作品である。氏の秋よりも爽かな情味は、殆ど他に比類ないものであるにも關らず、本年度に於ける與志雄氏が、頗る創作に怠る所があつたのは、不本意至極と評せざるを得ない。

藤森成吉氏は、本年度に至つて、始めて氏の特色を明にすべき多くの短篇を發表した。氏は鈴木三重吉氏に師事した人であると云ふが、その抒情味には三重吉氏の如き、纖巧を極めた所がない。その代り自然の氣息のやうな、素朴な清新さが流れてゐる。「舊先生」の一篇の如き、この特色を語り得て餘りあるものの一つであらう。

最後にこの派の一人たる予自身は、幾分にもせよ自信のある作品は、「私の出遇つた事」「きりしとほろ上人傳」以外に、一つも發表出來なかつた。この評論を書きながらも、顧みて忸怩たらざるを得ない所以である。

(四)「新三田派」 水上瀧太郎氏を此處に列する事は、文壇的承認を經た時代から云ふと、當を失するものがあるかも知れない。が、氏の力が強く作品の上に現れ出したのは、比較的近い頃の事と

思ふから、便宜上此處に引合ひに出す事にしようと思ふ。瀧太郎氏は筆力に於ても、藝術的氣稟に於ても、優に文壇の先進を凌駕するに足る作家である。唯氏はその人生を見るの眼が、未だ一翳の爲に遮られて、透徹を缺く所がないでもない。その爲「日曜」の如き長篇になると、往々單調に失し易い憾がある。その代り氏の滯外中の消息を描いた短篇、殊に「紐育――リヴアプウル」の如きは、情景倶に至る所、殆ど永井荷風氏以後の第一人と稱して差支へない。

瀧太郎氏に及ばない事は勿論であるが、南部修太郎氏も亦、この派の新進作家として、堅實な風格のある作家である。「蜂谷のきず跡」の如き、「猫又先生」の如き、氏の追憶的短篇の中には、素直な美しさに富んだものが少くない。唯、その魄力に於て、何處かまだ手薄な所があるのは遺憾である。

小島政二郎氏は僅に「森の石松」の一篇を公にしたのに過ぎなかつたが、その淡々たる江戸人的風格を帶びてゐる點では、これ又ユニイクな作家の一人たるに恥ぢない。氏の作品は常に几董の句境を想はせる、纖細典雅な寂びに富んだものである。だから南部修太郎氏に水上瀧太郎氏の片鱗を見るものは、恐らく政二郎氏に久保田万太郎氏の遺響を聞く事であらう。

これらの四派以外に立つて、いづれも自敍傳體小說を提げながら、是非を文壇に問うたのは、室生犀星、島田清次郎の二氏である。室生犀星氏の詩名は既に天下に定評があるが、その處女作

「幼年時代」「性に眼覺める頃」の二篇の佳所も、亦氏の詩に於けると同じやうに、眞情流露の美しさにあると云つて差支へない。犀星氏に比べると、島田清次郎氏の長篇「地上」は、一歩所謂通俗小說に近い觀があるが、僅に行年二十歲の青年の作たる事を思へば、少くともその筆力の雄健な一點では、殆ど未來の大成を想見せしめるものがある。序ながらつけ加へて置くが、「地上」は出版書肆の廣告によると、二千枚全三卷の長篇で、本年度に發表された「地に潛むもの」の一卷のみでも、紙數三百頁を超過してゐると云ふ。同じく二千枚の長篇たる「不滅の像」の著者江馬修氏にとつては、取材と讀者とを同じくするこの新進作家の出現は、確に好個の競爭者を見出したものと云はなければなるまい。

五　評論、戲曲、詩歌

予の最初の計畫によれば、これらの諸方面にも鳥瞰的の一瞥を加へる筈であつた。が、今になつて見ると、豫定の紙數には限りがあるし、締切の日限も既に過ぎ去つてゐるので、旁々唯大雜把に二三言を下すより外はない。

評論界の沈滯は甚しい。西宮藤朝氏の如き、宮島新三郎氏の如き、新進氣銳の批評家もゐないではないが、彼等は皆小宮豐隆氏が往年文壇に臨んでゐた權威程のものさへ、持つてゐない。現代

の批評家の大部分は、鑑賞上の能力に於ても、論理的の頭腦に於ても、それらの背景たるべき學殖の多少に於ても、創作家中の錚々たるものと、拮抗し難い觀がある、だから彼等の評論は、文壇の大勢に影響すべく、餘りに低調子たるを免れ得ない。この間唯、片上伸氏が一人穩秀の筆を執つて、清警の時評を草してゐるのは、僅に人意を強からしむるものがあるやうである。

戲曲の創作も亦振はないらしい。國民文藝協會の設立を見ても、その上場戲曲の如きは、格別新生面を開いたものでも何でもなかつた。久米正雄氏の「三浦製絲場主」と菊池寛氏の「順番」との二作が殆ど本年度の戲曲界のすべての收穫であつた事を思へば、憮然たらざるを得ないものは、予一人ではなからうと思ふ。詩歌は評論戲曲の振はざるに比すれば、遙に活動の氣に溢れてゐたらしい。少くとも今年の如く、詩集歌集の出版の頻々としてあつた事は、近來稀だとか云ふ事である。予は本年度に出版された詩集中、最も特色あるものとして西條八十氏の「砂金」千家元麿氏の「虹」室生犀星氏の「第二愛の詩集」を擧げたいと思ふ。「虹」と「第二愛の詩集」との中に、聞えるものは、大河の如きウオルト・ホイツトマンのリズムである。が、翻つて「砂金」を見ると、此處にはレニエの如き、或はグルモンの如き、夕光幽花の世界があるのみで、更に煙塵の氣などは漂つてゐない。この二つの傾向——人生の爲の藝術か、藝術の爲の藝術かと云ふ詩作態度の問題は、今後も長く詩壇に於ける懸案となつて殘るのであらう。其他短歌の方面に就いては、齋藤茂吉氏、

島木赤彦氏の「アララギ」派が、事實に於て現代の歌壇に君臨してゐる事のみを記して置きたい。

大正九年度の文藝界

小序

私は批評家ではない。あまり上等な作品も發表しないが、兎に角小説家で通つてゐる人間である。だから私は文壇の種々な傾向に私自身は努めて公平を期してゐても、存外公平になれないかも知れない。のみならず小説家たる私は、その小説家たる立場から、やゝもすると小説家 卽 玄人に訴へる作品の長所のみを褒めて、一般讀者 卽 素人に訴へる作品の長所は貶する傾きがあるかも知れない。これが私の文壇鳥瞰圖が、果して正鵠を得てゐるかどうか、私自身幾分の疑ひなきを得ない所以である。

もう一度繰返せば、兎も角も私は小説家である。だから文壇と云ふ中でも、小説界の事情には多少通じてゐる所がある。が、小説界以外の方面、例へば詩だとか評論だとか或は又俳句だとか云ふ方面の作品には、特に通じてゐると云ふ自信がない。いや、夫らの作品は殆ど讀んでゐないと云つても好い位である。だから私の文壇鳥瞰圖は、僅に小説――精々眼界を廣くした所が、小

說と戲曲との二方面を見渡してゐるそれに過ぎない。その他の方面にはどんな所にどんな高山の氷河が見えるか、どんな森林が擴がつてゐるか、乃至どんな大河の水が逶迤とし遠く流れてゐるか、更に見當のつかない鳥瞰圖である。

それからもう一つ御承知を願ひたいのは、私が昨年度の文壇を論じた時、その鳥瞰圖の山や河は各作家の業績であり、その土地の高低遠近は各流派の主張であつた。が、今年はさう云ふ見方の代りに、どちらかと云へば外面的な、その代りもつと大づかみな、文壇的事實を本位にした鳥瞰圖を描いて見ようと思ふ。と云ふのは年鑑の性質上、その方が廣い世間の讀者に文壇の現狀を紹介するには、便利かも知れないと思つたからである。此三つの點——即ち私の鳥瞰圖は甚だ眼界が狹いと云ふ事と、且それが或程度までは公平でないかも知れぬと云ふ事と、最後にその鳥瞰圖は個々の作家や個々の流派を本位にしたものではないと云ふ事とは、この「大正九年度の文藝界」を讀まれる以上、是非とも念頭に置いて頂きたい。さもないと私の鳥瞰圖は、唯倦怠と失望と以外に何も與へないものになつてしまふ。それでは本文の讀者には勿論、作者たる私自身にも餘り氣の毒すぎるからである。

一　新進作家の輩出

大正八年度の下半期から九年度の文壇を見渡すと、最も人目につくものは、新進作家の輩出である。室生犀星、細田民樹、細田源吉、田中純、岡田三郎、佐佐木茂索、瀧井折柴、水谷勝、佐治祐吉、關口次郎、石丸梧平、福田正夫、三宅幾三郎――これらの諸氏以外にも、「早稻田文學」「新小說」等が推薦した新進作家を數へたら、夥しい數になるかも知れない。勿論それらの新進作家は、文壇的地步の占め方にも、種々雜多の相違がある。既に堂々たる一家を成してゐる士もあれば、僅に文壇へ處女作のみしか送つて居らぬ士も少くない。が、概して云へば有島武郎氏や里見弴氏が新進作家として、目ざましいデビユーをした時程に、文壇の視聽を一身に吸收してゐる新進作家が、一人もゐない事は事實である。

この數年間に文壇は、明かに局面を轉換した。それは手短に云つてしまへば、自然主義の桎梏を脱したのである。如是局面の轉換を促したものは、無論當時の新進作家何人かの力に違ひない。だからこの場合は新進作家が機會を作り出したのである。が、現在はさうではない。既に局面は轉換した。文壇は舊人を葬つた代りに、新人を容れる餘地はいくらもある。そこで幾多の新進作家が、續々文壇へ乘り出して來た。つまり今度は正反對に機會が新進作家を造り出したのである。從つて數が多い代りに、粒はあまり揃つてゐない。まづ一陽來復して草も木も同じやうに、芽を吹き出した趣がある。からなると有島武郎氏や里見弴氏にも劣らない、天分に富んだ作家があつ

ても、有島氏や里見氏が認められた程には、文壇の耳目を動かし悪い。それ所かまかり間違へば、草も木も水苔も、差當りは同列に見られてしまふ。――これが極大づかみではあるが、昨年以來輩出した新進作家の現狀である。

しかしかう云ふ狀態は、何時までも續くべきものではない。私は前に過去の新進作家が機會を造り出したと反對に、數の多い現在の新進作家は機會に造り出されたと云つて置いた。が、もう一度考へ直して見れば、過去と云はず現在と云はず、自然主義以後の新進作家は、悉く同一氣運の春が芽ぐませた木だの草だのである。すると文壇の局面轉換が完全に行はれ切つた後は、如何に雜誌編輯者が文壇の景氣を煽り立てるにせよ、新進作家に對する需要は、自然と減ずるに相違ない。否、最後には一時期の間、消滅してしまふのが通例である。實際又新進作家の輩出は、本年度も後半期に入らうとする頃から、そろそろ下火になり始めた。「新小說」の八月號が、數名の新進作家を文壇に紹介して、しかも何等文壇に反響を生じなかつたのは、それらの新進作家の力量は暫く問はず、確に新進作家に對する需要が、減退した徵だと云はざるを得ない。

二　文藝の多樣化

文壇の局面が一轉した結果、多數の新進作家が生まれた事は既に述べた通りである。しかしそ

れらの新進作家は、文壇的地歩の占め方のみが、千差萬別を極めてゐるのではない。諸家各自の藝術的色分けも、殆ど謝肉祭の行列すら三舍を避ける程多樣である。之は勿論文壇に限らず、一つの權威が倒れた後には、當然起るべき現象であらう。唯此處に一つ注意して置きたいのは、それらの新進作家の中には、その藝術的信條の上から見ると、殆ど自然主義の遵奉者とも稱すべき作家がゐる事である。之は私が「新進作家の輩出」の條に述べた事と、矛盾してゐる觀があるかも知れない。が、事實はこれらの新進作家も、やはり同じ事情が生んだものである。何故かと云ふと文壇の局面轉換は、新進作家の輩出を容易にした。容易にしたと云ふ言葉は、新しい藝術的信條の提唱を容易にしたと云ふばかりではない。單に新しい顏ぶれと云ふだけの出現をも容易にしたのである。それから又輩出した新進作家の大部分は前述の理由上何等かの意味では、反自然主義的傾向を持つてゐる。その傾向がこの五六年來文壇を支配したと云ふ事は、更に又自然主義へ復歸した新進作家を生み出すべき原因になつたのに相違ない。

多數の新進作家の藝術的色分けが多樣を極めてゐると云ふ事は、同時に又文壇全體が、自然主義に統一された過去に比べると、如何に葬場から舞踏場へ移つたやうな觀があるかを縮圖にしてゐるのも同じ事である。實際今日の文壇程、藝術的色分けの多樣な事は、事によると明治初年以來、一度も我國にはなかつたかも知れない。德田秋聲氏の如き自然主義の作家もあれば、武者小

路實篤氏の如き人道主義の作家もある。菊池寛氏の如き理性の逞しさを守る作家もあれば、室生犀星氏の如き感覺の鋭さに生きる作家もある。有島武郎氏の如きホイツトマンに私淑する作家もあれば、宇野浩二氏の如きスタアンを彷彿させる作家もある。――その他一々數へ立てたら、日本のパルナスに開いてゐる花は、寒帶溫帶熱帶の差別もないやうな氣がするかも知れない。

文藝の多樣化は一面から云へば、結構な事に相違ない。が、その結構な一面に、結構ならざる反面が、伴ひ易いことも事實である。既に文壇は放たれた。放たれた物が亂れるのは、當然と云へば當然であらう。しかしその當然は、必しも避け難き當然ではない。のみならず避けなければ自滅する外のない當然である。遺憾ながら文壇は放たれたのに止まらず、既に幾分かは亂れ出した兆候も發見されぬではない。が、私は年鑑の性質上、この種の時弊を數へ立てる代りに、今はその一つを次の條下に擧げることに止めて置かうと思ふ。

三　モデルの爲のモデル

この惡弊の一つはモデルの爲のモデルである。元來近年の文壇程、自敍傳的小說に富んでゐる文壇は滅多にない。月々諸種の雜誌に發表される小說の大部分は直接作者自身の生活に材料を取つたものである。(これにも種々の原因があるが、今は暫く問題にしない。) 既に自敍傳的小說で

あつて見れば、作者の家族乃至は友人知己が、その作中に登場するのは免れ難い所である。所がわが國の作家なるものは、西洋の作家に比べないまでも、交際の範圍が頗る狹い。概して云へば作家仲間に限られてゐるやうな觀がある。だから自敍傳的小說が行はれると、勢それらの小說の中には、文壇知名の作家たちが見え透いた假名のマスクの下に、登場する事も少くない。

其處までは自敍傳的小說を認める以上、許さるべき事に違ひあるまい。が、私がモデルの爲のモデルと呼ぶものは、さう云ふ實在の登場人物――所謂モデルを藝術的以外の目的の爲に使用して恥ぢない傾向である。その小說の目的が、たとひ全部でないまでも、大部分はモデルその物の興味に依らんとする傾向である。勿論これは作者の企圖如何の問題に外ならないから、實際作品に當つて見た上、この傾向を指摘しようとすると、多くの場合はモデルの爲のモデルか、或は否かと云ふ限界は曖昧な點を生じ易い。しかし現在の文壇に、殊に大正九年度の文壇に、この種の惡傾向の存する事は疑ひを容れない事實である。

しかしこの惡傾向も、單にモデルその物の興味に依らんとしてゐるだけなら、まだしも恕すべき點がないでもない。が、更に一歩を進めて、モデルその人を傷ける爲に、その人の私行乃至、家庭の祕事を暴露して顧みないと云ふ事になると、もはやそれは藝術上のみならず、道德上忌むべき問題である。いや、モデルその人の私行乃至は家庭の祕事を暴露して顧みないだけならば猶

も角も、その上に猶架空の談を捏造して、愈々累をその人に與へんとするに至つては、藝術家の墮落これよりも甚しきはないと云つても好い。しかも現在の文壇には、この種の例も一つならず發見する事が出來るのである。

四　文藝の社會化

そこでもう一度「文藝の社會化」へ立ち戻ると、正に現在の文壇は謝肉祭の行列そのものである。この藝術的色分けの多樣な文壇は、文藝が社會へ働きかける機會も、在來よりは多くなつて來たらしい。これは社會が文藝に、漸次理解と同情とを持つやうになつた結果であり、同時に又文壇の方面でも、主としてその取り扱ふ內容が、從前より社會一般に訴へるものが出て來た結果である。その事實として現れたのは何かと云へば、まづ指を通俗小說の進步に屈せざるを得ない。元來通俗小說なるものは、講談に滿足する事が出來ないと共に、小說に理解を持ち得ない讀者の爲に出來たものである。云ひ換へれば社會と文藝とが或程度に隔離された時、僅にこの兩者が開鑿した一條の運河に似たものである。だから社會と文藝とがより密接な關係になれば、當然この運河は澎湃たる大浪を起すに相違ない。いや、寧ろ舊日の運河の代りに、自然の大河が兩者の間を貫流しなければならない筈である。

通俗小說が進步し出したのは、久米正雄氏の「螢草」以來、或は更に遡れば長田幹彥氏の諸長篇が陸續出版された以來の事である。其が昨年あたりからは、更に此方面に指を染める文壇の新人が多くなつて來た。久米正雄氏は「不死鳥」を書き、菊池寛氏は「眞珠夫人」を書き、里見弴氏は「今年竹」を書き、志賀直哉氏も亦近々この種の長篇を書かうとしてゐる。もしこの傾向が理想的に進んで行つたら、所謂通俗小說なるものは、數年の内に堂々たる藝術的長篇に變つてしまふかも知れない。

が、文藝が社會に浸潤して來た徵は、獨り通俗小說の進步のみではない。もう一つ見逃すべからざる事は、文藝と全然緣のなかつた新舊劇俳優が、次第に新しい作家の戯曲を上演するやうになつた事である。中村吉藏氏の「井伊大老」の如き、山本有三氏の「生命の冠」の如き、菊池寛氏の「恩讐の彼方に」及び「藤十郎の戀」の如き、武者小路實篤氏の「その妹」の如きはいづれも上演された上に、世間的にも相當な成功を博する事が出來た。如是舞臺の上にも文壇が、着々影響を及ぼし出した事に就いては、まだ述ぶべき事もないではないが、問題が劇壇へ移る爲、此處では差控へた方が好からうと思ふ。

それから序に述べて置きたいのは改造社が試みた新講談の企てである。之も亦或意味では、文藝が社會に接近した實例と見る事が出來るかも知れない。しかし通俗小說の進步は、讀者が現在

の通俗小説に慊焉たる所から、必然に起つた現象である。が、講談の讀者は之に反して、講談に不滿を感じてゐない。いや、寧ろ講談の讀者には、講談の講談たる所が、――小説と緣の遠い所が、喜ばれつつあるのである。だから新講談の企てには、通俗小説の進歩程、已むに已まれない勢がない。それが格別顯著な成功を收め得なかつたのは、當に自然の結果である。つまり通俗小説の進歩乃至劇壇の新機運は、社會と文藝とがお互に接近し合つた結果であるが、新講談の場合は文藝のみが、徒に社會へ割り込むべき努力をしたと云はれるかも知れない。私はこの故に新講談の企てには、文藝の社會化の一例と云ふ名前を與へるのにためらふのである。

「文藝講座」

文藝一般論

わたしは文藝と言ふものを出來るだけ平易に考へて見たいと思ひます。出來るだけ平易にと言ふ事は出來るだけ通俗にと改めても宜しい。兎に角科學的の考へ方をせずに考へて見ようと思ふのです。かう言ふわたしの考へ方に反し科學的に文藝を考へる事も勿論出來ない譯ではありません。いや、諸家の講じてゐる文學論と言ふものは皆此科學的の考へ方の上に立つて居るものであります。或は立つて居なければならぬ筈のものであります。いま文學論の目的を文藝上の美とか文藝の本質とか言ふものを明らかにするのにあるとすれば、文學論――科學的の考へ方の上に立つた文學論は美學の各論の一つにならなければなりません。是は中中わたしなどの力量に及ばぬ大仕事であります。のみならず「文藝講座」の目的には縁の遠い閑事業であります。かたがたわたしは前に述べた通り出來るだけ通俗に文藝とはどう言ふものかを考へて見ようと思ふのです。なほ序に斷つて置きますが、既に科學的の考へ方の上に立たないのですから、當然わたしの考へ方

は直觀的に傾かなければなりません。その爲に往々わたし一人の獨斷としか見られぬ處も出て來るだらうと思ひます。それはこの議論の性質上、どうもやむを得ない事とお宥しを願ひたいと思ひます。

一　言語と文字と

文藝には小說とか、抒情詩とか、或は又戲曲とか、色々の形式がありますが、兎に角如何なる文藝も言語を使はなければなりません。或はその言語を現した符號——即ち文字を使はなければなりません。尤も禪宗の坊さん達は不立文字などと言ひますが、如何なる高僧知識でも言語或は文字を使はない限り、發句一つ出來ないことは確かであります。しかし勿論かう言ふことは言語或は文字を並べさへすれば、何でも文藝になると言ふのではありません。如何に言語或は文字を並べたにもせよ、「二等邊三角形の頂角の二等分線は底邊を二等分す」と言ふ文句が文藝でない事は明らかであります、が、言語或は文字を使はぬ文藝と言ふものは何處にもない——これだけは事實に違ひありません。すると文藝とは何であるかと言へば、まづ「言語或は文字に依る——言語或は文字を表現の手段にする或一つの藝術である」——かう言ふことが出來るかと思ひます。前にもちよつと述べた通り、言語或は文字を並べたものは必しも文藝ではありません。いま文

藝と言ふものを一人の人間にたとへれば、言語或は文字は肉體であります。如何に肉體は完備してゐても、魂がはひつてゐなければ、畢竟死骸たるにとゞまるやうに、如何に言語或は文字は並んでゐても、文藝をして文藝たらしめるものがなければ、文藝の稱を與へることは出來ません。それならば言語或は文字よりも、この文藝をして文藝たらしめるものをつかまへて、文藝とはかう言ふものであると言つた方が都合が善いのに違ひありません。しかしこの文藝をして文藝たらしめるものは丁度前の例の魂のやうに、容易に捕捉出來ぬものであります。魂は肉體の中にあるものではありません。と言つて又肉體の外にもあるものではありません。只肉體を通じてのみその正體を示すものであります。文藝を文藝たらしめるものもやはり魂と變りはありません。肉體の外に魂を求めるのは幽靈を信ずる心靈學者であります。言語或は文字の外に文藝を文藝たらしめるものを求めるものも——まあ幽靈に似たものを信ずる神秘主義者と言はなければなりません。けれどもわたしは不幸にも常識一點張りの人間ですから、都合上まづ肉體たる言語或は文字と言ふものを考へることにしたいと思ひます。

前に「言語或は文字」と言ひましたが、差し當り言語だけ離して考へて見ると、元來言語と言ふものは人間同志の意志を疏通させる爲に發明したものでありますから、必ず或意味を具へてゐます。尤も「ああ」とか「おや」とか言ふ間投詞は無意味であるとも言はれるかも知れません。が、他

の名詞や動詞ほどはつきりした意味はないにもせよ、誰も「あゝ、悲しい哉」と言はない所を見ると、兎に角「あゝ」は「あゝ」なりに、又「おや」は「おや」なりに或使ひ道を具へてゐる、――或意味を具へてゐると言つても差支へあるまいと思ひます。その次に言語と言ふものは吾々人間の口から出る聲を用ふるものでありますから、必ず或音を具へてゐます。では盲啞學校の啞生徒の言語はどうだなどと質問してはいけません。あれは言語とは言ふものの、實は言語の代用をする身振りに外ならぬものですから、當然問題にはならぬ筈であります。すると第一に或意味を具へ、第二に或音を具へてゐる――これは勿論莫迦々々しい位、當り前のことに違ひありません。しかしこの當り前のことでもわたしの議論を進める上には多少の役目を果たすかと思ひます。

もう一度前に立ち戻つて見ると、言語或は文字を使はぬ文藝と云ふものは何處にもない、文藝は言語或は文字を表現の手段にする藝術であります。して見れば文藝も或意味と共に、或音を具へてゐるものに違ひありません。たとへば電車に乘るとします。電車に乘る爲には金を出した上、切符を貰はなければなりません。これは會社へ出る爲に電車に乘つても、旅行をする爲に電車に乘つても、乃至は又お茶屋へ行く爲に電車に乘つても、常に免れ難い運命であります。言語もこれと同じことであります。苟くも言語を使つたからには或意味を具へた上、或音を具へるのは當

然であります。即ち一首の歌は一首の意味を具へ、同時に又一首の音――音と言ふのは妙ですが、兎に角音調とか調べとか言ふものを具へることになつて來ます。これは勿論小說でも戯曲でも變りはありません。あらゆる文藝は意味と音との兩面を具へてゐる筈であります。(この意味と音との關係は後の說明に讓ります。)只或文藝の形式は他の或文藝の形式ほど、比較的音を重んじません。或はもつと正確に言へば、比較的聽覺的效果を重んじません。この比較的聽覺的效果を重んじない形式――即ち前者を散文と言ひ、比較的聽覺的效果を重んずる形式――即ち後者を韻文と言つてゐます。しかし散文と韻文との差別は勿論比較的のものですから、何處を境界にするかと言ふことは曖昧模糊たるを免れません。成程小說と短歌とを比較すれば、前者は明らかに散文であり、後者は明らかに韻文であります。が、これは散文と韻文との兩極にあるものを比較するからであります。兩者の中間に位するもの――即ち韻文的散文と散文的韻文とを比較すれば、どちらをどちらと言ふことも出來なくなるのに違ひありません。

しかし前にも述べた通り、文藝は言語或は文字を表現の手段にする藝術であります。して見れば言語を考へた以上、文字も考へて見なければなりません。元來文字と言ふものは言語を示す符號であります。まづ言語即ち文字と言つてもよろしい。意味の具つてゐることは勿論、音もちやんと具つてゐる。尤も符號でありますから、文字それ自身は音を出しません。出した日には符號

ではない。妖怪變化になる訣であります。では言語と文字とは全然同一のものかと言へば、必しも同一ではありません。文字は言語の具へてゐない形と言ふものを具へてゐます。この形と言ふものは古來等閑に附せられてゐますが、決して文藝に緣のないものと片づけてしまふ譯には行きません。言語も表現の手段ならば、文字も表現の手段であります。言語の意味や音を大事がりながら、文字の形に背中を向けるのはどう考へても片手落ちであります。

けれども文字の形と言ふものの古來等閑に附せられたのは必しも偶然ではありません。文字は前にも述べた通り、言語を示す符號であります。——と言つてしまへば手輕でありますが、實は何も言語を示す符號ばかりではありません。漢字と言ふ東洋の象形文字は（漢字も細かに區別すれば、象形ばかりには限りません。が、指事とか會意とか一々區別する必要もありませんから、象形文字と言ふ言葉に代表させて置きます。）「イヌ」は「犬」、「ハシル」は「走る」と言ふやうに一字一義を示してゐることは確かであります。しかし「アルフアベツト」と言ふ西洋の音標文字はＡはエエ、Ｂはビイと言ふやうに一字一音しか示してゐません。卽ち東洋の象形文字のやうに言語を示す符號ではない譯であります。從つて西洋の言語と言ふものは少數の例外（たとへば英語のＯと言ふ間投詞など）を除きさへすれば、二つ以上の文字を集めたものであります。かう言ふ文字の集まつた言語ははつきりした形を具へてゐません。勿論ＡはＡの形を、Ｂは又Ｂの形を具へて

ゐるのには違ひありません。が、一つの言葉として見ると、いろいろの言葉に共通したいろいろの文字を含んでゐますから、その一つの言葉としての形――形の上の個性と言ふものは朦朧となることを免れません。この故に古來西洋人は文字の形と言ふものを等閑に附してゐるのであります。しかし西洋人は少時問はず、「いろは」と言ふ音標文字以外に漢字も使つてゐる我々は等閑に附された義理ではありません。實際又文學論を講ずる學者は如何に等閑に附してゐても、存外一般民衆は等閑に附してゐないのであります。その證據にはあなたがたでも「どうもこの字は字面が惡い」などと小首を傾けることがあるでせう。あの字面の善惡と言ふのはつまりその文字の形――或はその文字の與へる視覺的效果を指してゐるのであります。

漢字の視覺的效果に富んでゐることは論ずるのを待たないのに違ひありません。從つて漢字を使ふ文藝、――就中漢字だけを使ふ支那の文藝は言語の意味や音の外にも、文字の形を重んじてゐます。たとへば袁隨園の「江水三千里、家書十五行、行々無別語、只道早還鄕」を御覽なさい。（念の爲に飜譯すれば、これは「江水三千里、家書十五行、行々別語無し、只道ふ早く鄕に還れと」であります。）字劃の少ない文字の多いことはこの淡々とした絶句の味を少からず扶けてゐます。尤もかう云ふ文字の形は言語の意味や音のやうに、文藝の生命を支配す大問題ではないかも知れません。けれども日本の文藝にさへ、多少なりとも文字の形を重んずる傾向のあることは疑ひ

を容れぬ事實であります。

最後にもう一度繰り返せば、文藝は言語或は文字を表現の手段にする藝術であります。これをもつと詳細に言へば、(一)言語の意味と(二)言語の音と(三)文字の形との三要素により、生命を傳へる藝術であります。すると次の問題はこの三要素相互の間の關係に移らなければなりません。

二　內容と形式

文藝は前に述べた通り(一)言語の意味と(二)言語の音と(三)文字の形との三要素により、生命を傳へる藝術であります。もう一度文藝と言ふものを一人の人間にたとへれば、この三要素はとりも直さず骨だの筋肉だの皮膚だのに當ることになると思ひます。骨だの筋肉だの皮膚だのは骨は骨、筋肉は筋肉、皮膚は又皮膚と言ふやうに獨立して働くものではありません。どれも皆一つになつた全體として働くばかりであります。若し骨は動いても、筋肉や皮膚は動かないとすれば、その人間は片輪——所ではない、生けるが如く死せるが如き怪物になる外はありません。言語の意味と言語の音と文字の形との三要素も常に全體として活動することは少しもそれと變りません。今第三の要素——卽ち文字の形だけは主として支那の文藝に限られてゐるものでありますから、少時不問に附することにすると、言語の意味と言語の音とは常に全體として活動しなければならぬ、

又全體として活動しなければ、到底生命を傳へることは出來ない――と言ふことになるのであります。現に短歌に徴すれば、一首の意味と一首の音とは常に微妙にからみ合つてゐます。たとへば「足びきの山河の瀬の鳴るなべに弓月が嶽に雲立ち渡る」と言ふ人麻呂の歌を御覽なさい。この雄渾な景情はこの雄渾な調子を待たずに現はされるものではありません。或はこの一首の短歌から我々の心に傳はる感銘――如何にも雄渾を極めた感銘は景情と調子との一つになつた「全體」からばかり生れて來るのであります。勿論比較的聽覺的效果を重んじない形式――即ち散文は短歌のやうに言語の音に負ふ所は多くはないのに違ひありません。しかし何よりも早い話が、夏目先生の「坊ちやん」や「吾輩は猫である」を御覽なさい。あの輕妙な文章の調子はあの輕妙な作品の效果を少からず扶けてゐます。すると散文にも短歌のやうに、言語の意味と言語の音との一つになつた「全體」は存在すると言はなければなりません。わたしの内容と名づけるのはこの「全體」に外ならぬのであります。

尤も由來内容と言ふ言葉はいろいろの意味に解釋されてゐます。現に或人々の所謂内容は小說ならば一篇の筋、短歌ならば一首の大意であります。もう一度人麻呂の短歌を例にすれば、かう言ふ人々はこの短歌の内容を「山の中の河瀬の鳴るのにつれ、弓月が嶽に雲が立つた」と言ふだけにあると考へてゐます。しかし内容と言ふものは言はば中味の全體でありますから、一篇の筋や

一首の大意を內容と呼ぶのは滑稽であります。若しこれを內容とすれば、一人の人間も一具の骸骨も同じものにならなければなりません。更に又或人々の所謂內容は主として散文の場合でありますが、その作品に含まれた思想或は道德であります。たとへばかう言ふ人々は「坊ちやん」の內容を「僞善者位怪からぬものはない。從つて何びとも僞善者には相當の制裁を加へなければならぬ」と言ふだけにあると考へてゐます。これも中味の全體たる內容と言ふ言葉に符合しません。アルコオルは酒から取れるにしても、誰も酒卽ちアルコオルと言ふもののないことは事實であります。尤も昨夜のアルコオルの祟りで今朝は頭痛がするなどと吹聽する酒飲みもありますが、あれは常談でありますから、問題にするには當りません。――その他にもまだ內容と言ふ言葉はいろいろの意味に解釋されてゐませう。が、それ等の人々の俗に內容と言ふものはいづれもわたしの言ふ內容ではありません。わたしの言ふ內容は前にも述べた通り、言語の意味と言語の音との一になつた全體であります。

けれども內容をかう言ふものとすると、では內容は文藝そのものと同じことになるのかと言ふ質問も出ないとは限りません。實際內容は文藝そのものと殆ど大差のないものであります。しかし全然同一かと言ふと、必ずしも同一ではありません。度たび繰り返すのは恐縮でありますが、文藝は言語或は文字を表現の手段にする藝術であります。が、文藝上の作品は常に幾つかの言葉

から成り立つてゐます。たつた一つの言葉から成り立つてゐる作品などはまづないと言つても差支へありません。たとへばあらゆる韻文の中でも、一番短い俳句さへ、十七音に相當する幾つかの言葉を含んでゐます。すると等閑に附せられないのはその作品を組み立ててゐる幾つかの言葉の並べかたであります。勿論「本を持つて來い」と言ふことでも出たらめに言葉を並べれば――「來いを本持つて」とか何とか並べれば、ちよつと他人には通じないでせう。が、わたしの並べかたと言ふのはさう言ふことを言ふのではない。「秋深き鄰は何をする人ぞ」と言ふか、「秋暮るる鄰は何をする人か」と言ふか、或は又「何をする人と鄰りて暮の秋」と言ふか、――と考へる時の並べかたであります。つまり辭の達するか達しないかと言ふ並べかたではない、生命を傳へられるか傳へられないかと言ふ並べかたであります。この又幾つかの言葉の並べかたを不問に附することは出來ないとすれば、その幾つかの言葉から成り立つた一句とか一節とか一章とかの並べかたもやはり不問に附することは出來ないのに違ひありません。いや、更に三部作の長篇小說などを考へれば、幾つかの句から成り立つた一節、――その又幾つかの節から成り立つた一章、――その又幾つかの章から成り立つた一篇、――さう言ふ手數のかかつた一篇の並べかたもやはり不問に附することは出來ないのに違ひありません。卽ち文藝上の作品は小は十七音に相當する幾つかの言葉の俳句から大は何千句、何百節、何十章に相當する何萬かの言葉の長篇小說まで、悉く、或

並べかたに、——或はその作品を支配する或構成上の原則に從つてゐます。この構成上の原則に從はない限り、如何なる內容も一足飛びに文藝上の作品となることは出來ません。單なる內容は——この構成上の原則を缺いた內容は机の形を成さない机とか、椅子の形を成さない椅子とか言ふやうに要領を得ないものに了るだけであります。つまり文藝上の作品は一方に內容を持つてゐると同時に、他方にはその內容に形を與へる或構成上の原則を持つてゐなければなりません。上に述べた內容に對し、わたしの形式と名づけるのは實にこの構成上の原則を指してゐるのであります。

內容は上に述べたやうに絕對に形式を必要としてゐます。同時に又內容を持ち合せない形式と言ふものも存在しません。わたしは「形式を缺いた內容は机の形を成さない机とか、椅子の形を成さない椅子とかに同じものである」と言ひました。すると內容を缺いた形式も机を成さない机の形とか、椅子を成さない椅子の形とかに同じものになる訣であります。これは勿論考へることも出來ないものに違ひありません。して見れば內容と言ひ、形式と言つても、この兩者は事實上切り離すことの出來ないもの——或は不卽不離の關係に立つものと言はなければなりません。たとへば何度も例に擧げた人麻呂の短歌を御覽なさい。あの雄渾な內容は「足びきの山河の瀨の云云と言ふ言葉の並べかた、——卽ちあの形式を待たずに存在することは出來ません。しかしあの

形式なるものもあの雄渾な內容を待たずに存在することは出來ません。たとひ存在するとしても、それは內容にしろ形式にしろ、雲か山か呉か越か、頗る影の薄い代物であります。尤もわたしは今までは勿論、この後も內容とか、形式とか、恰も水とか油とか言ふやうに議論を進めることと思ひます。けれどもかう言ふ議論の上の區別は只便宜を旨とした姑息の手段でありますから、事實は何處までも切り離すことの出來ない、言はば惡因緣にからまれたものと心得てゐなければなりません。

この形式と言ふ言葉もいろいろの意味に解釋されてゐます。現にわたし自身も前の章(言語と文字)に韻文と散文との差を論じた時、比較的聽覺的效果を重んずる形式とか、比較的聽覺的效果を重んじない形式とか、形式と言ふ言葉を用ひました。なほその外にも一般の人々は短歌の五七五七七や俳句の五七五の並べかたにも形式と言ふ言葉を用ひてゐます。しかしかう言ふ形式はいづれも狹い意味の形式であります。たとへば我々の炭火のことを只火と言ふのと變りはありません。炭火は正に火であります。が、勿論廣い意味の火は炭火の外にもランプの火だとか火事の火だとかを含んでゐます。廣い意味の形式も——內容に對する形式も廣い意味の火のやうに狹い意味の形式を超越した、あらゆる文藝に亙る形式であります。この廣い意味の形式に比べれば、狹い意味の形式は約束と言つても好いかも知れません。

わたしは以上どうにかかうにか「內容と形式」の問題を片づけました。この問題は手輕さうに見えても、甚だ厄介な問題であります。しかし兎に角わたし自身は一應わたしの信ずるやうに片づけたものと思ひますから、次にはもつと立ち入つて內容と言ふものを考へて見ませう。尤も內容論をはじめるとなると、自然と里見弴君の「小說內容論」と同じことを述べるやうになるかも知れません。或は又違つたことを述べるやうになるかも知れません。けれどもそれはどちらにもせよ「文藝講座」なるものの性質上、どうも致しかたのないことと諦らめて頂きたいと思ひます。

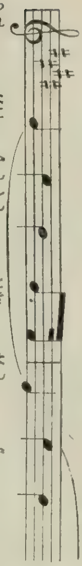
三　內容

わたしは前に內容とは言語の音と言語の意味との一つになつた「全體」だと言ひました。たとへば「足びきの山河の瀨の鳴るなべに弓月が嶽に雲立ち渡る」と言ふ一首の短歌の內容はこの一首の我々に與へる或感銘の全體であります。そこでこの內容を考へて見ると、これは大體下の二つに分けることも出來るのに違ひありません。――即ち第一は「足びきの山河の瀨の鳴るなべに弓月が嶽に雲立ち渡る」と言ふ或情景を認めることであり、第二はその又情景に或情緒を感ずることであります。かう言ふ分けかたの出來るのは勿論短歌ばかりではありません。俳句でも、小說でも、戲曲でも、あらゆる文藝上の作品はどれも皆通用を許す筈であります。たとへば近松門左衞

門の「大經師昔暦」を考へて見ても、おさん茂兵衛の悲劇的生涯を認めることとその又悲劇的生涯の悲哀を感ずることとの兩方面、――言はば認識的方面と情緒的方面とに分けることも出來るのに違ひありません。すると文藝的内容と言ふものはまづこの兩方面を具へる所に始まると言つても好い訣であります。尤もこの兩方面は事實上さほどはつきりとは分かれてゐないかも知れません。が、便宜上上のやうに二つに引き離して考へることも出來ぬことはないと思ふのであります。

わたしは前に「二等邊三角形の頂角の二等分線は底邊を二等分す」は文藝ではないと言ひました。これは全然我々の情緒に訴へる方面を缺いてゐるからであります。では或情景――には限りません。或事實でも何でもよろしい。兎に角認めると言ふ方面はどうかと言ふと、如何に情緒には訴へても、全然言語にならぬものはやはり文藝の埒外に退散しなければなりません。たとへば音とか色とかを待たずに傳へることの出來ぬ情緒は當然この埒外にある訣であります。尤も近代の文藝はフランスの象徴主義の運動以來、表現主義とかダダイズムとか言ふやうに在來の文藝の絶望してゐた情緒を捉へるのに成功しました。しかし何度も繰り返すやうに文藝は言語或は文字を表現の手段にする藝術であります。この制限を越えられぬ限り、やはり文藝の内容にならぬ情緒を認めずにはゐられません。たとへばカンディンスキイの「即興」と題する畫は只何の形ともつかぬ種々の色の集合であります。（之は圖でも入れれば好いのでありますが、「文藝講座」の經濟狀態は

到底さう言ふことを許しません。）ああ言ふ畫の與へる情緒は如何なるダダイズムの詩人にもせよ、到底言語を手段として表現することは出來ますまい。勿論御自身表現したと御吹聽になることは隨意でありますが、少くともわたしはその點に疑ひなきを得ないのは事實であります。いや、何もカンデインスキイなどを引き合ひに出すには當りません。たとへば「のんこう」の茶碗だとか、



だとかの與へる情緒は文藝の埒外にある筈であります。我々は何か感心した時に「何とも言はれぬ」と言ひたくなりませう。あれは我々ばかりではない、實は文藝そのものの歎聲を發してゐるのであります。

扨文藝的內容の認識的方面と情緒的方面を具へなければならぬことは上に述べた通りでありますが、文藝の種類の異るに從ひ、この兩方面もおのづから變化を生ぜぬ訣には行きません。まづ短歌、抒情詩（短歌も勿論抒情詩に加へられないことはありません。しかし此處に抒情詩と言ふのは短歌以外の抒情詩を指したのであります。）等は情緒的方面の勝つた文藝であります。同時に又音樂と言ふ純情緒的藝術に最も近い文藝であります。ヴエルレエンと言ふフランスの詩人は名高い「作詩術」と言ふ詩の中に「何よりも音樂を」と言ひました。これは勿論抒情詩なればこそ、始めて出來る註文であります。この註文に應ずることは短歌にさへ出來ないかも知れません。それから又小說、戲曲等は認識的方面の勝つた文藝であります。同時に又哲學と言ふ認識專門の學

問に最も近い文藝であります。ヴェルレエンを引き合ひに出した次手に、西洋人をもう一人立ち合はせると、イブセンと言ふノオルウェイの戯曲家は問題劇と言ふものさへ唱へ出しました。これも戯曲や小說なればこそ、始めて唱へることの出來るものであります。たとひ柿の木の人麿にもせよ、問題短歌などと言ふものは作ることの出來ないのに違ひありません。まづ精々出來た所が道歌位に了るだけであります。今小說、戯曲等を文藝の右に位するものと考へ、又短歌、抒情詩等を文藝の左に位するものと考へるならば、その他の種々の文藝はまづこの中間に燦然と並んでゐると言はなければなりません。それを一一例に擧げることは無用の手數と思ひますから御免を蒙ることにしますが、兎に角この中間に並んでゐるものの多種多樣であることは事實であります。成程文藝的內容と言ふものは上は「のんこう」の茶碗の與へる情緖の手前を境にし、下は「二等邊三角形の頂角の二等分線は底邊を二等分す」の與へる認識の手前を境にした、地面であるのに違ひありません。しかしそれだけの地面でも、其處に芽を出し花を開いた個々の作品の內容は掛値なしに千差萬別であります。昔の希臘人は詩の女神を九人のミユウズに限りましたが、——しかもその中には天文學の女神や歷史の女神も交つてゐますが、若し現代の我々も詩の女神を製造するとすれば、到底九人や十人ではない、俳句の女神、問題劇の女神、心理描寫の女神、象徵主義の女神、わたくし小說の女神、ダダイズムの女神——兎に角餘程大勢の女神を必要とするだ

らうと思ひます。

文藝の內容の複雜であることは上に述べた通りでありますが、これは文藝の一種類――たとへば小說を考へて見ても、やはり大體變りはありません。成程小說は戲曲などと共に文藝の極右黨、――卽ち認識方面の勝つたものでありませう。しかし又その中にも認識的要素の多い少ないに、――或は逆に說明すれば情緒的要素の濃い淡いに無數の差別がある譯であります。たとへば菊池寬君の小說などは非常に認識的要素が多い。「忠直卿行狀記」にしても、「恩讐の彼方に」にしても、哲學じみた所を持つてゐます。しかし佐藤春夫君の小說などはかう言ふ要素の乏しい代りに情緒的方面が裕かであります。「侘しすぎる」にしても、「お絹とその兄弟」にしても、殆ど只散文を用ひた抒情詩と言つても差支へありません。けれどもどちらが本ものでどちらが贋ものだと言ふことは出來ない。出來ると言ふ君子もあるかも知れませんが、わたしには出來るとは思はれません。どちらもちやんと存在する權利を持つてゐると心得ます。では又なぜ持つてゐるかと言へば、それも前に述べた通り、文藝は上は「のんこう」の茶碗の與へる情緒の手前を境にし、下は「二等邊三角形の頂角の二等分線は底邊を二等分す」の與へる認識の手前を境とした多種多樣の內容を抱擁することが出來るからであります。

この點をもう少し明らかにする爲には更に前に述べた文藝の定義、――定義と言ふのも大袈裟

でありますが、兎に角定義の如きものに戻つて見なければなりません。文藝は言語或は文字を表現の手段とする藝術であります。その又言語は第一に意味を、第二に音を持つてゐます。今音は少時措き、意味と言ふものを持つてゐる限り、言語は到底認識的要素を脱する譯に行きません。音樂の表現の手段とする音や繪畫の表現の手段とする色はこの要素なしにも成り立つて行きます。(尤も繪畫でも人とか馬とか或は又樹木とかを描けば、人を人と認め、馬を馬と認め、或は又樹木を樹木と認める以上、この要素のあるには違ひありません。)しかし言語は「山」と言へばその「山」と言ふものに如何なる情緒を感ずるにもせよ、兎に角「山」と言ふものを認めることにある筈であります。成程「おう」とか「ああ」と言ふ間投詞は情緒だけしか傳へないかも知れません。けれどもよし傳へないにもせよ、「おう」や「ああ」の間投詞ばかりでは發句一つ出來ない筈であります。「松島やああ松島や松島や」でも「これはこれはとばかり花の吉野山」でも「松島」や「花の吉野山」を必要としてゐます。(但しどちらも俗句でありますが。)かう言ふ言語を表現の手段にしてゐるのでありますから、文藝はどうしても認識的方面を捨ててしまふことは出來ません。いや、寧ろ文藝は如何なる他の藝術よりも認識的要素の多いことを特色としてゐるとも言はれる位であります。若し繪畫や音樂を金や銀にたとへるとすれば、文藝は鐵と言つてもよろしい。鐵は金や銀よりも堅いことを特色としてゐます。我々の祖先はこの特色を利用し、劍や矛を作り出しました。彼等

が文藝の特色を——認識的要素の多いことを利用し昔は敍事詩、今は小説を作り出したのもやはりこれと同じことであります。するとその又小説の中に認識的要素の多少により、多種多様の差別を生じたのも當然と言はなければなりません。鋼鐵と軟鐵とは違ふにもせよ、鐵たる點は同じであります。お前は柔いから鐵ではないと言はれては、軟鐵も定めし迷惑でありませう。苟くも鐵たる特色を具へてゐるからは、軟鐵も鋼鐵も同じやうに鐵として取り扱はなければなりません。文藝もどれを好むかと言ふことは勿論あなたがたの御勝手であります。が、どれでなければならぬと言ふのは、——たとへば抒情詩でなければ文藝でないとか、自然主義の小説でなければ文藝でないとか言ふのは考へものに違ひありません。況や更に狹い區別を文藝の上に劃するのは考へもの以上の考へものであります。

この又認識的方面と情緒的方面とは横に文藝に色をつけてゐるばかりではありません。竪にもやはり色をつけてゐます。——と言ふ意味は時代により、認識的要素が多くなつたり、情緒的要素が多くなつたり、それぞれ一時代の文藝に色をつけてゐると言ふ意味であります。十九世紀の前半に起つたロマン主義の文藝はこの情緒的要素の多かつた——寧ろ多過ぎた文藝でありませう。その反動として世紀末（世紀末とは大抵十九世紀末の意味であります。）に起つた自然主義の文藝に認識的要素の多かつたことは述べるまでもありません。前に引き合ひに出したノオルウェイの

イブセンとか、イギリスのショオと言ふ戯曲家とかはかう言ふ中でも大將株であります。現にショオなどは「イブセン主義の眞髓」と言ふ本の中に「戯曲の中に議論を入れるのは新時代の戯曲家の特色である」と言ひました。のみならず彼自身の戯曲の巻頭にも長い論文をくつつけました。それも彼の說によれば、「古來藝術家はその描かうとしたものを說明してはならぬと言はれてゐる。それは鷄の畫を描いて『これは鷄であります』と斷るのと同樣、莫迦げてゐると言はれてゐる。が、何も說明したから、莫迦げてゐると言ふ譯はない。アカデミイの展覧會へ行つて見れば、どの畫家もそれぞれ彼自身の畫に『山の風景』とか『少女の肖像』とか斷り書をつけてゐるぢやないか？」と言ふのであります。尤もこのショオの議論は畫に題をつけることの莫迦げてゐることは證明しても、戯曲に論文をつけることの辯護になるかどうかはわかりません。――しかしそれは餘事であります。なほこの各時代の文藝の變化は必しも認識的方面の多少――或は情緒的方面の濃淡ばかりから論ぜられる次第ではありません。その外にもいろいろの見かたがあり、その又いろいろの見かたを參酌しなければ、說明出來ぬ點の多いのも勿論であります。

　文藝に多種多樣の内容のあり得ることは、――言ひ換へれば多種多樣の文藝にそれぞれ存在の理由のあることは上に述べた通りであります。そこで次の問題へ移りますが、その前にちよつと話したいのは通俗小說と言ふ問題であります。ロマン主義の文藝も好い、自然主義の文藝も好い、

では通俗小説も好いかとお尋ねになるかたも――或はないかも知れません。が、假にあつたとして見てこの問題を考へて見ませう。通俗小説と言ふものは西洋にもあります。ベンネツトと言ふイギリスの小説家などは自作の通俗小説に「空想小説」と言ふ、體裁の好い名前をつけてゐますが、兎に角通俗小説に違ひありません。しかしこの通俗小説はどの位普通の小説と違つてゐるかと言ふと、――勿論新聞の畫入り小説を通俗小説ときめてしまへば、甚だ簡單に片づいてしまひます。けれども少し立ち入つて考へて見ると餘り判然とした區別はありません。理窟よりも手つ取り早い事實を考へて御覧なさい。フランスのユウゴオと言ふ小説家の書いた「レ・ミゼラアブル」と言ふ小説があります。あれを日本の新聞の畫入り小説にしたとすれば、通俗小説にならないでせうか？　ならないと言はれればそれまでであります。しかし黒岩涙香の「レ・ミゼラアブル」を譯述した「噫無情」と言ふ小説は一世の喝采を博しました。近頃久米正雄君の譯述した「レ・ミゼラアブル」即ち「此悲慘」も同じやうに歡迎を受けたやうであります。すると「レ・ミゼラアブル」は兎に角通俗小説としても成功すると言はなければなりません。この例に徴してもわかるやうに、通俗小説は普通の小説と餘り變つてはゐないのであります。若し普通の小説と幾分でも變つてゐる所があるとすれば、それは文藝か文藝でないかの問題よりも文藝的價値が多いか少いかの問題、――即ち質の問題よりも量の問題に違ひありません。その又量の問題にしても、通俗小

說として書かれたものは必ず文藝的價値に乏しいとも決定することは出來ぬやうであります。若し夫れ通俗と言ふならば、近松門左衛門の淨瑠璃や井原西鶴の浮世草紙もやはり十七世紀の通俗戯曲や通俗小說だつたと言はなければなりません。なほこの項の中にお伽噺やナンセンス・ライム(無意味詩)のことも述べるつもりでありましたが、「文藝講座」もそろそろ完結に近づきましたから、それは後の機會に讓り、次の結論へとりかゝりませう。

餘論

扨一通り內容論を終つて見ると、まだ述べたい――と言ふよりも述べることの出來る問題もないではありません。しかし「文藝講座」も終ることになりましたし、下手の長談義の誹りを受けるのも難有くありませんから、この邊で一まづ切り上げることにします。唯もう一回だけ何か述べる紙面のあるのを幸ひ、以上述べて來たところを實際上の問題に當て嵌めて見ませう。尤も以上述べて來た所と言つても、主として內容論を當て嵌めて見るのですが。

實際上の問題と言つても、何に當て嵌めたものか、選擇に迷ひますが、まづ技巧と言ふ問題をとつて見ませう。技巧と言ふことは文壇ではどうも評判が好くありません。しかしわたしの見る所によれば、あれは始めから技巧と言ふことに或惡い意味を伴はせてゐる、さうしてそれを惡い

とか怪しからんとか言つてゐるやうであります。たとへば甲野乙吉は惡人だ、あいつはいかんと言つてゐるのと大した違ひはありません。なぜ甲野乙吉は惡人だか、それを說明してくれるならば兎に角、曖昧模糊たるうちに惡人にしておいて、あいつはいかんと言はれては、甲野君も甚だ迷惑でありませう。技巧も——技巧は寃を訴へないから好いやうなものの、技巧に巧みであると言はれてゐる作家、——さしづめ里見弴君などは御迷惑であらうと心得ます。では技巧とは何であるかと言へば、小手先の仕事とか或は後からくつついたものとか、豫め惡い意味を伴はせない限り、或内容を表現する手練と考へる外はありません。内容は前にも述べた通り、一篇に漂つてゐる思想でもなければ一篇に通つてゐる話の筋でもない、それ等を包んでゐる全體であります。その又全體なるものと形式と不卽不離であることは改めて述べるのを待たないでありませう。技巧とは或内容を表現する手練——卽ちこの形式を與へる手練でありますから、これを等閑に附することは考へものと言はなければなりません。何でもトルストイは誰かがプウシュキンの短篇を讀むのを聞きながら、「さうだ。短篇はさう言ふ風に冒頭から讀者をつりこまなければならぬ」と、——唯今旅先にゐる爲に參考書を持つてゐませんが、少くともそれに近いことを言つたさうであります。かう言ふ呼吸とか「コツ」とか言ふものが卽ち技巧でありますから、これは巧ければ巧いほどよろしい。現にわたしの信ずる所によれば、「アンナ・カレニナ」の第一章などは（勿論「アン

ナ・カレニナ」は長篇でありますが。）上に擧げたトルストイの言葉を如實に示してゐるものであります。

今度は技巧に緣の遠い、或文藝上の作品の持つてゐる思想と言ふ問題をとつて見ませう。これも文壇ではややもすると、見當違ひな非難を受け兼ねません。たとへば或作品が「人の性は善なり」と言ふ思想を持つてゐると、あんな思想は孟子にもある、あの作品はつまらんと言ふ非難を受ける類であります。しかし或作品の持つてゐる或思想の哲學的價値は必しもその作品の文藝的價値と同じものではありません。唯或作品の持つてゐる或思想の哲學的價値と言ふことばかり考へれば、恐らくはゲエテもシエクスピイアも餘程光彩を減ずるでありませう。現にショオなどはシエクスピイアの思想を一笑に附してゐるやうであります。が、幸ひにもその爲に詩人シエクスピイアまでも一笑に附してはゐないやうであります。わたしは前に內容には認識的要素と情緒的要素との二つのあることを述べました。或作品の持つてゐる思想とはつまりこの認識的要素の進化したものでありますから、その思想の哲學的價値はやはりあらゆる認識的要素と同じやうにその作品の文藝的價値を支配するものと言はなければなりません。しかし或作品の認識的要素はたとひどんなに平凡でも、その作品の文藝的價値まで平凡になるかどうかは疑問であります。たとへば近松門左衞門の「鎗の權三」と言ふ淨瑠璃の中に「笹野權三は好い男、油壺から出たよな男、

しんとんとろりと見とれる男」とか何とか言ふ文句がありませう。あの文句の認識的要素は――と言ふのも莫迦々々しい位でありますが、兎に角あの文句の認識的要素はまことにつまらない、唯「笹野權三君は好い男である」と言ふだけであります。けれども誰も「好い男がどうしたんだ? 平凡なことを言つてゐる」と罵倒するものはありません。或作品の持つてゐる思想と言ふ問題もこれと五十歩百歩であります。勿論或作品の中に前人未發の思想を持つてゐれば、その作品は一世を震駭するでありませう。しかし文藝上の問題になるのはどう言ふ思想を持つてゐるかと言ふよりも如何にその思想を表現してゐるかと言ふこと、――即ち文藝的全體としてどう言ふ感銘を生ずるかと言ふことであります。たとへばイブセンの「人形の家」を御覧なさい。「人形の家」は前世紀の末にはその戯曲的完成の外にもその思想の新らしかつた爲に世界の人目を聳動しました。それからだんだんその思想が新しさを失ふやうになると、前には過度に褒められた反動として今度は又過度に貶されたやうであります。少くとも日本の文壇ではかう言ふ傾きがあつたのに違ひありません。しかしあのノラの悲劇の中に生命の火の燃えてゐる以上、「人形の家」の文藝的價値はおのづから世界の文藝の天に一星座を占めることになるでありませう。いや、既に占めてゐるかも知れません。或作品が古典になるとか或は古典的價値を得るとか言ふのはつまりこの一星座を占めること、――その作品の文藝的價値だけが正當に認められると言ふことであります。

次手に又昨日流行した、同時に又明日も流行するかも知れないプロレタリアの文藝と言ふものに前に述べた所を當て嵌めて見ませう。尤もプロレタリアの文藝とは何かと言ふことはいろいろ議論の餘地もあるのに違ひありません。しかしここでは便宜上、通俗に所謂プロレタリアの文藝、――プロレツト・カルトの思想を持つてゐる文藝とでも考へて見れば、やはりその思想のあると言ふだけでは經濟學上の問題は兎も角も、文藝上の問題にはなり兼ねる筈であります。又實際それだけでは古往今來どこの國でも文藝上の問題にしたものはない、萬一あるとすれば日本だけでありませう。それをプロレツト・カルトの思想がないから、あの作品はつまらんと言ふのは勿論見當違ひも甚しいものであります。のみならず文藝上の內容は上は「のんこう」の茶碗の與へる情緒の手前を境にし、下は「二等邊三角形の頂角の二等分線は底邊を二等分す」の與へる認識の手前を境にした、廣い地面でありますから、その中にはプロレツト・カルトの思想どころではない、思想と名のついたものは盛ることの出來ぬ文藝もあるのに違ひありません。たとへば抒情詩などと言ふものはその一つであります。あらゆる天下の抒情詩人は勞農政府の赤旗のもとにも、やはりアクロポリスの丘の上をソクラテスの步いてゐた時と大差のない歎きを歌ふでありませう。それで少しも差支へない、抒情詩と言ふものの性質上、さうなければならぬ筈であります。その抒情詩にもプロレツト・カルトの思想を要求するのは蝶にビフテキを平げろと註文するのと變りは

ありません。これは自明の道理のやうでありますが、昨日プロレタリアの文藝の流行した時はプロレタリアの俳句などと言ふものさへ出しました。つまりみづからビフテキを食ふと號する蝶の如きものも出たのであります。

かう言ふ風に實際上の問題に當て嵌めて行けば、まだいろいろ駄辯を振へる筈でありますが、あとはあなたがた御自身の適用されるのに任かせたいと思ひます。なほ本論に述べ殘したことは又この「文藝講座」の新たになる時にでも述べる機會を待つことにしませう。ではわたしの「文藝一般論」なるものはこれで完結を告げることにします。

（大正十四年）

文藝鑑賞

一

文藝上の作品を鑑賞する爲には文藝的素質がなければなりません。文藝的素質のない人は如何なる傑作に親んでも、如何なる良師に從つても、やはり常に鑑賞上の盲人に了る外はないのであります。文藝と美術との相違はありますが、書畫骨董を愛する富豪などにかう云ふ例の多いことは誰でも知つてゐる事實でありませう。しかし文藝的素質の有無と云ふことも程度によりけりでありますから、テエブルや椅子の有無のやうに判然ときめる譯には行かないのであります　たとへばわたし自身などはゲエテとかシエクスピイアと云ふ文豪なるものに比べれば、文藝的素質はないと言つてもよろしい。或はもつと下らぬ作家に比べても、ないに等しいかも知れません。けれども野田大塊先生あたりに比べれば、文藝的素質――少くとも俳諧的素質は大いにある。これはあなたがたでも同じことであります。すると文藝に興味のある人はまづ文藝的素質もあるものと己惚れてかかつても差支へありません。少くとも己惚れてかかつた方が幸福であることは確か

であります。

では文藝的素質さへあれば、文藝上の作品を鑑賞することも容易に出來るものかと言ふと、これはさうは行きません。やはり創作と同じやうに、鑑賞の上にもそれ相當の訓練を受けることが必要であります。尤もダンヌンツィオは十五の時に詩集を出したとか、池大雅は五つの時に書を善くしたとか言ふやうに、古來の英靈漢は創作の上にさへ、天成の才能を發揮してゐます。が、これは天才と稱する怪物のことでありますから、我々凡人は氣にかけずともよろしい。のみならず彼等の早熟は訓練を受けなかつたと言ふよりも、驚く可く短い時間の中に驚く可く深い訓練を受けたと言ふ方が妥當であります。すると我々凡人はいやが上にも訓練を受ける覺悟をしたければなりません。いや、我々凡人ばかりではない、如何なる天才も天才以上になる大望を持つてゐれば、當然訓練を受けた上にも更に又訓練を重ねる筈であります。又實際天才の傳記——たとへば森鷗外先生の「ギョオテ傳」（言ふまでもないことと思ひますが、森先生は所謂ゲエテを常にギヨオテと書かれたのであります。）を讀んで御覽なさい。天才とは殆ど如何なる時にも訓練を受ける機會を逃さぬ才能と言ふことも出來るほどであります。

では又かう云ふ訓練を受けた結果、鑑賞の程度が深くなる、或は鑑賞の範圍が廣くなることはどう云ふ役に立つかと言ふと、勿論深くなり廣くなること自身が人生を豐富にすることは事實で

あります。人生は生命を錢の代りに拂ふ珈琲店と同じでありますから、いろいろのものが味はへれば、それに越した幸福はありません。が、鑑賞の程度が深くなつたり、鑑賞の範圍が廣くなつたりすることは更に又創作上にも少からぬ利益を與へる筈であります。元來藝術と云ふものは――いや、これは議論よりも實例を擧げた方が早いかも知れません。實例と云ふのはロダンの話であります。ロダンはフロレンスへ行つた時にミケルアンヂェロの彫刻を見ました。それも只の彫刻ではない、在來未完成と稱へられてゐる晩年の彫刻を見たのであります。尤も未完成の作品と稱へられてゐるのは何もミケルアンヂェロ自身の證明のある次第ではありません。只大理石の塊の中に模糊たる人間の姿が浮かんでゐる、まあざつと形容すれば、天地開闢の昔以來、大理石の塊の中に眠つてゐた、何とも得體の知れぬ人間がやつと目をさましたと言ふ代物であります。ロダンはかう言ふ彫刻を見た時に、未完成の――と言ふよりも寧ろ茫漠とした無限の美に打たれました。それからあの大理石の塊へ半ば人間を彫刻した作品、――たとへば「詩人とミユウズ」などを作り出すやうになつたのであります。するとロダンの成長の一歩はミケルアンヂェロの所謂未完成の作品に接したことに懸つてゐる、けれどもかう言ふ作品を見たものは勿論ロダン一人ではない。古往今來無數の男女はかう言ふ作品を陳列したフロレンスの博物館へ出入してゐる。が、誰もロダンのやうに大いなる美を認めなかつた。して見ればロダンの成長の一歩はこの美を鑑賞

したことに懸つてゐる、——と言ふことに歸着しなければなりません。これは如何なる藝術家の上にも當然當嵌る眞理であります。成程鑑賞出來る美は必しも創作出來ないでありませう。けれども亦鑑賞出來ない美は到底創作も出來ません。この故に古來の英靈漢は鑑賞上の訓練を受けた上にも更に又訓練を重ねようとしました。それも文藝上の作品の鑑賞ばかりではない、屢美術とか音樂とかにも鑑賞上の訓練を加へた上、その機敏に捉へ得た所を文藝上の創作に活用しました。殊にゲエテの一生はかう言ふ藝術的多慾それ自身であります。尤も鑑賞の程度が深くなる、或は鑑賞の範圍が廣くなる結果、創作上の利益も多いなどと言ふことは多言を用ひずとも好いのかも知れません。が、創作に志のある、——少くとも志のあると稱する青年諸君の勉强ぶりを見ると、原稿用紙と親密にする割にどうも本とは親密にしません。それではミケルアンヂェロの所謂未完成の作品を見逃してしまふ所ではない、第一フロレンスの博物館の前を素通りしてしまふのも同前であります。わたしは日頃からかう云ふ傾向を頗る遺憾に思つてゐますから、冗漫の嫌ひはありますが、次手を以て創作するのにも鑑賞上の訓練の重大である所以を辯じました。

扨鑑賞上の訓練の必要であることは、——わたくしに都合の好いやうに解釋すれば、この鑑賞講座なるものの必要であることは上に述べましたが、今この鑑賞上の訓練を助ける爲に多少の言葉を費すとすると、それはざつと下に擧げる三點になるかと思ひます。卽ちその三點と言ふの

は(一)どう言ふ風に鑑賞すれば好いか？　(二)どう言ふものを鑑賞すれば好いか？　(三)どう言ふ鑑賞上の議論を參考すれば好いか？――と言ふことになるのであります。或は鑑賞上の訓練を助ける言葉は必しも上の三點に盡きてゐないかも知れません。けれどもまづ上の三點は比較的重大の問題を盡してゐると言つても好いかと思ひます。そこで愈どう云ふ風に鑑賞すれば好いか？　と言ふ最初の問題にはいりますが、その前にちよつと注意して置きたいのは鑑賞の始まる境であります。盲人は繪畫の鑑賞に與らなければ、聾者も音樂の鑑賞には與りません。同樣に又文藝の鑑賞もまづ文字を讀んでその意味を理解する所から始まるのであります。萬一文藝の鑑賞に志しながら、文字の讀めない人があるとすれば、早速文字を稽古おしなさい。――と言ふと常談のやうに聞えますが、この常談のやうに聞えることさへ、誰でも心得てゐると言ふ訣には行かないのであります。その證據には歌人などに萬葉時代の言葉を使つて歌を作る人があると、耳遠い古語を使ふのは怪しからぬと言ふ非難を生じます。が、古語に通じないのは歌人の知つたことではありません。歌人は古語でも新語でも好い、只歌人自身の生命を托し得る言葉を使ふのであります。或はその言葉を使ふより外に、表現したいと思ふ情緒の表現出來ぬ言葉を使ふのであります。もし古語に耳遠い人があれば、その人は歌人を非難する爲に、略解を讀むなり古義を讀むなり、御自身まづ古語の稽古を積んでかからなければなりません。それを歌人ばかり責めるのは不合理以上

に滑稽であります。かう言ふ滑稽も許されるとすれば、勿論英語の讀めない人は「なぜ英語のハムレットを書いた?」とシエクスピイアを責めるのに違ひありません。が、シエクスピイアの英語は誰も責めない。只歌人の古語ばかりを責める。――これは明らかに文藝の鑑賞はまづ文字を讀んでその意味を理解する所から始まると言ふ原則を無視してゐる實例であります。して見れば如何に當り前のやうに聞えても、やはり本題へはいる前に十分この原則だけは心得てかからなければなりません。

なほ次手に斷つて置きますが、この「文字を讀んでその意味を理解する」と言ふ意味は官報を讀んで理解するのと同じやうに理解するのではありません。わたくしはこの議論の冒頭に文藝的素質のない人は如何なる傑作に親んでも、如何なる良師に從つても、鑑賞上の盲人に了る外はないと言ひました。その「鑑賞上の盲人」とは赤人人麻呂の長歌を讀むこと、銀行や會社の定款を讀むのと選ぶ所のない人のことであります。わたしの「理解する」と言ふ意味は單に櫻を一種の花木と理解することを言ふのではない。一種の花木と理解すると同時におのづから或感じを生ずる、――――哲學じみた言葉を使へば、認識的に理解すると共に情緒的にも理解することを言ふのであります。

尤もその感じは好感でも好ければ、惡感でも差支へはありません。兎に角或情緒だけは作つて

來なければならぬのであります。もし文藝の鑑賞に志しながら、一種の花木と言ふより外に櫻を理解出來ない人があるとすれば、その人は甚だお氣の毒ですが、まづ文藝の鑑賞には緣のないものとおあきらめなさい。これは文字の讀めないのよりも、稽古する餘地のないだけに一層致命的な弱點であります。その證據には御覽なさい。より文字の讀める文科大學教授は時々——と言ふよりも寧ろ屢々、より文字の讀めない大學生よりも鑑賞上には明めくらであります。

二

文藝上の作品をどう言ふ風に鑑賞すれば好いかと言ふことは勿論大問題でありますが、まづわたしの主張したいのは素直に作品に面することであります。これはかう言ふ作品とか、あれはああ言ふ作品とか言ふ心構へをしないことであります。況や片々たる批評家の言葉などを顧慮してかかつてはいけません。片々たらざる批評家の言葉も顧慮せずにすめばしない方がよろしい。兎に角作品の與へるものをまともに受け入れることが必要であります。尤も「ではその作品は讀まないにもせよ、既に二三の作品を讀んだ作家の作品はどうするか？」と言ふ質問も出るかも知れません。それもやはり同じことであります。同一の作家にした所が、前のと全然異つた作品を書かないものとは限りません。現にストリントベリイなどは自然主義時代とその以後とに可成かけ

離れた作品を書いてゐます。たとへば「伯爵令嬢ユリエ」と「ダマスクスへ」とを比べて御覧なさい。殘酷な前者の現實主義は夢幻的な後者の象徴主義と著しい相違を示してゐます。それをどちらかの作品から推した心構へを以て臨めば、どうしても失望——しないにもせよ、兎に角多少は鑑賞上に狂ひを生じ易いのであります。しかし勿論絶對に何等の心構へもしないと言ふことは人間業には及びません。必ずどの作品にも或は作家の人となりから、或は作家の流派から、或は又裝幀だの插畫だのから、幾分かの暗示を受けてゐます。が、わたしの主張するのはそれをも排斥しろと言ふのではない、只それを出來るだけ少くしたいと言ふのであります。これは文藝の話ではない、畫の話でありますが、あの、サロメの插畫を描いたビイアズレエと言ふ青年が或時或人々に何枚かの作品を示しました。するとその人々の中にゐたのはこれも名高い「カアライルの肖像」などを描いたホイツスラアであります。ホイツスラアはビイアズレエの作品に餘り好意を持たずにゐましたから、その時も始は冷然として取り合ふ氣色を見せずにゐました。が、一枚一枚見て行くうちに、だんだん感心し出したと見え、とうとう「美しい。非常に美しい」と言ひ出しました。それを聞いたビイアズレエは餘程この先輩の賞讃が嬉しかつたと見え、思はず兩手を顏に當てゝ泣き出してしまつたさうであります。ビイアズレエの作品は幸ひにもホイツスラアの持つてゐた心構へを打ち碎きました。けれども萬一ホイツスラアが頑固に心構へを捨てなかつたとすれば——

―それは獨りビイアズレエの爲に不幸であるばかりではありません、ホイツスラアの爲にも不幸であります。わたしはこの逸話を讀んだ時に、さぞその時のビイアズレエは嬉しかつたらうと思ひました。同時に又その時のホイツスラアもやはり嬉しかつたらうと思ひました。わたしの心構へをするなと言ふのも他意のある訣ではありません。片々たる批評家の言葉の爲にも、何かと心構へを生じ易い結果、存外一かどの作品も看過されることが多いからであります。

しかし素直に面して見ても、世界的に名高い作品さへ何の感銘も與へないことは必しもないとは限りません。かう言ふ時はどうするかと言へば、何も無理には感心したがらずに、そのまゝ少時は讀まずにお置きなさい。實際如何なる傑作でも讀者の年齢とか、境遇とか、或は又教養とか、種々の制限を受けることは當り前の話でありますから、誰にも容易に理解出來ないのは少しも不思議ではありません。それは自慢は出來ないにもせよ、少くとも自己を欺いて感心した風を裝ふよりも恥かしいことではない筈であります。けれども前に讀んだ時に理解出來なかつた作品も成る可くは讀み返して御覽なさい。その内には目のさめたやうに豁然と悟入も出來るものであります。古來禪宗の坊さんは「啐啄の機」とか言ふことを言ひます。これは大悟を雛に譬へ、一羽の雛の生まれる爲には卵の中の雛の啄と卵の外の親鳥の啄と同時に殼を破らなければならぬと言ふことを教へたものであります。文藝上の作品を理解するのもやはりこれと變りはありません。讀者

自身の心境さへ進めば、鑑賞上の難關も破竹のやうに拔けるものであります。ではその心境を養ふにはどう言ふ道を採るかと言へば、半ばは後に出て來る問題、——即ちどう言ふものを鑑賞すれば好いか？　並びにどう言ふ鑑賞上の議論を參考すれば好いか？　と言ふ問題にはひりますが、半ばは又人間的修業であります。或はもつと通俗的に言へば、一かどの人間になることであります。文學青年ではいけません。當世才子ではいけません。自稱天才ではなほいけません。一通りは人情の機微を知つたほんたうの大人になることであります。と言ふと「それは大事業だ」とひやかす讀者もあるかも知れません。が、鑑賞は御意の通り、正に一生の大事業であります。

素直に作品に面すると言ふのはその作品を前にした心全體の保ちかたであります。が、心の動かしかたから言へば、今度は出來るだけ丹念に目を配つて行かなければなりません。もし小說だつたとすれば、筋の發展のしかたとか人物の描寫のしかたとかは勿論、一行の文字の使ひかたにも注意して行かなければなりません。これは創作に志す青年諸君には殊に必要かと思ひます。古來の名作と言はれる作品を細心に讀んで御覽なさい。一篇の感銘を釀し出す源は到る所に潛んでゐます。名高いトルストイの「戰爭と平和」は古今に絕した長篇であります。しかしあの恐しい感銘は見事な細部の描寫を待たずに生じて來るものではありません。たとへばラストオヴア伯爵家の獨逸人の家庭教師を御覽なさい。（第一卷第十八章）この獨逸人の家庭教師は主要な人物でない

會を描いた數行の中に彼の性格を躍動させてゐます。しかしトルストイは伯爵家の晩餐所か、寧ろ顏を出さずとも差支へないほどの端役であります。

「獨逸人の家庭教師は食物だのデザアトだの(食事の後に出る菓子や果物)酒だのの種類を殘らず覺えようと努力した。それは後にこまごまと故郷の家族に書いてやる爲だつた。だから家來がナプキンに包んだ酒の瓶を携へたまゝ、時々素通りをしたりすると、大いに憤慨して顏をしかめたが、なる可くそんな酒などは入るものかと言ふ風を見せるやうにした。彼の酒を欲しがるのは格別渇いてゐる爲でもなければ、根性のさもしい爲でもない。只頗る品の好い好奇心を持つてゐる爲である。しかしそれは不幸にも誰一人認めてくれるものはない。――彼はかう思ふと口惜しかつた。」

飜譯は甚だ拙劣でありますが、大意は傳へられることと思ひます。前にもちよつと述べた通り、から言ふ細部の美しさなしには「戰爭と平和」十七卷の感銘、――あの手固い壯大の感銘を生み出すことは出來ません。――と言ふのは創作の上でありますが、これを鑑賞の上へ移すと、かう言ふ細部の美しさをも鑑賞することが出來なければ、あの手堅い壯大の感銘は到底はつきりとは捉へられません。只何か漠然とした感銘を受けるのに了るだけであります。この丹念に目を配ることは一篇の大局を忘れない以上、微細に亙れば亙るほどよろしい。露西亞に生まれなかつた我々

は到底トルストイの文章の末までも目を通すことは出來ません。それはやむを得ない運命でありますが、苟くも外國人にも窺はれる所は悉く看破するだけの氣組みを持たなければなりません。

支那人は古來「一字の師」と言ふことを言ひます。詩は一字の妥當を缺いても、神韻を傳へることは出來ませんから、その一字を安からしめる人を「一字の師」と稱するのであります。たとへば唐の任翻と言ふ詩人が天台山の巾子峯に遊んだ時、寺の壁に一詩を題しました。その詩は、便宜上假名まじりにすると、「絶頂の新秋、夜涼を生ず。鶴は松露を翻して衣裳に滴る。前峯の月は照す、一江の水。僧は翠微に在つて竹房を開く。」と言ふのであります。が、天台山を去つて數十里――と言つても六町一里位でありませうが、兎に角數十里來るうちに、ふと任翻は「一江の水」よりも「半江の水」と言つた方が適切だつたことに氣づきました。そこでもう一度御苦勞にも巾子峯へ引き返して見ると、誰かもう壁に書いた「一江の水」を「半江の水」と書き改めてしまつた後でありました。先手を打たれた任翻はこの改作を眺めながら、しみじみ「台州(天台山のある土地の名)人有り」と長嘆したと言ふことであります。既に一篇の詩の生死は一字に關してゐるとすれば、「一字の師」は同時に又「一篇の師」にならなければなりません。これを鑑賞の上へ移すと、一字を知るものは一篇を知るもの、――或は一篇を知る爲には一字を知らなければならぬと言ひ換へられる筈であります。今如何に一行の文章も等閑視し難いかを示す爲に夏目先生を例に引いて見ませ

う。

「木戸を開けて表へ出ると、大きな馬の足迹の中に雨が一杯たまつてゐた。」（「永日小品」の「蛇」）

「風が高い建物に當たつて、思ふ如く眞直に抜けられないので、急に稻妻に折れて、頭の上から斜に鋪石迄吹き卸ろして來る。自分は歩きながら、被つてゐた山高帽を右の手で抑へた。」（「永日小品」の「暖かい夢」）

これはいづれも數語の中に一事件の起る背景を描いた辣腕を示してゐるものであります。前者の馬の足跡に雨中の田舍道を浮かび出させてゐますし、後者は又稻妻形の風に大都市の往來を浮かび出させてゐます。かう言ふ例に富んでゐるのは勿論夏目先生に限りません。古來名作と稱へられるものはいづれもこの妙所を具へてゐます。この妙所を捉へぬ限り、鑑賞上の十全を期することは——殊に創作上の利益を得ることは不可能と言つても好い位であります。

尤も前にも述べた通り、細部に心を配ると言つても、それは只全篇の大意を見のがさない上の話であります。若し細部に注意するのを「心の動かしかた」と稱へるならば、この全篇の大意を捉へるのは「心の抑へかた」と言つても好いかと思ひます。或は又前者は「どう書いたか？」の問題、後者は「何を書いたか？」の問題と區別出來ないこともありません。次にはこの「何を書いたか？」の問題へ話を進めませう。

三

前回に「何を書いたか？」の問題へ話を進めると言ひましたが、「文藝講座」もそろ〳〵完結に近づいた爲にこの問題を論ずることは他日に讓る外はありません。尤もこれは前回にも旣にちよつと話してゐますし、又わたしの「文藝一般論」の「內容」の條にも通ずることでありますから、必しも論ずるのを待ちますまい。唯手輕に實際上の用意だけに言及すれば、「何を書いたか？」を捉へる爲には種々の教養も必要でありますが、何よりも心得なければならぬことはその作品の中の事件なり或は又人物なりを讀者自身の身の上に移して見ること、――即ち體驗に徵して見ることであります。これは小說や戲曲の鑑賞は勿論、抒情詩などの鑑賞にも多少の役に立つでせう。アナトオル・フランスの言葉の中に「わたしはわたし自身のことを書いてゐる。讀者はそれを讀む際に讀者自身のことを考へられたい」とか言つてゐるのがありました。これは確かに好忠告であります。たとへばイブセンは「人形の家」の中に何を書いたかを知らうと思へば、あなたがたの夫婦生活を、――或はあなたがたの兩親の夫婦生活を考へて御覽なさい。あなたがたは容易にノラの悲劇を捉へることが出來るのに違ひありません。或は現在あなたがたの向う三軒兩隣にノラの悲劇の起つてゐることも發見出來る筈であります。我々は文藝上の作品を鑑賞する爲にも畢竟我々

自身の上に立ち戻つて來なければなりません。實際又我々の鑑賞力なるものもその身もとを洗つて見れば、文藝的素質を豫想した上の我々の大小に比例するのであります。文學青年ではいけません。當世才子ではいけません。自稱天才では、――わたしは又いつの間にか前回の言葉を繰返してゐました。

では何を鑑賞すれば好いか？　わたしは古來の傑作を鑑賞するのに限ると思ひます。これは骨董屋の話でありますが、眞贋の見わけに熟する爲には「ほんもの」ばかり見なければならぬ、たとひ參考の爲などと言つても、「にせもの」に目をなじませると、却つて誤り易いと言ふことであります。文藝上の作品を鑑賞するのもやはりこの理窟に變りはありません。傑作ばかりに接してゐれば、他の作品に接した時にも長短を知ることは容易であります。が、惡作ばかりに接してゐれば、勢ひ他の作品の長短にも無神經になることを免れません。これは日常の經驗に徵しても、直にわかることでありませう。糞尿の惡臭を不快としないものに薔薇の芳香のわからぬのは當然すぎるほど當然であります。すると新聞や雜誌に載る文藝上の作品しか讀まないのなどは最も鑑賞力を養ふのに損であると言はなければなりません。なほ又かう言ふ用心は鑑賞力を養ふ外にも、創作的氣魄を高める上に役立ちはしないかと思ひます。元の四大家の一人と呼ばれる倪瓚などと言ふ先生は竹や梧桐の茂つた中に清閟閣と言ふ閣を造り、常に古人の名詩畫に親んでゐたと言ふ

ことであります。勿論閣を造るのは誰でも銀行の通ひ帳と相談の上でありますが、兎に角古來の傑作にだけは是非とも親しまなければいけません。

しかし古來の傑作と言つても、一概に古代の傑作ばかり讀めと言ふ次第ではありません。一番利益の多いと共に一番又取つき易いのは新らしい文藝の古典でせう。西洋の小説を例にすれば、――西洋の小説と言つてもいろ〳〵ありますが、まづ近代の日本に最も大きい影響を與へたロシアの小説を例にすれば、兎に角トルストイ、ドストエフスキイ、トゥルゲネフ、チェホフなどをお讀みなさい。無暗に新らしいものに手をつけるのはジヤアナリストと三越呉服店とに任かせて置けば澤山であります。それよりも偉大なる前人の苦心の痕をお味ひなさい。時代遲れになることなどは心配する必要はありません。片々たる新作品こそ却つて忽ち時代遲れになります。又畫の話を持つて來ますが、つい近頃まで生きてゐた印象派の大家のルノアルは「我々は何も新らしいことをしようとしたのではない。唯古大家の跡を踏んだだけだ。それを新らしいことのやうに言ひ囃したのは世間だけに過ぎぬ」と言ひました。單に鑑賞に止まらず、創作に志す青年諸君は一層この心がけを持つて貰ひたいと思ひます。若し諸君の萬葉集を讀み、或は芭蕉を讀むのを見て、時代遲れと笑ふものがあれば、芥川龍之介はかう言つたと、――位のことには何ひとつ驚かないかも知れません、それならばルノアルはかう言つたと一撃を加へておやりなさい。その爲に

も甚た便利だと思ひ、ルノアルを立ち合はせた次第であります。

ではどう言ふ鑑賞上の議論を參照すれば好いか？　これもわたしの所信によれば、批評家よりも寧ろ作家の書いた文藝上の議論が有益であります。と言つても決してわたし自身の「鑑賞講座」の廣告などをしてゐる次第ではありません。唯作家の書いたものは何處か作家でなければわからぬ微妙の言が多いからであります。或は又作家の苦心談でもよろしい。かう言ふ議論も昔のものは取りつき悪いと言ふのならば、やはり新らしい文藝の古典的作家の議論でも啓發を受けることは多いでせう。若し夫れ歌の上ならば、正岡子規の「歌人に與ふる書」や齋藤茂吉氏の「童馬漫語」や島木赤彦氏の「歌道小見」を御覧なさい。これ等は歌の上ばかりに限らず、一般文藝の鑑賞の上にも恐らくは無益ではないでありませう。それから又文藝以外の藝術に關する、一かどの作家の筆に成つた藝術上の議論或は苦心談も存外莫迦にはなりません。これも古いものに辟易するならば、ロダン、セザンヌ、ルノアルなどの語錄や何かを御覧なさい。今下に掲げるのは清朝の畫家沈芥舟の筆に成つた「芥舟學畫篇」の數節であります。この本は在來南畫家などの間に廣く讀まれたものでありますが、それでもなほ當世に通用しない訣ではありません。いや、寧ろ當世にも痛切な言が多いやうであります。

「華の用を巧と爲す。巧にして纖なるときは則ち日に大方に遠し。巧にして奇なれば必ず正格を

輕視す。大方を無みして正格を非とすれば、其の美麗を極むと雖も、以て衆を驚かし俗を駭かすに足れども、實は即ち米老（米芾）の所謂但之を酒肆に懸くべしといふものにして、豈是士大夫の性情を陶寫する事ならんや。」

「若し直にして致なく、板にして靈ならずんば、又是病なり。故に質を存せんと欲する者は先づ須らく理徑明透して識量宏遠なるべし。之に加ふるに學力を以てし、之に參するに見聞を以てせば、自然に意趣は古に近くして、波瀾老成ならん。」

「若し夫れ通八才子の情を寄せ興を託する、雅趣餘りあらざるに非ざるも、而も必ず其の規矩に出入し、動きて輙ち合ふ能はざる、是を雅にして未だ正しからずと謂ふ。師門の授受の如きに至りては、膠固より已に深し。旣に自ら是として人非とし、復見ること少にして怪しむこと多ければ、之を非とせんと欲するも未だ嘗て繩尺に乖かず。之を是とせんと欲するも、未だ尋常に越ゆるを見ず。是を正にして雅ならずと謂ふ。夫れ雅にして未だ正ならざるは猶可なるも若し正にして未だ雅ならざるは、其の俗を去ること幾何ぞや。」

元來「鑑賞講座」などと言ふものはいくらでも話す事はあるものであります。しかし最初に擧げた三問題だけは兎に角話してしまひましたから、これでひとまづ打ち切ることにします。何だか愈〻打ち切るとなると、丁度碌に體も拭かずに湯を上つた時のやうな、物足りなさに似たものも

ありますが、それは「文藝講座」の都合上やむを得ないことと思はなければなりません。その邊はどうか大目に見て下さい。

（大正十四年）

講演

ロビン・ホッド

私の演題は茲にロビン・ホッドと書いてありますけれども、實は是は私の演題ではないのであります。私は初め此講演を御引受けする時に、演題は英吉利の泥棒としたのであります。所が此講演會のプログラムを英國の皇太子殿下の御手許に差上げることになるかも知れない。其時に英吉利の泥棒であつては甚だ不當であるから取變へろと云ふ命令を受けました。併し差當りお話申さうとする事は、やはり英吉利の泥棒の外にないのであります。のみならず今度英國の皇太子殿下がお出でになると、斯う云ふ講演會が方々に澤山開かれるだらうと思ふ。さうすると英吉利の文學とか、英吉利の國民性とか、英吉利の色々な事柄の講演が方々にて行はれるだらうと思ひます。併しながら色々さう云ふ講演がありましても、恐らく何處にも英吉利の泥棒に關する講演はないだらうと思ひますから、旁々私の演題は卽ち英吉利の泥棒、英吉利の、上品に言へば盜賊ですな、其講演をすることが適當だと確信した次第であります。併しながらそれは私の此英吉利の

泥棒と云ふ演題を選んだ理由の全部ではないのであります。まだ第二の理由がありますが、それは講演をして居る間に自ら明になるだらうと思ひます。又あと大勢あるので時間がないので成るべく手短にやれと云ふ御命令でありますから、途中少し飛ばして駈足でやりますが、併しプロフエッサ・スペイトが十分間喋べると云つて出られても十分より少し長く喋べられたやうでありますから、私も少し長くなるかも知れませぬ。唯今申上げました通りロビン・ホッドと云ふものは私の演題ではないのでありますけれども、苟も英吉利の盗賊を談ずる以上ロビン・ホッドを以て始めざるを得ないのであります。ロビン・ホッドと云ふのは何かと申すと、昔英吉利に居りました名高い泥棒です。スコットのアイヴアンホオとか、是は少々怪しいのでありますが、調べる時間がない爲に調べて參りませぬが、タリスマンと云ふあの小說の中にあつたと思ひます。さう云ふものの中に出て來る泥棒で、バラッドの中には澤山出て來る。丸善、中西屋なぞにお出になるとロビン・ホッドのことだけ書いた薄ぺらな本が澤山――澤山かどうか知らぬが、大分ある筈でございますから、多分玆にお出の中にも御存じの方が多いだらうと思ひます。本屋の廣告をする譯ではありませぬが、ロビン・ホッドの如きものは私の講演以外にもう少し御承知になつて宜からうと思ひますから御注意までに申上げます。

ロビン・ホッドと云ふ男は英吉利のシヤアウッドの森の中に住んで居たのです。同類が大勢あ

りましてリンカン・グリイン、リンカンは英吉利の町の名です、其處で出來る綠色の着物を一着して弓や棒を持つたり劍を下げたり森の中を横行して居つた。横行して居つたと云つても勿論散歩して居た譯ではないが、人を見れば捉へる。さうして金を取る。主として彼等の狙つたのはシエリフ或は坊主、金のある坊主を捕へて金を取り上げるのです。彼等の仲間にも名高い仲間が居る。まづリツトル・ジョンと云ふ豪傑が居ました。リツトルと云ふと小さいやうだけれども身の丈七尺もある大男であります。のみならず非常に强い。又フライアア・タツクと云ふ坊さんが居ります。是はアイヴアンホオの中で可なり重要な役廻りを務めて居りますから御承知の方も多いだらうと思ひます。坊主でありますが破戒無慘な坊主で弓も彎けば劍も使ふ。其上に大きな番犬を澤山飼つて居りまして、其犬がフライアア・タツクの命令通りに人に嚙付くのです。私の如き者に取つては最も恐るべき坊主であります。水滸傳の魯智深のやうな坊主であると思へば間違ひない。大將のロビン・ホツドの戀人であるメエド・マリアンと云ふ女もあります。まだ其外に名前の知れて居る者を言へばウイル・ステウトレエと云ふそれは弓の巧い男。ウイル・スカレツトと云ふ頭の毛の赤い男。これはロビン・ホツドの從兄弟であります。多分從兄弟でせう。まだバラツドや何かに名前の出て來る男ではアラン・ア・デエルと云ふ村の不良青年。さう云ふ者も一緒になつて活躍する。此ロビン・ホツドと云ふものは泥棒でありますが、强きを助けて、いや間

違つた。弱きを助けて（笑聲起る）間違つた所で喝采したつて仕様がない、弱きを助けて强きを挫く豪傑であります。其爲に大變英吉利の公衆の間には評判が宜いです。其文獻に殘つて居ります所でも、と云ふと非常に偉さうでありますが、ビショップ・ラテイマアと云ふ十六世紀頃の坊さん、――ロビン・ホツドが活躍したのは獅子王リチアドのゐた頃でありますが、そのビショップ・ラテイマアと云ふ人が英吉利の或所へ行つた所が、寺へ行くと寺の戶が締つてゐる。中へ這入ることが出來ない。外へ立つて待つて居た。所が何時まで經つても人が來ない。凡そ一時間待つて始めて寺の男が何か鍵を持つて寺の戶を開けて呉れた。どうして今時分寺がそんなに開かないかと云ふと、それは丁度其日がロビン・ホツドの記念日ですな。さうしてロビン・ホツドの日は村中が役者を招んで芝居する。坊主の說敎を聽くよりロビン・ホツドの名譽の爲に役者の芝居を見た方が宜いと云ふので村中が出拂ひになつたと云ふ位であります。其位ロビン・ホツドは英吉利の町と云はず田舍と云はず到る處で非常に持てたと云ふことになるのであります。併し此ロビン・ホツドの崇拜と云ふものは必しも泥棒の崇拜ではない。幾分は泥棒の崇拜だけれども、泥棒の崇拜で持切つて居る譯でない。何となればロ・ビン・ホツドの傳說的の英雄例へば諸威人のピイア・ギント、向側の獨逸、佛蘭西、和蘭、白耳義のオロイレン・シユレエゲルと云ふあゝ云ふ傳說的の人間を考へて見ると、ロビン・ホツドは勇敢で世の中の權威を認めないで、さうして酒が好き

で食意地が張つてゐて天下を自由に横行して居ると云ふ點では甚だ類似して居るのであります。さう云ふ傳説的英雄の性質をロビン・ホツドも多分持合はして居りますから、必しも之を以て英吉利人は泥棒が好きだと云ふこと、泥棒すると云ふことが好きだと云ふ譯でない、泥棒する人間を好むと云ふことは言へないのでありますが、更に文獻に徵するとどうも英吉利人と云ふものは多少泥棒が好きらしいのです。それは是は名高い人でありますが、アベ・ルブランと云ふ人が……阿部と云ふ日本の阿部でない、阿部次郎氏の阿部でない、坊さんのアベです。アベ・ルブランと云ふ坊さんが、佛蘭西の坊さんです、それが十八世紀の初め英吉利へ來た時に手紙を書いた。其書いた物に徵すると英吉利の泥棒を愛することは佛蘭西人に數倍して居ると云ふのである。名高い泥棒が捕つて死刑の宣告を受けて首を縊られに刑場へ送られる途中などは何處の國でも大騷ぎである。皆見ようと云うて大騷ぎをする、英吉利人が泥棒の死刑を見ようと熱狂するのは其首を縊られる死刑の慘酷な所を見ようと云ふのでなく、まさに彼の最大なる危難に遭遇せんとする英雄を送る氣持で非常なる熱狂を極めると云ふのであります。又實際ロビン・ホツドの後は英吉利には頻々として偉い泥棒が現はれて居る。ちよつと玆に私が書いて來ただけでもクロオド・デイユヴアルにデイツク・タアピン、ジョナスン・ワイルド、ジヤツク・シエツパアド、皆是は名高い泥棒であります。此中で一々喋べつて居ると時間が足りませんから代表的なものを二三申上げ

ますが、二番目に擧げましたデイツク・タアピンと云ふ男です。此男は中々紳士であります。泥棒の事を英語ではゼントルマン・オブ・ザ・ロオドと言ひますが、其言葉の意味通りゼントルマン・ロツバアです。非常に泥棒するのに行儀が宜い。禮節正しく泥棒を働く。是も前に擧げましたアベ・ルブランが英吉利に居る間に色々手紙を書いてゐると、其手紙の中にも時々タアピンの話が出て來る。彼の擧げて居る話に依ると、或紳士は途中でタアピンに捕つた。さうして金を出すか、出さなければ命を取る、さうしてポツケツトを調べられた。所が金が殆ど無かつた。さうしたらタアピン先生が金がなければ取る譯に行かないから、己の處に來い、御馳走をしてやると、一緒に飯を食つてそれから紳士を送り出す時に、今度通り掛る時にはもう少し金を持つて來いと云つた。誰も取られに持つて行く奴はないだらうと思ひますが、兎に角さう言つて歸したさうであります。又曰くミスタア・シイと言ふ人がケンブリツヂでタアピンに捕つた。さうして懷中時計一つと嗅煙草の箱一つと持つて居る金二志だけ殘してあと皆持つて行かれた。さうして其後でタアピンが盜んだミスタア・シイに向つて自分のことを官憲に告げると貴下は非常に迷惑を蒙ることがあるだらうからお止しになつたらよろしからうと云つた。取られた人も無論承知致しましたと言つて引き下つた。所が其後何年か經つてニユウマツケツトへ競馬か何か見に行くとミスタア・シイが群衆の中でタアピンに不圖出會つた。競馬を見て居るとタアピンが賭をしようかと言

ふ。宜しい、しようと云ふので競馬で二人が賭を始めた。するとタアピンの方が負けたさうですが、負けると負けた分だけ正直にタアピンがミスタア・シイに金を拂つたと云ふことです。さうして其ミスタア・シイなる者はルブランに向つて、自分はタアピンが自分から略奪した金を正當なる方法を以て取返したことは名譽と存ずると斯う申したさうです。最もひどいのはお婆さんが金を匿してあつた所がそれを白狀させる爲にタアピンがお婆さんを火炙りにした。それでも當時の公衆は慘酷だと言はなかつた。中には言ふ者も居たか知らんが、一般の定評では良い冗談、面白い冗談、と言つて居つたと言ふ。タアピンの人望は非常なものであります。

今タアピンの事を申上げましたが、其前にクロオド・デイユヴアルの名前を擧げた。これもゼントルマン・ロツバアたることはタアピンとちつとも違はない豪傑である。デイユヴアルのことは申上げない積りでありましたが、ちよつとついでに申上げると、彼はヨオクと倫敦との間を二十四時間で馬で駈付けたと云ふ素晴しい大泥棒であります。是が死刑になつた時、タアピンもさうでありますが、彼等は死刑になる時立派な服を着て胸のボタンの穴に花を差して從容として死に赴いたと云ふ事です。デイユヴアルには又、彼が死刑になつた時に、其死骸を或醫者が解剖することになつた。さうすると公衆が憤慨して吾々の名譽ある盜賊を外科醫の手に委して解剖をさせると云ふことは怪しからぬと云つて死刑執行場から其死骸を解剖場に運ぶ途中モツブが官憲を

襲撃してデイユヴアルの死骸を奪つて、さうしてどん／＼凱旋歌を歌ひながら擔いで葬場へ持つて行つて、深い穴の中へ抛りこんで、後から來て掘り出しても解剖の役に立たぬやうに死骸を埋めて生石灰を撒いたと云ふことである。餘程評判が良かつたのですな。先づ言へばロビン・ホッドは日本の義賊、タアピンやデイユヴアルになりますと禮儀が正しいから禮賊――と云ふ言葉があれば禮賊であります。で三番目のジヤツク・シエツパアドになると、是は義賊でもなければ禮賊でもない。純粹の慓悍無双な泥棒であります。此男はニユウゲエトの監獄へ放り込まれた時に手枷足枷をすつかりかけられて居る、其なりに牢を破つて逃出して仕舞つたと云ふ豪傑であります。しかも死刑に處せられたる時が僅に二十三歳であると云ふのであるから天才ですな。此先生も矢張り死ぬ時は一番良い着物を着て胸に花を付けたと云ふことです。それが死んだ時は到る處で何處でも話がある時にはシエツパアドの話ばかりである。のみならずシエツパアドのことを書いた本が出來る。肖像が出來る。サア・リチヤアド・ソオンヒルと云ふ男の如きはサアと云ふ名前が付いて居るのだから當時重んぜられた畫工でありませうが、それの如きは態々このシエツパアドの肖像畫を描いた。それが非常な大評判になつた。此人氣は賀川豊彦氏や島田清次郎氏よりも遙に多かつたと言はざるを得ません。其サア・リチヤアドの書いたシエツパアドの繪が出た時にブリテイツシユ・ジヤアナルと云ふ雜誌に詩が出た。詳しく言へば千七百二十四年の十二月二

十八日號に詩が出たのでありますが、其詩が頗る振つたもので、終ひの節だけを簡單に申上げますと、アレキサンダア大帝はアペレスに依つて不朽になり、シイザアはアウレリアスに依つて、クロムウエルはリリイに依つて不朽になり、大泥棒ジヤツク・シエツパアドはサア・リチヤアド・ソオンヒルに依つて不朽になつた。斯う云ふ詩が出來た。アペレスがアレキサンダアの像を描いたやうにサア・リチヤアド・ソオンヒルが泥棒シエツパアドの畫を描いたことは後代に記念すべき素晴しいことだと云ふのですから、私なら怒りますが、サア・リチヤアド・ソオンヒルと云ふ畫工は非常に喜んだと云ふことであります。既に詩も出た位でありますから、固より芝居は行はれました。無言劇でありますが、それはサアモンドと云ふ人がやつた。ドルリイ・レエンの劇場で盛んに上演された時は、其背景は實景通りで實際シエツパアドが始終其泥棒仲間と共に酒を飮んだ居酒屋の如きは在りの儘拵へて客を呼んださうであります。

此シエツパアドに就いて最も滑稽なことは、當時或坊さんが往來へ立つて說教して居るのを聽くと、其中にシエツパアドの例を引いて居たさうであります。それは人間と云ふものは皆肉體の安全ばかり心掛けるものである。それでは天國へ行かれない。天國へ行かれる爲には精神のことに目を着けなければならぬ。既に彼の泥棒のシエツパアドの如きは、彼の肉體を保存する爲に……肉體を保存する爲にと云ふとをかしいが、牢屋へ這入れば逃出したり、巡査が追駈ければ逃出

したりすることを言ふのであります。其爲に色々素晴しいことをして居る。君達も精神の救濟を得る爲には、彼のシエツパアドがしたやうに色々大膽のことを試みなければいかないと往來で坊主が說敎したと云ふことであります。

第三番目のジョナスン・ワイルドと云ふ泥棒、是はフイルデイングやデフオなどの英吉利の大家が其作品の中に使つた大變有名な泥棒であります。此男になると甚だ評判が惡い。何故評判が惡いかと申しますと、前に申上げたシエツパアドのやうに素晴しい勇氣、力量と云ふやうたものがないのであります。同時に又ロビン・ホツドのやうな意氣、弱きを助け強きを挫くと云ふやうな所もない。タアピン先生の如く禮儀の正しい所もないのであります。唯非常に惡賢くて泥棒のやり方が巧妙なんです。其上自分の仲間を官憲に密告して自分の安全を圖つたと云ふことがあつた爲に不人望になつた。是が死刑場に送られる時には皆から石だの馬鈴薯だの腐つた卵だのを叩き付けられた。デイユヴアルの如く凱旋式の如くにして死骸を運び去られたのとは格段の相違であります。

斯樣に偉い泥棒を讃歎することは必しも英吉利國民に限つたことではありませぬ。日本でも石川五右衞門でありますとか、鼠小僧次郎吉だとか、古來有名な大泥棒が澤山ありますやうに、西洋でも佛蘭西、獨逸、伊太利、西班牙、到る處に偉い泥棒が澤山居ります。何故泥棒が民衆に人

望が好いかと申しますと、其泥棒と云ふものは其泥棒を行ふヒロイズム、勇敢なる行爲ですな、泥棒の勇敢なることは最も民衆に睹易い、誰にも分り易いヒロイズムであります。最もと云つても軍人だけは例外であります。軍人のヒロイズムは泥棒よりも睹易い、と云つて決して軍人を輕蔑する譯ではない。睹易いと云ふ點から言へば軍人のヒロイズムの方が睹易いのです。昔のやうに一騎打の勝負をすると尙更其ヒロイズムは睹易い。其軍人の次に睹易いのは泥棒であります。吾々が實際金を取られまい、妻子眷族に害なからしめまいと一生懸命に戶締りをして居る。其處を深夜破つて來るのでありますから、そのヒロイズムは痛切に我々の實感に訴へます。のみならず吾々自身が取られた場合には腹も立ちますが、人が取られて居る場合は、殊に非常な金持、岩崎とか三井とかが金城鐵壁の如く塀を取廻して威張つて居る所へ忍び込んで金を取つたと言へばそれは壯快でせう。でありますから唯今申上げますやうにタアピンとか、シエツパアドだとか、最後のジョナスン・ワイルド、此三人の泥棒、も少し前から考へればロビン・ホツドのやうな義賊、タアピンのやうな禮賊、それからシエツパアドのやうな唯强い强賊、それからワイルドのやうな非常に奸譎なる奸賊、さう云ふ三四人の泥棒を考へて見ますと、公衆が盜賊を愛することは必しも不自然ではないと云ふ、公衆が泥棒を愛する原理が分ると同時に、それらの盜賊の持て方に、或は英吉利國民の特色が現はれて居やしないかと思ふのであります。

それは何故かと言ひますと、三番目に擧げました强賊のジヤツク・シエツパアドでありますが、彼はロビン・ホツドのやうに弱きを助け强きを挫くと云ふ譯ではない。同時に又タアピンのやうに禮儀正しくエチケツトに合はして泥棒を働くと云ふことはない。併しながら英吉利國民は强賊たるジヤツク・シエツパアドに滿腔の熱情を注ぐことを吝まなかつた。之を日本に比べて考へますと、日本の評判の好い泥棒は何等かの點で必ず人道主義者であります。唯强いばかりの泥棒で後代に嘖々たる名聲を博して居る泥棒はありませぬ。鼠小僧を御覽なさい、貧乏人に金を惠んで居るでありませう。石川五右衞門も實際の場合は知りませぬが、芝居で見ると、義理人情を辨へて居る愛すべき泥棒であります。所で翻つて熊坂長範を見ると、是はさう云ふ所が一つもない。唯强い一點張りの泥棒だから牛若丸に斬られて二つになつてぞ失せにけると云ふやうな哀れな最後しか評判になりません。それとジヤツク・シエツパアドを愛する、熊坂長範の如きはジヤツク・シエツパアドと必しも一緒でないか知らんけれども、兎に角强賊を愛すると云ふ所に英吉利國民の本質がありはしないかと考へることが必しも不當な考へ方でないだらうと思ひます。詰り英吉利國民は强い事を愛する、言ひ換へればエネルギイ、精力を愛する國民だと云ふことは此一事にも現はれて居りやしないかと思ひます。ロビン・ホツドの場合を見ますと、ロビン・ホツドがリツトル・ジヨンと云ふ七尺豐かの大男と初めて出遭ひましたのは、或森の中を歩いて居たら

川があつて一本橋が架かつて居る。ロビン・ホッドが此方から渡つて行くと、見馴れない大きな男が向うからやつて來た。お前どけ、お前どけと言つて毆り合を始めて、それが縁で友達になり、ジョンはロビン・ホッドの手下になつたのです。其時にリツトル・ジョンがロビン・ホッドに向つて、何と言つて居るかと言ふと、君は自分を隨分ひどくブン毆つた、其ひどさほどことほど左様に君を愛する、巧く譯せないが……、澤山毆られたから其毆られ方が强かつただけに餘計ロビン・ホッドに好意を寄せると云ふ譯でありませう。此リツトル・ジョンの言葉は其儘英吉利國民の全體を代表する言葉ではないかと思ふ。まだ此議論は發展させると、色々文學上の問題に這入るのでありますが、又這入らせる積りで此處にも書いたのでありますが、大分長くなりましたから一切それは省略します。

之を要するに、英吉利國民は强い國民です。ストロング・メン、世界の外の國民に例のないストロング・メンであります。强賊シエツパアドを愛する心持と云ふものは力の前には色々な理想とか、道德とか云ふものを顧みない心持であります。さう云ふものを輕蔑する心持だと云ふのではない、輕蔑するとかしないとか云ふことを考へずに、或素晴しいエネルギイの前に出た時に英吉利國民と云ふものは自然と感に入つてしまふ。何れの國民でも多少あるけれども、それが更に强い。マイト・イズ・ライト、力は正義なり、あれは英吉利人の心持でない。そんなことを考へ

るのは餘裕がある。さう云ふ餘裕のある心持でない。もつと端的である。英吉利人に言はせればマイト・イズ・マイト、ライト・イズ・ライト、だと思つてゐる。さうして居てマイトにライト以上或はライト同等の尊敬を持つて居る。言はばまあ生れながらのリアリストのやうな心持のある。何しろ強い國民であります。

此度プリンス・オブ・ウエルスが日本へ御出でになつて吾々も歡迎の意を表する次第でありますが、其歡迎の意を表するにしましても、英吉利は日本と同じやうに大陸に接近して居る島帝國である。英吉利と地理に於て似て居ると云ふやうなこと、或は日英同盟を結んで何年經つたとか云ふやうなこと、さう云ふ國際的な僞善だけで御歡迎申したくない。實際島帝國の島の形が似て居るから英吉利と日本とは仲の良くなるべきものだと云ふことを考へるは餘りに子供染みて居りますし、日英同盟にしましても、どちらが果して迷惑したか疑問だらうと斯う思ふのであります。さう云ふ一切の僞善なしに、此ストロング・メンに君臨する君主たるべき皇太子として、斯う申上げることが失禮でなければシエクスピアと偉大なる泥棒を愛する英吉利に君臨する皇太子殿下を歡迎すると云ふことに於て歡迎の誠意を表したいと思ふのであります。私が演題に泥棒を選んだ第二の理由は此點にあるのであります。（拍手）

（大正十一年四月十三日　英文學講演會にて）

文藝雜感

私はまことに身體がわるい、頭がわるい、心臓もわるい、胃腸もわるい、丈夫なのは差當り兩方の肺と肝臓と腎臓、是もわるくなつて居るかも知れませぬが、兎に角今のところは大丈夫なんです、あとは大部分わるい。それで今日の講演もお斷りする積りでありましたけれども、ツイお斷りの手紙を差上げるのが延び延びになつて、折角お引受をしたものでありますから、兎に角演壇の上へ立たうと思つて出て參りました。約束を重んじた結果此處に立つて居る次第であります。實は醫者に讀むことも、書くことも禁じられて居ります。相成るべくは講演を禁じて貰ひたいと思ひまして、講演はいかぬだらうと言つたら、講演は宜いと云ふんですナ、いかないだらうと言つたら宜いと言ふから已むを得ず出席したと云ふ形もある。

さう云ふ事情でありますから、勿論喋舌ることなどの準備はして參りませぬ。此點は甚だ無責任でありますが、實は今日も午前中は、行かうか行くまいか、電報を打たうか打つまいか、甚だ

迷うたのでありますが、餘り天氣が好いので出る氣になつて出て參つたやうな次第であります。ですから此處に「天才に就いて」と書いてございますが、此演題は取消します。併し全く話を止めようと云ふ譯ではないのであります。私は今日此方へ參る時に、私の家は田端でありますから、山手電車に乘つて目白へ來て、目白から俥で此處まで參つたのでありますが、私は學習院の存在は知つてゐたが所在を知らなかつた爲に、どの位遠いか分りませぬから俥に乘つたのでありますが、忽ちに來て驚いたやうな次第であります。其當時田端で電車を待つて居りました、電車が中中參りませぬ、煙草は醫者の禁ずる所でありますが好物ですから內々のんで居ります、其節も煙草を一本出してのみながら電車を待ちました。待ちながら何を話さうかと考へました。差當り私の眼に觸れる物は私の口に啣へて居る煙草であります。そこで私は煙草に就いて考へたが、煙草と申す物は亞米利加から歐羅巴へ渡つたものであります。羅馬に煙草があつたとか、亞剌比亞に煙草があつたとか云ふが嘘ださうです。亞米利加から歐羅巴に渡つたのが本當だと云ふことになつて居りますが、あの煙草を亞米利加のインディアンが作つて居た時分に葉卷がありましたさうです。歐羅巴に渡つてから煙草が進歩して紙卷が出來た、吾々ののんで居る敷島とか朝日とか、あゝ云ふ煙草は歐羅巴人の發明であるさうです。是は餘談でありますが當時は煙草に慣れなかつた、ニコチン毒も甚だ强かつたものと見えまして煙草で自殺した男があつたと言つて居ります。

其自殺者の傍らに煙草の吸殼が十何本並んであつたと云ふことです。そんな事を漫然と考へて居ります中に、此煙草ですネ、私のすつて居るのは朝日であります、十二錢の煙草であります、其朝日と云ふ紙卷煙草として成立たせるものは何だらうと云ふことを考へたです。さう云ふことは考へないが普通なのでありますが、兎に角電車を待つて居る間にさう云ふことを考へた。するとこれは紙卷、紙に卷いてあると云ふことですネ、紙に卷いてあると云ふ形式が朝日と云ふ、朝日でも何でも宜しいが、兎に角紙卷煙草を成立たして居るのであります、同時に又紙卷煙草と云ふものの內容も出來て居る。其場合に紙に卷いてございます形式と、紙卷煙草と云ふ內容とは離れて居る如くにして離れて居りませぬ、不卽不離の關係にあると心得ます。是は紙卷煙草には限りませぬ、單に煙草を卷いてある葉卷の形式が其葉卷なるものを成立たせて居ります。詰り紙卷煙草は葉卷煙草の變形だらうと思ひます。此不卽不離の關係は直ちに文藝の內容と形式の關係に當嵌りはしないかと考へる。それは例を引くとよく分りますが、例へばゲエテのフアウストの中にメフイストフエレスの言つた所に、一切の議論は灰色で、綠なのは黃金色の生活の樹だと云ふ臺詞があつたと思ひます。昔習つたので、はつきり覺えて居りませぬが、確か原の語を申しますと

„Grau ist alle Theorie,
Und grün des Lebens goldner Baum.“

と云ふのであつたと思ひます。世間では普通にこの二行の內容は理論はつまらんもの、生活は難有いものと云ふことだと解釋してゐる、同時に灰色だの、黃金色だの、生活の樹だのと云ふのは皆裝飾、卽ち形式だと解釋してゐる。併しながらこの內容と形式の考へは當つてゐない。これでは思想と言葉との區別にしかなりません。一切の議論は灰色で綠なのは黃金色の生活の樹だと云ふ二行の內容は、一切の議論は灰色で綠なのは黃金色の生活の樹だと云ふ形式によつてのみ現される、さう云ふ形式を借りなければ現されないと存じます。斯樣な形式と內容の表現は不卽不離でありまして、一つ去れば一つ無くなる、一つがあると又同時に又他の一つもあると云ふやうな關係が起つて居るものだらうと存じます。さう考へた時分に電車が來ましたので電車に乘りました。あとは其後に段々考へたことでありますが、何處で何を考へたと云ふことは申上げませぬ、直ぐに話の順序だけ申上げます。

　そこで形式と內容と云ふことは本來一つものであります。けれども此二つの事を言ふ便宜の上からは、形式と內容の二つの言葉は許されることと考へます。さう云ふ二つあるものが或點に行くと差別が付かなくなることがよくあります。例へば畫と模樣との關係を考へますと、何處迄が畫で、何處迄が模樣かと云ふことは一目瞭然として居るやうで分りませぬ。模樣の中には極端に畫に近いものがある。是と同じやうに畫の或物は模樣に近い、併しながら畫と模樣と分けること

は便宜で仕方がない。例へば帝展や美術展覽會の畫の前に行つて立派な模様だと言つたら、描いた人は快い氣持がしないだらうと思ふ。もう一つ例を引きますと、動物と植物の區別ははつきりとして居りますまい。結局を言へば動物だか植物だか分らないものが澤山あります。併し此處に多數お列びになつて居る諸君に向つて、植物が澤山生えたと言つたら定めし御憤慨になるだらうと思ひます。演壇に立つて居る私の如きは憐むべき植物だらうと存じます。さう云ふ風に內容と形式とは、はつきり區別を立てて考へることは出來ませぬが、其內容と形式と云ふものに就いて考へますと、日本の文藝、日本の文藝を支配して居る文壇はどう云ふ發達をして來たかと考へますと……、是はちよつとお斷りを致しますが、私の今日の講演は甚だ杜撰であります、斯う云ふ文壇とか文藝とか特殊に偏つた材料を捉へず、どなたにも興味のある演題を求むべき筈でありますが、今申すやうに病人でありますから頭に浮び次第に申上げます、其點は御容赦を願ひたいと思ひます。

我日本の文藝がどう云ふ發達をして來たかと申しますと、私が中學を卒業した時分は自然主義の世界でありまして、島崎藤村氏の「破戒」等が盛んに讀まれたのであります。自然主義の時代はどう云ふものかと申しますと、硯友社時代が一段落を告げたその後の時代であります。自然主義の小說がモツトオとして振翳したものは眞を描くと云ふことであります。眞の爲には美を犧牲に

しても宜いと云ふことをモツトオにして居りました。所が私の中學卒業の前後から、それに對抗して他の運動が起りました。其運動の最初に現はれたものは、丁度自然主義が文章世界、早稻田文學に依つて代表されたやうに、其新しい運動を代表したものはスバルと、三田文學でございます。自然主義が田山花袋氏、國木田獨歩氏に依つて代表された如く、新しい運動の先鋒に立つたのは永井荷風、谷崎潤一郎の諸先生でありました。これがまあ名をつければ唯美主義の運動であります。自然主義の反動として新しい運動を起した人々のモツトオは、自然主義の眞に對して、美と云ふことを唱へました。其證據にはその唯美主義の連中の作品を讀んで見ますと、美と云ふことを露骨に主張しない迄も、必ず其時分の作品は美しい情緒と云ふことを主にして日本の文壇に立つたのであります。木下杢太郎氏其他が新しい劇を書きましたが、これは何れも美しい劇であります、美し過ぎるかも知れませぬ。其次に、其運動と殆んど踵を接して起つた新しいものがあります。それは何かと云ふと、雜誌から言へば白樺に依つて代表された人道主義であります。此ムウヴメントは非常に興味あるムウヴメントでありまして、第一、此人道主義の運動は自然主義に對する反動であると同時に、自然主義に對する反動として起つた唯美主義に對する反動であつたのであります。人道主義の運動は自然主義に對する反對と、唯美主義に對する反對との二つの鋒を提げて出て參りました。でありますから唯美主義を見ますと、俗に云ふ形式、實は言葉の

方面から言へば唯美主義は自然主義と斷然手を切つて居る、これは雙方の作品を比ぶれば分ります。自然主義の小說家は、文章の字句の洗練は第二の問題として、眞を捉へれば宜いと云ふ事ばかりを問題にして居ります。併し後から起つた唯美主義のムウヴメントの諸先生は字句の洗練、文章の鍛練に全力を注いで居ります。併しながら其唯美主義の諸先生の小說に現はれた文章を取つて閱しますと、不思議にもそれが自然主義の諸先生の人生觀と似た所があるのであります。似た所は何かと云ふと人生觀上のマテリアリズム、物質主義であります。其の好い例になりますのは永井荷風氏であります。氏は當時自然主義者であるか、新しい作家であるかと云ふことが問題になつたものであります。今考へればをかしな話でありますけれども、其當時はむづかしい問題になつていろいろ議論が出たのであります。これで見ても唯美主義と自然主義とは人生觀上類似してゐたことがわかりませう。所が自然主義者は眞を標榜し、耽美主義者は美を標榜し、人道主義者は善を標榜して居りますが、人道主義の諸先生の作品を見ますと、言葉或は文章の上では自然主義者と手を握つて居ります。その點では自然主義に逆戻りをして居る觀がないでもありませぬ。逆戻りと云ふのは悪い言葉でありますが類似をして居る、耽美主義の諸先生のやうに字句の洗練と云ふやうなことを意としないで、文章でも何でもさつさとお書きになる點は甚だ類似して居ると思ひます。しかし思想は非常に違ふ。此處に强調されてゐるのは申す迄もなく理想主義で

あります。斯う云ふ二つの經過が丁度私が高等學校へ入る前後から、高等學校より大學へ入る迄の間の文壇の有様であります。勿論其時分に私は他人の釣を見てゐる閑人の如く、或はエルバ島に於けるナポレオンの如く何もして居なかつた時代であります。然るに其後又新しいことが起りました。それは何であるかと云ふと、何派と云ふ派も分りませぬ、何と云ふ雜誌もございませぬ、併しながら其新しい機運は從來の流派よりは綜合的の特色をもつた機運であります。これは慾の深い機運でありまして、眞善美にも眞面目な色眼を使つて、何れにも圓滿な作品を出さう、一々の作品はどうか保證しませぬが、さう云ふ傾向のある作品が出て參つたのであります。それは作品の方面でありますが、同時に理論の方も、形式と內容は表現の一致であると云ふやうなことが行はれて來て、今日の文壇では、相當の作家なり、批評家なりが藝術は表現であると申すやうになりました。藝術は表現であると云ふ言葉の意味は、詳しく御話することは御免を蒙りますが、此言葉が行はれるやうになつた現在を考へて見ますと、過去の時代よりも形式が重んじられ、內容が輕んぜられて居る傾向がありはしないかと思ふのであります。わたしの口からかう云ふことをお聞きになるのは意外に思召す方もあるかも知れませぬが、私は現在は形式が重んじられ內容が輕んぜられると云ふことにあるのではないかと思ひます。

それは何故かと云ふと、最近文壇で二人の小說家が論戰を致しました、一人は菊池寛氏、小說

家兼批評家であります。私の友達であります。もう一人の小說家は里見弴氏と申す人で矢張り私の知つて居る人であります。さうして其二人の論戰の問題になつたものは何かと云ふと、藝術の內容的價値と云ふことであります。里見氏は藝術はうまければ好いと云ひ、菊池氏は唯うまいだけの作品では慊らない、何か作品の中に胸を打つ所が欲しい、其胸を打つ所は何かと言へば、それは藝術的價値でないかも知れない、藝術のみと云ふよりは、宗教とか、哲學とかに共通する最高の功利主義に訴へた或る他の價値かも知れない、イヤ他の價値である、さう云ふものが欲しいと云ふのです。其論戰で里見氏の言はれる所は、私は更に不服を感じませぬ、寧ろ聊か御尤もすぎると思ひます。菊池氏の言はれる所も御尤ではあります。わたくしも文藝の作品の中には、何か胸を打つ所が欲しいと思ひます。又實際感心する作品は胸を打つやうな作品であります。しかし之を文藝其物の價値以外に求めることは餘り御謙遜に過ぎはしないかと考へるのであります。菊池氏が其價値の標準を文藝以外に置かれるのは、知らず識らずの間にいつか藝術上の形式偏重の弊に陷つて居るのではないかと心配する次第であります。それは何故かと云ふと藝術は表現であります。藝術から表現を取去つては藝術は成立たないでありませう。表現を失つては藝術にならないことは事實である、それは確かでありませう。しかし何もさうだからと云つて吾々の胸を打つ、例へば人道的感激、さう云ふものが藝術の價値標準以外にあると云ふことにはならない、

藝術は表現であるとすれば、表現のある所に藝術ありと言つても差支ない筈であります。

例を言へばはつきり分りますが、例へば往來で子供が電車で轢かれようとした、其場合に一人の勞働者が身を挺してこれを救つた。其場合に吾々が感激を受ける、道徳的にも其他色々な立場から批判されるでありませうけれども。同時に又子供が電車に轢かれようとした、身を挺して其子供を救つた勞働者、其瞬間の光景、それは藝術的ではないでせうか。更に一例を引けば、茲に何かのプロパガンダの爲の演說會があつて、演說家が侃々諤々の辯を揮つて聽衆を感動さしたとします、この感動を與へたものは論旨のみではありますまい、演說者自身の聲とか、言葉とかヂエステユアとか、一言に云へば表現にもよるのでせう。すると其處にも藝術的意味を含んで居るとは言はれないでせうか。私はどう考へても——先程申上げたやうに此頃頭が惡いのでありますから、甚だ自信が無い次第でありますけれども、其惡い頭の許す限りで考へて見ました所では、藝術を菊池寛氏の如く狹義に解釋することは一種の時弊に累せられて居るのではないかと云ふ懸念があります。さう云ふ胸を打つ感激を取除いた小說を尊重すると、世紀末の佛蘭西の藝術が行詰つたやうに、極く氣の利いた作品、さう云ふものばかりを狙つた小規模の作品ばかりしか出來なくなり、偉大なる作品が日本に現はれる機會が無くなつて仕舞ひはしないかと思ふのであります。從つて兎に角私は藝術と云ふものをさう狹く解釋したくない、もつと廣い如何なる題材でも、

如何なる考へ方でも抱容したものと考へたいのが、私の斯う云ふ事を述べる動機なんであります。

昔、まだ二十歳になるかならぬかと云ふ時でありましたが、唯今申上げた如く他人の釣を見てゐる閑人の如く、エルバ島に於けるナポレオンの如く、何もしなかつた時分に、第一高等學校の圖書館で一つの本を讀みました。それは英吉利の、十九世紀の末の色々の運動のことを書いた本であります。其中にビアズレエの畫のことを書いて居ります。ビアズレエの畫は先輩ホイツスラアにどうしても認められなかつたさうであります、所が或人の家でビアズレエの描いた畫を見せた、其側にホイツスラアが居たさうですが、反感を有つて居るので初めは其畫を見なかつた、併し段々其方を向いて、終ひにビアズレエの畫をぢつと見て「美しい美しい」と言つたさうでありま す。それと同時にビアズレエは兩手に顏を隱して泣いたさうであります。私は其時にビアズレエの如くホイツスラアに認められたならばどの位嬉しいことだらうと思ひました。今日では大分年を取りましたが、ビアズレエの如く認められたらどの位嬉しいだらうと考へるには餘り年を取りましたが、併し今日でもホイツスラアのやうに認める嬉しさは得たいものと思ひます。その爲にも藝術を狹いものに考へたくない、生き生きした自由な廣いものに考へたいのであります。それ故に內容と形式の關係に一隻眼を具へることは、さう云ふ事を專門になさらない方でも必要ではないかと思つて居ります。

甚だ漫然とした話でありますが、此處へ來る途中是だけのことを考へた次第であります。

（大正十一年十一月十八日　學習院特別邦語大會にて）

明日の道德

今日は遲くなりましたが、實は十日の午後三時と云ふのを、どう云ふ譯か、十三日の午後三時と記憶して居りました故、今朝速達を頂きましてひどく驚きました。それに今日の二時から出席する會がありましたので、愈々狼狽して、其方を一時間待つて貰つて、午前中に原稿を作つて、周章て馳せ參じた次第であります。從つて話も纏らないと思ひますが、其邊は寛大に御聞逃しを願ひます。元來餘り纏つた話の出來る柄でありませんが、あなた方も私共も大變似寄つた職業——職業と言つては失禮か知れませぬが、マア天職と言つても差支ない。兎に角似寄つた天職に從事して居る。違ふのは唯あなた方は大人よりも聰明なる小學校の子供を教へ、私は小學校の生徒よりも聰明ならざる大人に、小說を讀まして居るだけであります。其略ぼ似た同職の者が、今日の倫理問題と云ふか、道德と云ふか、それをどう考へて居るかと云ふ點に就いて、多少興味を繫いで御聽き下されば、仕合せと思ひます。もう一つ序に御斷りして置きますが、私はあなた方と

同じ職業に從事して居ると申しましたが、私は小說を書いて居るのであります。小說と申すも烏滸がましいが、世間で小說と言つて居りますから、小說と申しますが、兎に角小說と稱せられるものを書いて居ります。從つて私の話の中に、興味のない文藝上の話が出て來るかも知れませぬ、それは私の職業上已むを得ないと御諦めを願ひます。味噌の味噌臭きは何とかと申しますが、どうも已むを得ない事と思ひます。又私の演題を早く通知するやうにと云ふ御手紙を頂きましたが、旅行した爲に怠りましたので、私の演題はと後を見て書いてあると、大變都合が宜いが、私の不行屆のため書いてないので、誠に殘念に思ひます。

私の演題は明日の道德と云ふのであります。この明日と云ふのは、今日の次ぎの日の明日と云ふ意味ではありませぬ、卽ち次の時代と云ふ意味でありますが、この次の時代と云ふ意味にしても、何年經つた後の時代かと云ふと、甚だ曖昧であります。今日の中に明日があつたり、明日の中に今日があつたりするかも知れません。併しそれは極く相對的に、唯今日、明日とお考へ下さるやうに願ひます。

明日の道德を考へる前に、昨日の道德を考へて見ますと、昨日の道德はどう云ふものでありませう。先づ大摑みに明治前の道德はどう云ふものかと云ふと、それは色々な人が言ひますやうに、封建主義の道德であります。この封建主義の道德は、今日の目より見ますと、甚だ實際を離れた、

或は甚だ理想的に出來上つた、實踐上困難な道德であります。と申しますのは、忠臣孝子烈女と云ふが如き、理想的の人物を一つ目安に立てて、その典型的人物に、己れを合せしめるに努力するのでありますが、なかなかさう云ふ道德的標準から見て、完全な行爲は出來難いのであります。昔の本を見ますと、殊に德川時代の本を見ますと、今日の目からは滑稽な事があります。私の友人の菊池寛と云ふ人の書いた小說の中に、將軍家の御通夜の晩に、小姓が笑つた爲に、遂に腹を切らなければならぬと云ふ事がある。この笑ふと云ふ事は如何なる場合でも、起らないとも限りませぬ。殊に私のやうな神經質の男は、笑つてはならないと云ふ事になればなる程をかしくなる。是は餘談でありますが、私が大學を卒業する時に、今の天皇陛下が御臨場になりまして、吾々も卒業證書を貰ひに行きましたが、夏服がないので——別に貧乏であつた譯でないが、まあさう云ふ趣味であつたのです。——裸體の上に冬服を着て出掛けましたが、何しろ七月十日だから堪らない。式場に花氷が立つて居つたので、それをナイフで壞して、ハンケチに包んで、脇の下に挾んで居りましたが、愈々山川總長の祝辭となるとをかしくて弱つた事があります。是が昔であつたら、私は腹を切らなければならぬ場合であります。さう云ふ封建時代の道德を成立し或は保存せしめたものは何でせう。成立し或は保存せしめたと云ふのは封建時代の道德の本質と云ふ意味でありませぬ。封建時代の道德は、それがなければ成立しないと云ふのではない。成立せしむる

に便宜であつた原因、或は原因と云ふよりは條件と言つた方が宜い、その保存せしめた條件は何かと申しますと、それは色々ありましたらうが、最も著しいものを引出すと、批判的精神の缺乏ではないかと思ひます。この批判的精神の缺乏の現れ方を觀察すると、先づ縱に時間的に考へれば、吾々から遠ざかつた過去の人間、卽ち過去の忠臣、過去の孝子、過去の烈婦と云ふものを吾吾と同じ血肉を具へた人間だとは考へずに、何か神樣の生れ代りのやうに考へるのです。例へば儒者の唱へる堯舜の如きは、其一例でありますが、存在したかしないか疑問な人物に、完全無缺な德を備へさして、後世の人がそれに追付かうと努力するのであります。が、更に又橫に空間的に考へると、自分の居る町を離れては、交通機關が不便でありますから、山の向うには八犬傳の中の人物が、向う三軒兩隣に住んで居るが如き感じを起したのです。況や萬里の波濤を隔てた支那などには二十四孝と云ふ事も實際あつたと思つたでせう。それで縱と橫の說明は付いたが、その外に昔は士農工商と云ふ階級があつて、上の階級を町人から見れば、大名或は御三家、御三卿、將軍家と云ふものはどんな人間だかわからなかつた。餘程前でありましたが、偶然讀んだ本の中に、昔大名が參覲交代の途中——甚だ尾籠な話で恐縮しますが、大名でも糞をするので、大名が糞をすると云ふ事を士分以下の者に見せては危險と解釋したかどうか知れませんが、兎に角威嚴に關るとは思つた。しかし東海道五十三次を我慢する事も出來ませぬから、一々取つて砂の入つ

た樽に詰めて、之を江戸たり國なりへ送つたさうであります。元來階級的差別があつて、上の人は吾々と同じ人間かどうか分らないものになつて來た上、さういふ人工的方法を加へて、人間性を蔽ふに至つては、分らなくなるのは當然と思ひます。それ等の原因の合した結果、生まれて來たものが昨日の道德であります。

而して其の昨日の道德に取つて代つたものが、今日の道德でありますが、其の昨日の道德が如何に實際離れのした、餘り理想的であつたかを證據立てるのは、申し合せたやうに維新の先覺が批判的精神に充ち滿ちたリアリストだつたことであります。日本に適當な言葉はありませぬが、西洋人の言葉を使ふと維新の先覺の言葉を見ると、何れも批判的精神の發揚してゐる。例へば林子平が、日本橋の水は英國のテエムス川に通じて居ると言つた事がありますが、其の言葉も今日から考へれば、馬鹿々々しいほど當り前の話であります。併し其の言葉が當時の人には、言ふ可からざる新しい刺戟を與へたことと思ひます。其の刺戟を與へたと云ふ事は、如何に當時の人心が、批判的精神を失つて、理想的に或は空想的になつたかを證明するに足ると思ひます。斯う云ふ事を擧げれば際限なくあつて、講演が長くなりますが、長州の村田清風が初めて東海道を通つて富士山を見た時に、何とかして聞くより低し富士の山釋迦や孔子も斯くやあらんと言つた。是も富士の山の面目を誇張なしに見たものと言つて差支へないと思ひます。

扨日本の昨日の道德は大體上に述べた通りでありますが、一體昨日の道德と申すものは今日の道德と一致するものでありません。何しろ今日の道德は昨日の道德の反動として生れて來るのですから、一致しないのも當然であります。併し此處に妙な事がある。成程昨日の道德は今日の道德と一致しない。けれども一昨日の道德とは兩立する可能性を持つてゐます。前に妙な事があると言ひましたが、實は妙でも何でもない。もし今日の道德を昨日の道德の反動とすれば、その昨日の道德は一昨日の道德の反動でせう。すると今日の道德は一昨日の道德の反動の又反動ですから、自然と一昨日の道德と兩立することも出來る筈です。これは道德ばかりぢやない。文藝の歷史に徵して見ても、浪曼主義が極點に達すると、その反動として自然主義が生まれる。その又自然主義が極點に達すると、今度はその又反動として新浪曼主義が生れる。新浪曼主義と浪曼主義とは名前の示してゐるやうに兩立する可能性を持つてゐます。

日本の今日の道德もやはりこの原則に洩れず、昨日の道德と兩立しません。封建時代の道德と、封建時代以後の道德と打當つた例は、細かに歷史を調べたら多いでせうが、文部大臣の森有禮が暗殺された如きは、二つの道德の衝突を表徵した事件でないかと思ひます。斯やうに前時代の道德と、後の時代の道德は衝突しますが、新しい道德を捕へるものは、山の中でも高い山にだけ朝日が當るやうに、時代の先覺でなければ、新しい光を受ける事が出來ない。其の時代の先覺者は

新しい道德を捕へて居るに拘らず、賢明なる民衆は、光を捕へ損ふのであります。それでありますから、實際社會狀態に就いて見ると、其の時代の道德と、其の次の道德は同時に其社會に存在し得るのであります。私は今年三十三歳でありますが、私の子供時代の道德は、今日から見れば、封建時代の道德が澤山に殘つて居りまして、其爲に尠からざる迷惑をしたのであります。其の最も著しい例は、最近外の物にも書きましたが、私は小學校の時代に、二宮金次郎を教へられました。金次郎のおやぢ、――おやぢと言つては失禮でありますが、お父さんは如何なる人か分らない。兎に角貧乏であつた事は事實であります。それが爲に金次郎は、田を植ゑたり草鞋を作つたりして、其の間に本を讀んで、あゝ云ふ偉い人になつたと教へられました。私共も金次郎の轍を履んで、如何なる難儀辛苦しても、本さへ讀めば偉くなる事と思ひましたが、併しあれは今日考へると、親の爲には甚だ都合が好くて、子供の爲には都合が惡い道德であります。今日は不幸にして小學校の教科書を失つて、讀む機會がありませぬが、金次郎を讃美する前に、田を植ゑたり草鞋を作つたりしなければならぬ家庭に、金次郎を陷れた、金次郎の父並に母に憤慨を感ずるだらうと思ひます。又事實憤慨を感じつゝある事も事實であります。併し斯の如き舊時代の道德は過ぎ去つて、新しい道德が來た、之を私は今日の道德と申すのでありますが、其の今日の道德とは如何なるものかと言ふと、一言すれば個人主義の道德であります。是も前に申上げたやうに、

個人主義の道德の本質でない。それを成立せしめる條件、それは何かと云ふと、前の封建時代の道德を成立せしめた、批判的精神の缺乏の當然の歸結として、批判的精神の覺醒であります。吾吾は今日は前に述べた如く、時間的にも、空間的にも、階級的にも昔の人の考へた如き、忠臣、孝子、烈婦の存在を信じませぬ。尤も大體は信じないにもせよ、一部は信じてゐるかも知れません。斯う云ふ事を申して居ると、話が段々延びますが、後の話に關係があるから申し上げます。成程吾々は忠臣、孝子、烈婦の存在は信じません。併し西洋の藝術家は皆日本の藝術家より偉いかの如く信じてゐます。あれは空間的に批判的精神に目醒めてゐないものぢやないでせうか。又昔の藝術家は皆今の藝術家より偉いかの如くも信じてゐます。あれは時間的に批判的精神の缺乏してゐる證據でせう。更に又資本家と言へば悉く惡魔、プロレタリアと言へば悉く善魔、——善魔と言ふのは可笑しいが、兎に角虐げられたる神の子の如く考へるのも、階級的に批判的精神の目覺めないと申しても宜い。

では今日吾々の批判的精神を目覺めさしたものは何かと云ふと、それは色々な原因がありますが、其の一つ著しいものを引き出すと、大體に於て西洋文明の恩惠と云つても差支ないと思ひます。之を文藝に徵しますと、自然主義の文藝の功績と申して宜いと思ひます。私は常に自然主義文藝の惡口を言つて居りますが、功績は功績として認めたいのです。もし日本の文壇が硯友社の

文藝以上に出なかつたとしたら、吾々は到底今日ほど自由の精神を感得する事は出來なかつたらうと存じます。日本の文壇の歴史から云つて自然主義以後の時代――私が高等學校、大學に居つた時分は、舊い道德に代つて新道德が興つて、勢のよい氣分に充ち滿ちた時代であります。その時分の色々の出版物を見て、一番澤山出た言葉は何かと云ふと、「我」といふ言葉でありまして、何事も必ず「我」を主張したものであります。雜誌には「エゴ」卽ち「我」といふのが出る。本には京都の朝永三十郎氏の書いた近世に於ける「我」の發達史等といふものが出る。後年菊池寛が「我鬼」といふ小說を出版したが、あれもその名殘であります。其の時分の事で最も私の記憶に殘つて居りますのは、私が高等學校に居りました頃、校長は新渡戶稻造氏で、同氏の倫理の講義を聽きましたが、(實は時々休んで、人に返事をして貰つた事もあります。併し先生の講義は非常に評判が宜いので、兎に角聽く事は聽きました。)或日其講義中に斯う云ふ事を云はれたのです。人間は色色汚いものを有つてゐるから、友達同志でも醜いものを遠慮なくさらけ出し合ふと、互に愛想が盡きて世は成立ない。あの男も此の位下等か、自分も其の位下等で宜いと云ふ樣な事で、滔々として墮落すると言はれた事があります。私は之を聽いて非常に憤慨しました。其の憤慨は時間にすると、彼是三四年も連續しましたが、今日では新渡戶先生の言葉に、よし多くでないにしても、多少の眞理を認めて居ります。併し其の當時は、吾々自身が幾ら醜いものを有つにしろ、それは

有つてゐる事は事實である、事實を糊塗するのは怪しからんと思ひましたから、それ以來倫理の講義を休むことにしました。と言つても新渡戶先生を攻撃するのではないのですよ。如何に其當時吾々が有りの儘の「我」を尊重したかと云ふ事の爲に、例に引いたのみであります。

今日は個人主義の道德が天下を支配して居ります。現在吾々は或程度迄卑しさは互に認めて居ります。併し昔の人は、自分の弱點を口に出さなかつたのみならず、人に知られる事を欲しなかつた。自分自身でも自分に弱點の存在する事を、否定せんとしてゐた。併し今日の吾々は平然と弱點をさらけ出して居ります。甚だ著しい證據は近來新聞の廣告を見ると、其の廣告の標語になつて居るものは、人間的といふ事であります。さう云へば「人間」と云ふ雜誌が里見弴君や久米正雄君主宰となつて出した事もあります。是は吾々から見ますれば、別に不思議はありませぬが、實は雜誌に「人間」といふ名を付けた事は、古往今來なかつたに相違ありませぬ。その證據には、「人間」の編輯者が、他に行つて「人間」から來ましたといふと、必ず其處の女中は驚く、是に依つても如何に「人間」と云ふ名が、不思議であつたかが分るのであります。斯る例を舉げますれば、幾らでもありますが私の友達に哲學をやつて居る男があります。其の男は大學の卒業論文に、カントの純粹理性の批判を書いた位で、ひどくやかましい事ばかり云つて居る男であります。その如何にやかましいかと云ふ例證は、或時私に向つて君、僕にどうしても分らないものは、待合と

いふもののフンクチオオネン（作用）だと云ふ。それは分らなかつたに違ひない。其の男に四五日前に會ひましたら、兎に角カントの研究者でありますから、談直ちにカントに及びました。私はカントを讀んで居りませぬ。しかしカントの事を書いた物は讀んで居ります。從つてカントの書いた物も讀んで居る位の顏はして居ります。而して色々議論を上下して居りましたら、友達の言ふには、僕はカントの良心の絕對命令に疑問を持つ、どうも吾々の倫理的の態度から、幸福とか快樂を除いては考へられない。さう云ふ事を捨てる事は人間的でないやうな氣がすると云ふ。此人さへ此言のある事は、滔々として天下が今日迄、個人主義の道德の潮流に押流されてゐる證據でないかと思ひます。

併し茲に甚だ困つた事には、人間といふ者は甚だセンチメンタルな動物であります。元來センチメンタリズムは、――日本語にすれば感傷主義ですね――その感傷主義は批判的精神とは兩立しない筈であります。しかし前人が批判的精神で捕へたものを後人が繼承する。例へば私が私の批判的精神を働かして、或現實を捕へたものを書いたとする、あなた方がそれを讀んで、成程尤もだと思つたとする、その尤もだと思つたあなた方が最初に言あげをした私程批判的精神に富んで居るかどうかは疑問であります。かう云ふ例を取ると、あなた方にはお氣の毒でありますが、これは勿論逆にしてもよろしい。卽ちあなた方に雷同した私が先驅者たるあなた方程批判的精神

に富んでゐるかどうかは疑問であります。すると批判的精神の覺醒から生れた今日の道徳或は個人主義の道徳と雖も、この吾々のセンチメンタリズムの爲に、頗る無批判的な方向へ發展しないとは限りません。其の邊はよく御理解の事と思ひますが、念の爲にもう一つ例をとれば書畫骨董を買ふ場合、私の目で見て間違ひないものを一つ買つて、それを私の子孫に讓るとする、其處までは甚だ批判的ですが、私の子孫は無批判的に何でもそれに似たものを蒐集しないとは限りません。さういふ傾向が今日の道德の上にも起り得るのであります。さうしてそれが現在起りつゝある證據には、先刻申上げた、新聞に揭げられた本の廣告文の中の、人間的といふ言葉を考へて見ると、人間的の苦しみ、人間的の悲しみを書いた筋でありますから、實際書いてあるかと思つて讀むと、中の主人公の苦しみや悲しみは、どうもあまり人間的でない場合が多い、是は作者が下手の時を云ふのぢやありません。下手の時は人間だかアイスクリイムだかわからぬものが出現するだけでありますが、さうでなくて人間的と云ふよりは、寧ろ動物的なる主人公が出て來る場合が多い。かやうに不幸なる我々は何時もセンチメンタリズムに動かされてゐる。丁度馬に乘らうとする時に、右から飛び乘れば左へ飛び過ぎ、左から飛び乘れば右へ飛び過ぎ、何時も鞍を飛超えて仕舞ふやうに兎角中正を失ふのです。或は人間と云ふ者は永久に馬に乘れないかも分りません。併し地球の亡びる迄には五六百萬年ありますから、先づ今日の歷史を以て將來を判斷する事

は、どうかと思ひますので、差當り馬に乘れる工夫をする方が宜からうと思ひます。此のセンチメンタリズムが或道德的觀方に加へられる。さうすると時勢が滔々として、それに動かされて極端な方向に走る。其處へ今度はそれに反對する先生が出て來まして、又其の潮流を抑へようとしまする事は、何れの國の歷史へも現はれて居るのであります。たとへば近代の西洋文學史上で顯著であつたのは、イブセンが人形の家を書いた時であります。御承知の通りイブセンの人形の家は、ノラと云ふ主人公が、何時迄も人形の如き妻であるのは惜しいと、御亭主にたんかを切つて飛出します。飛出して如何にして衣食するかは疑問でありますが、芝居は其處で幕が降りて居りますから、其の先きは問題になりませぬ。尤もイブセンより二十年前に佛蘭西の小說家リイ・ラグンと云ふ人が、それと同じ問題を取扱つて劇を書いて居ます。イブセン程傑作でありませぬが、これは其の先を書いて居ります。細君が飛出しますと、舞臺は暗くなる。其の中に、夜明けとなつて、段々舞臺が明くなる、御亭主はまだ卓子の前にへこたれて坐つて居る。其處へ御亭主を離れては生活出來ぬ事を知つた細君が歸つて來ると云ふ劇であります。扨このイブセンの人形の家は露西亞、獨逸、佛蘭西、英吉利を動かし、遂にその潮流は日本に迄及んだのであります。すると天下の善男、善女が餘りにセンチメンタルに人形の家の教を奉ずる事に反抗して、同じ人形の家と云ふ名前で短篇を書いたのがストリントベリイと云ふ人であります。是も御承知の方が多い

と思ひますが、或海軍士官の細君がオオルドミスと友達になる。之がイブセンの信者で、人形の家を讀んでゐる、細君は段々この友達にかぶれて遂に御亭主に向つて、あなたの人形になつて居るのはいやだと言ひ出した。主人公大に弱つて、お前は人形ではない、亭主の物質的慾望を滿す外にも、精神的慾望を滿す家內ではないかと言ふ、すると細君は物質的慾望を滿しながら、精神的慾望を滿すと云ふ事はあり得ない、それは黑であつて同時に白であると云ふのと同じだと云ひます。御亭主はそれでも剛情に黑であつて同時に白であると云ふ事は言ひ得る、お前の洋傘を見れば、表は白で裏は黑だと云ふ。所が細君の母が一策を其の御亭主に授ける。御亭主は歸つて來て何知らぬ顏して、その細君の友達のオオルドミスを晚餐に招待して、其の席でオオルドミスにイチヤ付く、オオルドミスも忽ち戀を感ずる、すると、細君は燒餅を燒いて、オオルドミスを追出して、又幸福に暮すと云ふ筋であります。斯やうに新たな道德もセンチメンタリズムが加はる爲にいつも極端迄進み勝ちでありますが、現代の日本に之を徵しますると、自然主義の文藝が陷つたのもこの弊であります。卽ち自然主義の文藝は餘り人間を下等に書き過ぎたのであります。それは誰も言つて居る事でありますが、一般西洋文明の影響もやはりセンチメンタルに走つて居ります。今日は何か西洋風な事を言ひませぬと、時勢に遲れてゐるが如く言はれます。最近上野に美術展覽會が開かれまして、佛蘭西のロダンの出品物を、見せるか見せないかに就いて、警視

廳と美術家との間に於て議論して居りますが、美術家の立場からロダンの作は、何も布を以て蔽ふ必要はないと云ふ。其の位の理窟は誰も言ふ。文學青年でも言ひます。又一般民衆に害がなければ宜いが、一般民衆に悪い影響を與へるといけないから、布を蔽うて見せない方が宜いといふ事も、警視廳でさへ考へる位でありますから、幼稚園の生徒でも考へるのに違ひがありません。けれども一體西洋人は肌を他人に見せる事を非常に嫌ひます。肌を見せる者は野蠻人だと言はれてゐる。上海や漢口に行つても領事のやかましい事は非常なものであつて、浴衣がけで散歩する事は出來ず、素足で歩く事は禁じられて居る。此の風が日本にも入つて來まして、此の頃は女でも足袋の外に、向脛を包むべく靴下やうのものを用ひて居りますが、その位西洋人は肉體を晒すことを恥辱と心得て居ります。尤も夜會服は背中を出して居ります。しかも歐洲の大戰後は餘計出すやうになりました。羅馬法王は大いに之を憂慮して、苟も善良なるカトリツクの信者は背中迄出す事はならぬと言つて居ります。しかし勿論利き目はありません。これは話の横道ですが、扨裸體畫を出し或は裸體の彫刻を出す事は、如何に辯明しても素足を恥ぢる西洋人には矛盾であると思ひます。斯く申すとお前は頭が古い、繪や彫刻にすれば美的であつて、物質的慾望が起らないと云ひませうが、實際は西洋の俗人ばらが物質的慾望を繪や彫刻によつて慰めて居るとしか考へられませぬ。今日ではロダンの彫刻を見るにあの特別室へはひる資格のある人は役人とか大

學教授とか精々專門學校の生徒と云ふやうなものですが、さうすると貧乏人の子供と生れた者は、專門學校に入れず、從つてロダンの彫刻は見られませぬが、さう云ふ制限を設けるよりは、ロダンの彫刻を見て、物質的慾望を起させないものだけに見せる方が至當であります。卽ち特別室に脫衣所を設けて、裸體となつて其の室に入れて、若しも物質的慾望を起した徵候を認めた場合は、千圓位の罰金を科してやるのですね。それを冒しても見る勇氣のある人は、見る資格があるのであります。から云ふと大いに美術家を貶して警視廳の肩を持つやうでありますが、今日警視廳にも罪があります。吾々から見て物質的慾望を與へない事も、警視廳から見るとさうでない。其處を見ると上は警視總監より、下は巡査に至る迄、餘程物質的慾望の旺盛な人ばかり揃つてゐるのでせう。これは勿論國辱であります。佛蘭西のアナトオル・フランスと云ふ人の話でありますが、ルウブルとかルクサンブウルでは全部裸體になつて居る彫刻は、一々葡萄の葉で前を隱してある。さう云ふ事はすべきでない、初から出して置けば何とも思はないのに、隱すからいけない。何故かと云ふと、人間の聯想作用は微妙でありますから、さう云ふ事をして置くと、今に葡萄畑に入つた時に、妙な感を有つやうになると言つて居る、まことにこの說の通りであります。

大分喋り過ぎて時間を取りましたが、簡單に後を付けますと、今日の道德が個人主義的の道德なりとすれば、明日の道德は、此個人主義的道德に反對である事は、想像するに難くないと思ひ

ます。而して明日の道徳は、個人主義と利己主義とは別でありますが、適當な言葉がありませぬから、それを使ひますが、今日より利他主義的な或は共存主義的な道徳である事も、容易に看取する事が出來ると思ひます。尤も前に申上げたやうに、今日、明日と云ふ差別はぼんやりして居りますから、必しもまだ明日の道徳が始まらないのでない、始まりつゝあることも考へられます。同様に明日の道徳を有つて居る人も多いのに違ひありません。既に明日の道徳が、今日の個人主義の道徳と反對のものと申しますと、明日の道徳は昨日の道徳を其儘繰返すかと云ふ御質問があるかも知れませぬが、歴史は嚴密に同じ事を繰返さないのでありますから、明日の道徳はその個人主義でない點に於て、今日の道徳に異るにしても、其の前の昨日の道徳をその儘繼承する事は、勿論ないと思ひます。この邊の理解のない道徳家、時に堂々たる道徳的大家は、今日日本國民の道徳の、弛緩を覺ます爲に、全國民に論語を讀ませ、孔子の廟でも興したら、もつと國民思想を善導する事が出來るであらうと云ふ議論を述べますが、その議論の滑稽である事は、論を俟たないと思ひます。尤もその論語を出版する費用は何處から出るか、孔子廟を建てる費用は何處から出るか分りませんから、冗談に言つて居るのかも知れませぬ。前にも一度引合ひに出した明治維新を考へても、維新當時の名高い話でありますが、岩倉具視公が或時玉松操と云ふ人と明治の大業に就いて話をして、建武中興の基礎に依るべきものかと申した時に、玉松操は、イヤ神武創業

の昔に遡るべきものであると申したので、岩倉公も非常に感心したと云ひます。是は事實かどうか知りませぬが、此の話の如く神武創業の昔其の儘にせよと言つても、神武創業が如何なるものかは玉松操と雖も知らなかつたのに違ひない。只當時に於て理想的の政治狀態と云ふ言葉を神武創業の昔と云ふ言葉と言ひ換へたものと思ひます。さうすると明治の維新にしても、徒らに過去の道德に範を求めた次第ではない。それを今日昔にさへ還れば國家安穩のやうに考へるのは維新の古老にも恥づる次第であります。

明日の道德は個人主義的の道德でない事は、今申す通りであります。それは如何なる道德かを申上げるのは、私の任でないか知れませぬが、少くも是だけは、何等危險なしに申す事が出來ると思ひます。たとひ國家とか家族とかを中心にしたものにしても、兎に角大勢の人が集つて立つて居る或社會的團體を、目標に置いた道德であると云ふ事だけは、確であらうと思ひます。もう一度繰返しますと、私は今日の道德は、昨日の道德と兩立しないと申しましたが、今日の道德も亦明日の道德と、兩立しないと考へるのであります。今日の道德と明日の道德の間に、今日の道德と昨日の道德との間に於けるやうに、衝突が起るのは自然と思ひます。而してそれの起るのを起らないと考へるのは卑怯であります。又新聞を見て居りますと、さう云ふ事件が吾々の目に、常に觸れるのであります。且又今日の道德は、昨日の道德と兩立しないにしても、一昨日の道德

とは兩立する、或は共存し得ると申しましたが、それと同時に明日の道德と昨日の道德とは兩立しないにしても、共存する所があるかも知れませぬ。既にさうであるとすれば、封建時代的道德家も案外容易に明日の道德家と握手するかも知れません。これは本統の道德の本筋の發達の仕方でありますが、日本の現在の國狀から申しますと、自然其儘の發達の外にもいろいろ又複雜な影響がある。何しろ日本は近々五六十年に進歩したのですから、思想的には冬至も夏至も同時に起つてゐる觀があります。其處へ又在來の因習があり物質的方面から來る諸威力があるとなると、日本の現在の道德狀態は複雜な、又可なり渾沌たるもののある事は明であります。のみならずこの渦卷へ人間本來有つて居る、センチメンタリズムが各々加はつて、敵とも味方とも分らない位、眞赤になつてやつて居りますから、混亂も亦非常なものであります。眞に國を憂へる士なら、今日の日本の道德的狀態の收拾すべからざる光景には、浩歎の聲を發せずには居られないでないかと思ひます。でありますから吾々――と云ふのはあなた方も含めて言ふのでありますが、差當り私共は此國民の爲に、昨日、今日、明日の道德を整理する必要上、先づ少くともセンチメンタリズムを離れて何事も有りの儘に見る事を天下に教へる――と云ふと偉さうで、又教へようと思つてもなかなか覺えて呉れませぬが、兎に角心懸だけは、天下に教へる積りで立ちたいと思ひます。詰り私の道德と云ふよりは倫理教育の希望は、甚だ陳腐な希望でありますが、新舊共餘りのぼせ

上らないやうに、それこそ孔子の所謂中庸道に立還つて靜かにものの正體を見る心がけだけでも助長さしたいと思ひます。大變話がごた〳〵しましたが、殊に末段は駈歩になりましたが、前に申す次第でありますから、是で御免を蒙ります。

（大正十三年六月十日　第二十二回全國教育者協議會にて）

補遺

一　ある鞭

僕は年少の時、硝子畫の窓や振り香爐やコンタスの爲に基督教を愛した。その後僕の心を捉へたものは聖人や福者の傳記だつた。僕は彼等の捨命の事蹟に心理的或は戲曲的興味を感じ、その爲に又基督教を愛した。卽ち僕は基督教を愛しながら、基督教的信仰には徹頭徹尾冷淡だつた。しかしそれはまだ好かつた。僕は千九百二十二年來、基督教的信仰或は基督教徒を嘲る爲に屢短篇やアフォリズムを弄した。しかもそれ等の短篇はやはりいつも基督教の藝術的莊嚴を道具にしてゐた。卽ち僕は基督教を輕んずる爲に反つて基督教を愛したのだつた。僕の罰を受けたのは必しもその爲ばかりではあるまい。けれども僕はその爲にも罰を受けたことを信じてゐる。

二　唖

僕は昔から書いた。――「全智全能の神の悲劇は神自身には自殺の出來ないことである。」恰も

自殺の出來ることは僕等の幸福であるかのやうに！　僕はこの苦しい三箇月の間に屢自殺に想到した。その度に又僕の言葉の冷かに僕を嘲るのを感じた。天に向つて吐いた唾は必ず面上に落ちなければならぬ。僕はこの一章を艸する時も、一心に神に念じてゐる。――「神の求め給ふ供物は砕けたる靈魂なり。神よ。汝は砕けたる悔いし心を輕しめ給はざるべし。」

（大正十五年？）

〔侏儒の言葉〕

神秘主義

〔六六頁に〕

神秘主義は文明の爲に衰退し去るものではない。寧ろ文明は神秘主義に長足の進歩を與へるものである。

古人は我々人間の先祖はアダムであると信じてゐた。と云ふ意味は創生記を信じてゐたと云ふことである。今人は既に中學生さへ、猿であると信じてゐる。と云ふ意味はダアウインの著書を信じてゐると云ふことである。つまり書物を信ずることは今人も古人も變りはない。その上古人は少くとも創生記に目を曝らしてゐた。今人は少數の專門家を除き、ダアウインの著書も讀まぬ癖に、恬然とその說を信じてゐる。猿を先祖とすることはエホバの息吹きのかかつた土、――アダムを先祖とすることよりも、光彩に富んだ信念ではない。しかも今人は悉かう云ふ信念に安んじてゐる。

これは進化論ばかりではない。地球は圓いと云ふことさへ、ほんたうに知つてゐるものは少數である。大多數は何時か敎へられたやうに、圓いと一圖に信じてゐるのに過ぎない。なぜ圓いかと問ひつめて見れば、上愚は總理大臣から下愚は腰辨に至る迄、說明の出來ないことは事實である。

次ぎにもう一つ例を擧げれば、今人は誰も古人のやうに幽靈の實在を信ずるものはない。しかし幽靈を見たと云ふ話は未に時々傳へられる。ではなぜその話を信じないのか？　幽靈などを見る者は迷信に囚はれて居るからである。ではなぜ迷信に囚はれてゐるのか？　幽靈などを見るからである。かう云ふ今人の論法は勿論所謂循環論法に過ぎない。

況や更にこみ入つた問題は全然信念の上に立脚してゐる。我々は理性に耳を借さない。いや、理性を超越した何物かのみに耳を借すのである。何物かに、――わたしは「何物か」と云ふ以前に、ふさはしい名前さへ發見出來ない。もし强ひて名づけるとすれば、薔薇とか魚とか蠟燭とか、象徵を用ふるばかりである。たとへば我々の帽子でも好い。我々は羽根のついた帽子をかぶらず、ソフトや中折をかぶるやうに、祖先の猿だつたことを信じ、幽靈の實在しないことを信じ、地球の圓いことを信じてゐる。もし嘘と思ふ人は日本に於けるアインシュタイン博士、或はその相對性原理の歡迎されたことを考へるがよい。あれは神秘主義の祭である。不可解なる莊嚴の儀式で

ある。何の爲に熱狂したのかは「改造」社主の山本氏さへ知らない。

するを偉大なる神祕主義者はスウエデンボルグだのベエメだのではない。實は我々文明の民である。同時に又我々の信念も三越の飾り窓と選ぶところはない。我々の信念を支配するものは常に捉へ難い流行である。或は神意に似た好惡である。實際又西施や龍陽君の祖先もやはり猿だつたと考へることは多少の滿足を與へないでもない。

或自警團員の言葉

〔七四頁に〕

さあ、自警の部署に就かう。今夜は星も木木の梢に涼しい光を放つてゐる。微風もそろそろ通ひ出したらしい。さあ、この籐の長椅子に寢ころび、この一本のマニラに火をつけ、夜もすがら氣樂に警戒しよう。もし喉の渇いた時には水筒のウイスキイを傾ければ好い。幸ひまだポケツトにはチヨコレエトの棒も殘つてゐる。

聽き給へ、高い木木の梢に何か寢鳥の騷いでゐるのを。鳥は今度の大地震にも困ると云ふことを知らないであらう。しかし我我人間は衣食住の便宜を失つた爲にあらゆる苦痛を味はつてゐる。

いや、衣食住どころではない。一杯のシトロンの飲めぬ爲にも少からぬ不自由を忍んでゐる。人間と云ふ二足の獸は何と云ふ情けない動物であらう。我我は文明を失つたが最後、それこそ風前の燈火のやうに覺束ない命を守らなければならぬ。見給へ。鳥はもう靜かに寢入つてゐる。羽根蒲團や枕を知らぬ鳥は！

鳥はもう靜かに寢入つてゐる。夢も我我より安らかであらう。鳥は現在にのみ生きるものである。しかし我我人間は過去や未來にも生きなければならぬ。と云ふ意味は悔恨や憂慮の苦痛を嘗めなければならぬ。殊に今度の大地震はどの位我我の未來の上へ寂しい暗黑を投げかけたであらう。東京を燒かれた我我は今日の饑に苦しみ乍ら、明日の饑にも苦しんでゐる。鳥は幸ひにこの苦痛を知らぬ。いや、鳥に限つたことではない。三世の苦痛を知るものは我我人間のあるばかりである。

小泉八雲は人間よりも蝶になりたいと云つたさうである。蝶――と云へばあの蟻を見給へ。もし幸福と云ふことを苦痛の少ないことのみとすれば、蟻も亦我我よりは幸福であらう。けれども我我人間は蟻の知らぬ快樂をも心得てゐる。蟻は破產や失戀の爲に自殺をする患はないかも知れぬ。が、我我と同じやうに樂しい希望を持ち得るであらうか？ 僕は未だに覺えてゐる。月明りの仄めいた洛陽の廢都に、李太白の詩の一行さへ知らぬ無數の蟻の群を憐んだことを！

しかしショオペンハウエルは、——まあ、哲學はやめにし給へ。我我は兎に角あそこへ來た蛾と大差のないことだけは確かである。もしそれだけでも確かだとすれば、人間らしい感情の全部は一層大切にしなければならぬ。自然は唯冷然と我我の苦痛を眺めてゐる。我我は互に憐まなければならぬ。況や殺戮を喜ぶなどは、——尤も相手を絞め殺すことは議論に勝つよりも手輕である。

我我は互に憐まなければならぬ。ショオペンハウエルの厭世觀の我我に與へた教訓もかう云ふことではなかつたであらうか？

夜はもう十二時を過ぎたらしい。星も相不變頭の上に涼しい光を放つてゐる。さあ、君はソイスキイを傾け給へ。僕は長椅子に寢ころんだまま、チヨコレエトの棒でも嚙ることにしよう。

〔一三一頁に〕

若楓

若楓は幹に手をやつただけでも、もう梢に簇つた芽を神經のやうに震はせてゐる。植物と言ふ

ものの氣味の惡さ！

蟇

最も美しい石竹色は確かに蟇(ひきがへる)の舌の色である。

鴉

わたしは或雪霽の薄暮、隣の屋根に止まつてゐた、まつ青な鴉を見たことがある。

〔文藝的な、餘りに文藝的な〕

志賀直哉氏に就いて　（覺え書）

〔一六四頁に〕

一　描寫上のリアリズム。この點では誰も（トルストイさへも）志賀氏ほど細かくはない。「子供三題」「鵠沼行」等に徵すべし。

二　東洋的傳統に立つた美しさ。この點は存外等閑視されてゐる。殊に志賀氏のエピゴオネンは全然この點に無理解である。「焚火」「雪の日」等に徵すべし。

三　良心――と云ふよりも道德的神經。この點は志賀氏の作品の世界を狹めたと云ふものもあるかも知れない。が、實は廣くしてゐる。「暗夜行路」に徵すべし。

四　文章の口語化。この點は武者小路氏に類似してゐる。

五　人としては性格上のゲエテ的完成。この點も或は武者小路氏に負つてゐる所があるのかも知れない。

六　小說家の小說家（セザンヌを畫家の畫家と云ふ意味で）大作家よりも純作家。僕は勿論大作家よりも純作家に敬意を持つてゐる。

一の附　神經衰弱を書いたものはストリントベリイと双璧である。あれは唯の神經衰弱ではない。道德的荒廢の感に對する內部的鬪爭のやうに感じられる。「子を盜む話」「憐れな男」等に徵すべし。

「大道無門」

〔二二一頁に〕

あらゆる小說は一面には處世術の敎科書である。從つて又極めて廣い意味では敎育的と言つても差し支へない。その最も著しい例は一見如何にも塵外のものらしい碧巖錄などと云ふ短篇集である。（僕は禪宗のことは何も知らない。が、一度碧巖錄だけは短篇集として愛讀した。）から云ふ小說中の處世術は當然その作家の人生觀と密接に結びついてゐなければならぬ。里見弴氏の長篇小說「大道無門」も亦この例に洩れない。

里見弴氏は哲學者である。から云ふ里見氏の一面はなぜか常に見のがされ易い。が、里見氏を

論じる上には到底この事實は見のがせない筈である。里見氏は前には「多情佛心」を著し、今度は「大道無門」を著はした。それ等の小說は題そのものさへ哲學的であるのに違ひない。更に里見氏の感想を讀めば、大抵哲學的、――或は更に丁寧に言へば、理想主義的色彩に富んでゐる。しかもこの理想主義者は少しも現實の前に落膽してゐない。のみならず「莫怖幻滅」(?)と書いた旗を飜して進んでゐる。

僕が哲學者里見氏を云々するのは必しも奇を衒ふ爲ではない。かう云ふ一面は里見氏を截然と他の作家たちから切り離してゐる。いや、「他の作家たちから」ではないかも知れない。寧ろ「外見上里見氏に近い作家たちから」と言ふべきであらう。僕は或批評家の里見氏をデカダンスと呼んでゐるのを見、かうも考へは違ふものかと思つた。里見氏は成程無數の情事を描いてゐるのに違ひない。しかしデカダンスの匂などはどの作品にも見えないのである。のみならず所謂殉情的情緒さへどの作品にも見えないのである。しかも里見氏の作品は決して現實主義に終始してゐない。僕は「大道無門」を讀み、人生に對する里見氏の態度にあらゆる理想主義者の嚴しさを感じた。

里見氏は前に永井荷風氏を評し、「永井氏ほど立派に完成した人はない。唯この人に一生懸命になつた作品のないのは遺憾である」と言つた。理想主義者里見氏の面目はこの言葉の中にも躍動してゐる。里見氏の「一生懸命になる」と云ふのは或作品の形式的完成に一生懸命になると云ふ意

味でない。或作品に盛られる人生を一生懸命に生きると云ふ意味である。かう云ふ里見氏の作品にデカダンスの匂のないのは偶然ではない。所謂殉情的情緒のないのも、——これは既に里見氏自身も「まごころ」の哲學に解釋してゐる。……

里見弴氏は理想主義者である。が、天成の理想主義者ではない。現實主義者的氣質から精進をつづけて行つた理想主義者である。武者小路實篤氏は天成の理想主義者を代表するであらう。同時に又菊池寛氏は天成の現實主義者を代表するであらう。里見氏は丁度兩氏の中にまつ直に伸び上つた小說家である。僕等に親愛なるカリバンは里見氏の中にもゐないことはない。しかしその又カリバンはエリエルの歌も歌つてゐるのである。僕は「大道無門」の中にもやはりエリエルの歌を感じた。のみならずその又エリエルの歌は二三の理想主義的作家たちの歌よりもはるかに天上に近いものだつた。

里見弴氏のテクニイクの冴えは既に定評を持つてゐる。僕はもうこの點では屋上に屋を架す必要はない。所謂「白樺派」の作家たちはいづれも理想主義の色彩を帶びた兜や槍を輝かせながら、文藝的トウナメントの廣場へそれぞれ馬を進めて行つた。里見氏はそれ等の作家たちの中では或は馬上のジアン・ダアクのやうに異色を持つてゐたであらう。が、里見氏の兜の上にはやはり理想主義の鳥の羽根が一すぢ白じらと日の光に閃いてゐる。……

〔芭蕉雜記〕

〔三三一頁に〕

宗師

芭蕉は不世出の天才であり、同時に又一代の宗師だつた。が、古來の天才は一人ならず陋巷に窮死してゐる。すると天才だつたことは必しも宗師だつた所以ではない。子規居士はその「芭蕉雜談」の中に、芭蕉の大名を得た所以を俳諧そのものの「平民的」傾向と芭蕉その人の「智識德行」とに歸し、更に「それは俳諧宗の開祖としての芭蕉にして文學者としての芭蕉に非ず」と云つた。宗師たる芭蕉の天才たる芭蕉とおのづから趣を異にするのはまことに子規居士の言の通りである。

念の爲にもう一度繰り返せば、芭蕉は不世出の天才であり、同時に又一代の宗師だつた。一代の宗師となつた所以は勿論いろいろ數へられるであらう。たとへば芭蕉の西行のやうに行脚三昧を愛したり、枯淡の生涯に安んじたりしたのも、古往今來センティメンタルなる俗衆の感涙を流させたであらう。しかし宗師となる上に最も力のあつたものは——天成の宗師だつたと云ふこと

である。もし宗師と云ふ言葉を使はずにすませたいと思ふならば、天成の教師と云ひ換へても好い。芭蕉は子規居士も「芭蕉雜談」の中に「芭蕉の弟子を教ふる孔子の弟子を教ふるが如し。各人に向つて絶對的の論理を述ぶるに非ず、所謂人を見て法を說く者なり」と云つた通り、門下の龍象を教へるのに獨特の手腕を具へてゐた。向井去來の「去來抄」森川許六の「俳諧問答」等は明らかにこの事實を證するものである。今試みに「俳諧問答」中の「自讃之論」の一節を引けば、——

「その時翁の曰、明日衣更なり。句あるべし、聞かんといへり。かしこまりて、三四句吐出すと雖も、師本意に叶はず。師の云、當時諸門弟幷他門ともに、俳諧慥にして疊の上に坐し、釘鎹をもつてかたくしめたるが如し。是名人の遊所にあらず。許子が案ずる所も是なり。風雅の外に子が得たる藝能を察せよ。名人は危所に遊ぶ、俳諧かくの如し。仕損ずまじき心あくまで有、是下手の心にして上手の膓にあらず、師が當歲旦

「　年 と し や 猿 に 着 せ た る 猿 の 面

「といふ句、全く仕損じの句なり。(中略)予が曰、名人の師の上にも仕損じ有や。答曰、每句有。予この一言を聞て、言下に大悟す。」

更に又「去來抄」の一節を引けば、——

「　下 臥 に つ か み わ け ば や 糸 ざ く ら

「翁路上にて去來に語つて曰、此頃其角が集に此句あり、いかが思ひて入集しけんとなり。去來云、糸櫻の十分に咲たる形容よく云課（おほ）せたるに侍らずや。翁曰、いひ課せて何かある。去來ここにおいて肝に銘ずることあり。」

　許六に對する芭蕉の態度は老婆心切を極めてゐる。が、去來に對する芭蕉の態度は禪家の棒喝と選ぶ所はない。且又芭蕉は機宜に應じた、かう云ふ獨特の教授法の外にも、如何にも俳諧の父らしい無限の溫情を蓄へてゐた。「秋風に折れて悲しき桑の枝」と云ひ、「袖のいろよごれて寒し濃ねずみ」と云ひ、或は又「塚も動けわが泣く聲は秋の風」と云ひ、門人及び門人の父兄の長逝を悼んだ作品の惻々と人を動かすのは必しも巧拙の如何のみではない。殊に僕をセンティメンタルにするのはかう云ふ芭蕉の逸話である。

「　をとつひはあの山こえつ花ざかり　　去來

「これは猿蓑二三年以前の吟なり。翁曰、此句今聞人有まじ、一兩年まつべしとなり。其後杜國が徒と芳野行脚し給ひし道より去來への文に、或はよし野を花の山と云、或はこれは〱とばかり聞えしに魂をうばはれ、又は其角がさくらさだめぬと云しに氣色とられて、芳野に句もなかりき。唯をとつひはあの山こえつと日々吟じ行侍るとなり。」

　實際一兩年早かつたかどうかは少時問はずとも差支へない。が、「唯をとつひはあの山こえつと

日々吟じ行侍る」の一行は甞に透る優しさを含んでゐる。

教師たる芭蕉の特色はその外にも幾つか數へられるであらう。しかし上に擧げただけでも、如何に芭蕉の良教師だつたかは容易に首肯出來る筈である。かう云ふ教師を頂いた門人たちの心服は問ふを待たない。

才人

芭蕉は當代の龍象を易々と門下に從へてゐた。前人は屢この事實を擧げ、如何に芭蕉の德望の大いだつたかを力說してゐる。芭蕉は勿論德望に饒かだつた君子であらう。少くとも對人關係だけは出來るだけ平和に保たうとした精神上のエコノミストである。

「土芳曰、人是非に立る筋多し。今其の地にあるべからずと、恨あるべき人の方にも行かよひ、老後には心の障もなく見え侍るなり。」

芭蕉のこの爲にも門人は勿論、他門の俳人の中にさへ滅多に敵を造らなかつたのは疑ひもない事實である。しかし唯この爲にのみ、大宗匠になつたと信ずるのは村夫子の見を免れないであらう。芭蕉の藝術は俳諧であり、俳諧は付け合を試みるものである。然るに付け合の巧拙は和歌の題詠の巧拙のやうに、(付け合も實は題詠である。)俗目にも入り易いのに相違ない。いや、雨吟の

場合などにはその優劣の蔽ひ難いことは劍道の立ち合も同じことである。芭蕉はかう云ふ付け合の上に古今獨歩の名を博してゐた。諸人のおのづから芭蕉の前に畏敬の念を生じたのはこの爲もあつたのに違ひない。少くとも門下の龍象の芭蕉に頭の擧らなかつたのは德望よりも寧ろこの爲である。たとへば獅子庵支考と共に、容易に人に遜らなかつた許六の「自讚之論」に徵するが好い。

「初學の時は、季吟老人の流に手引せられて、中頃談林の風起て、急に風をうつし、京師田中氏常矩法師の門人と成て、俳諧する事七八年、晝夜寢食を忘れて、一日に三百韻五百韻を吐き出す。その頃出る諸集に渡つて、一天下の俳諧恐くは掌中に握りたる樣におぼゆ。常矩門弟の第一と稱す如泉などと云へる者は、予より遙におとつたる門人なり。(中略)その頃常矩が何がし集の付句に、

「　　物の時宜も所によりてかはりけり(前句)

「　　難波のあしを伊勢風呂でえた

「といふ句有り。秀逸とて入集す。我黨これを取らず。(中略)又その頃桃靑の付け句に、

「　　聞き耳やよそに怪しき荻の聲(前句)

「　　難波の蘆は伊勢のよも市

「と云句あり。これ上手の作なりとて、感じて桃靑の上手を稱す。(中略)その頃の一天下桃靑を

翁と稱して、いよ／＼名人の號を四海にしくと沙汰しけり。予この人の器を見るに、我肩を並べたる時、中々及ばざる上手なり。日々名人と成侍らん。願くは一度對面して、俳諧の新風を開きたしと、（下略）」

「難波の蘆」の句を吐いたのは當時まだ談林風に心醉してゐた三十四五歳の芭蕉である。（前句の作者は信德である。）この付け合の註釋は樋口功氏の「芭蕉研究」に盡きてゐると云つても好い。（同書後篇、第三節百韻時代）もし屋上屋を架すれば、按摩らしいよも市の名を「難波の蘆は伊勢の濱荻」の濱荻に換へた猾手段は右すれば滑稽に入り、左すれば幻怪に入る一髮の機微を捉らへたものである。これをしも才人でないと云ふならば、何ものを才人と稱するのであらう？　更に又蕉風を打開した四十一歳の芭蕉の作品もやはりその點は同じことである。

籬まで津浪の水に崩れ行　荷兮

佛食たる魚ほどきけり　芭蕉

「佛食たる」は幸田露伴氏の說のやうに水死人を食つたことであらう。これは勿論談林風のやうに洒落や地口を弄してゐない。しかし付けかたの鮮かさは依然たる才人の面目である。

ゆがみて蓋のあはぬ半櫃　凡兆

草庵に暫く居ては打やぶり　芭蕉

「雀百迄躍りを忘れず」とはまことに五十歳に垂んとする芭蕉の付け合の才氣である。

……………………………………………

偶像

芭蕉は大阪に示寂した後、忽ち偶像に化しはじめた。いや、偶像に化したばかりではない。八百萬の神神と少しも變らぬ俳諧の神にさへ化しはじめたのである。この芭蕉の神格化はそれ自身興味のある問題であらう。如何に芭蕉はクリストのやうに奇蹟を行ふやうになつたか、如何に諸國の百姓町人は芭蕉の祠を崇めるやうになつたか、又如何に芭蕉の門人たちもクリストの十二の使徒のやうに多少の莊嚴を帶びるやうになつたか、——さう云ふ研究は俳諧のみならず、日本の土俗を明らかにする上にも幾分かの役に立つことであらう。(註一)

芭蕉は流俗の思惑などに頓着せぬ偶像破壞者である。幾多の俳諧の偶像を破壞し去つたのは云ふを待たない。「俳諧は萬葉集の心なり。唐明すべて中華の豪傑にも愧づる事なし」と傲語したのも芭蕉である。「見てあしき書とてはなし。儒佛より國書其外謠淨瑠璃本も見るべし」と嘯いたのも芭蕉である。他門と交るも「苦しからず。交りてあしきものは博奕とぬす人なるべし」と喝破したのも芭蕉である。(いや、博奕とぬす人さへ、芭蕉は必しも蛇蝎のやうに排斥することはなさ

なかつたであらう)。から云ふ偶像破壞者自身の忽ち偶像に化したのはあらゆる天才の運命とは云へ、如何にも悲慘なる喜劇である。

この偶像崇拜に手痛い一擊を加へたのは正岡子規の「芭蕉雜談」である。「芭蕉雜談」は芭蕉の面目を說盡したものではないかも知れない。しかし芭蕉の圓光を粉碎し去つたことは事實である。これは十百の芭蕉堂を作り、千萬の芭蕉忌を修するよりも、二百年前の偶像破壞者には好個の供養だつたと云はなければならぬ。

けれども芭蕉の偶像崇拜は未だに跡を絕つた訣ではない。成程子規は一擊の下に俳諧の神を撲殺した。しかし神の落命した後にも、聖者は依然として殘つてゐる。たとへば吉田絃二郎氏の「芭蕉」は傳稱するに足る小說であらう。が、作中に現れる芭蕉はいつも妙にうち沈んだ、洒落一つ滅多に云ひさうもない、頗るセンティメンタルな聖者である。あの傲岸な支考や許六もから云ふ芭蕉の說教に唯唯諾諾としてゐたであらうか? いや、僕さへから云ふ芭蕉は一蹴し去ることを辭せないものである。

古人は靑雲のむかぶすきはみに俳諧の神を建立した。今人は女學校の運動場の隅に俳諧の聖者を建立してゐる。もしその一を選べと云ふならば、僕は寧ろ聖者よりは神を選びたいと思つてゐる。吉田絃二郎氏の芭蕉よりは「行脚怪談袋」だの「俳諧水滸傳」だのの芭蕉を選びたいと思つてゐ

る。

氣質

芭蕉は大抵尤もらしい隱君子のやうに考へられてゐる。が、必しも吉田絃二郎氏の小說「芭蕉」の主人公のやうに、沈み勝ちの人ではなかつたらしい。成程芭蕉には「食の後、蠟燭をはや取るべしと宣ふ。夜の更くること目に見えて心せはしきとなり」と云ふ、名高い逸話も傳へられてゐる。しかしこれは芭蕉ばかりではない。我々も亦柱時計を前に、付け合の工夫を凝らすとすれば、必ず「時計をとり去るべし。夜の更くること目に見えて心せはしき」などと云ひ出すであらう。

その外にも亦小川破笠は市川柏筵の「老の樂」の中にかう云ふ逸話を傳へてゐる。

「嵐雪なども俳情の外に翁をはづし逃げなどいたし候よし。殊の外氣がつまり面白からぬ故なり。」

しかし如何なる門人もその私淑する師匠の前には多少氣づまりに感ずるものである。現に夏目漱石先生は甚だ諧謔に饒かだつた。けれども門人たる僕などの氣づまりに感じたのは確かである。況や破笠だの嵐雪だのは謹嚴に身を持した君子ではない。いづれも晋子其角などの居候になつてゐた風流無双の才子である。すると彼等の「俳情の外に翁をはづし逃げなど」したは愈當然と云は

なければならぬ。

尤も芭蕉の人生の無常を感じてゐたことは確かである。少くとも屢人生の無常を說いてゐたことは確かである。人生は無常に違ひない。それを無常々々と吹聽するのは如何に芭蕉庵桃青にもせよ、頗る談義僧の口吻に類した不見識の沙汰と云はなければならぬ。が、少時芭蕉の爲に辯護の勞を執るとすれば、芭蕉の火宅に住したのは所謂元祿の黃金時代である。この豪奢なる一代の風潮はおのづから芭蕉の厭離の念に拍車を加へずには措かなかつたであらう。のみならず芭蕉自身にしても、談林風の俳諧を愛した前半生を具へてゐるだけに、なほ更如夢幻泡影の觀を强めない訣には行かなかつたであらう。是等の事情を考へれば、芭蕉の無常を力說したのも……………なるかも知れない。しかし芭蕉の氣質の上へ憂鬱の刻印を打つてしまふには必しも證據にはならぬ筈である。

最後に芭蕉は作品の中に屢無常を語つてゐる。……………………………………………………………………………………………

諧謔

芭蕉は世人の考へてゐるほど、もの寂しい人ではなかつたらしい。寧ろあらゆる天才のやうに、

頗る諧謔を好んだやうである。から云ふ事實を證明する例は「去來抄」等に傳へられた逸話の中にも乏しくない。

「我翁の常に歎美し給ひし狂歌あり。のぼるべきたよりなければ鳴神の井戸の底にて相果にける。讀み人知らず。」

「三河の新城にて支考桃鄰も同座せられけるに、白雪問ふ、故事は何と使ひ候て新しめ候やらん。翁曰、ある歌仙に、

　　鷹かぶり居る北の橋詰
　祐經は武運のつよき男にて

敵打のあらまし事、かかる形容もありぬべし。多くの年月ねらひけるに果報いみじき工藤なり。建久四年五月二十八日まで生のびぬと可笑がり給ひしが、是さへ形見となる。」

「翁、ある御方にて、會半ばに席を立つて長雪隱せられけるを、幾度も召し出けるに、やや經て、手を洗ひ口漱ぎて、咲うて曰、人間五十年と云へり。我二十五年をば後架にながらへたるなり云云。」

「支考云、嵯峨の落柿舍に遊びて談笑の序に、都には蕉門の稀なることを歎きしに、翁は例の咲ひ咲ひ、我家の俳諧は京の土地に合はず。蕎麥切の汁の甘きにも知るべし。大根の辛みの速かな

るに山葵の辛みの詔ひたる句さへ、例の似て非ならん。此後に丈夫の人ありて、心のねばりを洗ひ盡し、剛ならず柔ならず、俳諧は今日の平話なることを知らば、始めて落柿舎の講中となりて、箒箕の名錄に入るべしとぞ。」

のみならず芭蕉の俳諧にも諧謔を弄した句は勿論、地口や洒落の多いことは旣に周知の事實である。それも世人の考へてゐるやうに、談林の影響のもとに作つた初期の句ばかりにとどまるのではない。元祿以後の句の中にもかう云ふ例は秋の野山の鶉のやうに散在してゐる。

景清も花見の座には七兵衞

箕輪笠島も五月雨の折にふれたりとて、

笠島やいづこ五月のぬかり道

わが宿は蚊の小さきを馳走かな

まだ埋火の消えやらず臘月する京都を立出でて

乙州が新宅に春を待ちて、

人に家を買はせて我は年忘れ

田家にありて

麥飯にやつるる戀か猫の妻

鳳來寺に參籠して、

夜着一つ祈り出したる旅寐かな

二月吉日とて是橋が剃髮入醫門を賀す、

初午に狐の剃りし頭かな

美濃路より李由のもとへ文の音信に、

晝顏に晝寐せうもの床の山

殊に最後の「晝顏」の句は芭蕉の大阪に示寂した元祿七年の作である。すると芭蕉は死に至る迄、諧謔を好んだと云はねばならぬ。

晚年の芭蕉は幽玄を愛し、寂び栞を說いた…………………………

……………………………………………………

支那

延寶年間の桃靑は談林風の俳人である。が、貞享年間の芭蕉はもう談林風の俳人ではない。卽ち延寶から貞享に至る天和年間の芭蕉庵桃靑は拳を放れた鷹のやうに、談林風の圈外へ逸し去つたのである。

談林風の圏外に逸し去つたのは勿論芭蕉の天才に依つたものと云はなければならぬ。しかし芭蕉は人も許し、みづからも才を負つてゐた、錚々たる談林風の俳人である。かう云ふ芭蕉には餘人よりも、談林風の圏外に逸し去ることは困難だつたのに違ひない。この金鎖を截斷したのは、――それも天才と云つてしまへば、造作のないことは確かである。が、もう少し立ち入つて見れば、芭蕉の天才も何かの機縁に開眼を受けたものと思はなければならぬ。ではその機縁は何だつたであらうか？

この答も同樣に簡單である。必ず古人の藝術はおのづから津頭を示したであらう。しかし芭蕉は歌を愛し、謠曲を愛し、書を愛し、更に又畫をも愛してゐる。四十歳に近い天和年間の芭蕉に蕉風の寂光土を示したものはそれらの中の何だつたであらうか？　これも亦全部と答へさへすれば、手數は省けるのに違ひない。では最も直接に芭蕉の天才の開眼に力のあつたのは何であらうか？

天和年間の芭蕉の作品は頗る支那文學の臭味を帶びてゐる。尤も「漢字を集め、詩を聞くやうになり、又は字餘り、一息にいはれぬやうなる事」（歷代滑稽傳）になつたのは必しも芭蕉に創まつたのではない。寧ろ當時の俳諧を風靡した流行と云はなければならぬ。しかし芭蕉は明らかにかう云ふ支那文學の影響の骨髓に入つた一人である。「虛栗」の「髭風を吹いて暮秋嘆ずるは誰が子

ぞ」「夜着は黒し吳天に雪を見るあらん」等の支那文學の臭味は云ふを待たない。夙に蕉風を樹立した四十七歳の芭蕉さへ下の作品を殘してゐる。

　　鐘消(きえ)て花の香は撞(つく)夕べかな

これは朱飲山の所謂倒裝法を俳諧に試みたものである。たとへば下の例に徴するが好い。

　　紅稻啄殘鸚鵡粒　碧梧棲老鳳凰枝

この名高い杜少陵の聯句は勿論意味を理解する爲には、「鸚鵡啄殘紅稻粒　鳳凰棲老碧梧枝」と兩句とも名詞を入れ換へなければならぬ。芭蕉の句も意味を理解する爲には、「鐘搗いて花の香消ゆる夕べかな」と動詞を入れ換へなければならぬことは全然上の例と同じことである。これを暗合と云つてしまへば兎も角、もし僕の云ふやうに倒裝法を用ひたものとすれば、芭蕉の蒙つた支那文學の影響は可成大きかつたと云はなければならぬ。

なほ又もう一つ例を擧げれば、芭蕉は「虛栗」の跋の後に「芭蕉洞桃靑」と署名してゐる。「芭蕉庵桃靑」は必しも支那文學の臭味を帶びてゐない。が、「芭蕉洞桃靑」は「凝烟肌帶綠　映日瞼粧紅」の詩中の趣を具へてゐる。特に「洞」の字を用ひた芭蕉の如何に支那文學に心醉してゐたかは何びとも看取に苦しまないであらう。

芭蕉の支那文學に傾倒したことは上に述べた通りである。しかもその支那文學の臭味の最も横

溢したのは前人も既に云つた通り、「次韻」「武藏曲」「虚栗」等を出した天和年間と云はなければならぬ。すると最も芭蕉の天才を開眼するのに效のあつたものも支那文學と云ふことは出來るかも知れない。

昭和九年十二月二十九日印刷
昭和十年一月七日發行

芥川龍之介全集第六卷

著作者　芥川龍之介

發行者　岩波茂雄
東京市神田區一ツ橋通二丁目三番地

印刷者　白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十七番地

印刷所　精興社
東京市神田區錦町三丁目十七番地

發行所　岩波書店
東京市神田區一ツ橋通二丁目三番地
電話九段(33)一八七・一八八番
二一八九・一八〇番
振替口座東京七四四一六番

(大森製本)

古谷夏子
Natsuko Y. Furuya

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03185 6479